
一步先から闇

ウドの大木

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一歩先から闇

【Nコード】

N6227A

【作者名】

ウドの大大

【あらすじ】

突然の拉致！現れるは超大企業の御令嬢と執事。ご褒美に目の眩んだ野崎霞少年と助っ人？として現れた大川深娜の奇妙な家族生活迫り来る敵（身内も含む）を退け、最高の仲間と共に探しだせ！（注・霞少年に彼女が出来るのは遙か彼方です。期待せず気長に待ちましょう。尚、この人をもっと出して等のご要望は脳内電波を発信してください。作者が受信出来ると出るでしょう）

1・落ちるとこまで落ちました（前書き）

お初の人初めまして

知ってる人ちよりっす！

ウドの大木で御座います

今このお話を呼んで下さり誠にありがとうございます

因みにちよつと書き直したので、既に読んだ方には少しフレッシュに感じるかもしれません

それでは一歩先から闇、どうぞお楽しみ下さい

1・落ちるとこまで落ちました

これから語られる物語は、俺にとって最良で最悪の幕開けとも言える出来事の始まりだった

僅かな揺れと窮屈さに強制的に覚醒を余儀無くされた俺は、ぼんやりする頭で目を開いた

あれ？真っ暗だ。まだ夜なのか？つかここ俺のベッドじゃないな。堅いし

何処だ？分らない？
寝惚けてるのか？夢か夢なのか？？なーんだ夢かならいいか

ってよくないわい！

こんな知らんところで寝てられるか

勢いよく起きあがつ（ズガンっ！！）

「アイタあっ！」

もろに顔面を強打した。余りの痛さに顔を押さえようと・・・なんだと！手が縛られてる

ま、不味いぞ俺。これは俗に言う拉致なのではないのか！助けて、拉致られてるよー！ワタシを見付けてー。早く見付けてー！

陸に打ち上げられた鯖の様にビタビタ動くがいかんせん脱出する事

は到底出来るわけもなく、無駄に体力を消費してしまった。駄目なのか、こりゃ諦めて運に任せるしかないかもなあ

こうして俺達の歯車は、ゆっくりと回り始めた

戻ることなど決して叶わない不確かな未来へ

2・這上がる道は一つだけ？

どうも、拉致られた霞です。いま私は手足を縛られ通称『マグロ』状態で車と思われる乗り物に閉じ込められています

まれに激しい揺れがありますが側頭部を強打する以外は問題はないようです

それでは一度スタジオにお返しいたします。佐々木さん。

まずいよ俺、

正気に戻れ俺。

まずは俺のことを思いだそう

俺の名前は霞。光世高校に通う極々一般的な生徒な訳だ。一般ピーポーだから特に環境も変なところはない・・・はず

良かった、俺まだ正常に違いない

しかし脱出不可能で長いこと揺られていると暇になってきたな。昨日も徹夜だったし眠い・・・いやいや今は人生初の拉致の可能性が高いわけで、もしかしたらこれは拉致犯の作戦かもしれん。だが眠い、暇だ・・・・・・寝るか

《時間早まってさらに一時間経過》

目的の場所に着いた車から降りる二人の男

上等な黒のスーツを着た男がトランクを開けると、呑気に寝ている少年がいた

「こいつ寝てやがる。どんな神経してんだ？」

「いいんじゃないか、その方が都合いいし。さっさと部屋に連れていこうぜ」

「そうだな。ならちやつちやと運んで飯の続き食おーぜ」

「お前よく素麺に麻婆かけて食うな」

「うるへー」

二人の男は爆睡中のバカを目的の部屋に放り投げると縛っていた口
ーブを切り捨てガムテープで鼻を押さえてから部屋を出ていった

むぐあー！

変な奇声と共にガムテープを剥がす

「なにさらすんじゃゴラ。鼻を押さえるとかどーゆー見じゃ！」

一目散に部屋の入り口にドロップキックをかましてやったが見事に
弾かれた

「んのあっ」

床にゴロゴロと転がった後、改めて部屋を眺めた。意外に広い部屋
はベットにチャブ台、天井には監視カメラがこちらを撮影している
俺はチャブ台をカメラの下にセット

「盗撮すんなー！」

見事にチャブ台でカメラを壊してやった

レベル2の俺。経験値20取得、次のレベルまで後29980

「えー、その器物破損犯、静かにしなさい」

何処からともなく若い男の声

「うるせー拉致犯！」

「静かにしたら出してあげますよ」

その場で膝を折り、まだ壊していないカメラに向かって土下座する
俺。出してくれるならプライドの一つや二つ投げ捨ててやる

そんな光景を画面越しに眺める20前後の男は振り返り

「お嬢様、案外軽い人間のようですが、よろしいんですか？」

男の視線の先には、華やかに着飾った人形のように綺麗な17、18程の少女がいた

「構いませんわ。その方が扱いやすくて。それに私にかかればあんな男なんて」

「ではこちらにお呼びしますので」

男はマイクに向かってこう言った

「少年、君に選択権を与える。一つ目は私達に従うか、二つ目はジヤングルの奥地に下着姿で放り出されるか。好きな方を選びたまえ」

霞は壊れ欠けたチャブ台をまたひっくり返した

3・逝つて来ます

今俺は椅子に座らされている。

左右には屈強な大男が二人立っている。さっき見てみたが服の胸元が片方だけ出っ張っている。見たことあるよーな形で

それは忘れよう

そして俺の視線の先には若い男と派手な服を着た女がいる。どうやら女がボスらしい。

「すまないな少年、何の連絡もなしに連れてきてしまつて。ま、運が悪かつたな」

「謝るのか挑発するのかどっちかにしろ」

「なら運が悪かつたな小僧」

俺こいつキライ

「そう怒るな少年、これもお嬢様のためなのだ。協力してくれたらそれなりの礼はするつもりだぞ」

「うるせー。拉致つといてよくそんなこ．．．」

左右の大男はスツと懷に手を忍ばせてる

「分かつた。言うこと聞くから止めて」

「そうかそうか。それはありがたい。では説明をする。一度しか言わないからしっかり聞いてくれ」

男は一枚のメモを見せる。よく知つた文字だ

* 光世高校 *

「見覚え有るだろ？君の通う学校だ。実はその学校にとある物があつてね、是非見付けてほしいんだ。勿論盗まなくていい。場所さえ見付けてくれればそれでいい。探して欲しい物の名前はゼオン。それしか分らない。」

「なんだそりゃ、なんで学校にあんたらが欲しいもんがあん．．．」

・
」

左右の大男はスツと懷に手を忍ばせる

「分かった。聞かないから許して」

若い男の合図で大男は部屋から出ていく。

部屋には三人だけとなった。

すると今まで黙っていた女はゆっくりと立ち上がり何かを誘つように近づいてくる。

普通の男ならドキドキするだろう。

俺は寒気がした。

甘く漂う香水の匂い

普通の男ならウツトリするだろう

俺は鼻が曲がる

「お願いね、必ず見付けてちょうだい」

甘く囁く声

普通の男なら尻尾を振って頷くだろう

俺は頭が痛くなってきた。

要するに俺はこーゆー女は大嫌いなのだ

「あー近付くな、香水の匂いに移る。あっちいけ。シッシッ」

そして俺は氣を失った

首が危ない方に曲がりながら

僕、もう眠いよ、パト○ツシュ

このまま永眠かもな俺

4・そんな悲劇の昼下がり

霞の人生初の最大ピンチに襲われてるころ、彼の通う光世高校では・
・・・。

「えー、皆も薄々気付いていると思うが」

2-Cの担任、尾崎先生は、皆に聞こえるようハッキリとした口調で話している。生徒もただじつと耳を傾けている。

「霞のことなんだが・・・・」

先生は覚悟を決め重い口を開いた

「今日、あいつは、欠席だ」

クラス全体に雷が落ちたような衝撃が走る。ざわめきがクラスを包む「先生、なんで霞が欠席なんですか！アイツは学校を休む人ではありません。アイツがいけない学校は寂しいです。」

学級委員の大武君の素晴らしい発言に

周りからも

「そーだそーだ」

と賛同の声があがる。

先生はクラスの団結力に目が潤んでいる。

果してこんなクラスが全国にどれだけあるだろうか。テレビのドキユメンタリーに出ても問題はないくらいだ。

視線を窓際の正面に向けてみよう。そこにはビデオカメラを回す人が一名。

「はいOK、お疲れ様です」

カメラを回していたのは、後ろで髪を束ね表情に乏しいように見えてしまうクラスのカメラマン。先塚洸夜（なづか ほうや）。するとクラス中で複数の溜め息が吐き出された。

「いやー疲れた疲れた」

「熱演だったねあたしたち」

「団結力がちがうからな」

口々に喋るなか先生も

「これで今年のベストムービー賞は貰ったようなものだな」果してこんなクラスが全国にどれだけあるだろうか。生徒一人を餌にこんなことを出来るクラスが

5・そんな悪夢の昼下がり

星が、星が掴めそうだよ・・・父さん・・・・・・・・。。ゴキッ！

嫌な音が部屋に広がる。音の発信源である少年はスイッチを入れた玩具の様にガバツと起き上がった。

「はっ、俺に何が起きた。何処いったんだパト　ツシュ」
ズビシ。

「すまん。何故か急に意識が遠退いて」

部屋にはもう女の姿がない、内心かなり嬉しかった。

「さて少年、早速明日から探し出して貰うのだが君にいくつか渡ししておくものがある。」

いつのまにかテーブルがセットしており、色々な物が乗っていた。ケータイ、発信機と思われる小さな球体。切味の良さそうなナイフ。手袋、ピアノ線、振ると伸びる棒、黒光りする拳銃・・・・。

「俺に何をさせる気だ」

「あーすまんすまん。余分なのがあったな」

結局渡されたのはケータイにナイフ。そして発信機だ。「最低限必要なものだ。残りは後々自宅に送るとするよ。家も当分は広々とするだろうしね」

なんか意味しんな発言です。

「どーゆーことだ」

「君の両親には当分海外で働いてもらうことになってね。えって・・・・、12分程前に旅だったね」

この男、なんか凄いくさラツと言っちゃまいやがった。

「な、なに言ってたんだお前、冗談にも限度があんだろうが」

「本当だとも。二人の会社は我が社の系列下にあるから然程難しくはない。それに両親に伝えるわけにはいくまい。小さな保険と思っ

てくれたまえ。生活費等は援助するから問題はあるまい」

あー、なんかマズイな。ヤバいなこの状態。久々にヤバイ。耐えろ俺。

頑張れ俺！

負けるな俺！

「一応協力者、監視役で君の家に一名派遣するから頑張ってくれたまえ。」

もうそんな話を聞く暇はありません。自我を抑えるので精一杯なんだから

詳しい話を右耳から左耳にスルーしている内にトークが終了。

「ま、頑張ってくれたまえ……あつ、忘れてた」

男は何を思い出したか部屋の隅から黒いアタッシュケースを取り出した。

「君の報酬はこれだからね」

!!!!!!!!!!

こ、これは、まさか……、何故こいつがこんな物を、何故俺の密かな趣味を知っている。これは余りにもレアすぎる。この業界の人なら全財産を捨ててでも手に入れるではないか

「やってくれるね？」

「やらせて頂きます」

プライドなんてもう欠片も見当たらなかったのは言うまでもあるまいそして俺は気を失ってた。興奮の余りに

気が付いたら自分の家、自分の部屋、ベッドの・・・
「なんで下なんだよ」小さなイジメは何処までも続くようだ

6・不幸とは常に向こうから

本当に親はいなかった
夕方になつても帰ってくる気配がない。部屋も綺麗サッパリでとても静かだ。

・・・・・・・・・・・・・・・・、

「フリ〜〜〜ダ〜ム!!」

ついに樂園が訪れた。

別に居ないなら居ないで何しても問題なし。

家事なんてオテノモノ

好きなもん食えるし咎める人もいない。

まさに

「フリ〜〜〜ダ〜ム」

また叫んでしまった。しかし咎め人なし！ ま、ゼオンだが何だか捜せばいいんだし見付りやあんなお宝が手にはいる。

笑いが止まりませんなー「にやハハハハー」

笑いが止まりませんなー

「うるさい」

何か聞こえた気がしたけど気のせい気のせい

「にやハハハハー」

「うるさい」

気のせい気のせい

「にやハハ・ガッ！」

「黙れ」

溝に重たい一撃が入る。余りにも突然な一撃だ

気のせいじゃないんですか？気のせいじゃないんですね？

「うぎゃっ」

勢いそのまま廊下へと転がり他界

冗談だよ？

虚ろな目に映るのは、大工さん愛用ハンマーを握り締めた奴。

性別は女の様だが異様なまでに無表情。比べるならクラスの崎塚より無表情。

仮面をつけてるような感じた。

見た目は薄く茶色がかった髪は肩まで伸び、黒の瞳は本当に何も感じれない程冷たい。

細く白い肌は綺麗なのだが正直怖い。直接眼を見れません。

どうにか意識を繋ぎ留めながらなんとか体を動かす。

「すいませんでした」

やっぱり土下座

「テレビが聞こえないから今後気を付けて」

そう言い残し居間へて去る、

・・・・・・・・・・・・・・・・・・、

どちら様？

まさかこんな堂々とした泥棒さんがいるわけないですよ？

恐る恐る居間を覗くと当たり前の様にソファーに座りくつろぎながらテレビを見ている。よりによって楽しみにしていた手作りクッキー

ーにレモンティーの組み合わせ。あまつさえクッキーを食べる度に

「砂糖が多い」

や

「焦げてる」

だの

「変な形」

なんて言っただけ。酷いことは一つビシッと言ってやるしかありません。

ユックリと近づき

「あの一、どちら様ですか？」

あー、俺腰低ー

するとゆつくりとレモンティーを飲み干し……………

「……………」

無視ですか？無視なんですか？

「無視なんで……………」

スカーン

「黙れ」

カップの襲撃

五分経過

テレビはCMに移り、ようやく話を聞いて貰えることになりました。

「改めてどちら様ですか？」

「貴方、幸澤ゆきざわから何も聞いてないの？」

「幸澤？誰だそれ？」

知りませんそんな人

「は…………、貴方を拉致した会社の男よ。会ったでしょ」

あの人か…………、いつかシバイたる

「私は協力者、監視役で派遣された大川深娜おおかわみな、ここを拠点にさせてもらうから」

「拠点？」

「察しが悪すぎね貴方。今後ここに住むってことよ」

え……………

「え……………」

「黙りなさい」

瞬殺ですか

不味いよ不味いよまずいよー。こんなの学校の連中にバレたら・・・
・ボクシンデシマウヨ？
そんな悪夢が頭を横切るなか
「それと晩御飯は何かしら？」
「・・・・・・へ？」
「だから晩御飯は何と聞いているの」

遡る記憶

朝、毎朝飲む牛乳の為冷蔵庫をオープン。その時の中身は確か
「卵三つにキャベツの芯の辺り。茄子と人参一個づつ。それからプリン一個に牛乳二パック」
「ろくな物しか残ってないじゃない」
「お前らが拉致ったから今日のタイムサービスとか逃したんじゃないですか!？」
深娜は深い溜め息。
「男の言い訳は見苦しいだけよ」
「それをお前が言うんですか？」
もう嫌

仕方ない、ここは俺のヘソクリを使って出前にするしかないか
電話帳をパラパラと眺める。久々にカツ丼食いたいし
確か載ってたなー
「出前でも取るの?」
ソファアを占領する深娜は首だけこっちを向ける
「私はピザね」
「何言ってるのですか居候の癖に。更に言っしまえばお前の料金俺持ちにする気なんですよ?」
「細かいこと気にしすぎよ。それにここに住む以上料金は同じところから出るでしょ」

無表情ながらも多少の苛々は放っている。

しかし譲れません。

譲る分けにはいきません。

「俺は今日カツ丼食べたいんだよ。居候なら少しは自粛したらどうですか？」

なんか語尾に行く度弱くなってないか俺？

「私はピザが食べたいの」

「俺はカツ丼食べたいです」

「私はピザ」

「俺カツ丼食べ」

「私はピザ」

「俺カツ丼」

「ピザ」

「俺力」

「ピザ」

「お」

「ピザ」

「」

「ピザ」

等々発言権すら剥奪されてしまった。

諦めよう。諦めよう

ピザで夕食を終え、テレビを奪われた俺は部屋で静かに趣味に没頭した。

ん？な、何みてるの？覗き禁止だよ

さー皆お休みの時間だよー。今日の出来事が夢だと願ってねー。

混乱してます

錯乱してます

7・涙が・・・止まらないや（前書き）

サブタイトルの真意を読み取ってあげて下さい

7・涙が……止まらないや

窓から流れ込む朝の光

小鳥のさえずりは心地よく、清々しい朝を向かえた。

ちなみに季節は春なので窓を開ければ桜の花びらが空を舞っている
「良い朝だ」

その一言では語れない程良い朝だが今回は簡単に済ませよう。

こんな良い朝なんだ、昨日のあれは悪夢か何かだ。きっと下に降り
れば朝食が出来ていて親父が新聞のテレビ欄だけ見てる筈だ。

そうだよ、あれは悪夢だから夢なんだよ。きっと夢は醒めてるよ。
夢は醒め

「遅いじゃない。朝食はまだなの」
悪夢だ

しかも当たり前のように居るこやつは完全にこの居間を占領したよう
だ。ついでに言えば一階の母親の部屋が深娜の部屋になったようだ。
知らない内に家具一式運ばれていた。

「ボーっと立ってないで早く朝食作ってよ」

「昨日出前を取ったのを忘れましたか？」

「ならコンビニでも行つて来なさい」

瞬殺ですか

どうやら俺は完全に深娜の舎弟になったようだ。怖くて全く逆らえ
ない。せめてあの無表情が少しでもなくなればな……

「早く行きなさいよ」

スカーン

中身入ってますよ！

逃げるように居間を飛び出し簡単に服を整え財布を片手に家をでる。
こうなったら幸澤にちゃんと請求しよう。じゃないとお小遣いがな

くなりそうです。

適当にパンやおにぎりを買い急いで帰る。早くしないと学校に遅刻してしまいます。買ってきたおにぎりを奪われ、パンを片手に急いで着替える。そろそろ制服買い変えたいな。少し小さく感じる制服に腕を通し玄関に急ぐ。幸澤に渡された物はバレないようバッグの底に隠しているのでそう簡単には見付からないだろう。

さあ、今日はりきってがんば・・・ろう？

何故玄関に光世高校の制服を着た深娜が立っているんですか？しかも素晴らしく着こなしてますよ

「遅いじゃない。何時まで待たせておく気なの」

「なんで貴方が制服着てるんですか？」等々完全敬語になってしまった。俺弱ー

「協力者だつて言ってるじゃない。家にいたって何も出来ないですよ。学校の方には連絡済みだから問題ないわ」

問題ないってさー、俺が問題有りだよ

「頼むから学校では一緒に住んできるとか言わないで下さい。オレ、シンデシマウカラ」

「学校には伝えるしかなかったから諦めなさい。住所はここなんだから」

「クラスの連中には、嫌、学校内でそれは言わないで下さい。」

「分かったわよ。それより転校早々遅刻は嫌なんだけど」

もう逃げ道は無いようだ。

観念した俺はクラスの連中に会わないかハラハラしながら通学するが・・・

人生甘くないよね？

後ろからドス黒いオーラを放っているのは藤阪慎、ふじさかまこと中学からの古い友だ。短く整えた髪に細いながらも強さを感じる表情。160センチしかないが見た目とは逆にかなり鍛えてるマッスルボディーの持ち主です。俺の裏の顔と趣味の顔を知る唯一の友だ。

つまり簡単に言えば俺ピンチってことだ

「霞、どちら様だこの人は？」

激しく怖い

「こ、この人、この人は、その、つまり、えっと・・・」

「抜け駆けとはお主も偉くなつたな」

「すいません、すいません、すいません、すいません」

するとようやく後ろの騒がしい二人組に気付いた深娜は

「うるさいわよ」

「すいません」

二人して謝つてた。

土下座で

深娜がまた歩き出した後今度はヒソヒソ声で

「だ、誰だよこの怖えー姉ちゃん」

慎にはまだ本当のことは喋れそうにないので

「母さんの姉妹の子で当分家に住むことになったんだよ」

住むことは本当だ

「おまえ、あんな子趣味だっけ？」

「それは違うからな」

そこだけは強く強調しておこう。

さあ学校だ。恐らく俺の墓場だろう。

俺の教室、21Cに入るなり教室は静まりかえった。修学旅行のバスの中で告白した後のように（実話）

複数の男子による殺意の眼差し

複数の女子による軽蔑の眼差し

どっちも痛かった。

心にグサグサ刺さってます

痛いよー、誰か、誰か助けてー

そんな感じで教室の隅に追いやられた俺をよそに、担任はいつも通り教室に入ってきた。

「全員席につけー、転校生紹介出来ないぞー」

すると皆凄い早さで席に座ります。ただ一人、俺のイジケっぷりを撮影していた崎塚だけはまだ物足りない感じで渋々座った。

「あー、今日からこのクラスに転校生が加わった。勿論女子だ」

男子一同

「うおおおお」

「さらに美人だ」

男子一同

「うおおおおおおおお」

テンション最高潮だ

「それじゃ、大川君、入りなさい」

視線は教室の入り口に注がれます。

そしてそこから現れた深娜はゆっくりとした足取りで中央に歩いてくる。

ただそれだけの動作に既に何人かの生徒が圧倒されている。

黒板に

「大川深娜」

と、まるで国語の教師のような綺麗な字で書き、振り向くと一言

「よろしく」

無愛想にも程があるだろう

先生も流石に困り他に話すことはないか聞いてたが返事は全くゼロだった。

「えーと、お、大川は両親が海外で働いてるから今は野崎の家にいるそうだ」

「い、痛い、痛いよ」

男子の皆が隅にいる俺を囲んでシャーペンの芯を指で弾いてきます。
地味に痛いんだよこの技

「質問は休み時間にでも皆で聞くといい」

そう言っつて先生は早々と教室を去った。

先生も苦手の様だ。

結局深娜の席は悪意を感じるほどに俺の隣。

先生、僕を教室から追い出したいんですか？

教室の窓際最後尾、

どうやらここが、俺の墓場だ

8・霞と愉快的仲間たち？

「おい霞、深娜さんの趣味ってなんだよ」

「深娜さんの好きな物なに」

「あの人のスリーサイズ測らせて貰えないか頼んでくれよ」

「み、深娜さんの今日の下着ってなに・・・」

（総動員で殴打）

皆は俺を囲んで質問攻めです。本人に問う勇氣が湧かないようだ

「なら俺からお前らに聞くが・・・」

俺は皆を見下ろしながら

「何故おれを磔にしているんだい？」

「貴様が憎いからだ」

（全員）

そんな感じで休み時間に入る度に磔にされてます。さらにその様子は崎塚によりリアルタイムで撮影されていた。

撮ってないでタスケテ

さらに授業では深娜の凄さが皆に伝わることになった。

全ての科目において優秀なんて生易しい表現じゃ表せない程素晴らしい成績です。そんな深娜に先生は一度しか当てません。

何故ならスキんシップが一切出来ないからです

転校生大川深娜は、午前中で全校に知れ渡った

そしてこんなかあだ名が飛び交うようになりました

深娜 人形、鉄仮面、氷の女王等々

俺 獣、下部A、舎弟、咬ませ犬等々

最後のは意味分かりませんよ？

そして昼休み、流石に毎回礫にするのは疲れるので見逃してもらった俺は、売店で奇跡的な購入できたコロツケパンとカスタードパンを頬張りながら向かいの席の話せば分かる友の慎と、同じく小学からの腐れ縁の太早加弥おおまぢかやと共に昼飯である

「んで、深娜ってのは居候中なわけだ」

頷く俺

「その割にはあんた腰低いわよね」

とても痛いところを突いてきますよこいつ

加弥は長めの髪に性格全面オープンな表情豊かな奴です。さらに聞いた話だと後輩にかなり人気だとか。

「男でしょ、ビシツと言ったらいいじゃない」

「最初の挨拶がハンマーで溝強打だよ？」

「溝の一発や二発、耐えられるだろが」

「お前とは体の作りが違うわいちびマッスル」

「なんだとキリン野郎」

キリンとゆうあだ名は俺がひよる長く見えるらしく付いたあだ名だ。

「やんのかコラー」

いつもと変わらないスキンシップな喧嘩をよそにカスタードパンとピリ辛唐揚げを加弥に奪取された

「「あー」」

いつもの光景です。

しいて違いを言えば唐揚げに肉が入ってない衣揚げだったこと位だ
そんなほのぼのとした昼休み、

「売店で何か買ってきてくれない」隣の氷の女王、じゃない深娜は
ごく当たり前の様に注文してきました。

これは不味いのです。

加弥は人をパシるのが好きではないので自分のことは自分でやる。

そんな良い子なんです。ほら、さっきから断りなさいってオーラを
槍の様に俺に投げ掛けてますよ

よし、頑張れ俺

「これからこの学校に通うんだし少しは見学がてらに見てきたらいんじゃないですか？」

その無謀な提案を

「なら案内して」

捻曲げて粉碎

助けを求める眼差しを二人の友に向けるが

「何故目を背けるんだい慎よ」

「いや、お前の低い腰がなんか痛々しくて……つい」
ならば加弥に援護を

「それならいいんじゃない？案内ぐらいなら」

あっさり認めちゃいましたよこの女

「まっ、待つて、ちよつと待つて、引つ張らないで襟が喉に当たるから。とゆうかあんた何でこんなに力あるんですか。ちよ、ちよつと待つてくださ……」

そして俺の存在も校内に知れ渡った。
美女に引きずられる無能として

9・校舎、不思議発見の下準備

昼休みが終わりそうなころ、俺と深娜は屋上にいた。流石に春先で授業間近となると誰もいないものだ。

昼休み一杯引きずられる様に案内させられた俺の首には痣がくつきりに残ってます。

さらに周りから無能の称号を頂きました。多少へこんでます。それでも案内をしつかりこなした俺って偉いよね？

深娜の方はというと以外にしっかりと聞いているではありませんか！ビックリです

「そしてここが屋上ね。入り口はそこ以外はないし見張らしがいいわね」

「そ、そうすか」

ようやく手を話してもらって、身体中に酸素を送る真つ最中の俺は肩で息をしています

「これだけじゃ情報が足りなすぎね。放課後も調べるわよ」

「へ？何を」

飛来するハンマー

「そうですね、放課後も頑張らしましょう」

一歩間違えなくても痛いんだよ？

そんな時ふとケータイを見てみると12時33分。授業開始まで後2分です。

「走るぞ深娜」

今回ばかりは敬語なんて使えません

「何ですよ？」

「後1分47秒で授業開始だからだよ」「何で今まで黙ってたのよ」

「あんたが長い間連れ回したからでしょうが」

すると深娜は溜め息をつき

「男のいいわけなんて見苦しいわよ」

「二度ネタ禁止！」

「いいから走るわよ」

「つつか早っ」

50m6秒代の速さで廊下を疾走。

「廊下は6秒代で走るものではありませんよー」

「起立、礼」

「うーし、まだ眠い季節だけど後二時間頑張れよー」

理科の棚崎先生はとても人気のある先生です。そして先生は伸びる指示棒をヒュンヒュンとしながら

「せ、先生。何故耳や鼻を集中的に叩くんですか。い、痛いんですよ特に鼻」

「遅刻者に話す舌は持たん」

「それはエゴだよ。先生！」

「黙れ小僧、貴様に生徒の気持が分かるのか」

「……そろそろ止めませんか。敵が増えますよ」

「よし、席に戻れ」

いつもこんなですよ棚崎先生は

「あんた、いつもあんなことしてるわけ？」

「聞くな。お願いだから」

僕が咬ませ犬だからですか？

さてさてここからは話を円滑に、さらに俺の悲しさを削減させるために箇条書きで行きたいのですがいいですか？
いいよね？

・理科で静電気の実験

・異常に溜めた静電気を俺に放つ

- ・利腕の筋肉が痙攣
- ・その後何故か小テスト・破滅

「さようなら」

HRも終り、皆部活やら委員会やら遊びやらで教室を後にする中、残っているのは俺と慎、加弥と崎塚と深娜。

組み合わせとしては悪い方に見えて仕方ありません。

放課後に続きの案内を言うと云ったらワラワラと群がる様に男子が集まったのだが冷たい視線に皆去っていったのだ。そして残ったのがこのメンバーなのだ。

もしかしたら俺らの目的がばれるのかとハラハラしたのだが、今日のはあくまで学校の造りを見るだけで止まったので幸い何事もなかった。

その代わり加弥によつて俺の過去が暴かれたのだった。

だから崎塚、そんなに落ち込んだ俺を撮影するのが楽しいの？

コクリ

ウーンイジメだ！。我が友慎よ、助けてください

「いや、ちよつと無理かな」

裏切り者ー、

ちなみに加弥によつて暴かれた過去話は俺の心にユトリが出来たらはなしますから。だから今は許して

「これで一通り校舎内は把握したわ。続きはまた今度ね」

「よしお疲れ。楽しかったな！。それにしても深娜さん、なんでいつもそんな顔してるの？笑ったりしたらもつと可愛くなるのに」

だめですよ加弥、そこは聞きたくても聞けない地雷地帯ですよ

深娜はいつもと変わらない鉄のような表情で

「貴方達に迷惑はかけてないわ」

すると加弥は

「ならアタシは迷惑してるよ。楽しいのにそんな顔だと嫌だもん。楽しかったら笑わなきゃ。それとも全部がつまらないの？」

「それなら嬉しいんだけどね」

深娜の眼には氷の様な冷たさの中に映る諦めの様な哀しさの様な色があつた気がする。

「そろそろ帰りましょう」

無理に話を切つた深娜は玄関へと足を向けた。

その後ろ姿を見続ける俺に後ろから羽交い締めを仕掛けて拘束する憤。き、貴様、裏切るのか。

そして顔をわし掴みにしながら加弥は

「霞、あんたなんか酷いことしたんでしょ」

「昨日在ったばっかなのに何が出来るんだよ」

「いやらしいよ、霞君」

「貴方は何を勘違いしてるんだい崎塚。俺は何も知らんし何もしてない。神に誓うよ」

「髪に？」

「それは30代から40代のお父様方だよ。なにを勘違いしてるんだい」

「二度ネタ禁止だよ」

「もういいよ、さっさと離して、タイムサービスに間に合わないから」

乱暴に拘束を解除して逃走。多分明日から大変だろうな

さて、場所が変わって商店街。何？突然すぎ？気にしない気にしない、

いつもお世話になっている八百屋さんはとっても安くてサービス満点なお気に入りの店だ。野菜類はここで買うように決めているのだ。他にもなんとか間に合ったタイムサービスで買い物していたが、ち

よくちよく深娜を見て何故かとてめ沈んでいるような気がした。
そんな重い空気のまま家に帰った俺は、また深娜による暴挙に苦しめられたのだった。

救いの手ってないのかな？

ないのか・・・

もう疲れた。今日は疲れたからこれぐらいで勘弁してやる。

じゃ、また明日。

俺が生きてたら

10・陰謀と策略と最終的な強攻手段と

いつもと変わらない朝にいつもと変わらない学校

大抵の人間なら味わうであろうこの感覚。

学校への期待と不満

友へな信頼と不信

親への交流で断絶

一度は味わうこの感情を、私は知らない

親も、友もない中、学校に何を想える。

学校に何を託せる

学校に何を求める

学校に何を菅る

全てが偽りの生活に終りを与えたのはあの方だ。

あの方がいなければ私は等の昔にこの世に未練もなく去って行った
だろう

あの方は私に生きる指針を与えて下さった大切な方。

その人の為なら私はいかなることも成し遂げよう。全てを与えて下
さったあの方の為に

「……………また……………か……………」

朝日が部屋を照らす。春らしい暖かな光だ。

ほんの数年前なら味わうことのない光だ

大川深娜はゆつくりと時計を見る。

朝の6時20分。まず問題ない時間だ。ゆつくりとした動作ながら
もしっかりとした足取りで洗面所で顔を洗う。幾分か目が醒め頭の
回転がよくなってきた。

部屋に戻り髪を整える。無駄な化粧等はしないため時間はさほどかからないのだ。

簡単な服装に着替えると新聞片手に居間へと向かう。既にそれが当たり前の様になっている。

今日は何処を調べようかしら

と予定を考えていると、なんとも食欲のそそられる匂いが漂う。

新聞片手に台所に向かうとエプロン姿の男、野崎霞が馴れた包丁さばきで朝食の準備に取り掛かっていた。

妙にエプロン姿が似合っていると思った。

「ん？」

そんな私に気付いたらしく首だけこっちに向けながら

「おはよ」

と短いながらも挨拶をしてきた。こちらも挨拶を返すとそろそろ仕上がるらしく茶碗の準備を手伝わされた。

朝食はまずまずの出来栄だった。しかしもう少し味噌汁を薄くしてもらうことにした。

文句を言いながらも薄めているが、何故そこまで愚痴を溢すのにやるのか分らない奴だ

* 深娜の目線よりおくりしました。引き続き霞の目線でお楽しみ下さい*

何故やるかって？それは勿論君が怖いからだよ。味噌汁入りお椀なんて投げつけられたら洒落になりません。

おはようございます。深娜の心に探りを入れてます霞です。

今日は金曜日でクラス会議がある日です。委員会とか面倒臭いことを決めるとも長い日なんです。

朝食を食べながら

「霞、今日は代2理科室を調べるから軍手を忘れないように。指紋

を調べられたら面倒だから」

「別にいらなんじゃないか。いつも使ってたから指紋なんて誤魔化せるだろ」

「持ってたなさい」

「分かりました」

やはり逆らえませんが、少なめの文句を言われながらも無事に食事が済み、弁当も作る余裕もあったので今回はパシリはなしのようだな。やっただけ――

さてさていつものクラスに入ろうとしたのだが何か雰囲気がおかしいよ？

色で例えれば通常が白とか黄色にするなら今の教室は異様に真ピンクな感じですよ。

え？分かりますか？

うーん、例えを変えれば小さい子を見付けたら急に鼻息が荒くなる大人みたいな感じです。

もつと分からない？正直俺も分かんないんだよねさて教室を覗いてみると……

「さっさと入りなさいよ」

と、後ろから蹴りを入れられ勢いよく突入。

あ、教室の色が黒に変わってきた……

クラスの男子は殺意に近い眼差しを向けてきます。しかし深娜が教室に足を踏み入れた途端まだ真ピンク色になりました。

背を低くしながら友の所へ向かう。

「どうしたんだこの教室」

慎は神妙な面持ちで

「どうやら深娜のファンクラブが発足したそう。なんか美人で冷たいってのがここまで発展した原因らしい」

彼等はアホなんですか？アホなんですね

そうこうしている内に俺は複数のクラスメイトに囲まれた。
ミナナサツィムキダシダヨ？

「それじゃHR始めるぞー。ん？何だ霞寝てんのか？さつさと起きろー」

先生、貴方が招いた結果がこれなんですからね。貴方が隣に座らせなかったら、4割は軽減出来たんだからね。
そんなことが頭の中で木霊していた。

く野崎霞の目線よりおおくりしました。引き続き大川深娜の目線よりおおくりしますく

どうやら霞はクラスでイジメにあっているようだ。あの程度の男達なら少し強く言うただけでおとなしくなるのに。そこが霞の弱いところなのだろう。

午前中の授業はつまらなかった。既に知っていることの復習の様なものだ。

私はあの方に拾われてからいかなる事もこなせる様に様々な事を習い続けた。

大学にだって行ける程度はやっている。

その辺の連中なら一撃で沈めることも可能だ。

私は私なりの恩返しをしたいだけだから。

どんな事でもやり遂げたいのだ。

例えば自分自身が滅んでも

退屈な授業も一段落付き、昼休みになった。霞の手作り弁当は可愛いらしい容器に入っている。あいつの趣味なのか？

怪訝な顔をする私に気付いたらしく、霞は趣味ではないと否定している。ただ単に手頃な容器が足りなかっただけのようだ。周りの男達がチラチラとこちらを見ているが多少の苛立ちは抑えよう。ここで黙らせるのは容易だが後々関係が崩れるのは任務に支障をきたす恐れがある。

それにしても霞はよく私の表情に気付いたものだ。本当は心を読んでいるのではないか？

その事は追々問うとしよう。

そんな事を考える片隅で、卵焼きが美味しいと思う深娜だった

く此処からは全て箇条書きにしますく

く嘘です。霞でしたく

なんか見えない世界から敵意の視線を感じた気が……………

「おーい聞いているかー、エロ霞ー」

加弥は間違った表現を使ってます。更に

「やめろ、唐揚げを乗せていたキッチンペーパーをおでこに付けるな。ヌルヌルになる」

「霞君、エロいよ」

「だから何を勘違いしてるんだい先塚、二度ネタ禁止って前言ってたじゃん」

「落ち着け霞、今は落ち着け」

「君ただだよ冷静なのは、慎！」

「取り合えずおでこに貼れ」

ペチャ

「うわー。裏切られた上にヌルヌルになったー」

みんなイジメナンドヨコレハ

「んで、さっきの話聞いてた？」

俺は油取り紙を8枚ぐらい使ってようやく戻ったおでこを擦りながら「ん〜。なんだっけ？」

ペチャッ

「うわー、二度ネタ駄目なんだよ」

「大丈夫、今回はマヨネーズ付きだから最悪ですね」

「しょーがないな、今度聞き入れなかった目にレモンだからね」真剣に聞きましよう

「明日からGWなんだし霞の家に皆で泊まらないって言ってるの。両親いないなら騒いでも問題無いでしょ？」

「え〜〜〜」

ピュー

「んノオオオ目が、目が〜、何故、ちゃんと聞いてたじゃん」

「聞き入れなかった罰だよ」

「聞き入れなかった？あー本当だー、断ったらやるって言ってるー」ミスでした。レモンの恐怖に内容を深く考えていませんでした。

しかし我が家には深娜が住み着いてるのです。奴を封じ込めねば宿泊は難しいでしょう

「深娜さーん、明日から泊まっていい？」

「・・・、霞の家なんだから断る相手はそっちよ。」

「なら良いってこと？」

「別に良いわよ」

！！！！！！

深娜が承諾しちゃったー、すげー奇跡だー

「よし、早速私とコウちゃん（先塚のあだ名）は今日から泊まりに行くからね。慎は明日の昼回りだから」

「俺の話を聞かぬ間にどんどん話が進んでな・・・」ピュー

そして昼休みは終わった

「みんな早く帰りたいかー」

「おー」

「なら委員長になる奴は手をあげるー」

「・・・」

こんな感じで10分経過

「仕方ない。なら書記二名立候補いるか」

そこに名乗りをあげるのは慎と加弥だった

二人の英雄に惜しめない拍手が送られた

「ついでに記録係はー」記録係とは学校行事を決めるための採決時に違法性がないか審議するときに使う映像で記録を残すための係だ
ここで手をあげるのは先塚洸夜であった。やはり惜しめない拍手が送られた

残る二つの席

「仕方ない、なら誰か推薦はあるか？」

その推薦に飛び付いたのは・・・、深娜だった

「野崎が委員長になれば副になっても構いません」

「な、何をいつぶぐあむぐう」

いつの間に関るに慎が！

「賛成あるか？」

女子は全員一致、男子は半分位賛成で可決。

「よし、終わり。次の議会はGW明けで。お疲れ」

俺に拒否権は無しですか

時間は更に進み放課後へ

加弥と先塚は準備のため一足先に帰った。

慎も買物があるため掃除の後に早々と帰った。そして俺達はい
いと、第2理科室に不法侵入してます

「なんでピッキング出来るんだ？」

「習ったのよ」

これ以上先は聞かない方が良さそうだ

まずは壁を叩く。不自然な音がないか調べた。ついでに薬品置き場も調べたが特に怪しそうな物はなかった。次に部屋に飾ってあるものの全てを念入りに調べたが、変わっていたところは精々骸骨の模型がB系ファッションだけだった。凄く似合ってるよ

結果

「何も無いわね。無駄足だったわ」

「俺は中々面白いの見れたから満足だけどね」

あ、なんか不機嫌なオーラ出してる

すると深娜は何かを思い出したらしく

「そう言えば聞こうと思ってたけど、私の考えって読んでる？」

「へっ？」

「だから私の考えてること読んでるのって聞いているの」

「読めるわけじゃないじゃないすか。精々気配と微妙な表情の変化で見当をつけてる」

「・・・・・・・・・・・・・・・・、なんか深く考えてますよ」

「と、とにかく今日はもう帰らないか？あいつらもいつ来るか分からないんだし」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

反応なしすか

ま、帰る気はある様なので帰りましょう

買い物中もやっぱり考えてる深娜は何故かじゃが芋と牛乳を何処をどう勘違いしたのか

山芋に乳化剤。

「山芋はまだ分かるよ、でも乳化剤はアウトだよ！乳以外合ってないし単品で食せないよ、その上完全に薬剤だよ！よくスーパーに置いてたね」

・・・・・・・・・・・・・・・・無視ですね

仕方なく買い直した後未だに試行錯誤中の深娜を引き連れ家へと向かう。

深娜に何が起きたのだろうか？

家で何が起きるのだろうか？

11・戦場に降り注ぐ・・・・・・・・手榴弾（前書き）

みな様。間違い有りましたら物凄く勢いで教えて下さい。
二度と無いようにしたいな

11・戦場に降り注ぐ……手榴弾

なんか話が勝手に進んで我が家への宿泊会へと進んでしまった。さてさて、今日の晩飯はいかなる評価を頂けるのか。しかも相手は三人。嘘でも不味いと言われればへこむんですよ。

「……………」

後ろではさっきから深娜は極力無表情で何を考えているのか。

数分もたてば我が家に到着、家の鍵を挿し込んで捻れば……

「？、開いてる……………！！！！」

まさか空き巣！こんな時になんたる不運、重なる時はとことん重なるものなのか！

ゆっくりと音をたてないように静かに家へ侵入。居間からはテレビの音が聞こえてます。

消し忘れたか堂々としすぎた泥棒なのか……………。

今の深娜は戦力にカウント出来ません。

俺がやるしかないんだ

一騎一殺

心で叫び居間へと

「何様のつもりじゃ泥棒風情がー」

ドアを勢いよく蹴り中に居るであろう泥棒に正義の鉄槌（深娜が愛用ハンマー）を振りかぶって

「遅いぞアホ霞ー」

そこにはソファーに寝そべる加弥とテーブルの横で正座する先塚。部屋の隅には荷物が寄せてあります。

「……………、君達は何故我が家に入ってるんだい？」

「ピッキング」

「先塚さん何平然と答えてるの！？　　つつかピッキング流行ってんの？」

後ろの人に聞いても反応はやっぱり無しですか。すると加弥はスス

スと深娜に近付き

「深娜ちゃん、エ口霞に何かされたの？」

「おいその勘違い娘、何を考えてそんなこと言ってるんだ」

「何かされなきゃこんなは無表情になるわけないじゃん」

いつもそうじゃん。

確に前より表情は読みづらいけど大雑把になら分かる。

周りの声にすら反応せずに考え事をしている。

以上

「こいつは考え事してるだけだ」

「なーんだ、つまらないー」

「人の不幸を笑うなや」

「・・・人の不幸は蜜の味」

「なにさりげなく問題発言してるんだ先塚、そんなこと言ってる
夕飯抜きだよ」

「死ねー」

どこからともなく細いロープが宙を舞います

「ぐごあああ、ナニコレ、必殺仕事○？お願い加弥、夕飯作るか
ら指で弾かないで」

「しょーがないなー」

生きてるって素晴らしいね？

さあ、早速料理を始めましょう。

今日は久々なグラタンです。美味しく作れるか多少心配なんです
が気合いでなんとかしましょう。

「・・・・・・・・カメラマンさん」

俺の顔をズーム

「居間に戻りなさい。」

少しずつバック。そして居間へ消える
あいつのせいでじゃが芋が変に切れた

「・・・・・・・・」

深娜をズーム

「・・・・・・・・」

撮影終了

「霞ーまだかー」

「後は焼くだけだからおとなしく牛乳飲んでなさい」

「はい」

素直なんだが底知れぬ恐怖を感じる加弥は、小中学を共に過ごし高校まで一緒に数少ない本心を語れる友だ。小中までは普通だったのに高校辺りから妙に攻撃的になった気がする。昔から素直で元気が売りで友達も多かった。今でもちよくちよく小学の時の友達と遊んでるそうだ。

俺なんかより何倍も人付き合いが巧かった。

俺はどーもその辺が苦手だった。共通の趣味が持てる人がいなかった。

まー小、中であんな趣味持つてる奴なんて日本全国でも数える程もないだろうな

そんな俺に当たり前の様に話しかけてくれたのが加弥だし慎と親しくなれたのも加弥のおかげだ。

だから無くしたくないんだ。心から話せる大切な友を

チーン。

「焼けたよ、さっさと持ってきてー」

「それが人に物を頼む態度かい？」

首に伸びる手

「分かりました。ですので必殺〇事人は止めて。月にレントゲン写
つちゃうから」

さてさて運命の試食タイムですよ。

先程深娜の方をチラリと見たがどうやら考えはまとまったらしくい
つもの無表情だ

三人はゆつくりとフォークを口に運ぶ。

さて問題です、次のコメントは誰かを当てましょう

1 「んー、まずまずかな」

2 「・・・・・・・・・・」

3 「・・・・・・・・・・」

thinking time

3、2、1、終了

はい、答えを近所迷惑にならない程度に叫びましょう

はい、正解者は青森県八戸市の松倉君です。また来週ー
嘘だからね

順番は加弥、深娜、先塚です。違いは点の変換だよ

「まずまずって、結構へこむよ君」

「だってチーズがパルメザンじゃないんだもん」

「こだわるなよそこまで」

「何で私のだけ焦げが多いの」

「仕方ないじゃん。置く場所によって熱の伝わり違うんだから」

すると深娜はなんの躊躇もなく俺のグラタンを奪っていった。さり
げなく一番良いところ取ったのに

そんな悲しみに沈んでいるとなんか先塚の様子がおかしいんですよ。
なんか一口めから全く進んでません。もしかして不味かった？

あ、なんか手が震えてる。本当に不味かったの！やべー

ガタンッ

等々立ち上がった

「霞君！」

「すみませんでした。お代はいりません」

「……、ここって店じゃないでしょ」

深娜、適格なツツコミありがとう

それにしても今まで見たことない顔付きですよ先塚さん
すると定番になった土下座をする俺の手を取り

「美味しい」

「へ？」

「凄く美味しい」

なんか凄く感動してない？

「てゆうかキャラ違うよね？」

ドスッ

無粋な質問でした

「そんなに美味しかったの？」

加弥、お前の方が無粋だ

「うん、お母さん料理破滅的に下手だからさ。小麦粉と塩間違える
人だからさ。」

……

「白以外接点ないじゃない」

「他にも焼きそばにココアパウダー入れるし」

………分かる

「もう接点すらないじゃない」
分かる

「分かるぞその気持！」

本当に分かるんです

「俺のお袋もさ、肉を煮込むてゆう単純作業に何故かコ○ラを入れ

やがった。理由は甘く柔らかくなる。それだけなのだよ」

「苦労してるね、霞君」

「他にもカレーの仕上げで弱火で混ぜるって事を任せたのに何かタバスコと唐辛子とハバネロ入れちゃうんだよ。その日から四日泣いたよ」

お互い辛い過去を乗り越えた者同士何か共感出来るのだ。

「私もそんな料理出来る方じゃないから明日から色々教えて貰います」

「任せる。家庭の平和を守るためにも」

目指すのだ、家庭の星を

『・・・・・・・・・・・・・・・・、で、いつまで手を繋ぐの？』

皆さん、黙祷をお願い致します

さて、大惨事を終え奇跡的に一命をとりとめ助かった俺は片付けやお手伝い（間接的パシリ）に走りっぱなしで解放されたのは夜12時45分。

加弥、お前パシリ嫌いなはずだったのに何故あんな極悪非道な・・・

・・・

先塚、正直お前性格変わりすぎだ。何がお前をそこまで変えたんだ？
深娜、お前笑っただろ（普通に見たら無表情）雰囲気柔らかかった。
びっくりだ

明日から更に大変になるか。慎よ、助けてくれよ

12・暴走列車乗車注意（前書き）

タイトル読みづらくてすみません。
なんかテンパリ気味なんですよ。
元気になるおまじないありませんか？
（既にテンパリ）

12・暴走列車乗車注意

今日から休み

当分休み

早起きいらない

夜更かしよし

と言うことで俺は二度寝してるんです。

だって早起きする必要ないんだもん

コンコン

えっ！なんで朝の6時に訪問者なんですか？

まだ朝日昇ってないですよ

ここは狸寝入りでやり過ぎすしかあるまい

コンコン

寝てますよー

コンコンコンコン

寝てますって

コンコンコンコンコンコンコンコンゴコンコンコン

途中でキレなかった？

コンコンコンコンコンコンコンコンコンコンコンコンコンコンコン...

・・・バーン！

「何時まで寝てんのよ霞ー」

「蹴破つてまで入ってくるとは何事だ加弥！」

「いいからさっさと着替て」

「とにかく落ち着くか理由を話してくれ」

はい大きく深呼吸。吸ってー、吐いてー

「んで、どした」

「散歩しよ」

「はい？」

「散歩しよ」

「まだ日すら出てないのに？」

「うん」

「いや、なんでいきなり散歩なんですか？」

「気分」

こうなった加弥は止めれない。変なところで頑固なんだよな

「はー、分かった。とにかく下で待ってろ」

「イエーイ」

イエーイじゃないよまったく。しかし断れない俺にも問題ありか簡単に着替をすませて洗面所で顔を洗う。

幸い疲れは溜ってないようだ。

居間では加弥がごろごろしながら待っていた。

「準備いいぞ」

「よし行こう」

なんでこんなにテンション高いのか

家を出発してから10分、どちらもさほど会話もなくただただ歩いてる。このまま行くと川に出るな

「久しぶりじゃない散歩」

加弥は前を向いたまま口を開いた

「約9年前だな。小2の時、火曜日の辺りから『土曜に散歩しよ』

って会う度に言ってた。しまいには金曜の夜にいきなり泊まりに来て次の日俺を引きずりながら連れてったんだよな」

「よく覚えてたね」

「ついでに川に俺を突き飛ばしたよな」

「そうだったけ？」

この女ー、シラをきるつもりですな
それにしても・・・

「んで、何か目的でもあんだろ。質問とか」

「よく分かるね」

「付き合い長いからな」

「じゃあ・・・聞くけどさ、深娜ちゃんと霞って親戚なんだよね」
嘘は付きたくないのだが肯定のため頷く。

「似てないよね」

「親戚だからって似るとは限らんだろ」

「それもそうか」

しばしの無言。いつまで続くのか分からないこの重い空気　苦し
いな

「じゃあさ、」切り出したのはやはり加弥だった

「霞にとって深娜は何」

「何って？」

「どういった存在ってこと」

存在、俺は深娜をどう思っているか・・・

「家族だ。過ごした時間は少ないけど家で生活する以上どんな理由
があるうとあいつは家族だ」

嘘はついていない。

それに加弥に嘘はほとんど通じない事は既に検証済みだ

それに友達には嘘をつく気になれないから

すると加弥は満面の笑みを溢し

「それでこそ男だー」

元気ハツラツになっちゃった加弥はチョークスリーパーを俺に

「うぐゅああ」

近所迷惑になるから音声はカットしました。

隣をスキップしながら歩く加弥は昔と変わらない。出来れば変わっ
てほしいが無理だろう

それにしても加弥はこんなことを聞くためにわざわざ散歩に連れだ
したのか？女は分からんとゆうわけだ

そうこうしているうちに昔とまったく変わらない景色が目に入る。

「あの時と変わらないね」

「変わってもらっちゃ困る。数少ない思い出の場所だからな」

「そだね」

二人はただただ昔と変わらない景色を見続けた

見続けた

見続けた・・・

見続けた・・・

「そろそろ帰りませんか？多分あいつら起きてるから」

「後五分」

「さいですか」

20分経過

「帰りませんか？」

「後五分」

「さいですか」

20分経過

「帰りませんか？」

「後五」

「いい加減にしな」

「てりゃ」

一瞬の浮遊間の後に来る恐怖

「ああああああ・・・」

お決まりのパターンですね

そんなころ我が家では

「・・・・・・・・・・霞は？」

「・・・・・・・・・・、加弥さんは？」

『・・・・・・・・・・』

ビショヌレで家に着いた俺を向かえたのは殺気に近い敵意の気配。
なんか居間からズゴゴゴゴと擬音付きで漂ってきてます。

ここは気付かれないよう忍び足で洗面所で着替を・・・・・・・・
「たっだいまー」

ビュハッて音がする位の速さで居間から飛び出してきた二人は何か
おかしいんですよ

「いつまで待たせれば気が済むの。さっさとご飯にしてよ」

「二人とも何処行つてたの？拐われたのかと思つたんだよ」

なんか声の発音おかしい気が・・・・・・・・

気のせいだよね？

「結局何してたわけ？」

「デートだよー」

「だから勘違いを呼び込まないで。マジにやめぐぎゅああ」

あ、お日様がのぼったー

13・日に咲く花の様に（前書き）

どうも神様がだ。

試行錯誤しながら楽しんで貰おうと必死なウドの大木です。

今回から女性キャラを頑張って書こうと仕事中に誓ったんですが・
・・・服装とか分からないんです。どんな組み合わせが良いとか
悪いとか。

お願いします。こんな只いるだけのような木片に知恵を授けて下さい。

それと霞の昔話を書くのに小、中学どっちがいいかアンケートと
てみようか悩んでいます。

どうしようかな

13・日に咲く花の様に

太陽の光が俺を温かく包み込んでいく
暖かいなー

柔らかいなー

あ、お花畑だ。色とりどりの花が見渡す限りに広がってる

なんて素晴らしい景色だ。こりゃ永住しようかな？妖精さんもいるし皆手招きしてるしなー、どうしょー

「・・・き・・・」

？

「・・・き・・・さ・・・」

？

「・・・お・・・き・・・さ・・・」

誰？

「霞、起きろ。目を醒ませ」

花畑に急に落とし穴が出現し、万有引力に従い落ちて

「いい加減に起きろや」

慎の黄金の右により一気に覚醒！

そして闇の底へ・・・

「起きろや」

黄金の右

三回繰り返す

「はっ、ここは何処だ！鬼と妖精は何処いった」

「ウォラッ」

「ありがとう慎、おかげで目が覚めた」

「そうか。なら今の姿を確かめて見る」

はて、何かあった………

「あれ！なんでこんな格好なの？」

そこにいる霞は霞に非ず

程よく薄い藍色のワンピースに白のリボン。ソフトデニムに身を包み、唇には薄いルーージュ。質素に着飾るその姿を魅力的に見せます。そこにいるのは霞と言うよりカスミって感じです。

「何この格好！こんな服持ってないし着替えた記憶すらないよ」

訴えましょう。カメラマンに

「霞……」

「信じてくれ、慎」

「ぶっちゃけスゲー似合ってるぞ」

「………なんだと」

「でしょでしょ。私達でコーディネートしたんだよ」

加弥は誇らしげに話す。

「服は深娜ちゃんのとコウちゃんの借りたんだ。深娜ちゃんって体型近いから割りとすんなり着せれたんだよね」

「じゃないよ。人の服剥ぎ取って何喜んでんだよ」

「朝食の罰よ」

「それだけのためにこんな大罪扱いですか？悪魔だよあんたら」

「心配させた罰だよ」

「先塚、また戻ったの？酷い方に」

同じ苦痛を味わった仲間だと思ってたのに………

「とゆづか着替えていい？」

『ダメ』

3対1で惨敗

「なんで駄目なの。恥ずかしすぎだよこんなの」

「いいじゃん似合ってるんだし」

「マジでしばくぞ憤」

まあまあと手で制すのは加弥

「なら次の内どっちかやったら着替えていいよ。一つめはその格好と女口調で出校日前まで生活する。二つめは今からその格好と女口調で出掛ける。どっちがいい？」

「どっちもいやじゃいこのバカタレ」

「さつさと覚悟決めなさいよ」

深娜、お前絶対笑ってるだろ

どうする、長々とこんなことするくらいならさつさと切り上げる方がいい。ここは賭けるしかあるまい

「出かける方で」

「よつし、なら早速お昼食へに行こうか。」

「その前に責めて化粧だけでも流してきていいか。香水がちょっとな・・・」

『駄目』

3対1で惨敗

それから30分ほど女性講座が始まりました

「まずはその声か。ここをどうにかしないとバレるな」

憤は真剣に解決案を練っています。そんなこと真剣に考えないでよすると加弥は不適に笑っています

「安心しなさい。特殊科学研究部に頼んで変声機作ってもらったから」

「特科研部スゲー」
とかげんぶ

形はネックレスの形で恐らく首に巻いたとき声の振動を変換するんだろう

「さすが加弥、抜け目がないな」

加弥と慎はハイタッチしてます。

そして俺の後ろでは深娜が髪をいじっている。床屋に行く前ともあつて伸びていた髪は、深娜の手によりみるみる綺麗に整えられます。

「動かないで。巧く縛れないから」

されるがままの俺を先塚は黙々と撮影してます。

「楽しいか人の不幸は」

コクン

イジメだー

さて、等々俺、もとい私はカスミになってしまいました。

「完璧・・・」

震える声の主、加弥はもう感無量のようです。先塚に至ってはカメラ回すのすら忘れてます。

深娜は相変わらず表情は変わりませんが絶対心で笑ってます
慎はとゆうと

「霞、凄い。なんつか・・・凄い」

言葉に出来ないのかお前

「酷いよみんな」

変声機により柔らかいソプラノの声、自分ではないです。

さあいよいよ出発

「早速出かけようか」

「行くのはいいけど何処に行くの。お昼は軽めにしたいんだけど」

「私は麺類がいいな」

「俺ラーメンなら豚骨」

・・・

「カスミンは何処がいい？」

「カスミン言わないでく・・・下さい。」

ハイタッチする二人＋カメラマン

「ならあそこ行かない？ 駅の近くにあるフィオ。あそこならいろんなの食べれるから」

『意義なし』

ではいよいよ出陣です。本人バレないかどうか心配で一杯一杯なんですよ

「ほらほらカスミン楽しく楽しく」

「だからカスミンはやめて下さい」

ボソボソと聞こえる程度に話してますが誰も聞かないみたいです。悲しいよ

フィオは品揃えが良く、味も良いと中々評判のいいお店です。

さらに近くはショッピング通りで店は結構混んでるです。

ましてや今はGW。混んでるね

整理券を貰った五人はブラブラと歩く振りをしながらゆつくりと洋服店に誘導してるのですがカスミンは気付いてません

「あ……」

気付いた時には既に遅し

強制連行

「さ、これ着なさい」

「嫌ですよ。なんでチャイナ服なんてマニアックなの選ぶの。や、やめて下さい。押し込まないで試着室に、ダ、ダメです」

押し込んだ後に加弥は小声で

「スネダイジヨブだね？」

「なら着せないでよ」

すると慎が周りね目を盗み試着室に忍び込んで

「慎、何するの、や、やめて下さい。服、服持ってかないで、いや」

結局着せられてしまった自分が悲しい

しかし着てポーズをとらなきゃ返してくれないんだもん。酷いよね

悲しみから這上がった私を慰めたり冷やかしたり爆笑したりしながらフィオに向かう五人は時間良く店に入れた。しかしカスミは気が気ではありません。

ここのウェイターさん、クラスメートじゃないですか。しかも三人お前ら、知ってたな

「ご注文はお決まりですか？つて加弥じゃん。それに先塚さんに大川さん。あと慎」

「なんで俺だけオマケ扱いなんだよ」

「いいじゃん。て言うかその子誰？慎の彼女？」やばいよ私、じゃないや俺

「いえ、慎君の彼女ではないですよ」

なんとか言い切りました。もう顔をあげれない

「なんだーつまんないな。ま、よろしくねカワイコちゃん」

気付いてないのは嬉しいけど女として見られるのはちょっとね・・・

・
食事しながらの雑談にも花が咲き（主に私の過去ネタ）皆は楽しみ、私は憎しみに打ち震えながら帰路に着く。

あ、なんか嫌な予感がするな。帰りたくないな

14・夜に咲く華の様に

さて、羞恥プレイも終盤にさしかかり今夜何をするか近くの「井藤の公園」

たる私有地に間違えられるような公園のベンチで会議中である。

勿論私はチャイナ服ではありませんよ

残念でした

「まずは夕食何にしようか」

「昨日はグラタンだったわね。煮物もありじゃないかしら」

「私は鍋かな」

「俺なら焼肉だな」

「カスミンは何が食べたい？」

「私は皆と一緒に食べれるのがいいな、ってなんでここまで女口調になるんだよ」

「もどっちゃったらバレちゃうよ」

「ぐ、仕方ないか」

「しかし本当に似合うな霞」

「・・・・・・慎、お前確か純情派だったよな」

「そうだが、それがどうした？」

私は少しだけ頭を下げ上目使いに慎を見ながら恥じらうように

「慎くん・・・・・・」

「ぐはっ」

慎、撃沈

弱者め

弱者をほっという話を続けましょう

「ねーカスミン、アレってどれ位ある？」

もう気にするのやめにしました

「相当あるよ。じいちゃんがまた持ってきたから」

「よし、今夜はパーティーね」

「結局私がやるんでしょ。加弥も覚えてよ」

「二人とも、アレってなんなのよ」

「二人だけの秘密なんてズルイ」

「あ、そうか、コウちゃんは中学違うから知らないか。深娜ちゃんはカスミンから聞いてないの？」

「霞、何のこと？」

「うーん、加弥、これは内緒の方が面白くない？」

「賛成ね。と言うわけで今夜教えるから楽しみにしてねー」

二人は納得してない目でこちらを睨んでくる。やめて、痛いから

弱者を叩き起こし、買い物買い物。

スーパーでバイトしている隣のクラスの山田にバレないかハラハラしながら通過し、ようやく帰ってきました。

我家サイコー

早速顔を洗い髪を戻し服を着替え、口調を戻せば

「ふり〜〜ダーム」

自由なり

「俺の・・・理想が・・・」

慎を張り倒した後またまた会議。今回の議題は

「食事当番をローテーションにしてほしい。俺にも多少楽をさせてはくれないか。深娜はともかく皆食器の場所とかあんま分からんと思うから付き添い程度で俺も台所に立つけどな」

「私はいいよ」

加弥はあっさり承諾した

「アドバイスをお願いできればいいですよ」

先塚も承諾してくれた

しかし深娜は

「嫌よ。なんで私がやらな・・・」

「慎、お前は？」

「異論はないぞー」

深娜なら分かるはずだ

この家は今、民主主義だと

「分かったわよ。やればいいんでしょ」

分かればいいのだよ深娜。何か勝ったって気分になれるなー
さあ、誰が最初にやろうか

「ここは公平にゲームで勝負しないか？俺は家から人生ゲームを持
ってきたしな」

ナイスだ、弱者慎

ではこれより、人生這上がれるもんならやってみるゲームを開催し
ます

順番は霞、先塚、深娜、慎、加弥の順です。

「出だしをつかんづやる」

回るルーレットは4

「会社をクビ、所持金を全て失い銀行から20万借りる」
最悪じゃん

先塚は無言で回す

数字は7

「戦艦を三機落とし有名になり昇格。2万貰う」
一年戦争？

続いて深娜は相変わらず無表情でルーレットが回る
数字は5

「同期の友に『君のお父上が悪いのだよ』と言われ最期を遂げる。二回休み」

あ、深娜の額に青筋が……………

加弥は勢いよく回して数字は2

「『殺らせはせん、殺らせはせんぞ！』と大きな声で叫べば7進む」
叫んだよ本当に

慎の番か

「来たれ、黄金の右手」

左手で力強く回すその針の先には

「誰かを道連れに振りだしに戻り3回休み」

「慎、なぜ俺を見る。リードしてる人を道連れにするのが上作の筈だ。やめ、やめろ、あー」

白熱してます

結果発表

最後のダメ出しで子ども6人をジオ 公国に売りさばいた俺が何とか一位です

次に深娜、加弥、慎、先塚の順でした

早速夕飯づくり。皆で囲む鍋料理に決定です。味や具材、隠し味など出来るだけ細かく教えたので俺が作るのとさほど変わらない出来栄えだ。

『いただきます』

皆で囲む鍋はうまい。深娜も心なしが雰囲気柔らかかった。やはり皆で食べる飯は美味かった。

これからもちよくちよく集まって騒ぎたいものだ。

「さてさて霞、いよいよアレを出す時間じゃないかい」

慎よ、分かっているじゃないか

「で、アレってなに？」

「酒だ」

なんの悪びれもなく言う俺を心底馬鹿を見るような目で

「法律って知ってる？」

「勿論知ってるよー、でも霞のじいちゃん収集癖が凄くていろんな
のあるんだよ。この家の地下倉庫に」

「地下倉庫？初耳ね」

「深娜には教えてなかったな。ま、教えるわけにはいかんがな。あ
そこには触れてはいけない物も多く眠っているんだ」

例をあげるなら妹とはなんなのかと言う事を語った本が8冊あった
り人の急所を細かく書いた本もあったな。

後は骨董品に昔の貴重な資料や俺の趣味に火をつけた物も眠っている

「先塚、撮影は禁止だからな」

先に釘を打っておかないといつバレるか分かりませんからね

「なら俺アレキサンダーで頼むよ」

「私は紹興酒。まだあったよね？」

「ある。お二人さんはなんか飲む？」

先塚は少し考え

「昔父さんが飲んでたんだけどシードルってあるの？」

「あったはず。んで、深娜は何かリクエストありますか」

深娜は相変わらず無表情だが恐ろしい注文をしてきました

「ポートエレンは有るかしら？」

幻の一品ですよ？

ハッキリ言って世界中探してもほとんどないはずだよ。

「ないのね」

鼻で笑ったよこいつ。だがじいちゃんの収集癖を舐めている。

俺は無言で秘密の地下へ向かう

数分後、俺は深娜の前に突き出した

「ポートエレン、未開封だ」

深娜は今までで一番驚いたでしょう。

「参ったわ。こんなの出されたら文句なんて言わないわ」

「一杯だけだぞ。それぐらい分かるよな」

「ええ、楽しみは後々とおくわ」

飲む気満々だよ。つつかかなり上機嫌だし。もしかして豪酒ですか

ここからはもう書けない様な惨劇になってます。

五杯目で狂った加弥は慎を闇の底に叩き落とし、先塚の手によって罠に落とされた（カクテルの中にウォッカを導入）そして満足気な顔でダウン

まさに地獄絵図。酒気に満ちた部屋では三人が無惨な姿で倒れていた

しかしその中平然と座っている霞とほろ酔いの深娜だった

「お前すげーな。アレだけ飲んでまだ行けるか」

「馬鹿にしないで。あんたより強いわよ」

少し口調が怪しいがまだ行けるらしいな

「そうか、なら酔ったついでに何か昔話してやろうか？」

「面白くなかったらテキーラー気飲みだからね」

「はっはっは、なら問題ないな」

そう言っただけ俺は過去を思い出す。

苦く悲しいと感じた話を

14・夜に咲く華の様に（後書き）

どもです。読んでくださってありがとうございます。

次のお話は霞の過去を振り返ろうと思ってます。ですのて小、中ど
つちがいいかアンケートを取ることになりました。ですのて神様がた、
大変失礼なのですが御協力お願い致します

番外編、昔々の話（前書き）

毎度読んで頂きまして有難うございます

今回はノンコメディーな上に前回のお話と何の接点はございません。もし期待してくれたかたすいません。

次はちゃんと霞の過去話になりますんで今回は「こんなのもあったんだー」みたいな気分で読んで下さって構いませんので
ではどうぞ

番外編、昔々の話

薄暗くジメジメした空間

辺り一面に広がるゴミの山

小動物の死体が無数に転がる狭い道

全ての負を纏うような表情の人々

全てに拒絶され、全てを拒絶し、全てを捨てて生きる死人

その片隅に私と言うちっばけな存在が居た。全てを捨てるために捨てられた存在。

親と言うちっばけな存在が捨てたちっばけな存在

ほんの数日前までは暖かい街、暖かい家、暖かい服、暖かい家族の中で生きていた

そしてほんの数日前に私は捨てられた。

目が覚めたときには私と言う存在が全て否定されていたのだろう。しかし余りにも幼すぎた私にそこまで考える力はなかった。あったのは産まれて直ぐに出来る唯一の外部とのコミュニケーション。

私は一日中泣き続けた。

周り視線は初めの内で数分としない内に見向きもしなくなった。

しかし私は泣く事で親が来ると思っていた。しかしそれ以来親を見ることはなかった。

何時からだろうか、私は笑う事も泣く事も怒る事も楽しむ事も忘れていた。頭に在るのは今日生きる術だった。

人の物を盗み、人の家に侵入し、他人を傷付け生きていた。

そして私は捕まった。

単純な罠だった。

密告と言う至ってシンプルで確実な罠

幾ら見知った道であっても所詮は大人と子供、追いかけてこんなてものの数十秒で幕を閉じた。

顔すら知らない密告者に、今では礼をしたいものだ。

そのお陰で私はあの方に救われたのだから

警察署で取り調べを受けていた私の頭ではどうやって逃げるか、どうやってこの男を殺すか

それしかなかった

しかしその機会はどうとう来なかった

一人の若い警官が私に質問していた40後半の老け込んだ警官に耳打ちをした。

すると老けた警官は余りにも驚いたのか間抜けな声をあげていた。数分後、私は無実であったと言われ警察署を追い出されるような形で釈放された

余りにも唐突な流れに戸惑う私に追い討ちをかけるように後ろから年老いた老人の声が聞こえた

「讓ちゃん、こっちだよ」

振り向いた先にいた老人は声に良く合う白髪に長い白髭、しわくちゃな顔は優しく微笑んでいた

「讓ちゃん、今日から讓ちゃんは私の家に住むんだよ」

そんな声を聞いたと思った時には私は気を失っていた

暖かい

意識が朦朧とする中感じた温もり
雨風に晒されてきた2年と数ヶ月、決して味わうことの無かった温
もりを確かに感じていた。

今では思い出す事すら苦痛と感じる家族の温もり

今、確かに感じている

しかしその気持に何かが刺さる

これは夢ではないのか、目を開けたらまた暗い裏路地に寝ているの
ではないか

そんな不安に蝕まれる前に意を決し目を開けた

「起きたかいお嬢ちゃん」

目の前にはしわくちな顔が映る

一瞬の恐怖は長年体に染み込んだ行動に迅速に移る

首筋に向かって素早く突きを放つはずだった。しかし老人はいと
も簡単に止めた。

驚きと共に恐怖が再び沸き上がる

心の底で何かが震えた

震えはやがて全身を支配した

死ぬのか

横切る言葉はリアルに響く

叫ぶしか今の感情を表現出来なかつた

叫びたかつた

叫びたかつたのだ

「すまんな讓ちゃん、娘が起きるんでな」

口の前に出された人指し指に何故か言葉を呑み込んでしまった
「いい子だ」

につこり笑う老人はゆつくりと離れ近くの椅子に腰かけた

改めて自分の姿を見ると薄汚れボロボロだった服は真新しい服に変わっていた。傷だらけだった体も丁寧に治療されほとんど目立たない「安心しなさい。着替をさせてくれたのはここで働いてくれてる女性だから」

捨てられ、犯罪に手を染め汚れた自分にここまで親切にしてくれる

「何故？」

「何故とは」

「何故私みたいなのを拾ったの」

「何故だろうね」

老人は楽しんでいる

「多分気に入ったからかのう。それ以外は思い付かん」

その後老人は声を低くしながらも笑っていた。その笑っている老人が酷く感に触る

「貴方に私の生涯をいじる権利なんてないわ。私みたいな捨てられて汚れた存在なんてあのままそこに居るのが当然なのよ。私を勝手に生かさないうで、私は私が死にたい時に死ぬんだから」

その瞬間老人の顔が険しくなり左頬に熱い衝撃が走る

「死に行く者が口ごたえ出来る程の権利が有るのか、死に行く者が自由を主張するか、死に行く者がいくら死を望もうとわしは許さん死を求めるならば認めれるだけ生きてみよ。死ねるだけ生きる努力してみる。それが出来たら死ぬがよい。何もせん内に死ぬなんざ贅沢と言っもんだ」

老人は強く厳しく言い放ち、また優しい笑顔に戻った。

「だから今は寝るがいい。わしが言ったことを考えながら。いつか答えを出すために」

そう言って老人は部屋を出ていった。

私は気付いた

叩かれたからじゃない
怒られたからじゃない
同情されたからじゃない

教えてくれたから。
生きる道を

そのまま目わ閉じた
懐かしく頬を伝う物を感じながら

その日から私はこの家で働いた
主にやったのは老人の娘の世話だった
年は同じらしく綺麗になびくその髪は美しくほのかに甘い匂い、青
い瞳は今でも世界で一番美しく思っている
気軽に話しかけることは絶対に出来ないとい心に近い常に忠実にその
方に遣えた。
そうこうしている内に様々な事も見についた。お嬢様を守るための
護衛術もその時身に付けた。

それから数年の時が過ぎ、お嬢様はますます美しくなった。
そしてその姿を目に焼き付けるように見続けた老人は笑顔のまま長
い眠りについた。
結局、答えを聞かせることなく
老人は最後にこう言い残した
「やんちゃんな娘を頼んだよ」

余りにもしつかりとした口調は今でも心に残っている
あの方の最後の想いを守り通す為に

私はあの方に尽す為に

この命朽果てるまで

15・夢うつつ、時は冷たくして未知なる風を運ぶ

「かすみなんてほつといて行こうぜ」

「あいつ暗いよな」

「ともだちいないくせに」

何回、何十回と言われた言葉

小学3年の俺には友達なんてほとんどいない。つつかないに極限まで近い

欲しいとも思わなかったしいらないとも思わない。

ただ俺の周りには友達がいらない。それだけだった

毎日の様に本ばかり読んでいた俺は周りから浮いた存在だったのだ
ろう

それに本を読むことがなにより好きだった。図書室の本も4割は既に読みきってしまった。自分の楽しみを邪魔されるのは嫌だったがそれでいじめられるのも嫌だった。

常に波風立てないよう静かに過す学校生活をおくっていた。

唯一俺にまともに接してくれるのは大罌加弥だった

二年に上がって数日、俺はその頃から本ばかり読む毎日だった。

いつもの様に給食を食べ終え本を読んでいると妙な視線が右から来たのだ。そっちを向いて見るとクラス一元気な加弥がこちらを見ていた

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

共に無言で見つめ合う

「・・・・・・・・何？」

「・・・・・・・・楽しい？」

「何が？」

「本」

頷く俺

加弥はふーんと言って隣に歩いてくる

「何の本？」

「アンネの日記（日本語版）」

「????、外国人の友達？」

「違う。昔の人の日記」

またふーんと言った後本を覗きこむ。しかし漢字だらけで全く読めないらしく直ぐに目を反らした

「楽しい？」

「楽しい」

初めての会話がこんなだった。

それ以降友達と呼べる友達は加弥だけだった。慎は中学で加弥から紹介される形で知り合った。今では数少ない親友だ

慎は会った時から中々素晴らしい肉体だった。何故鍛えてるのか聞いたら

「だって歳とつて腹出たら嫌じゃん」

それだけの為に日々鍛えてるのか

慎とは以外にも三年間同じクラスだった。おかげで寂しいと感じることは無かったし人付き合いも順調だった。

きっかけは大事だとこの時実感したものだ

2年の春先頃から加弥は結構人気が出てきた

人付き合いの良さと明るく活発、男女共に同じく接する。そのためか、しょっちゅう誘われたり告白されたりの日だった。

確か9回告白したメガネデブがいたな

見事玉砕だったが

「またラブレターか……」

加弥は溜め息混じりに下駄箱のラブレター5通を何の躊躇もなくゴミ箱へ

「いいのか？」

「いいのいいの、当分興味ないから」

「良かったな霞、とられなくて」

俺はオレンジジュースを飲みながら

「そっくりそのまま返してやるチビマッスル」

「なんだとキリン野郎」

この辺りからあだ名がついた

いつも三人で帰るのでたまにクラスの連中に勘違いされるものだ

お陰で先輩に絡まれることもそこそこあった。と言っても精々釘を刺される程度かこ突かれる位だった。

だから俺も少々油断していた

何時の時代にも学校にバカなグループが存在する

しかも悲しい事にその頭があのかメガネデブだったとは

「二年ボウズ、てめーいい加減にしろよ」

「すいませんすいません」

この頃から謝り癖がついていた。穏便に済ませるのが俺の流儀だからだ

8対1、体格差も象対キリンじゃないか

勝てぬ戦いは避けたいのに

いきなり手下Aのボディー、腹の中が戻るのかと思ってしまった。

堪らずしゃがむ俺に蹴りやら殴りやら輪ゴムやら好き方だいやつて
る。

その内終るさ

それだけを考えひたすら耐えることに徹した
喧嘩嫌いだしさ、その内なんとかなるよな

既に15分が経過し、手下は交代しながら未だに殴り続ける
頭はさつきから輪ゴム銃でチマチマ狙ってきてる。

振られる原因はこれか

更に10分経過

突然痛みが止んだ、別に麻痺したとか脳内麻薬出たとかじゃないよ。
「あんたたちいい加減にしたらどうなのよ、20分近く殴ってまだ
足りないの」

ならもつと早く止めるなり先生呼ぶなりしてよ

「あ、あれって確か兄貴を振っぶれるうぎゃー」

余計なこと言わなきゃいいのに

「うるせえな、女は引つ込んでろ」

「男女平等の社会でそんなの通じるかー」

加弥のストレートは手下Bを一撃KO、更に裏拳でC、D撃破
強いよ加弥、逆らわないようにしよう

加弥は異常に強かった。しかし俺は加弥を巻き込むのは嫌だった。
最初の友達を怪我させるなんて嫌だ
だから流儀を捨てた

出来るだけ加弥を逃がすために注意をこちらに向けた

おかげで袋叩きにされた

「あんたたちいい加減にやめな」

「うるせー」

手下はただ突き飛ばしただけだったのだろう。しかし勢いが違った
突き飛ばされた加弥は転ぶ拍子に階段にもろにぶつかった。頭は打
つてないにせよあれだけ勢いがつけば痣なんてすぐにできる

ブチッ

10分後

ボロボロだ

あ、俺がだよ

泣いたなー

あ、俺がだよ

土下座したな

勿論俺がだよ

「加弥、大丈夫か、怪我はないか」

見た目は大丈夫そうだが俺は分からんから保険室に運ぶか・・・

「重い・・・」

「誰が重いつて」

「ひっ」

「代々木センサー」

「あらあら加弥ちゃんどうしたの」

保険室に引きずられ入ってきたのは物体X

「センセ、これよろしくー」

「あらあら、人じゃないものは引き受けれないわよー」

「ならどうすればいいの」

「んー、今用務の海部^{あま}さんが焼却してるからそこに持っていったら」

「ハイハイー」

「あん時後3分位起きるのが遅かったらやばかったろうな」
「ふーん、起きなきゃよかったのに」

「深娜、酔った勢いでもそれを言っちゃだめだ」

「別にいいじゃない。それからウオツカ一気飲みね」

「へいへい、予想通りでなにより」

グラスに注がれたウオツカを軽く飲みグラスを突きつける

「お前も飲むよな？」

「ふん、これるらいなんてころないわよ」

もうなに言ってるか分かりづらいよ

並々と注がれた酒を飲みほし虚ろな目で

「あんたも中々大変だったのね」

「今でもそうだよ」

皮肉のつもりで言ってやった。しかし予想が外れた

「そうね」

霞は見てしまった

ほんの少しだけが口元が緩みほんの少し笑顔になっていた

か、可愛い

不覚にも心がグラリと揺れてしまった

「人の・・・生きる道・・・なん・・・て・・・辛いのばか・・・
・・・りよ・・・ねえ・・・」

最後の方は聞き取れなかった

静かに寝息をたてる深娜

辛い過去でもあるのかよ、あんま深く考えるな。辛かったら吐き出せ
一応俺は家族って思ってたからよ

先塚のカメラが作動してなかったか調べた後、慎を加弥の足に抱き
つかせる

後は皆に毛布を掛けて片付けを済ませる

明日の朝が楽しみだ

《余談》

深娜の笑顔は勿論ケータイに収めた。

いじめられそうになった時の奥の手に使うつもりだ
皆、言っちゃ駄目だよ

16・今は儚くも美しく、過去は美しくも醜く（前書き）

ああ、なんだこの触り心地

柔らかくも内に秘めた力

華奢な様で何者にも屈しぬ強さ

甘く漂う夢心地の匂い

全てを包む自然にして無限たる匂い

ああ、あああ。ああああああああ

16・今は儚くも美しく、過去は美しくも醜く

「ねー霞、これどーする？」

「加弥、我家に粗大ごみ兼生ゴミを捨てる場所はない」

日曜の朝日は清々しくスツキリとした朝を迎えることができた。
一名には天の迎えが来たようだが

さて、今日の朝食を作るのは慎の筈なのだが多分彼は地獄の底でクモの糸を登っている最中だろう
と言うことで只今キッチンに立っているのは加弥である。

俺愛用の黄色のエプロンを身に付けベーコンエッグにハムサンド。
サラダはフルーツが多少多めです

「相変わらず簡単な物なのに上手く作るな」

「そりゃーそうよ。霞仕込みだから」

「つつても中学の時以来教えてないがな」

「まーねー」

とても和やかに雰囲気です。なんだかんだ言っても加弥は可愛いのだ。暴力面さえ無視すればだが

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「さ、後は一人て出来るだろ。俺はホットミルクでも作るかなー」

「えー、仕上手伝ってよー」

俺の身が危険だから駄目だよ

「ホットミルク飲む人ー」

無言で手をあげる二人

火傷の危険あり

「さて、今日は何をする？」

左手が妙に赤い俺の質問に誰もが頭を捻る

加弥

「朝からゲームもなんだしね」

深娜

「出掛けるにも日曜のGW、無謀ね」

慎

「しかも明日は出校日だ」

先塚

「遠くには行けない」

どうしたものか

悩むこと9分48秒72

え、細かい？気にしない気にしない

その時俺の頭に赤い人が先読みが出来る時に出る光りがキュピーンと輝いた

「慎、加弥、あそこがあるぞ、」

「????？」

「遅咲きの原がある」

輝く太陽の光に反射する桜の花びら

幾重にも重なり舞い散る花びら

5本の桜が立ち並び、その場所は街を見渡す絶景の穴場であり俺と慎、加弥しか知らない秘密の花見場所なのだ

「やつぱ綺麗だなー霞」

「久しぶりに来たもんねこの場所」

「やはり良いもんだな、いつ来ても」

「彼方達よくここに来るの？」

深娜の質問に

「いや、特に決まって来るのは春とか秋だな。後は暇潰しだ」

納得したのかしないのか相変わらぬ無表情で桜を眺める

先塚はさっきからビデオを回しっぱなしである

「・・・・・・・・」

自分の世界に入ったか

「よし、早速御花見始めよー」

可愛らしいシートを広げ持参した手作り弁当（ほぼ俺が作ったが）を並べ日本酒片手に

「そんな物は持ってたきとらん」

『ブーブー』

皆でブーイングなんて酷いな

「それにしてもよくこんな場所見付けたわね」

ハムサンド片手に深娜は感心している

「ま、怪我の功名つてとこでしょ」

加弥は笑いながら話した

「小学の4年の時に遠足でこの山の天辺に行ったんだ。そしたら霞がね」

「ああ、クラスの馬鹿尾崎が俺の靴を放り投げてな、斜面を転がって落ちて見失ったんだ。加弥と一緒に探して奥に進んでたらここを見付けたんだ」

「仕返は面白かったね」

「杉の枝をリュックに入れといてやった。あいつ3日休んだな学校」

「次の日鼻水垂らして来たときクラスで爆笑だったしね」

この場所にいると嫌な過去も楽しく語れるのだ。未だに不思議に思うがいいんだろう。こんな場所があっても

昼食の後は皆揃って桜の下で日向ぼっこ。

下から眺める桜は風で穏やかに揺れ花びらを舞い散らす。

揺れる花びらの間からは優しく太陽の光が降り注いだ

何度やっても飽きない数少ない憩いの場なのだ

いつの間にか四人とも静かな寝息を立てながら思い思い夢の中へと向かう

皆の寝顔を見ながら一人住み馴れた街を見下ろす

「いつまでも変わらなきやいいな」

誰にも聞こえないような小さな呟き

桜の木に寄りかかり周りで眠る四人

「すばくりんぐ」

加弥、お前どんな夢をみているんだ？

「や、柔らか・・・匂い・・・ああー」

慎、病院行け

「そこで霞君・・・落ちる」

先塚、撮影で俺を殺す気かい？

「・・・・・・御嬢様」

深娜、お嬢様つてあの化粧凄いあいつのことか？悪いことは言わん、あんな風にはなるな

苦笑いをしながら見ているとふと思い出した

俺は自分のリュックからカメラを取り出す

「記念撮影つてことでした承は取らんぞ」

「拒否しとくわ」

「あ、起きた」

目を開けた深娜をレンズ越しに見る
カシャ

「盗撮で訴えるわよ」

「気にするな、俺の思い出だ」

「思い出なんて時がたてば醜いものなのよ」

「・・・、お前なー」

しかし深娜は寝起きとは思えない険しい目つきで

「彼方の過去はそうかもしれない。でも私は違ふのよ。彼方とは・・・」

睨む瞳には熱く煮えたぎるような殺意と共に深海にも似た暗く重い哀しさが映つてゐる様な気がした。溜め息を吐いた俺は深娜を見据える「忘れるなんて無責任なことなんて言わん。それを背負つて行けなんて言う気はない。無理なら無理で他の道があるんだ、その辺頭に入れとくのも悪くないだろ？」

「あんたに言われるとなんかムカつくわね」

「気にするな、笑える深娜さんよ」

「わ、私がいつわらっ」

「ほれ」

ケータイに写るほんの少し頬の緩んだ深娜

「！！」

ああ、ついに深娜に勝った。

「こ、これは・・・いつ」

「昨晚だ。お前が寝た時にな」

その後しばし深娜は無言だった

多分深娜は打開策でも練つてたんだろうな

「霞・・・」

ユラリと立ち上る殺意の波動

「一つ教えてあげる」

一瞬の隙に懷に潜り込み左手を掴むと外側に捻り左足を膝裏にかけ体を捻る

体勢が崩れ後ろに倒れる俺に追い討ちをかけるように捻る体の中に舞わし踵を溝に沈める

体が痺れ視界がぼやけるなにかいつの間にかマウントポジションの体勢に持ち込まれる

首筋に触れる手刀、後数センチ深ければ確実に刺さつただらう

「それでも私、昔3人殺した事あるのよ。彼方に何かを知ることが出来る？」

俺は乾いた笑みで

「俺に出来るのは今のお前を知ることだ」

「今を知って何になるの」

近づく顔は無表情であり、何かを拒む表情

「知った上で考えるさ、納得のいく答えを見付けるために」

「傲慢ね」

「だから俺なんだよ」

自分が知る唯一の意思だ

曲げる事は出来ない意思な・・・

「か、霞・・・、深娜ちゃん」

信じられない物を目撃してしまった様な、

松田聖　の本名を知ってしまった様な声をあげるのは

「か、かかかか加弥」

「霞、お前もついに男になったか」

「馬鹿か慎、この首筋が見えんか」

「赤い跡が、イヤらしいよ霞君」

「撮影なんかしないでよ先塚、変な証拠にされるじゃん。深娜、お

前も何か言つてよ」

「ただのスキンシップよ。問題ないわ」

「バカー・・・・・・・・」

夕桜に一句

春の風、木々に染み込む、阿鼻叫喚

花見の後にのんびり帰る4人+1。慎は肉辺をシートに包み人目に付かない様に運んでます。周りの配慮は万全です

「明日学校だし一旦帰ろうか。どうせ一回行けばまた3日休みだしさ」

「そうだな。ならこれ届けたら皆一旦解散か」

「私はいいの撮れたから編集したいしいいよ」

「分かったわ。ならそれ庭に投げといて」

シートを指差す深娜は無情にも家に入れる気はないようだ

解散した皆は各々の帰路に着いた

視線を横に向けると無惨に横たわるシートに包まれた肉辺

「晩御飯どうしようかしら」

今の彼女の問題はそこにあった

17・去らば友よ、我は星になりて（前書き）

あー1000人突破したよ。すげー。

こんなに読んで頂いてまことにありがとうございます。

もうばんばん張り切って書きますんで今後もよろしくお願い致します
あ、要望とか指摘あったらばんばん書いてください

17・去らば友よ、我は星になりて

「ではこれより、被告人、野崎霞の審議にとりかかる。被告人Aは一昨日の夜から日曜にかけ大早加弥、先塚洸夜、藤阪慎、大川深娜を自宅に連れ込み二泊三日の宿泊をした。間違いはないか？」

「裁判長、その件は事実ですが内容に関しては黙秘権を行使します」
「被告人の拒否権、黙秘権はこのクラスに来た時点で剥奪されている」

「ならば基本的人権により自由権の基本権の人身の自由を行使します」

「被告人の基本的人権は只今をもって剥奪されました」

「いい加減にしろアホ裁判官。真面目に暴れるぞ」

「黙れ。被告の分際で何が出来ると言うのだ」

ズラリと並ぶ男の壁、壁、壁

「基本的人権を剥奪された俺は法律上物扱いなんだよ、つまり何をやっても無罪」

制服の裏から取り出すマシンガン（エアガン）

「今まで散々やらかしてきたな馬鹿どもがー」

教室にはこびる悪を蜂の巣にした後

「では改めてクラス会議を始めます」

冷静に述べる深娜

蜂の巣にされた男子は素早く席へ座ります

「えー、まずは一番面倒臭そうな風紀委員。ほぼ毎朝挨拶してもらう上に人のプライバシー無視した持ち物検査等がおもな仕事です。

えー話を手短にするためにアホ裁判官、八尾木、お前やれ」

「なに言っただよお前」

俺は深娜に予め頼んでおいた指示を促す

「八尾木、やりなさい」

「イエス・サー」

「えー次は清掃委員……、深娜、制服に傷がある奴から適当に決めてくれ。さっさと終らせたい」

「なら清掃委員は久保と岡部」

「イエッサー」

5分で終了

「これにて終了します。GWあけの集会に集まるようにしてください」

『はい』

「先生からは……いいですか。ではこれにて閉会します」

スツキリしたクラスに残るのはいつもの五人組

「霞、なんだかんだ言って中々良い司会が出来たな」

「最初に暴動があったがな」

先塚は教室に備え付けられたパソコンから顔を上げ

「撮影の処理は終わったから大丈夫だよ」

ありがとうと返事を返す。流石にあれは不味いからな

「でさ、今日からまた泊まるけど何か持っていくのある？」

「ああ、これから三連休だし長く楽しめる何かが欲しいな」

「また遅咲きの原にでも行くか？ボール持ってけばそれなりに遊べるぞ」

可決

「私のお父さん映画好きだからビデオ持ってこようか？」

可決

「なら集合は7時でいいか」

『意義ないし』

なんか皆ノリがよくなってきたなー

さて、今回二度目の学校探索

場所は調理室

清潔に保たれている調理室は教室二つ分の広さを持ち、おそらく校内でも一番広いであろう。

洗浄されたまな板や包丁が整然と並べられ、厳重に保管されている。

「包丁の中に何故アーミーナイフがあるのかしら」

「ああ、それは井島のだ。彼は『いかなるものも斬るならナイフだ』と言う片寄った危険思考の持ち主だ」

「後その棚には日本刀とかノコギリが並んでるのは何故」

「それは家庭科の山口先生が『料理は決戦だ』と言う片寄った危険思考だからだ」

「……ここにはまともな先生はいないの」

「諦めてくれ」

深娜の儚い願望を打ち砕いた後で早速調査開始です

食器棚をくまなくチェックするがこれと言っておかしい箇所は見当たらない。

蛇口を捻るが出るのは当たり前の水

「ふむ……何にもない。おい深娜。なんかあったか？」

「卵にマヨネーズ、ケチャップ、グリーンピース、鶏肉、玉葱、バター……」

「つておい、冷蔵庫チェックしなくていいって、早く他を調べて」

しかし深娜は一向に移動する気はないようです。冷蔵庫は開けすぎでピーピー鳴ってます

「おい。いい加減に他に移動し……」

「……教えて」

「は？何をだ」

「料理」

数分流れる時間

深娜は真剣な目でこちらを見て、もとい睨んでいます

「出来ないのか。料理」

深娜の目は落胆と言つか諦めと言つか、何とも言いづらい雰囲気を漂わせています

「頑張るんだけど巧く焼けないの。9割7分で黒い何かに変わるの」

「なら残りの3分は何に変わるんだ」

「原色に赤を足した様な色」

既に食べ物領域を超越したか

しかも今日の晩飯担当は………

「今日我が家に初の死者が現れるのか」

「だからこそ今日を乗りきらなきゃいけないの」

「確かに死者が出たら処理に困る………よし、やるか」

さー良い子のみんなー。深娜オネーサンのドキドキクッキングの間だよー

今日は光世高校の調理室を貸し切って（無断侵入）始めるよ

材料はさつき冷蔵庫にあったものにご飯だ

「まず下拵えだ。玉葱をみじん切りにした後鶏肉を細かく切る。フライパンにバターをしいてご飯を炒める」

深娜は黙々とこなす。意外にも包丁捌きは確りしているではないですか。指を切るのではないかとハラハラしてましたが安心です

「次に玉葱を入れて狐色になるまで炒めつてご飯既に黒いぞ」

ほんの少し目を離しただけでこんな事になるとは………

ていくつ

「狐色になったらグリーンピースと鶏肉導入。サツと炒めてケチャップ入れ……あゝ入れすぎ入れすぎ」

吐血

「な、何をいれ・・・た・・・」

「そこにあつた調味料」

そこにあるのはママ モン

完全犯罪成立

さあ、今日の深娜のドキドキキングはどうだったかな？皆はマ
レモンなんて混ぜたら駄目だよ

来週はオニオンをニンニクって勘違いしてる子の為の時間だよ。
バイバーイ

18・我はここに誓う（前書き）

やってしまった。

まさか洗剤だったなんて

仕方ない。早く処置をした方が良くから保険室に連れてくしかないわね。

なんで間違えるんだろう

18・我はここに誓う

「あらあら、どうしたのこの子、なんで泡なんか吹いてるのかしら」
「・・・知りません。急に倒れて」

「んふふふ」。この子からケチャップと卵の匂いがするわね。後マ
マ モン」

「・・・・・・・・・・」

「あら、当たりか。ま、その内起きるから今の内に片付けでも済ませ
てきたら？」

「お手数かけます」

「いいのいいの気にしな―い」

頭を下げて深娜は保険室を後にする

「さてさてー・・・・・・・・」保険室の先生はベットに横たわる霞を眺める
なんか不機嫌な顔になっていく先生

「こいつはねー」

不適に笑う先生はおもむろに白衣のボタンを外していく。

白い肌が露になり、ギリギリ下着まで見えてます。

ゆつくりとベットに近付き、細くしなやかな指は霞の頬に触れる

不適に笑う先生は耳元に口を近付け

「起きろ」

かなりドスのきいた声で囁く

ビクツと震えようやく霞は意識を取り戻した

「おあつ、代々木先生、なにいきなり生徒にセクハラ働いてるんで
すか」

「なに言ってるのよ、ほんととは嬉しいくせに」

「いえ、非常に迷惑です。今すぐやめてください」

「ちえっ」

舌打ちをしながらボタンをとめ直す

「あんた中々落ちないわねー」

「彼方はそうやって何人落としたんですか」

「えーっと3年でザツと千人位かな」

「この人はなー。姉を見習え」

賢い人は気付いたかもしれませんが代々木先生は妹と姉がいるんですよ。

妹の方は俺がいた中学に、姉は大学に勤めているのだ。

「姉貴は治療馬鹿なだけだよ。妹なんて職務放棄に近いし。私の方がやってるもん」

「威張るな駄目教師。保険室で煙草を吸うな」

「・・・臭う？」

頷く俺

「やばいかー。白衣着て吸うのは」

やっぱり駄目教師だこいつ

「と言う事で帰る。深娜は何処行っただか知りませんか？」

「深娜・・・あのガキがー」

いきなりぶちギレた駄目教師は机をいとも簡単に粉碎しカーテンに隠されたサンドバックをひたすら殴り続ける

どうもこの学校には裏ランキングが存在し、そのトップに君臨していたのがこの駄目教師、代々木真美だったのだ。しかしこの頃深娜に抜かれたらしく、大変ご立腹の様子です

後ろでサンドバックを殴る音には聞こえない様なピシュッ、ピシュッという音を聞きながら保険室を後にした

「必ず叩きのめしてやるー」

振りかえるな、俺

さて、深娜と合流した俺は足早に家へと向かう。誰も侵入していない事を確認し、もう一度オムライスのおさらい。今度は洗剤なんか

入れさせない

準備も万全、後は待つのみ

「今夜も飲むの？」

「多分な。強いのは出さないつもりだが飲むだろうな」

深娜は納得した後

「あんた酒強いよね」

「いや、そうでもないんだよな。いきなり強いのは駄目なんだ」

「どうゆうこと？」

「最初に弱いのを飲んで体を馴らさなきゃいけないんだ。最初っからジンとかウオッカだと確実に酔う」

一度だけ酔ったことがあるがその時何故か母親が頬を朱に染め父がガツクリと敗北を味わっていたようだった

「ふーん」

興味が無い様な感じだったが、不覚にも深娜の心の内を読み取る事は出来なかったと後々後悔した

さて、集合時間を律儀に守った皆は深娜の手料理を心待にしています
台所では細心の注意をはらいながら料理という名の決戦を向かえていた。

常に小声でアドバイスを繰り返し、深娜も素直に従う。

「もっと早く炒める。少し焦げてる」

や

「ストップストップ入れすぎ」

とか

「フライ返しつか・・・あー」

なんて聞こえてないからね。本当だよ。

お願いシンジテ

さーいよいよ実食の時間がやってきた。

見た目は完璧に見えます。今回は洗剤も入ってません。きっと大丈夫

夫なはずです

『いただきまーす』

三人は同時に口へと運ぶ

『……………』

黙る三人、それを見守る二人

加弥

「ご飯が……ちょっと焦げてる」

慎

「ケチャップが多い」

先塚

「なんか辛い」

これはまずい、ええい仕方ない

「すまん。俺のせいだ」

四人の視線が一気に向く

「か、霞、何を……」

「なにやってんのよ霞」

深娜の発言は怒り狂う加弥の発言により欠き消された

「あんた深娜ちゃんの料理邪魔するのはどーゆー見よ」

「すんませんすんません」

「土下座ごときで許されると思ってたのー」

「駄目、拳を上げないで、Vサインからの突きは死をまねぎゅいあ

~~~~~

のたうち回る俺に容赦なく蹴り続けあげくの果てにポットのお湯を  
なげ

「止める加弥、それをやったら酒が飲めなくなる」

間違った方向で制止すり慎。やはり君は友達だ？

「たく、今回は見逃してあげるけど今度こんなことやったら痛覚を  
忘れるまでイジメルからね」

やはり酒の魅力には勝てないようだ

さて、一つの壁を乗りきり次はいかにご機嫌をとればいいのか

「霞、これ何入れたんだ？妙に辛いぞ」

俺も一口食べてみる

これは多分……

「唐辛子とシヨウガ、ラー油だ。前作った時気に入ってつい……」

「

「俺は中々好きだが先塚は辛いのが苦手なようだぞ」

「舌がヒリヒリする」

一応あやまっておいた、こんなのを入れられてとは思わなかった。

監督ミスだ

「さ、飲むか。お詫びとゆうか吟醸酒を出させて頂きます」

「かすみー許すー」

軽いな〜こいつ

秘密の地下室から大量の酒やつまみを持ち出し、いざ、修羅場の道へ

「霞、今回は私がカクテルを作るわ」

意外にも優しい一面を見てしまった。変わったなー

それが落とし穴だった

台所に向かう深娜は俺以外の三人を呼び出し、皆で何かを作ろうと引っ込む

「霞を酔わせようと思うの」

「でもあいつ酒強いぞ」

「霞は強い酒を最初に飲めば落ちるらしいのよ」

「それは美味しい情報ね。コウちゃん、ビデオセット」

「了解です」

バレないようウォッカを果汁で誤魔化し完成。

対霞用最終兵器

カスミンコロリ

「霞く出来たよ」笑いながら加弥はカスミンコロリを出す  
皆の優しさに確認を怠ってしまいカクテルを一口  
『・・・・・・・・・・！』固唾を呑んで見守る四人

見る見る顔は赤くなり焦点が合わなくなってきた・・・・・・・・

「むいーーーー」

締まらない微妙な奇声と共にグツタリと伸びる男

「あらら、伸びちゃった。コウちゃん、一応撮っておいて」

頷く先塚は無言で撮影続行

「まさか霞が一発で落ちるとは思わなかったな。しかし情けない  
声だったな」

「本当ね。一撃で沈むとは思わなかったわ」

「だらしないな」

一番酒に弱い加弥は平然と言ってます

皆は持ってきた酒に手をつけようとすると

「おあつ」

いきなり霞が目を覚ました

「んん。何かあったか？ないな？なら飲め、バンバン飲め」

なんか気分がいいな。隣の慎の肩をバンバン叩きながら加弥が飲  
む筈だった吟醸酒を飲みだした

「ああ、私のお酒！。霞の癖にー。オリヤツ」

シタツパAを一撃で沈めた拳の三倍の速さで殴りかかるが・・・

「ん」

突き出された拳に手を添え軽く力を込め楽にいなす。ついでに引つ  
張り

「ふぎゅっ」

「少しは女らしくしたらどうだ？」

訳もなく隣に座らせる。さらに頭を撫でながら

「まー飲め」

吟醸酒を口に突っ込み鼻を押さえる

「んーんー、むぎゃー」

瓶はあつという間に空になり

「アハハ、あはははは」

壊れた

「かすみ。いきなりーはだめよ」

一氣に出来ちゃいました

「もう、かすみったらー可愛いなんて」

本気パンチをくりだしながら照れまくる加弥

「いいじゃないか可愛いんだからよ。怒らなきゃ」

笑いながら軽々と避ける霞

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

面白くなさそうな目で見る三人

すると加弥はいきなり深娜に絡みだした

「もう、みなちゃんってなんでこんなにスタイルいいのよ。うら

やまし」

「ちよつと加弥さん」

「むい」

意味不明な奇声と共に襲いかかる加弥

「ちよつちよつとまつ・・・・・・・・きや」

一人の尊い犠牲が生まれた

そして矛先は慎へ

「飲め慎。とにかく飲め」

グラスにどんどん注ぎあつという間に

「いいねーこの感じ」

また一人堕ちた

「ほらほら。加弥の上着だぞー欲しいか」

獣の様な血走った眼は絶えず上着を見続ける

「とつてこーい」

部屋の隅に投げられた服めがけて走り出す慎。  
情けなく見えた

そして次は・・・

「先塚、縛ってる髪解いた方が可愛いよ」

「えっ、えーっと、その・・・本当？」

先塚は妙に緊張しながら髪に手を当てる

「その方がいいよ洗夜」

初めて下の名前で呼ばれた先塚は手元のグラスを一気に飲み干す。  
しかもそれは俺のグラス、入ってるのはジン

「霞君つたら・・・」

もうネジがゆるんでるじゃないですか

「かーすーみー。かーすーみー」

同じくネジがぶっ壊れた加弥は既に目が半開きで寝そうな雰囲気  
存分に発揮している

「寝るか加弥ー。寝たら残りの酒貰うぞー」

「だーめー。カスミンのバカー」

しかし睡魔には勝てません。猫みたいに丸くなってダウン

ちゃっかり人の膝を枕にして安らかな眠りにつく。たまに訳もなく  
拳を突き出すがあっさりかわす

「俺だつてさ・・・いい匂いとか好きなのに皆は変人扱いするし  
さー」

「泣くな慎、いつか報われる日があるさ」

「かすみ！」

「まこと！取り合えず黙れ」

手刀で黙らせる

「霞君、この方がいいの？」

後ろで束ねていた髪を解くと意外にも長い髪で、紅い頬は今までに無い色気をかもし出している

「洸夜、綺麗だなー」

真顔で言う俺、なんか変？

先塚は更に赤くなりススッと隣に座りさり気なく寄りかかる俺は頭をそつと撫で耳元で

「綺麗だよ」

普段では絶対言わないような甘い声で囁く

向かいの席から空ビンが飛来するがアツサリキャッチしてテーブルに戻す

先塚はオーバーヒートで完全ダウン  
そのまま深い眠りに落ちた

二人を起こさないように退けて何の躊躇もなく深娜の隣に座る  
お決まりの様に出される拳も難無く避け笑いながら

「妬いてんのか？」

「黙りなさい女たらし」

「はっはっ、手厳しいねー」

「黙れたらし」

「お前なー。何そんな怒ってんだ？」

「黙れと言ったのよ」

冷たい視線も今の俺には全く通じません

「常に無を徹して何がいい？笑い、泣き、怒り、楽しむ。それが娯楽なんじゃねーのか？お前は上の命令で来ただけかもしれんがいつも従うわけでもあるまい？今は楽しむってもんだろ」

「貴方とは育った環境が違いすぎるのよ」

俺は鼻で笑う

「くだらねーな」

睨む視線を反らさず続ける

「過去がなんだ？今を考えろ。過去を引きずるな。未来を見続けるな、今やる最適な事を考えろ。それが出来なきゃ無理にやれ。忘れることをするな。思い出すことをするな。やれるからとをやれ」  
無茶苦茶な意見を一気に言い笑う

「それでも出来なきゃ頼れ。俺はお前を家族と認めてるんだ」  
笑って深娜の頭をそつと撫でる。

普段なら百回殺されるだろうが今日は酒もあるせいか抵抗はない  
「あんたって最低なのかしら」

「はっ、既に自覚してるさ」

笑う俺を見て深娜も笑う

自然の笑みは綺麗だった

笑えるだろうが

「なら霞、家族のワガママ聞いてくれるかしら？」

「聞いてから考える」

「なら言うわ。今から散歩行かない？遅咲きの原まで」

「いいぞ。付き合ってやる」

すんなり承諾し、そつと部屋を後にする

歩くこと20分

遅咲きの原は、月の光で鮮やかに桜を彩る

一枚一枚の花びらは雪のように白く輝いている

その中で桜の木に寄りかかる二人組

深夜をまわっているのも町の明かりはなく、月明かりだけが輝いていた



「綺麗ね」

「いつまでも変わらない景色だ」

短い会話

しかし今は心地よかった

「そう言えば昔話を話してくれたわね」

遠くを見つめながら深娜は口を開く

「私も一つだけ教えてあげようか？」

「頼むよ。家族を知るために」

「私って本当はハーフなの。昔はアメリカに住んでね、家族と幸せに暮らしてた。でも捨てられてさ。今の組織に拾われた。だから今の家族は組織のトップに立つお嬢様だけなの。だから私はあの方のために今の仕事を達成するの」

「ふーん。ま、ハーフなのは薄々気付いてたけどな。英語の発音に一切違和感がない。更にアクセントの付け方が現地の会話と代わりがなかったからな」

「あんた何者なのよ」

「ただ趣味の一貫だ」

笑いながら空を見上げる

「お前も変わったな。この短い期間で。それとも酒のせいか」

「そーゆー事にしといて」

わかったと笑いながら町を見下ろす

暗闇に映る無骨な建物

空に舞う幻想的な花びら

交わることのない二つの景色

二人は無言で眺める

「そーいやこんなのを持ってきたんだな」

二つの杯と

酒瓶

「月見酒に一杯」

「夜桜つてあんま縁起は良くないけどね」

二人で笑いながら杯になみなみと酒を注ぎ

「ちよつとした演技に付き合ってくれ」

「つまらなかつたら承知しないわよ」

真剣な顔付きで深娜に体を向ける

我はここに宣言する

大川深娜、改めて汝を家族と認める

我は如何なる時も彼方を守ろう

如何なる時も彼方と共に考えよう

如何なる時も彼方を励まそう

然れど我は如何なる時も彼方を突き離そう

如何なる時も彼方を一人にしよう

如何なる時も彼方を嫌おう

杯を持ち上げ

「ようこそ我が家へ。清狂たる弧高の女王、大川深娜」

頬を緩め、同じく杯を上げる

「御招き頂き感謝します。粹狂にして傲慢な我が家の主、野崎霞」

月夜の下で二人は杯を交した

家に帰ると直ぐ様寝たかった。しかしソファーは完全に占領されて

るため仕方なく壁に背をつけて寝ることにした。深娜は台所の椅子に座るなりさつさと眠ってしまった為、仕方なく全員にシーツをかけてようやく寝ることが出来た

いやー楽しかったねー

火曜の朝は加弥の絶叫により始まった

「な、なんだ加弥、慎がなんかやったのか」  
しかし慎は生きています

「か、霞、あんた……」

「昨日の事か？それは仕方ないだろ。お前らが酔わせたんだから」  
「そんなじゃないわよ、あんた自分を見てみなさい」

ん？なんだろ？なんかシーツを入ってる

ふにつ

柔らかいな……？

シーツの中を覗くと

「深娜！」

そこには猫の様に丸まり何故か俺に引っ付いて寝ている弧高の女王様！

「何やってんだ深娜、起きろ。さっさと起きろ」

頑張つて揺すりようやく目を開けた深娜はまだ半分寝ているらしく、現状を認識していないようです

「んっ・・・霞・・・」

妙に熱のある声で囁き

「昨日は・・・ありがと。なんか嬉しかったな」

シーツを隠れて俺しか見れなかったが今まで見たなかで一番綺麗に笑っていた

「うん。それだけ。おやすみ」

言いたいことを言つてまた深い眠りについた

深娜がくつついている限り俺は殺されはしないだろう。

神よ、これは新手の試練なんですか

## 18・我はここに誓う（後書き）

いやーお久しぶりです。木偶の坊やつてるウドの大木です。

沢山の人を読んで下さってまことに感謝の極みです。

これからも皆さんに読んでいただけるよい頑張ります。ではまたいつか

「こんなんでいいの?」「こらっ、まだ終わらないに喋るなノイン」

「だって木偶『これ読んで』しか言っていないじゃん。こんなプリチーな精霊さんにこんな雑無やらせるなんて・・・」

「もしかしたら続編あるかもだってさ」

「それじゃー皆、これからも作者をよろしくね」

「〔作者〕すみません」

## 19・波乱の御花見(ぜんぺん)だって私

なんですもの(前書き)

今日起きたら目の前に鳥が飛んでた。窓開けっぱなし不味かったかあ、無駄話ご免なさい。いよいよ20話目なのでこれからも頑張りますんで見守ってくれたら素晴らしいありがとうございます。  
では、どうぞ〜

## 19・波乱の御花見（ぜんぺん）だって私

なんですもの

目を覚ました深娜は己の過ちを知り恐怖した

最初に目に写るのは安堵の表情の霞  
視線を変えるが薄い布と霞の服だけ  
そして今の自分の姿は

霞にくつついて寝ている

「やっと起きたか深娜」

「これは………いつたい………」

「俺が聞きたい。だが今は取り合えず離れる。巻き込まれるぞ」

「巻き込まれる？」

「ああ。加弥の制裁だ」

唸る拳は脇を剔る

激痛に耐えながら懸命に釈明を説こうとするが溝に突き刺さる抜き  
手により封じこまれ右頬に拳が叩き込まれる

そのまま壁に叩き付けられ意識が飛びそうになる

しかしそれを許そうとはせず華奢な手は深くこめかみに食い込む

声にならない悲鳴はもう一つの手により封じられる  
喉に食い込む手は確実に己の生命に終止符を打とうとしている

「言い訳があるなら5秒以内に手紙に書きなさい」  
無理ですよそれは

「なら痛覚を忘れるまで遊びましょ」

「ねー大川さん。なんで霞君にくつついて寝てたの」  
「分からないわ。目が覚めたら霞にくつついてたんだから。それから撮影はしないように」

渋谷深娜から惨劇の方にカメラが向く  
今まさに加弥は男として狙ってはいけないポイントめがけて痛烈な蹴りをくりだす瞬間だ

「先塚。霞の為に撮影は控えろ」  
慎の心使いにより後世に惨劇が伝わることは無かった

「さ、深娜ちゃん。昨日は何をしたのか隅々余すことなく全部吐いてちょうだい」  
「ただ散歩に行っただけよ」



「ふーん。何処まで？」

「遅咲きの原」

「いいわねー。綺麗だったよねー」

「ええ、中々見れない景色だったわ」

「いいわねー。ロマンチックねー」

「そうでもないわよ。愚痴言い合って酒を飲んだだけだから」「ふーん。深夜徘徊で酒飲んで何もなかったんだ。さっきだって嬉しかったって言ってたじゃない」

「それは・・・」

「やっぱりなんかあるんだ？有るなら早く言った方がいいよ。霞がいろんな意味でカスミンになる前に」

『・・・・・・・・・・』

離れた位置で傍観に徹する二人

「怖いね慎君」

「ああ。俺としては霞の今の心境がヒシヒシ伝わる。男として」

「痛いんだねアレ」

「全ての苦痛を上回る苦しさがある。しかも持続性があって最悪だ」  
「ふーん」

惨劇は一時間後に休戦協定で合意された

何故ならまだ朝食が済んでいないのだから

「んで、霞、もといカスミンはなんでそんな格好なんだ？」

「ああそれ、罰として今日一日はその格好で生活してもらうことになったの」

それはまさに機能を重視し、あらゆる面で最高の技能を駆使し、主に対する配慮を完璧にこなす為の正装

言わずと知れた男の夢の境地

「メイド服はやりすぎですよ加弥様」

前回同様女の子に仕立てられたカスミンはテーブルの横に姿勢正しく立ち、注文を全てこなしている

勿論脚は大丈夫ですよ

悲しいことに永久に生えることはない

今日一日は全員様づけで命令は全て聞かなければならない

パシリ嫌いな加弥がここまで変わるなんて相当後立腹のようです

「カスミン、今日も遅咲きの原に行くわよ。だからお昼ごはん準備しといて」

「かしこまりました加弥様」

深々と頭を下げ、台所に向かう

なんで俺こんなことやってるんだろ

さて、町中を異様な格好で歩くメイドを従えて加弥様御一行は近くのスーパーにお買い物

きつと夜まで宴会でもするつもりなんでしょう

今回はサッパリした昼食を準備したので夜食はコツテリを選んでしまうんでしょうか

御体の事を心配です

でもその心配は無く、ちょっと覗いてみると意外にサッパリ物が多いですね

あ、慎様、それは夜が元気になるドリンクですよ。そのままだと桜の木の下に埋められちゃいますよ？って言うか埋めますよ？

「あんたいつまでその口調なのよ」

「あ、深娜様、御決まりですか」

「やめなさい様づけするのは。寒気がするわ」

「私もそうしたいんだがいかんせん加弥には逆らえん。なんであんなに怒ったんだろう」

「持ち出したお酒が不味かったんじゃないの？」

「でもあれはそんな特別な物じゃないのに」

『分からないわね』

さて、今回の御花見はお酒持参の宴会です。私は今回飲まないのですが加弥様は早くも三杯目に突入です

「こーらーカースミーン」

もうおかしくなっちゃったんですね

「カスミン〜食べさせて〜」

「それは何故です加弥様？私にいろんな意味で死ねって言ってる様なものですよ」

「命令には逆らわな〜い。慎達だつて頼めばいいじゃん」

「よーしカスミン、膝枕させてくれ〜」

「慎様、取り合えずその崖から飛び降りて下さい。這上がつて来たらいいですよ」

慎は雄叫びを上げ走り出した

「慎様ー。化けて出ないで下さいねー」

波乱の御花の始まりです

20・波乱の御花見(こうへん)もう加弥様ったらおいたが過ぎますよ(前書き

もう加弥様ったら酷いですよね。こんな格好で一日様付けなんて。

慎様も異様に血走った目で見るし、お酒飲んだ皆様の相手に疲れます

え？ネタバレ禁止？前書きページ少ない？

もう作者ったらへたれですね。これぐらい勇気で乗りきってほしいです。

では、こうへんすたとですよー

20・波乱の御花見（こうへん）もう加弥様ったらおいたが過ぎますよ

暖かい日差し

舞い散る桜

微笑ましい……………

「もうコウちゃん、ほら、飲め」

「もうダメ、少し休ませて……………」

「お二人共、少しは自重して下さい。いくらなんでも飲みすぎですよ。夜の分がなくなります」

「うるさ〜いカスミン。主人の言うこと聞きな〜さい、でも流石にやめるかな〜」

「……………彼方達、少しは配分を考えたらどうなの？」

崖の方から

「遂にのぼつぷるぎゃー！」

「ああすいません慎様、つい手が滑って近くの石を」

訂正、見るも無惨な地獄絵図と化した遅咲きの原

二名を残し、皆狂っていた

「霞、あんたも大変ね」

「いえいえ。深娜様程苦労はしていませんので。それに私にとって

の大事な友達ですから」

につこり笑う私を横目に深娜様は先ほどからチビチビと飲んでいる。  
勿論私は飲んでいませんよ

そんな二人のやりくりを見て、黙っているほどこの人は甘くありません

「カゝスゝミゝン」。限定接待つてメイドとして失格だよー」

「いえ、そんなこと言われましても基本的にメイドじゃ無いよ私」

「問答無用、カモンけるべろす」

そう言つていきなり香水の液を投げつける

一瞬の動作の遅れが命取りとなり服に液が染み込む

これはラベンダー

するとどうでしょう、崖の方から凄まじい速さで何かが飛び出す

「お呼びですか加弥嬢」

血走る眼と鍛え抜かれた鋼のボディー

見た目と裏腹な匂いフェチ

その名も

Mr. scent      Makoto

その鋭い嗅覚は直ぐ様匂いをキャッチ

今直ぐにでも直行したいようですが、加弥の命令には逆らえません

「カゝスミゝン、観念なさい」

「えーっと、とにかく落ち着いてください」

「これが落ち着いていられるか」

フェチに何を言っても無駄です

このままだと何をされるか分かりません

こころは己を殺すしかない

その場にゆっくりと正座し少しだけ脚を崩す

「どいつぞ、慎様」

一瞬にして膝に頭を乗せ至福の顔へと変貌する

「御気分は如何ですか慎様？」

「それはよろしいようで……」

その場に慎を寝かせゆつくり立ち上がり、満面の笑みを加弥に向ける。全ての感情を覆い隠すように笑いながら

「えーっと……カスミン？」

「怒ってます？」

ゆつくりと手が伸びる

遅咲きの原に初めて加弥の悲鳴が響きわたった

桜の木の下ですすり泣く加弥

初めて泣くところを見てしまい、流石にやりすぎてしまいました。

反省です

一応先塚様のカメラを押収して危険部分は削除したので大丈夫でしょう

それにしてもなんで先塚様も震えていたんでしょう。不思議です  
いつのまにか太陽も西に傾き、町では次々と灯りがともされていきます

日が沈み、空には一番星と三日月が輝く空を眺め、初めての体験を  
乗り越えた加弥と三途の川辺りから無事帰還した慎も加え、幻想的  
な夜桜を見つめていた

「ふーん。昨日二人でこの景色見てたんだ。羨ましーなー」

「今見てるからいいじゃありませんか」

「でも二人つきりつてのがロマンチックじゃない」

私は少しだけ考える

しかし考えてもよく分からない

そこでまずは隣の深娜様に聞いてみる

「そんなこと聞かれても分からないわよ」

次は慎様に聞いてみる

「そつゆうものなんですか？」

「多分な。経験が無いからよく分からないが」



「なら先塚様、そういう経験はあるんですか？」

「わ、私ですか、その・・・一度だけ」

『あるの！』

全員揃って驚きです

「昨日の夜に・・・霞君に・・・」

『・・・・・・・・・・』

皆様のジトツとした視線が突き刺さります。

凄く痛いです

さて、ここで何を思ったのか加弥は爆弾質問を投げ掛ける

「カスミンってき、私のことどう思ってる？」

「どう思ってるとは？」

「私のこと好き？嫌い？」

『ぶっ』

深娜、先塚、慎は飲んでた酒を勢いよく吹き出す

「か、加弥ちゃん突然何言ってるんのよ。ひ、酷いよ」

「霞、俺はお前を信じていたに・・・」

「霞、やっぱあんたってたらしなのね」

三者三論でしょう

「加弥様は好きですよ」

加弥も一緒に吹き出した

「か、かかかかか霞、ほ、本当？」

「ええ。私は加弥様のこと好きですよ」

加弥は真っ赤になり視線を反らす

「霞君、なら私の事はどう思ってるの」

先塚様はは完全にテンパって後先を考えない発言です

「勿論先塚様も好きですよ」

・・・・・・・・・・・・・・・・

『え?』

「好きか嫌いで選ぶなら私は好きを選びますよ」

「ち、ちよつと待って、それはつまり恋愛云々は含んでないの?」

「そうですね・・・問題ありました?」

『大ありだよ』

あからさまに落胆する一人に安堵の表情の三人

私なんか不味いことしてしまったんでしょうか?

「ならカスミンの初恋っていつなの?」

「それが無いんですよ、初恋が」

予想通りという感じで頭を下げる一同

「なら霞君ってどんな子がタイプなの?」

「理想ですか・・・・・・多分こだわりはありませんね」

呆れる一同

そこで考えた慎は

「ならカスミ、お前の恋愛論を聞かせてくれないか。アレなんだから少しはヒネって」

「慎、それは言わない約束ですよ」

様付けを忘れる動揺っぷりに飛び付く加弥様

「アレってなによアレ」

『教えません』

断固拒否です。これは慎以外知らない最大の秘密なんですから

「ま、その辺は後々じっくり聞きましょう。今は霞の恋愛論でも聞いてみたら」

深娜様の天の助けです

「私も聞きたいです」

されに続く先塚様

ここは民主主義によりスルーです

「私の恋愛論ですか・・・・・・・・」  
目を閉じゆっくりと考える

私にとって恋愛とは、その人に全てを託す事が出来る、信頼出来る  
人と過ごす事だと思っています

私は誰かを選べる様な人間ではありません

私を選んでくれた人を私は何処までも信じて行きたいんです

でも私は臆病者です

ですが私を愛してくれ人の為に全てを投げ出す覚悟は常にあります  
私を愛してくれる人が私を嫌いになるまで私はその人の隣に立ち続  
けます

もしその人が私を嫌いになった時、私はその人を嫌い、自ら離れ、  
その人の記憶から消えましょう

その人が次を目指すための踏み台になる為に

私を知り、その上で私を愛してくれる人を私は愛します

嫌われるその日まで

ゆっくりと開く瞳

そこに広がる月の光に反射する花びら

私は選ばない

選んでくれた人を愛し通すだけです

「メイド風情がこの様な私情論を説いて申し訳ありません」  
「い、いや、いいよ別に。聞きたいって言ったの私達だし」  
慌てて誤魔化す加弥様、なんか涙目ですよ

「そろそろ帰ろつか。結構遅いし」

先塚様の提案で長い御花見も終了です。支度を整え  
いざ、我が家に帰りましょう

帰り道、先頭を歩く加弥様は振り向きながら

「ねーカスミン、カスミンって案外ロマンチストなのかもね」

「御冗談を加弥様、私は常に現実を見てますよ」

「そういうことにしとこっか」

そう言っておもむろに右手を掴み並んで歩く

困った顔をしてると先塚様までもが反対側の手を掴む

「!!--」

「!」

さて、私を挟んで喧嘩はよしてくださいね

家はもうすぐなんですから

ほら、深娜様も慎様も睨んでますよ

明日も大変そうですわ

20・波乱の御花見（こうへん）もう加弥様ったらおいたが過ぎますよ（後書き

やつと解放ですね。もう様付けしなくていいんだ。

え？夜もあるの？

この作者って実は変態ですよ？男にこんな格好させて何話引っ張るのよ

いい加減にしないとあなたの作品の中に勝手に出てくからね  
シリアスなのに加弥様とかでから台無しだからね

わかった？

まったく程々にしなさいよ

それでは皆様、もう少しの間、メイドの私、カスミンに御付き合いますね  
下さいね

21・命短し恋せよ乙女（私は関係ないわよ）（前書き）

はい、いつも読んでくれてありがとう。

なんと今回の前書きは私加弥がおくりしまーす。やっぱあれだね。ヒロインにはこーゆーのをやる定があるんだね。ほら、私霞とも絡むじゃん

あ、そう言えば作者何か言いたいんじゃない？

「今回から前書き、後書きに僕の書いてるキャラが出るから」  
だって。

やっぱ最初に私を出すのは当たり前よね

さ、前書きの仕事しなきゃ

え？終わり？まってよまだ仕事してないよ

## 21・命短し恋せよ乙女（私は関係ないわよ）

「ねー深娜ちゃーん、霞の事どう思ってるの？」

「いきなり何言ってるの？」

「だって結構嫉妬してなかった？」

「ニヤニヤ笑いながら加弥は頬杖を突いて問いつめる。

霞といい加弥といい何故読まれてるんだ。

昔は幸澤にすら読まれなかったのに。ここ数日で私は変わったのか  
もしれない

「って言うか嫉妬は流石に違うと思うわよ。霞はただの知り合い程  
度の存在よ」

「嘘だね深娜ちゃーん。ばればれ」

「何を根拠に嘘だと決めているのかしら？」

「あれ？気付いてないの？深娜ちゃん本心じゃないこと言うと眉間の  
シワが普通の1.02倍位に増えるんだよ」

「彼方の眼は何で出来てるのかしらね」

洗面器の湯を被り濡れた髪を白く細い指が払う

170の長身は瑞瑞しく、長くしなやかな手足は無駄のない引き締  
まった体だ

割と広い浴槽に三人の女性がゆったりと浸っている

「ほら深娜ちゃーん、白状したら。気になってんでしょ」

「ええそうね。なんで私の過去を知りながら普通に過ごせるのか理  
解に苦しむわね」

「過去って昔なにかあったの？」

長い黒髪は艶があり、意外にも出るとこは出て引つ込むとこは引つ  
込んだナイスボディーな先塚は、深娜といい勝負を繰り広げそうです  
「教えないわよ。あくまでこれは私の問題だし。それに話した時  
も酔ってたからつい口が滑ったのよ」



「微妙に嘘まじってるね」

この女は何者なのよ

「分かったわよ。白状するわ。昨日の夜に二人で散歩行ったときに話したのよ。あいつの昔話聞かせてもらったから」

二人はふくと頷く

「それに認めてくれたのよ。私を家族って」

『・・・・・・・・』

何この視線

「ふくん、やっぱ気になるんだ霞」

「だから違うつていつてるでしょ。あいつは何でもないわよ」  
視線を反らし天井を見上げる

私自身知らないわよ。私が霞をどう思っているのか

すると加弥はクククつと笑う

「じゃあ私が告白しても文句ないよね？」

もろに滑って浴槽に沈む二人

「加弥ちゃんなに言い出すのよ」

先塚は両肩をガツシリ掴みガツクンガツクン揺らす

「あはは。だつて私の初恋カスミンだもん」

「酷いよ加弥ちゃん、応援してあげるって言ってたのに」

「命短し恋せよ乙女」

やはりまだ酔いが覚めてないようだ

だが

「ねえ加弥さん、告白するのはいいけど果たして上手く行くかしらね」

何処か強気な発言に眉をひそめる加弥

「どーいうことかな？」

「その体で霞が落ちるかしら？」

そう、加弥は確かに可愛い。しかし二人にあって加弥に無いもの。それは色気

なぜ自分がこんなことを言ってるか分からなかった。気付いたら口を開いていた

「な、なんですと。カスミン言ってたじゃんこだわりは無いって」「そうかしらね。もし二人から選べって言われたら無いものより有るものを選ぶのが普通じゃない？先塚さんの方が上よ」

加弥は視線を先塚に向ける

「これがいけないのね。このたわわに実ったコレが！」

「か、加弥ちゃん、な、何、やめて。やめて〜」

浴槽で暴れる二人を横目に考える

霞は私を認めてくれた

捨てられ、人を殺し、罪を被り続けた私を

家族と

私は霞をどう思っているのかしら

「か、加弥ちゃん、深娜さんだって敵の一人だよ」

「先塚さん、何言って……」

ユラリと動く闘気

「確かに深娜ちゃんだってコウちゃんと同じ……」

「ま、待ちなさい、私は関係無いっていつ」

「これがいけないのね。このたわわに実ったコレが。そしてこの細さが！」

「騒がしい風呂だな」

「浸りながらも風呂場に向かうため必死に手錠をはずす努力をしないで下さい」

居間ではソファーに腰を下ろす私と壁に張り付けになり、あらゆる場所に手錠やロープによって拘束された慎様がいる

「と言うか着替えていい？この後お風呂だし」

「いいんじゃない？」

意外な反応です

「慎様なら確実に『やめろ、俺の理想像を壊すような真似だけはするな』とか『膝枕するまで許さない』とか言うと思ってました」

「いや、このままその格好で居られたらやめられなくなってしまう。流石に男に恋は不味い」

さいですか

さーて着替えるかなー

ピリリリリリラ

ラ？

いつ家の着信音変わった

ピリリリリリラ

はいはい今行きますよ

「はいもしもし」

ちなみに着替前でボイスもそのままでした

「あれ？大川君、声が違うね。いつもの棘がないな」

やっぱーい。声そのままだった

「もしや霞君かね？」

「いえ違います。霞君の友達です。今霞君を呼びますので」

急いで受話器を保留にし、ビヤバツと着替、階段から滑ってコロゲ落ちた

「か、霞ですがどちらさんだ」

「やあ霞君、久しぶりだね。拉致した会社の者だよ」

「幸澤か、何の用だ」

「いやーこんな時間に女を連れ込むとはハーレムじゃないか。うらやまし」

ガチャ

ピリリリリリラ

「はいもしもし、野崎ですが」

「切るなんて酷いじゃない」

ガチャ

ピリリリリリラ

「はい」

「わかった。本題だ」

「初めからそうしろ」

まったく面倒な奴だ

「君達に頼んだゼオンについて我々も色々調べたんだがね、面白

い情報を掴んだ」

「面白い情報？」

電話向こうではしのび笑いがする

「実は洸世高校のコンピューターに侵入しようとしたんだがね、セキユリティーが固かったんだ。はつきり言えば国家クラスのセキユリティーレベルだ」

国家？規模がでかすぎないか？

「深層部にはまだ侵入出来そうになくてね、その代わり学校の地図を入手することが出来たから後程送る。後深娜君は居るかね？」

「入浴中だ」

「覗きにはいったのかね？」

ガチャ

ピリリリリリリラ

「野崎ですが」

「君に冗談は通じないのかね？」

「知るか。後で深娜に伝えておく」

「ああ頼むよ。それから君にお嬢様から伝言がある」

ガチャ

ピリリリリリリラ

「なぜ切った」

「気分だ」

「まあいい。お嬢様からだがゼオンの事はお嬢様のお父上から聞いた物だそうだ。名前と場所以外は教えてくれなかったようでも探し出して欲しいそうだ。私からも頼む。お嬢様の為に探し出してくれ」

あー卑怯くせー

「分かったよ。努力する」

どうもこの手の理由がつくと断れん

「ありがとう、これからも深娜君を頼むよ。ちなみに彼女はDカットだ」

「この世から死んでしまえ」

ガチャ

「つたくあの馬鹿たれは何を考えているのか

「霞」。誰からだ」

「ああ、ちよつとした知り合いからだ」

誤魔化しておくしかあるまい

どうにもややこしくなってきたものだ

果して国家クラスのセキュリティを持つ学校をどれだけ探れるのやら

不安がつるばかりだ

改めて着替を済ますソファに腰を下ろす

「いやー、ようやく解放された。俺って言えるってすばらしい」

「ようやくカスミから霞に戻ったわけだ。それにしても霞、お前やつぱり変わってんな。恋愛ゼ口つてのが特に」

「やかましい。仕方あるまいあれが俺なんだから。それに俺よりいい奴は五万といるだろ」

「さいですか。やっぱお前は変わり者だ」

下らない会話は延々と続く

「さつぱりした。入っていいよ」ってなに着替えてんのよカスミン」

「黙らっしゃい。もういいだろ。満足したろ」

「まだよ。これからマッサージしてもらって一緒にお酒飲んだりしなきゃいけないのに」

「ちよつと加弥ちゃん、なに勝手に話を進めてるのよ」

討論を始めた二人を無視し、深娜に先程の事を伝える

「話が大きくなりすぎじゃないかしら」

「一応地図は来るらしいからそれを見て今後の計画を練るしかあるまい」

「そうね」

その瞬間殺意に満ちた気配に居間は支配される

ゆっくり振り向くと

「霞ー、深娜ちゃん、何をコソコソ話てるのー」

「大川さん、さっき興味ないって言ってたのに酷い」

勘違いですから

これは勘違いですから

「慎、風呂場に走れ」

ダッシャで風呂場に走り、神聖なる聖域を作り上げ、犠に深娜を差し出した

すまん深娜、後でなんが奢るから許せ

心で黙祷を捧げ、一日の疲れをとるための休息に浸るのだった

その後さらに飲み出した加弥を速攻で寝かせ、静かになった居間で映画鑑賞。

先塚、最終絶叫計　なんてマニアックな映画じゃありませんか。  
楽しかったから良いけどさ

さて一人づつ眠りにつき、最後はやっぱり俺しか起きてなかった  
結局片付け俺だかなー

明日もまた楽しめるかもしれん。多分明日はイジメられないだろう

多分

## 21・命短し恋せよ乙女（私は関係ないわよ）（後書き）

読んでくれてありがとーございました。

今回の後書きはしつかりやるよ

ん？また言いたいことあるの？

「えーいよいよ読者様がミレニウムに近付いてます。ですので突破記念に番外特別企画を実施します。基本はRPGで皆様のネタを基礎に頑張つて読み切り短編を連載する予定です。書いてほしいネタがもしありましたら秘密基地の小説ヒントに書いてみてください。では」

終わり？なら張り切つて後書きするよー

え？後書き終わり？ちよつとまってよ。私まだちゃんと仕事してないよ。次回もだしてよ



## 22・プロジェクトZ始動（前書き）

・・・・・・・・

何このコーナー

前書き？何で私が今回の担当なのよ。加弥さんが出せってダダこねてたわよ。

もう仕事すれば終わっていいんでしょ

今回は本題一步前進

以上

何よ。本当の事でしょ。詳しく言えばネタバレってうるさいし短いと文句言っし。

作者、あんた最近調子のとてない？いくらなんでも時とばあ

## 22・プロジェクトZ始動

暗く静かなとある一室に、一筋の光のみが周りを照らし、そこに立つ二人を照らしている

ライトの直下には一枚の地図が置かれている

「この地図を見る限り疑問点は三カ所ね。まずは・・・」

細くしなやかな指は一点を指す

「ここは確か美術室の筈ね。まずは二階で窓は一面。外に見えるのは体育館。美術をする上で余り良い場所では無いわね」

「確かこの学校は創立20年で最初からここが美術室と決まっていたそう。アルバムに写真が載っていた」

「次は音楽室。教室二つ分の広さに準備室までついている。広すぎないかしら」

俺は記憶を遡らせる

「合唱部の成績は良くて県大会出場程度だ。いくら学校が大きいからって確かに不自然だ」

改めて考えると不信な点は意外にあるものだ

「そして最後は学校の構造かしらね」

「何故だ？その辺はあんま変なのは見当たらない気が・・・あつ、避難経路か」

「そう。この学校の避難経路は何処もそれなりの距離と時間が必要。さらに言えば数が少ない」

この学校は元々あった建物を改築や増築により完成した学校で創立20年と言っても実際は結構古いのだ。

図書室にあるアルバムや創立記念の経歴書にはそこまで載ってはいなかった

し字形の本校を繋ぐようにもう一つの新校舎。さらに体育館を挟んで建物が建っている。

俺達の実験塔と呼んでいる。実験室が多いのと余り使用しないとゆうのが主な理由だろう

四階建てにエレベーター完備

敷地の広さもかなりのものでプールもある

「ついでに俺からも一つある。この地図には校長室が記載されていない。本来なら職員室の隣だがこの地図には載っていない」

「言われてみればそうね。何故かしら？」

「分らんからそこは幸澤に任せておくか。他の資料も集まらないと確信に迫れない」

二人は深い溜め息を漏らしライトを片付ける。そして部屋を後にした

「まずは朝飯だ」

GW最終日のは波乱な匂いをかもしだしていた

現在午前8時20分

三名爆睡

二名朝食準備中

「深娜、なぜそれを手に持っている」

それはタバスコ

「入れないの？」

「お前がいた家ではピザトーストにタバスコをかけるんだな。しかも一瓶丸々」

真っ赤に染まったパンの上には赤い液が滴るベーコンにより赤く染まるトマト

パプリカに見えるピーマンは正に無限の境地だった

「勿論お前が食べるんだよな？」

「……………」

「食べるんだよな？」

「……………」

「食べるんだよな？」

「ご免なさい食べ物粗末にしてすみません指示に従わず勝手にやっています。ですので無表情で睨まないで下さい」

「君はいつもそうなんだよ」

和やかな朝を迎えた我々に悲劇は訪れた

ピンポン

「俺が出る。深娜はその物体を作り直してくれ」

ピンポン

「はい、ちょっと待ってください」

エプロンをしたままイソイソと玄関に向かう

「どちら様ですか」

「霞君、私だ」

「この家の敷地内から今すぐ立ち去れ幸澤」

「何故かね」

「友達が泊まっている。この事は話していない」

「ああ、その事について話にきたんだ」

ガチャ

戸を開けると会った時と同じスーツ姿で立っていた

「やあおはよう霞君、昨日は覗いたかね」

ボタン

ピンポン

「なんだ」

「すまない、本題を話すから入れてくれないかい」

ガチャ

「いいだろう。俺の部屋に行ってくれ。階段を上がって左だ。俺は深娜を呼んでくる」

そう言つて深娜を呼び部屋へと向かう

「で、なんだ」

椅子に座り座布団に座る幸澤を見下ろす

「ああ、まずは先に聞くが君の友達は信頼出来るかね？」

「愚問だ。俺は皆を信頼してるし信用出来ない奴ははなから友達と認識していない」

「それは何よりだ」

幸澤はニツコリ笑い直ぐに真顔に戻った

「では本題だ。君達に頼んだ件は思っていたよりも規模が大きい。我々の調査不足で巻き込んだことは詫びる。しかしこの件はなんとかしても遂行してもらう。その事でお嬢様と話合った結果、仲間を増やす事にする。それが君の友達だ」

・・・・・・

「つまり、危険がある可能性のあるこの仕事を手伝わせると？」

「早い話そうだ」

「却下だ。俺だけならまだしも他の皆を巻き込むのは許さん」

「そこを御願ひしているんだよ」

「いい加減にしろ」

低く押し殺した声に深娜は驚いた  
必死に感情を捻伏せ己を抑える

「友達を巻き込むことは俺が許さん。本人が望むなら俺は口出しする気はない。だが強制だけはするな」

今までで一番威圧のある無表情で睨む  
幸澤は溜め息をつき

「余り事を荒げたくなかったんだがね……」

「ぐああああ……」

居間から響く慎の悲鳴

「慎！」

俺は部屋を飛び出し居間へと走る

深娜は驚きの表情を見せていた。まさかここまでやるとは思っていなかったんだろう

居間へ飛込むとそこには喉を押さえ苦しむ慎と慌てる加弥と先塚がいた

「慎、何があった」

「があああ、ぐ、あああああ」

ひたすら苦しむ慎

まさか何か毒物を……

「どうしたのかね霞君」

平然と降りてきた幸澤に対して殺意が芽生える

「貴様、何をした！」

荒げる声に全く反応せず

「おいおい、私は何もしていないぞ」

「貴様、シラを切るつも……り……」

その時俺は見てしまった

慎の口元に付いた紅い液体

押し黙る俺

まさかな、まさか慎は……

「  
・  
・  
・  
深娜」

静かに燃え上がる感情を抑え、平静を保つ

「お前が犯人か」

「霞、何を急に」

驚きを隠しながらいつもの様に答える深娜

しかし

「お前が犯人だ、………つかお前が作った危険物食ったんだよ慎は！」

急いで冷蔵庫から牛乳を持ち出し慎に差し出す

[illegible]

無我夢中で牛乳を飲みほし、

「辛ね」

口から炎を吹き出さんばかりの雄叫びをあげた

彼は一命をとりとめる事が出来た  
一人の友の迅速な行動によって

「で、そちらさん誰？」

加弥の当たり前の対応だが困った

話すべきか否か・・・

「こんにちはお嬢さん。  
わこせつ  
故雪と申します」

私は菊池財閥の執事を務めております幸澤  
ゆきぞう

話ちゃったこのばかり――

ん？菊池財閥？

『えくくく 菊池財閥！』

説明しよう

菊池財閥とはこの街、つつか多分西日本最大の財閥だ

あらゆる分野に手を出しほぼ全て成功に治めている

ちなみに失敗したのは確か駄菓子屋の復興だったな。いまいち反応が鈍かったらしい

そして菊池財閥はコレクターとしても有名でよくじいさんに聞かされていた

あ、うちのじいさんも金持ちだから。勿論菊池財閥よりは下だけど。ばあさんはもう他界して今は一人で世界中飛び回っている

「で？その菊池財閥の執事さんがこんな庶民の家に何用？」

「んくく。話たいのは山々なんだがね、霞君、どうしたらいいかね」  
振るなよバカタレ

「霞、つまりお前次第か。どうするよ、加弥が既に食い付いてるぞ」  
「いいなさい霞、言わなきゃ後が酷いよ。特に格好が」

「すいませんすいません。話します」

本日二度目の溜め息をついた

「先に言っておくが聞いてからじゃ遅い。それに危険がある可能性がある。俺は友を危険に巻き込みたくないのが本音だ」

本当に嫌だ。友達を巻き込みたくない

「だがそれでもいいなら止める気はない。つつか言わなきゃ俺が殺られる。いいか？」

頷く三人をみて覚悟を決めた

「んじゃ話すか」

俺は全てを話した

そりゃく全部話しました。



深娜が親戚で無いことも

「と言うわけだが質問は？」

『ない』

ないの？

「つつか今までで黙ってんなよこんなこと」

「そうだよ。霞君だけなんてずるい」

「霞、あんた後で私刑ね」

三者三論に

「中々愉快的仲間だね。羨ましいじゃないか」

「さいですか」

もう好きにして

この場を借りまして発表です  
本日只今より

「ゼオン探索対（仮名）」  
の始動です

応援よろしく！

## 22・プロジェクトZ始動（後書き）

分かった？本当に分かったのかしら？

もう少しその少ない頭で考えてから書きなさい

あら、もう後書き？

分かったわよ。やればいいんですよ。

次回も一歩前進するそうよ

なに作者？また文句言いたそうね

だいたい貴方は調子にのって他人に迷惑かけすぎなのよ。少しは頭をつか

後書き冒頭に戻る

### 23・見た目と内心と総合的ないい加減差と（前書き）

ああ、前書きかい、

初めまして。僕はリオ。偶々雨が続いて立ち往生で暇だったから助かるよ

読んでみたけど、今回は「人の持つ表と裏、想像と現実」がテーマみたいだね

人には社交的な面と隠し続けたい面が存在するんだ。僕にもある様に君にもあるんだよ。

イメージだけが全てじゃなく、実際に見て初めて気付く事だってあるんだ

それじゃあどうぞ

## 23・見た目と内心と総合的ないい加減差と

ピンポンパンポン

「次と呼ばれる生徒は第二生徒会室に来てください」

昼食の時間に全クラスに流れる放送。どうやら新室長と副が呼ばれているようだ

「大川深娜さん、囃ませ犬下道」

「誰が囃ませ犬下道じゃい！」

モッブ片手に放送室に殴り込みに行く俺

「お昼ぐらいゆっくりさせてほしいわね」

溜め息をつきながら兎の絵の描いた弁当箱をしまふ深娜。（この弁当箱を選んだのは加弥）

「初めまして、改めて自己紹介をする。会長だ。最後に様を付ける  
とポイントアップだ」

「貴様何言ってんだ？」

隣の副会長は平然と言う

「ふふふ、3ポイントアップだ」

「シネ、キサマ」

こんなやりとりを10分程続け本題に入る

「では早速用件を伝える。君達は室長、副室長になった時点で生徒会の一員となる。つまり私の下僕だ」

「はい、会長様」

手をあげる俺

「2ポイントだ。何かね？」

「死ねクソヤロウって言っていていいですか？」

「困るね。君みたいな自尊心が強い生徒は」

「死ねクソヤロウ生徒会長様」

「2ポイント追加でマイナス235892だ」

「あはははは」

「ふふふふ」

お互い笑い合う

「死ねクソ会長様！」

「甘いぞ噛ませ犬風情か！」

テーブルから高々と飛び跳ね、お互い手にしたモップと箒が交差する  
お互い致命傷を与えられず着地と同時に手に持つ物を投げる  
弾きあつた二本の武器は宙を舞い、互いの手に戻る

「ふふふ、中々腕を上げたね」

「ふん、これからだ。行くぞ！」

「黙れ」

「黙りなさい」

サイドから強烈なストレートを受け無様に倒れる二人

「あーうん。話が脱線したね。今回集まってもらったのは君達に生徒会の仕事を担当してもらいたいんだ。そんなたいした仕事ではない。委員会や部活動がどれだけ成果を上げているかとか不正を行ってないかなどを監視してもらおう仕事だ」  
会長はホワイトボードに色々と書きだした

【量産の暁には他のモビルス ツなどあつというま・・・】

【ソロモンよ、私は帰っ・・・】  
【ジーク・ジオ】

しばらくお待ちください

ま、待ちたまえ三木原君、これはほんのジョークだぎょ

「三年から順に決めて」

ホワイトボードの裏で無惨な死を遂げた会長を無視して考えてみる

「何がいいと思う」

「私としてはここかしら」

そこは部活動運営会計及び運営状況の調査

「ふむ、確かにこれなら学校全体が調べれるな」

「決定ね」

そう言ってボードに2・Cと書き席へ戻る

「うむ、全て決まったようだね。ではこれにて解散だ」

白眼の会長の後ろで腹話術の様に話す副会長を横目に生徒会室を後にした

只今4時20分

放課後です

「これより第一回部活意識調査を開始します」

「わ」

「まずは成績優秀部員真面目のラグビー部。」

「頑張つて男子」

「なんで男子？」

「だってなんか汚そう」

と言うわけでラグビー部、部室にて俺と慎は部長の田村先輩の前に座っている

「ぶつちやけ綺麗だよな部室」

「凄い綺麗だ」

「勿論だとも。我々部員は綺麗好きだ」

草原の油絵に花瓶、白のテーブルにはレモンティーにチーズケーキ。誇り一つ見当たらない床

「皆来ればよかったのに」

チーズケーキを口に運びながら慎はグチる

「それで、今回は何かあったのかね？」

「今回は挨拶と簡単な会費の運用用途です」

「ふむ、運用用途は簡単だ。道具の整備や買い足し、後このケーキとかだ」

「成程。分かりました。後もう一つ、これは単純な質問です。この学校の不振に思った点がありますか？」

「不振な点……ああ、先輩が言ってたな。実験棟に開かない部屋があるそうだ」

「開かない部屋？」

「ああ、なんでも4、5年は空いてないそうだ」

「そうですか。ありがとうございました。慎、帰るぞ・・・あれ？」  
隣にいるはずの慎がいない？

「か、霞、たしけて」

「慎」

両サイドを屈強なラガーマンに抱えられグラウンドに引きずられていく

「慎、グットラック！」

「裏切り者・・・」

さて次は野球部・・・

「シニクサレバッター！」

「はっはー。滑ってバット飛ぶかもしれないぜ」

「貴様等、それでも野球部か！腕立て2万秒！」

「パス？」

『パス』

次は・・・

「そろそろ引き上げない？今日は霞の家にお客さん来るんですよ」

「思い出させないでくれ。忘れてたいんだ永久に」

「霞、失礼は許さないわよ」

「すいませんすいません消ゴムの角でグリグリしないで消えちゃうから」



そうなんです。今日家にお嬢が来るんです。  
最悪です

なんでも挨拶がてら来るそうだが迷惑このうえない

飯作るの俺だよ？

ワザワザ俺だよ？

絶対文句言っよ？

「霞、お嬢様への失礼は許さないわよ」

「すいませんすいませんシャープンに付いてる消ゴムでグリグリしないで」

我が家にて

「なんで俺も幸澤と同じ服装なんだい？」

黒のスーツを着こなし片手にナプキンを乗せ、直立で立つ俺

「すまないね。これもお嬢様に失礼の無いためなんだよ」

幸澤は涼しい顔でお嬢の隣に立っている

「初めまして皆さん。私は菊地財閥総責任者の菊地麗奈きくちれなと言います。  
以後御見知りおきを」

優雅に頭を下げる麗奈嬢、ピンクと白のドレスに身を包み、栗色の髪は腰まで伸び、人形の様な顔付きは俺から見ても美人だ。慎に至っては

「私のことは下僕と御呼び下さい麗奈様」

「なら下僕、料理を運んで」

「カシコマリマシタマイますた」

狂ってるよ

「それはそうと今日のメニューは何かしら？」

「ただのカレーだ」

「カレー？冗談にしては笑えないわね」

「はっはっは、なら今すぐ自宅に帰りやがれ」

首筋に伸びる銀色で鋭利な・・・

「すいません深娜さんもうしません」

「でも霞のカレー美味しいよ」

加弥はスプーン片手に戦闘モード

「ふふふ、それでも私は食事につるさいですよ」

運ばれてきたカレーはシーフード中辛仕立て

サザエのワタ、蟹味噌、アサリの煮汁を使いコクのある味に仕上げ、煮すぎると固くなる魚貝類を程よい柔らかさで仕立てる。

ご飯は擦った人参を混ぜたバターライス、

水は少し少なくして味を堪能して頂く

まずはお嬢が一口

「・・・・・・・・・・・・・・・・まあ・・・・・・・・中々じゃ・・・・・・・・ないかしら」

目は既にカレーをロックおん！

次に加弥が・・・・

「おかわり！」

「味わえよ」

既に皿は空である。オソルベシ

「深娜、彼方毎日こんな料理を食べてるの？」

「いいえ。今回は雪澤が料金を負担するとの事で豪華になったんです。いつもは普通の料理です」

「そう、なら霞、彼方明日から私の家の料理長を担当しなさい」

「はっはっは、誰がやるか」

「何が不満なのよ。給料は出すわよ」

「根本的に香水嫌いだしそういう性格嫌いだから」

「私がこんなに頼んでるのにですか？」

「頼んでる人が椅子に座って俺の友達を下僕扱いか？」

「・・・・・・分かりました。諦めましょう」

そう言ってカレーを食べ始める

「おかわり！」

「だから味わえ加弥」

「霞君、後で作り方教えて」

「はいはい了解」

「おい霞、なんで俺のカレーにはゲソが大量に入ってるんだ？」

「単純な悪戯だ」

食事はとてもにぎやかだった。

ただ深娜は口数が少ない気がした

一時間後

「改めて説明しますわ。皆さんに探して頂きたいのはゼオン。お父様が亡くなる前に話して下さった遺言の様なものです。光世高校の

何処かにあるとしか言ってます。ですので皆さん、お父様の遺言の真意を私は知りたいのです。どうかお願いします」

頭を下げる麗奈は確かに真剣だった

やはりこうなると断れないのが俺なのである

「つつ事だ。皆、いいかな？」

皆は笑って頷いてくれた

「だそうだお嬢」

「ありがとうございます、私に出来ることがあれば言ってくださいね」

「ならその香水つけて家に来るの止める。鼻が痛い。せめて後10倍薄める」

「何言ってるの？彼方には女性の苦勞が分からないの？常に美しくなきゃいけないよ」

「だが皆は化粧無くてもお前より魅力的だと俺は思うが？」

『！！！！』

数名の動きが止まる

「彼方の感性がおかしいだけですわ。まあいいでしょう。今日はこの辺で帰りましょう。幸澤」

「はい、お嬢様」

幸澤は素早く居間の戸を開け道を作る

優雅に帰ろうとするお嬢を深娜は寂しそうに見ていた

仕方ない

「お嬢、香水なしで普通の服だったらたまに飯食いに来ても構わんぞ」

「……………考えておきますわ」

そう言い残し帰ったお嬢

それに続くように皆も帰り静かになった

台所で片付けをする俺に深娜が話しかける

「なんでお嬢様を誘ったの。嫌いなんでしょ」

「ああ嫌いだ。だがお前にとっては家族なんだろう？たまには良さ」  
「そう・・・」

後ろに立つ深娜の表情は分からない

でも多分・・・

「ありがとう」

笑ってるさ

「お嬢様、いかが致しますか」

黒光するベンツを走らせる幸澤

「そうね・・・まだいいわ」

麗奈は相変わらず優雅に腰かけている

「かしこまりました」

無言の車内

いつもと変わらない静寂

しかし何処かいつもと違った

「幸澤」

「はい、お嬢様」

「来週にでもまた行こうかしら」

「かしこまりました。手配しておきます」

いつもより暖かい車内だった

### 23・見た目と内心と総合的ないい加減差と（後書き）

楽しんで貰えたかな？

いつか君達にも表と裏を見せることが出来る友達に会えるといいね  
あ、雨が止んだ。それじゃあ。またいつか

がー、なんだこの後書き何故笑いが無いんだ！  
何でなんだ（家の窓から叫ぶ）

ブロロロロロロロロロロ

なんだこの音は！（どかしやつ）  
ぎゃー

おや、何かぶつけたかな？

## 24・野崎の野望（戦線前）（前書き）

さて、久々に前書きに登場したウドの大木だ。やっぱりお盆だし時間に余裕あるからさ

で、今回作品は長編の手前の手前！と言っことしか言いません

詳しくは後書きで

では、最後まで楽しんで下さいね



## 24・野崎の野望（戦線前）

「以上で終わります」

一人の生徒は頭を下げ、職員室を出ていった。それを確認した二年教師は談話を始める

「いやーいよいよ近付きましたね」

「そうですねー。我々教師も楽しみですから」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「今回は何処でしょうかねー」

何処かで何かが狂い始めた

「で、話をまとめると」

「ああ」

先生は暗い面持ちで座っている

「我々学生の想い出のページに刻むに値する修学旅行の予定地は生徒に決定権があり、その重大な仕事をする日を連絡し忘れ既に内定してると・・・」

先生は非常にすまないといった表情です

「しかも予定地は東京に北海道？とてつもなくありふれた場所で観光地が限定された地域ですね・・・」

「その・・・すまん」

「いえいえ。先生を責めてる訳ではありませんが先生のミスで2」

この生徒の記憶に悲しみを刷り込ませる様なことになっては・・・  
・先生を責めてる訳ではありませんが」  
俺は細い目で窓の外を見る

「ふう・・・東京に北海道ね」。お決まりだな」

「か、霞君、何か良い案はないかな」

焦る先生を横目にポツリと呟く

「こりゃー校長先生に減給の案提出しようかなー」

「霞、家には小学5年生に上がる娘がいるんだ・・・！」

悲しい先生の力説に大丈夫ですよといった表情を向け、肩にそつと手を乗せる

「そついえば先生の昼食シャケ弁ですよ。ノリ弁にすれば二百円浮きますよ」

笑顔で先生の小さな希望をぶち壊し

「先生は何も見なかった事にして下さいね。じゃないと減俸にしますからね」

そつ言い残し職員室を後にした

昼休み

「今回貴重な昼休みを返上してまでここに集まって頂いたのだが緊急集会を始める」

廊下に面する窓を全てカーテンで遮り、クラスメイトを出来るだけ密集した状態で緊急集会は始められた

「我々は2学年である。高校2年と言えばアレがあるね」  
クラスメイトの頭には同じ文字が浮かんだ筈です

【修学旅行】

と

「今回の修学旅行の予定地は生徒に決定権が与えられている」

『お~~~~』

「しかし、先生のミスにより既に内定してしまった。場所は東京に北海道」

『は~~~~！』

クラスメイトの怒りはごもつともです

「我々2ーCに決定権は無いのか？否！そんな暴挙は存在しない！我々優良者たる2ーCに管理、運営され初めて心に残る修学旅行が生まれるのである！無能たる他のクラスの生徒に如何程の策略があるうとも、それは既に形骸である。あえて言おう。カスであると！それら軟弱な集団がこの2ーCの団結力を抜くことは出来ない！私は断言しよう。明日の未来の為に我等2ーCは立たねばならない時である！」

『お~~~~！』

「ジーク・自民！」

『ジーク・自民！ジーク・自民！ジーク・自民！ジーク・自民！』

この2ーCの団結は、後に【自民の集い】（注意、自民とは自由民主主義の略である）と語り継がれた

「この会議はいかなる事が有ろうとも口外は禁止である。」

放課後、コの字に机を並べ議長である俺を真剣に見る

「既にこの教室は七力所盗聴されていたが全てダミー音声を設置しておいた。安心して会議を始めよう」

黒板には加弥が配置し、慎はパソコンにスタンバイ、先塚は廊下に設置した数台のカメラをくまなくチェックしている

「深娜、アレを」

深娜は黒板に大きなポスターを二枚貼る

「分かるかね？私としては沖縄、京都に行きたいんだが」

青い空、澄み渡った海、照りかえる太陽の光に反射する輝く汗

「男子の諸君、君達は夢と希望はここに詰まっていらないかね？見たくはないかね？本心をさらけ出したらどうかね！」

『うお~~~~~！しなやかな肌！

きらめく汗！肌に食い込む水着！その時見せるあの笑顔！』

「男子の諸君！どうかね沖縄！」

『我々男子一同隊長に最後までついていきます！』

男子とは団結の強い種族だ。そう感じた

「次に女子の諸君。日本の女性として京都美人とまでいわれる京都に行ってみたくはないかね？」

優雅に美しく、控え目に振る舞い世の男を魅了し、その微笑みは一撃必殺の威力を容易に生み出す

「これによりこの学校を落とすことなど更に容易になるのではないかね？君達は夢と希望はここに詰まっていらないかね？見たくはないかね？膝ま付く男子を！」

『ついに来る私達の時代、今まで日を見ること無く終るかもしれなかった学校生活に一筋の光！私達女子の天下！』

「どうかね京都！」

『彼方の事を隊長と呼ばせてください！』

「協力、感謝する」

必ず成功すると確信した

「それにしても霞、あんたも男なんだって改めて確信したわ」

スパゲッティを食べながら白い目で見てくる深娜

「何がだ？」

「男子にあんなこと吹き込んで。自分も見たかったんじゃないの？」

「まー見たくないって言ったら嘘になるがそれよりも行きたいのが  
古来の琉球文化、沖縄！日本の心、和の美学京都！最高ではないか  
！」

「・・・つまり自分の為？」

「皆行きたがってたんだからいいではないか。お前は嫌だったか？」

「そんなことは言っていないわよ」

なんか不機嫌だな

片付けを済ませ、作戦会議を始める

「明後日の朝に最終決議の投票開封が始まる。俺達は不在だったから参加は出来ない。そこで明日の深夜校内に侵入し、投票用紙を摩り替える」

「校舎の侵入方法は？」

「担任を落としてある。口を割ることは無いから安心しろ」

「後は運次第ね」

「そうなるな。恐らく鋭兵が待機している筈だから色々準備をする  
か」

ケータイを取り出しメモリーを開く

ピッピッピッピッピッピッピッピッピッ

ぶるるるりらら

ぶるるるりらら

「霞か」

電話に出たのは低く押し殺した様な声が聞こえる

「そうだ。すまないが今から用意してもらいたいものがあるんだが・

・・・・・」

「倉田からも来ていた。夜間タイプでいいな？」

「ああ。五着程頼む」

「明日の昼には運んでおく。報酬は・・・」

「明日の朝一に郵便に出しておく」

「助かる」

「お互い様だ」

「そうだな。武運を」

「感謝する」

電話を切ってから気付いたが隣に深娜が立っていた

「今の男は誰？」

「軍事マニアの引きこもり君だ。本名は言わない約束なんでね」

「別にそこまで知りたくはないわ。なら明日決行ね」

「そうだな。じゃ、俺は早めに寝る」

そう言っただけで戻ろうとする俺を深娜は呼び止める

「そう言えば報酬ってなんなの？」

「報酬？ああ、あれね」

居間を出ながら教えた

「加弥の写真が欲しいんだとさ」

次の日目を覚ますと、僕は庭に生き埋めにされていた

何故！！！！！！

## 24・野崎の野望（戦線前）（後書き）

どうだったかな？楽しんで頂けたら幸いです

今回は戦略と策略の渦巻く戦場！一人、また一人と倒れる屍を乗り  
越え掴めるのか希望の世界を！

止まるな霞、躊躇するな、引金を絞れ！

ターーン

霞よ・・・止まるな・・・俺の屍を・・・越えて行け・・・

ターーン

無念



## 25・英雄達、進撃せよ！（前書き）

こんにちは霞です

今回のお客様さんは深娜さんです

「で、何のコーナーなの？」

前書きですよ

「そんなことやる暇あるなら少しは作戦を考えたら」  
「いや、そんなこと言われても・・・」

「いいから早くしなさい！」

・・・はい

それではどうぞ

## 25・英雄達、進撃せよ！

昼休み、教室は静寂に包まれている

「今言ったのが今回の作戦だ」

黒板に記された記号の様な字の羅列  
暗号化された作戦は全員に伝わった

「後は運に任せるのみ。皆、心してかかるように！」

21Cは一つになった瞬間だ

深夜11：20分、校舎は静寂に沈み、闇に支配されていた

玄関に立つ黒い影の集団

一人は校舎の鍵を開けセンサーを全て解除する。合図が出ると影は音もなく校舎に侵入する

暗闇の中小さな動きでサインを送りそれぞれ配置につく

「これより『BSE』を開始する」

BSEとはbest school excursionの略である

「A班C班配置につけ。B班はこれより我々と共に第二生徒会室に向かう。確実に鋭兵が潜んでいる。心してかかるぞ」

『了解!』

闇に紛れる様に黒服の集団は北階段前に向かう

暗い階段の前につき辺りを見渡す

ここに敵は配備されていないようだ

階段を登りそのまま三階に行きたいところだが三階への階段は見事に封鎖されている。大量のワックスに一段毎に配置されたハードルどちらにしてもこれを越えて戦闘に突入すればワックスにより滑る足。

負けるのは我々だ。

予定通り西階段から向かうことにする

廊下の奥は完全に見ることが出来ない。

霞他四名は暗視ゴーグルを作動、奥に敵はいない。しかし妙な物がぶらさがっている

あれは・・・

「空き缶？」

慎は暗視ゴーグルから赤外線ゴーグルに変え、改めて見てみるとあらゆる場所から赤外線レーザーが巣を張っている  
これでは完全装備の五名以外は通行出来ない。

霞は直ぐ様新なプランを作成する

「B班はこの場にて待機、先塚はA班の後藤、山下をここに呼んでくれ。慎は西通路、深娜は東通路を監視、加弥は外の監視部隊に現状報告を」

皆は迅速に命令をこなし、霞は望遠鏡で先程の缶を調べた。改めて見るとあれは空き缶に偽装された何かだ

「B班！第二防御体勢、西通路を塞げ！」

直ぐ様張られた第二防御、黒いビニールのような物が西通路を完全に封鎖する。

それと同時にビニールに何かが数十発着弾した

奇襲が終わりビニールから顔を出す霞は安全を確かめ防御体勢を解除した

着弾したものは

「くそ、ガムか。しかも誰かが噛んでた奴だ」

ミントの香りのガムが付いたこれはもう使えない。その場に破棄し、二人の到着を待つ

数分して駆け付けた二人に霞は指令を出す

「後藤、山下、二人はその階段を通行できるようにしてもらいたい。出来るな？」

「隊佐、舐めては困る。我々の実家は掃除専門業者だぞ」

後藤は胸を張る

「任されよ隊佐！三分以内に終らせる」

山下は雑巾をヒュバツと構える

二人は敬礼をし、階段に対峙する

「ワックスは多いからって綺麗になると思っな」

「早く、薄く、美しく！それが掃除の神髄だ！」

二人のプロの掃除人の手により輝く階段が姿を現す

「さあ隊佐殿！我等が研きし道を！」

「我等の想いを頼みます隊佐殿！」

「任せろ！」

三人は固く拳を握り先へと進む

### 三階、西階段前

「これより東通路の第二生徒会室に向かう。B班は二手に別れ移動する。南ルートのは出来るだけ派手に頼む。我等わ2分後に北ルートへ向かう」

二手に別れたB班は一行に並び敬礼する

『我等の夢を貴方に託します。御武運を隊佐！』

「必ず叶えて見せる。君達の働きに期待する！」

武器を持つ英雄達は雄叫びを挙げ走り出した

「深娜、タイムを」

英雄に背を向ける霞は静かに告げた

「突入だ」

静かに告げた霞は低い姿勢で校舎を移動する  
遠くで銃撃戦が繰り広げられているようだ

西通路を北へ向かう霞達、相変わらず暗闇に包まれている

力子

そんな音が微かに聞こえた時、霞は叫んだ

「全員伏せる！」一斉に伏せた皆の頭上を銃弾が通過する

直ぐ様第一防御体勢をとる霞達は少しづつ距離を縮め、敵は後退をしている。相手が角へ身を引くと同時に霞は懐から筒上の物体を投げつける

「目を閉じろ！」

その瞬間辺りは眩しい閃光に包まれて敵は目を抑えのたうち回っている

「ふん。暗視ゴーグルに頼り過ぎたな」

縛り上げた敵兵を盾の様に掲げ雄叫びをあげる

「打ち首だぞ〜！」

「落ち武者カッツするぞ〜！」

「鬚剃るぞ〜！」

「水責めだぞ〜！」

飛び交う銃弾は盾により防がれ（当たる度に幸せな顔をしている）  
一気に東通路まで攻めた

東通路、第二生徒会室前は敵の拠点により守りに徹している。スナイパーにより近付く事も出来ず、閃光弾を投げつけても打ち返す凄腕の鋭兵だ

「こちら南ルートB班、近付く事は困難かと」

「こちらと同じ状況だ。しかしここを落とせば我々の勝ちだ。勝気を逃すな」

「了解しました。指示を待ちます」

通信を切り、何か案はないかひたすら考える

「霞、挟み打ちで一気に仕掛けたらどうだ？」

「慎、あちらに着く前にスナイパーの餌食だ。恐らくマシンガン部

隊も待機してるだろう」

「こつちも狙ったら？」

「こちらからでは場所が不利だ。頭を出した時点で狙撃される。第一加弥、こちらのスナイパーは二丁だけだ」

戦況はこちらの不利だ。戦況を覆す一手が欲しいが……

その時頭に一筋の光が落ちる  
霞は無言でサインを送る

合図があるまで耳を塞げ！これより対聴覚、精神攻撃を始める。  
絶対に聞くな！

直ぐ様無線で同じ指示を出す

「無線の合図があるまで耳を塞げ。必ずだぞ！」

全員が耳を塞いだことを確認し、そつと深娜に合図を送る

恐らく俺も精神破壊を受ける。その後の指示は任せた

まさかの為に準備をしていた秘密兵器が役に立つとはな……………

……………

「秘密のままの方が良かった兵器か……………」

ペンダントを首にかけ息を吸う

俺は女俺は女俺は女俺は女俺は女俺は女俺は女私は女私は女私は女  
私は女私は女私は女

私はカスミ！私なら出来る！

「隊長、弾薬が尽きました。早く補給してください。ねえ、は・や・く」

去らば俺

その場に崩れ去る俺は無線で合図を送る

「・・・突撃だ」

遠くで怒声が響く

「霞、そこまでしても勝ちたかったの？」口を開くことが出来ない俺は手で返事を返す

勝ちたいさ。早く行け。治まったら俺も行く

頷く深娜は突撃を指示する

「全軍、総攻撃を始めるわ。行きなさい！」

銃を掲げ高らかに宣言する深娜、それに続く英雄達は走り出した

敵兵の拠点は総崩れを起こしていた

いきなりあんな声が聞こえた為、半数は悶え、半数は頭を抱え震えていた

そこに突撃してきた黒服の集団はあらん限りの銃弾を乱射し兵が次々と倒れ、残り数名となってしまうた。

第二生徒会室にたて隠る

入り口を固め銃を構える



開けたら蜂の巣にしてやる！

「開けたらまず蜂の巣でしょうね」

深娜は現在の残り武器を確かめる

マシンガンのマガジンか3、閃光弾1、投げナイフ4

「苦しいわね」

「策はまだある」

先塚に支えられながらゆっくりと近づく霞

「最後の最後に使うことになるわな」

霞は小さな無線を取り出した

「お願いします。隊佐殿」

たて隠る兵は後ろからする小さな音に振り向いた

「やあ、初めまして」

それは全身黒のスーツに身を包み、ナイフを片手にそいつは立っていた

「そしてさようなら」

素早く身を低くし一番近い男の足を払い倒れた相手の頭に踵をぶつけ倒す。

室内で乱射される弾は蹴り上げたテーブルで防ぎ、そのままテーブルごと敵に向けて蹴り飛ばし二人を仕留める

「後三人か」

死神の声を響かせた

「隊佐つて貴方霞じゃないの！」

「すいません。隊佐殿に影武者を頼まれました」

顎を掴み上に向かつて引つ張ると皮が剥げるように霞の顔が取れる  
「隊佐に何があつてもバラすなど言われてまして今まで黙っていました」

「この技術は特科研部のだな」

慎は皮をヒラヒラさせている

「なら作戦とかは君が？」

「いえ。昨日メールで一通りの作戦は伝えてもらっていました」

「つまり霞君は全部分かってたんだ！」

「改めて霞が何者なのか分からなくなってきたわね」

皆は生徒会室を見ていた

「貴様が最後だ」

ナイフを構え一歩づつ近付く霞

「くそ、最後の最後にこんな策を持ってたとな」

「貴様の作戦がずばりなだけだ」

「だか最後に笑うのはやはり我々だ」

男はビデオテープを見せる

「貴様達が深夜に校舎に侵入して暴れた映像が入っている。教師の目に入ったら終りだ」

男は立ち上がり三階の窓を開け放つ。そこには隣の校舎の一階までロープが引いてある

「貴様の敗けだ、霞！」

男は闇の中へ消えた

残された霞は用紙を摩り替え生徒会室を後にした

「諸君、作戦は成功だ！」

歡喜が校舎を包んだ

深夜、家に帰り、霞は深娜に一部始終を話す

「つまり私達の負けってことよね。いくらなんでも生徒と先生じゃ話にならないわ」

「深娜、俺は皆に勝利を宣言したんだぞ？この程度の壁、紙に銃弾を撃つくらい脆い」

霞は笑いながらテープを取り出す

「策とは最後の一手まで決めるものさ」

「そのテープは？」

「明日になれば分かる」

ぴんぽんぱんぽん

なんだ今のベルは！

「野崎霞君、大川深娜さん、今すぐ職員室に来なさい」  
ざわめくクラスに問題無いことを伝え、職員室に向かう

「どうゆうことかね？ 昨晚学校に侵入して暴れたそうじゃないか」  
「誰がそんなことを？」

とぼけた様に笑う霞はさりげなくポケットの中のスイッチを押す

「こいつらが校舎に入るのを見ました」

21Dの山崎が勝ち誇った顔で言う

「野崎、どういう事か指導室で」

「まーまー先生」

割って入ってきたのは生徒会会長、月野屋政樹である

「先生方、彼等が学校に侵入した確な証拠をお持ちですか？ 更にたとえ証拠を持っていたとしても彼等の言い分をちゃんと聞くつもりでしたか？」

「しかし月野屋君、深夜に校舎に侵入など退学処分の検討が必要に

」

「上からばかり見ているから生徒側の不審も募り、その様な奇行に走ると考えれなかった事に問題があるのでは？ 第一証拠と言ってもいくらでも偽造の余地があるこの世の中それだけを信用し犯人を決めるのは教師として軽率過ぎではありませんか？」

「いや・・・しかし・・・」

教師を言い負かすこの会長は敵でないことがなにより幸いである

「そこで私に審議を勤めさせてもらいたいのですが。私情を挟む気はありません。平等に見るだけです」

その堂々とした振る舞いに教師陣は折れ、場所は第一生徒会室に移った

「さて、山崎君、君は証拠を持っているのだろ？ 見せたまえ」  
拒否をさせないもの言いに山崎は素直にテープを渡す

一通りの見終わった会長はテープを巻きとると  
「証拠としての価値は無いに等しいな」  
そう言ってなんの躊躇もなく壊した

「あ！何しやがる」

「このテープでは修正が容易に出来る。こんなものは証拠にならん」  
「会長、実はこんなものを俺は持っているんだが」  
それは昨日深娜に見せたテープである

「プロテクトレベルA A、成程、修正はほぼ無理だな」  
そう言っでビデオを再生する

「おい！やっぱ洋者は最高だぞ！」  
「見えそうなんだよな後少しで！」  
「たまんね〜！」  
「よっしゃ、モザイク消えた〜」  
「うほ〜！！！」

再生終了

「・・・・・・・・」

深娜はまるでゴミ虫や害虫を見る様な目で山崎を見る

霞と会長は遠くを見ている

「これは・・・その・・・」

「なあ会長、俺は今気付いたんだがこのテープはさっきのテープと同じに見えないかい？」

「ああそうだね。そっくりだね。今気付いた。危ない危ない。これを教師に渡すかもしれない」

「そういえば会長、さっきの映像はまるで教室のようだったね」

「ああそうだね。今気付いた。誰だろうねいつたい」

「その・・・だから・・・」

「会長、この机の上のスイッチは全校放送のスイッチではないかい？」

「危ない危ない。うっかり押してしまったら全校に筒抜けだ」

わざとらしいやりとりは更に10分程続いた

「さて、何の話をしてたんだっけ？霞君」

「それはその山崎に聞きましょう。なんの話だっけ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・何でもありません」

深娜は何も見えていないふりをするしかなかった

## 放課後

「助かった会長。これは約束の物だ」

一冊のノートを渡す

「この程度の事、どうとゆうことはない」

霞は更に二枚のチケットを渡す

「これはほんの気持だ。三木原さんと行くといい」

「うむ、ありがたく頂こう」

霞は生徒会室を出ていき、入れ替わりに三木原が入ってきた

「何か用？」

「半径50m以内に人はいないよ？」

「そう、どうしたの政樹？」

「いやね、君の誕生日が近いから早めのプレゼントを」

三木原は頬を朱に染め笑う

「そんな・・・プレゼントなんて」

「照れなくてもいいのだよ三木原君」

「政樹、二人の時は・・・」

「そうだったね麗奈」

政樹は立ち上がりプレゼントのノートを渡す

「霞君のノートだ。ようやく交渉成立してね」

麗奈は嬉しくなり政樹に抱きつく



「ありがとう政樹！」

「いいんだよ麗奈。それから今晚は暇かい？」  
チケツトを見せる

「食事でもどうかね？」

麗奈はにっこりと笑い頷く

「さあ、行こうか」

「ええ、政樹」

日の落ちた生徒会室で、二人はほんの一瞬だけ繋がった

上機嫌の霞は台所でフライパンを巧みに操る

「霞、まだ」

「待て、加弥。後少しだ・・・出来た！チャーハンお待ち！」  
出来立てチャーハンを皿に盛り、テーブルに運ぶ

『いただきます！』

豪華な晩御飯を食べながら慎はペラペラの霞の皮を見せる

「お前もよくあんな作戦思い付いたな」

「そつだよ。全部分かってたをだよ」

先塚は尊敬の眼差しを送る

「いやいや協力者がいたんだよ」

「会長ね？」

深娜は即答する

「ああ。大分前に頼んでおいたんだ。おかげで色々と情報が入ったよ」

笑いながら餃子を口に入れよう・・・

ピンポン

嫌な予感がした

## 25・英雄達、進撃せよ！（後書き）

さあ次は修学旅行編に突入！

誰だ晩飯時にきた奴は！邪魔するなってテンションで進みます

「もう帰っていい？」

何そのテンションの低さ！折角次も呼ばうと思ったのに。いいよ加弥か先塚呼ぶからびつるよかー！

「私が来てあげるわよ」

・・・さいですか

26・さあ、出掛けよう！（おかいもの編！）（前書き）

はい、霞です

今回も前回に引き続き深娜さんです

「で、何話すの？」

ネタバレしない程度のトークだそうです

「何それ、無謀じゃない？」

まあそうんだけどね。じゃあ聞くけど旅行の水着とか決めたの？

「な、何分けの分かんないことを！」

え？何！なんで拳を握るの？やめ、止めて！いや~~~~

26・さあ、出掛けよう！（おかいもの編！）

晴天の土曜日

雲なんて見当たらな

明後日はいよいよ修学旅行なんです！

ワクワクが止まらない！

しかし今はもう辛い

何故かって？

「何ですか？私がわざわざ買い物に付き合っ

お嬢、アンタは悪魔だ

ちよつとした町の方にあるショッピングセンター山田、その駐車場に一台のベンツが停まった。

皆もしってる菊地家の買い物用の安物車だそう

「お嬢、アンタは悪魔だ」

「人聞きの悪い。何を根拠にそんな暴言を」

遡ること三日前

ピンポン

「誰だ？食事時に来賓する野郎は」

立ち上がり玄関へ向かう

「どちら様？」

「私だよ霞君」

「帰れ幸澤、貴様が来ると何か嫌な予感が脳内を駆け回る」

「酷いな、兎に角入れてくれないか？お嬢様が待っているんだ」

「今すぐ帰れ腐れ外道！貴様は踏み込んでならん領域にいるんだ！」

「入れてくれたら江戸末期の文献一冊進呈すると言ったら？」

「ようこそ幸澤、早く入りたまえ」

扉を開けにこやかに招き入れる

なんとも微妙な表情で幸澤は中に入り、その後ろを優雅に付いてきたお嬢も入る……

ボタン

「な、なんですのこの愚行は！何故私を入れないのですか！」

「ほざけ！鼻が曲がる香水をつけた輩が入れる家ではない！」

「幸澤！なんとかしなさい！」

やれやれといった感じで幸澤は霞の肩を叩く

「二冊でどうだろうか？」

「やお嬢、よく来たな。ま、上がりたまえ」

お嬢はなんとも複雑な表情で入っていた

にぎやかになった食卓で、お嬢はちゃっかりとチャーハンを食べている

「それで、何の用だ？」

「この前貴方がまた来てもいいと言っていたので今週の土曜に来ようと思ひまして。ですので土曜の午前に買い物に付き合っ貰おうと思つてきたんですの」

『え！土曜！』

そんな声を上げたのは加弥、先塚、慎の三人である  
加弥

「私午前用事あったのに！」

先塚

「私も出掛ける事になってた」  
慎

「俺は家の手伝いだ」

「なら仕方あるまい。俺も修学旅行の買い物があるから構わん。深  
娜はどうだ？」

「私は・・・どちらでもいいわ」

なんとも複雑な心境の様だ

「なら来い。一人で荷物持ちは嫌だからな」有無を言わせぬ言い方  
で会話を打ち切り食事に戻る  
こつでもしなきゃ来ないだろうしな

そして今現在は土曜

「で、何を買った？」

ブラブラと歩きながら店を眺めている

「私は今晚の食事に必要な物と後は適当にですわ」

俺は幸澤を見る

「私はお嬢様の指示に従うまでですから」

俺は深娜を見る

「私はお嬢様の指示に従うまでよ」

俺はお嬢様を見る

「何？その不服そうな顔は？」

俺は溜め息をつき

「俺は自分のを済ませる。用があれば電話しろ」

そう言つてその場を後にした

さて、買い物とはその時の思い付きで色々と買つてみたくなるものだ  
買いすぎた物を車に持っていき第二ラウンドを開始しようと思うと  
携帯が鳴り出した

「もしもし」

「霞、三階のピュアに来て」

「はいはい了解」

アイス専門店ピュアの一角に三人はいた。

遠くで見る限り物凄つごく重い

会話の傾向が全く見られない。

「この現状打開に俺は呼ばれたのだろうか……」  
溜め息を吐きながらバニラ片手に向かう

「決まったのか？買うのは」

「いいえ。決まっていなわ」

「帰っていい？」

「駄目に決まってるでしょう」



「ならば聞く。何を食いたいんだ？」

「久しぶりにピカタが食べたいわね」

「帰って自分の家を家で食べ。今日はオムレツにする。車に戻ってろ」  
アイスを口に押し込みスーパーに向かおうとした

「……深娜さん、首に押し当ててるのは何かな？」

「フォークって言う串ざしをする為の武器よ」  
食い込むさきつちよはもう痛い

「あのー、血が流れてる気がするんですが？」

「ええ、出てるわね。どうすれば止まるか分かる？」

俺は回れ右をして頭を下げる

「すいませんでしたお嬢様愚行を及んですいませんでした。もうしません」

「……なんて言うか凄い現場見た気がするわね」

呆れた顔のお嬢は何処となく笑ってる気がした

コンチキシヨウ

さて、オムレツの材料を買うためにスーパーで買い物中、お嬢はなんとムカツク発言が多いので今は省くことにしたい。

まあ、あえて説明するなら

「何この食材？こんな物を使うの？」

ボルテージギリギリですよ

さて、材料も一通りてに入れたので今はお嬢の買い物に付き合<sup>ただフラフラするだけ</sup>わさ

れている

ここまでかと言う程会話がない

二人とも、黙りすぎ

仕方なく俺から話しかける

「お嬢、なに買うか決まったのか？さっきからブラブラしてばっかだけど」

「別に。ただ見て回ってるだけですから」

「帰っていい？」

「駄目に決まってるじゃない」

「帰りたいよ」等と考えてると

グ  
グ

「……………」

お嬢のお腹の虫が雄叫びを上げた

『……………』

三人はあえて何も言わず目を合わせません

「……………コホン。少しお腹が減ったので何処かで食べましょうか」

「かしこまりました御嬢様。アルテ・ルシアに予約を入れておきます」

直ぐ様電話をかける幸澤、しかし俺はと言うと

「ちよいまで幸澤。アルテ・ルシアって確かフランス料理専門店だったよな」

「そつだよ。御嬢様のいきつけなんですね」

「昼間っからんな所は行きたくないんだよな。俺がたまに行く店でいいか？味は保証する」

幸澤はお嬢の方を見て指示を仰ぐ  
しばし不服そうな顔をしていたが

「分かりました。どうしてもと言うなら構いませんわ」

と言うわけで一向はとある店の前に到着した  
お嬢は不服丸出しの顔をしており、俺はさっきから深娜に絞められている

ギブ！ギブアップ！ 許す訳にはいかないわ。よくも御嬢様をこんな場所に！

違うつて。物事を外見で判断するな！美味いんだてここのラーメン今楽にしてあげるわ

「深娜君、その位にしてあげたらどうだね。泡を吹き出してるから」  
「・・・・・・・・・・分かりました」

7 発程殴られ目を覚ました俺は改めて店を紹介した  
ラーメン店陳<sup>ちんどん</sup>綴。ふざけた名前だが味は知る人ぞ知る隠れた名店なのだ

「久しぶりおやっさん！」

厨房から顔を出したのは2m近い巨体のスキンヘッドなおっさんだ  
「なんでい霞じゃねーか！久しぶりだな」

声も低くてかなりドスが効いている

「なんだお前、ダブルデートなんてやってんのか？」

「ははは、何言ってるんだおやっさん。冗談はその面だけにしとけ。じゃないとその面剥いでダシとるぞ？」

「がはは、なに言ってるやがる。俺は保健所の友達はいらねーぞ？それならお前の本を薪代わりに使ってやるか？さぞや美味いダシがでるぞ」

「はっはっはっ、そんな行為に手を出したら貴様の頭に油性ペンで人魚の絵を描いてやるよ」

「がつはっは、それはありがたい。ならお礼に背中にメイド服の糺迦を掘ってやるよ」

お互い乾いた笑い声を響かせる

「んで、何だ？」

「ラーメン四人前。餃子二皿で頼む」

「あいよ、ちよいまちや」

そう言つて厨房に引つ込んだ

「霞、今の人は？」

「この店の店長で俺のラーメン師匠」

「師匠？」

「そ、あの人に一から十までラーメンのこと教わった。俺より100倍は美味しい」

程なくしてラーメンが運ばれてきた

「派手な穰ちゃんはあるさ塩、そのニイチャンはネギミソチャーシュー。そっちの穰ちゃんは和風醤油だ。霞はいつものだな」

「ちよつと貴方、なぜ私が塩だと思ひまして？」

「長年この道行つてから分かるんだよ。勘だ勘」

不信がりながらも一口食べてみた

『美味しい』

「そうか美味いか、そいつは良かった」

おやつさんは豪快に笑い厨房に戻る

「美味いだろ？」

「ええ、前彼方に作ってもらったのも美味しかったけどこのラーメンは別格ね」

「当たり前だ。麺から作ってる店に市販の麺が勝てるわけないだろ。それとそこ」

お嬢に釘をさす

「金で動く人じゃないからな。逆にキレて殴られるから止めとけよ」  
あの人には女だろうが子供だろうが容赦はしない鬼人だからな

ラーメンを堪能した我々は家に帰ろうとしてふと思い出した

「深娜、そういえば面白い物いいのか？なんも買ってない気がしたが」

「別にいいわ。私なんかの為にわざわざ引き返すなんて。それに別段買うものなんてないわ」

なんとも忠義に厚いのか、はたまたただ単に気後れしてるのか

仕方ない

「お嬢、近くのデパートで降ろしてくれ。買い忘れた」

「何です急に。まあ別に構いませんが」

「助かる。幸澤、材料の保管は頼む。四時頃にでも家に来てくれ」

「ああ、分かった。それでは四時にまた」

近くのデパートに降りた俺は深娜を引つ張りだし車を見送った

「さ、買うの買って帰るぞ。どうせ旅行中は制服で通す気だったんだろ」

ギクッて感じな深娜

中々面白いな

「ほれ、服なりなんなり買いに行くぞ」

「ちょ、ちよつと霞、引つ張らないで」

問答無用だ！

「深娜、君は今から葬儀にでも行くのかい？」

「当たり前のように言うけど違うわよ」

「ならば黒ばかり選ばぬことだ」

「なんで彼方にそんなことを言われなきゃならないのかしら？」

ふむ・・・

しばし考える

「元がいいんだからもつとお洒落をしたらどうだ？」

深娜はおもいつきりむせた

「ご、ゴホッゴホッ。なに馬鹿なことやってんのよ！」

「ぬー、馬鹿とはなんだ馬鹿とは。間違っではないない筈だぞ。最近仕入れた情報なら校内一位にランクインした筈だ」

「そんな情報どうでもいいけどあんたはどんな目をすればそう見えるのかしら」

「こんな目だ」

深娜の目をじっと見る

「と言っても分かるわけないか。ん？なに赤くなってんだお前？」

普通の人なら絶対分らない変化だが気付かぬ間に分かってしまうのだから困ったもんだ

「黙りなさい。なら聞くけど私の服にケチをつけるならあんたはもつとまじな服を選ぶのよね？」

「はっはっはっは、選べる訳ないじゃないか」

ゴスッ（ブアッ）

「ただ言えることは黒より白か水色、その辺りの色が似合うとしか言えん」

腫れた頬を擦りながら自分の分かる範囲の助言をした

「薄着は薄着で似合うが今回は絶対止めとけ。確実に男子のカメラが狙っている」

「でも沖縄では自殺行為に繋がるわよ」

「そうなんだよな。やはりここは白のワンピースでいつてみるか？」

「でも目立つのは嫌なのよね。はっきり言えば余り他の生徒とかと会話してないし。今のメンバーが一番楽なのよ」

「そうか・・・、ま、仕方ないさ。その内馴れるさ」

「それなら良いけどね・・・」

「あー暗くなるな。ほれ、選んだ選んだ」

はたから見れば仲の良いカップルにしか見えないのが分からない鈍感な二人だったのだ

さて、私服を一通り買った二人、しかし後一つ買わねばならない物それは白い肌を優しく包む最高の装備であり、時に残酷なまでに被い隠す諸刃の装備

水着

只今霞は休憩所にて待機

当たり前だがもし霞も水着コーナーに行っていたら二度と朝日を拝むことはない惨劇が待ってただろう  
霞はさっき買った文庫を読んでいる。20分程経過したが既に半分読み終えている

因みに霞は一度読み出すと周りが見えなくなる悪い癖がある

お陰で深娜が帰ってきた事に全く気付かず首筋にホットしるこをつけられ多少火傷したのは余談である

「へ〜、二人仲良くお買い物ね〜」

「いだだだだだ！ギブ！ギブアップ！」

ボウ&アローの拷問を受ける霞

「酷いな・・・霞君・・・」

先塚はさっきから本気で脇腹を殴っている

「とどめだ霞！地獄断頭台！」

慎のフィニッシュ技！（初代キン肉マンより、悪魔将　フィニッシュ技！）

生きたいと願う霞はギリギリで致命傷を避けるが既にボロボロで立っているのがやつとの状態だ

「行くわよコウちゃん！」

「いいよ、加弥ちゃん！」

二人は霞を挟むようにして立ち腕を構える

「プラスマグネットパワー！」

「マイナスマグネットパワー！」

二人は霞目がけ走り出す

『クロスボンバー！』



ありがとうネプチューン  
ありがとうビック・ザ・ブド

僕は君達を永遠に忘れない

午後六時、目覚めた霞は早々と調理に駆けだされ、必死に台所を走り回っている

明日からいよいよ修学旅行

京都に行つて沖縄行つて楽しむ行事

一週間のこの期間で僕達は何を得るのだろうか？何が起こるだろうか

「おかわり」

「加弥！いい加減にしろ。俺にも食う時間をよこせ」

波乱の幕開けか

26・さあ、出掛けよう！（おかいもの編！）（後書き）

結局水着は分かりませんでしたね

「まだ引つ張るの？まだ殴られ足りなかった？」

さあいよいよ次は修学旅行！どんな事が待ってるか楽しみだな

「無事に済むとは思えないけどね」

そうですね。それでは次回は加弥の登場です

またね

## 27・そうだ、京都へ行こう（一日目！）（前書き）

はい、ついに修学旅行です

「やつほ。加弥だよ。楽しみだね京都に沖縄！」

うんうん。そうだね。何事もなく楽しみたいね

「無理じゃない？作者が作者だし」

そうなんだよな

「ふふふ。修学旅行で霞とも急接近よ！見てなさい、二人の魔の手先め！」

## 27・そうだ、京都へ行く（一日目！）

「えー、それではこれより校長のお話があります」

「えー皆さん、今日はいよいよ修学旅行です。皆さんはそこでしか学べないよ」

「ズラ引つ込めー」

「ズラなのにバーコード短縮短縮」

「奥さんに逃げられた癖に」

校長は泣きながら教壇を降りた

お前達酷すぎ

教頭は慌てて進行を進めた

「そ、それでは生徒会会長の挨拶を、月野屋君」

教壇に上がった会長は生徒を見回し口を開く

「諸君、君達は今日より一週間、我が校の顔として他県へと行くことになる」

生徒は誰も言いません。言えません

「諸君達の行動一つで全てが壊れもするのだ。頭に入れておきたまえ。他校とのトラブルも無いとは言えない」

保護者の方はとても尊敬の眼差しを送っている

「よいか？何かあればとりあえず逃げる。それが駄目なら相手の記憶が飛ぶまで徹底的に殴れ。そして写真に収める。証拠さえ出なければ何も出来んし我々に主導権を握らせるのだ！」

『お』

おい会長

「よいか、殺るときは情けをかけるな。分かったか？」

「分かったわ」

三木原さんに襟を掴まれズルズルと引つ張られる会長

「よしたまえ三木原君、生徒が見ている」

髪をいじりながらズルズルと物陰に連れ困れる

ボクハナニモキイテナイ

出発前の最終確認  
人員点呼です

「各班、班長前へ」

ザツと並ぶ班長

「A班異常なし！」

「B班異常なし！」

「C班異常なし！」

「D班山田が鼻血です。早々と沖縄を想像したようです！」

「鎮静剤投与！」

山田にとある雑誌をパラパラと見せる

山田は体を震わせながら

「男怖い男怖い」

と呟いている

それは無視して

「それでは男子諸君前へ！」

男子は素早く二列に並ぶ

「諸君、君達は今日までのミジンコを卒業し、この一週間で男になる」『サー・イエッサー！』

霞は男達の前をゆっくり往復する

「行き着く先は天国、しかし一歩間違えば犯罪だ。どうだ、楽しいか？」

『サー・イエッサー！』

「良い返事だ」

霞は大きく息を吸う

「お前達は何を見るんだ！」

『水着！着物！餅肌！』

「お前達は何をするんだ！」

『撮影！誘惑！ピ〜〜〜（自主規制）』

「お前達は修学旅行を愛しているか！夢を掴むか！」

『願望！願望！願望！』

「よし！班に戻れ！」

男達はザッと整列した

「さて、修学旅行とは楽しむものである。つまり悪いことがあるととてもつまらない思い出になる。そこで男子諸君、今修学旅行においてイカガワシイ理由のためのカメラやビデオを保持していれば今すぐ提出してくれ」

加弥は霞の制服をつつく

「そんなこと言っても普通は出さないよ」

「問題ない。はい、加弥」

俺は黒い鞭（短めのペシペシ叩く程度）

深娜と先塚にも渡す

「今素直に出したらこの鞭で叩く懲罰で許す」

クラスの男子9割が並び次々と提出していく

「皆素直だな、霞」

「慎、お前も早く並べ」

整列した男子に微笑み

「さて、ではおねがいします」

現れたのは三学年演劇部、女性役の町琉太さん。まちるだ筋肉質の濃い男です

「悪いこはお仕置きしなきゃね（野太い口リくな女声）」

惨劇に背を向け深く耳栓

「悪の根元は早い内に消しておくものだ」

さあ、出発だ！

あから様に暗い男子と明るくはしゃぐ女子を乗せた新幹線は最初の  
目的地京都へ向けて軽快に進んでいる

いつものメンバーは当たり前のように一角に集まっている。タフな精神を持つ慎はいつも通りである。改めてこいつは変人だよ

さて、五人組で先頭を陣取ると前は二人後ろ三人とゆう席になる事が多く、現在の彼等も同じ状況な訳である

前 霞 慎

後 加弥 深娜 先塚

『不服申し立てます!』

「いや、そんなこと言われても・・・トランプ負けたじゃん」

「霞! あれは練習だよ!」

「何を子供みたいな言い訳を」

「霞君、あれは練習なんだよ」

「先塚まで。深娜は不服ないよな」

小さな希望にすぎる

「あの勝負イカサマじゃないの?」

君もか!

「ならまたやるか? ポーカー」

慎はバックからトランプを取り出した

『勝負!』

いや、俺の意見聞けよ

さて、国民的人気を誇るトランプ遊戯ポーカー

起源は1830年前後の米国で現在の形が生まれたと考えられており、ワンピースからロイヤル、ストレート、フラッシュ等の役で強弱を定め、最強者が賭け金を一人占めする。



オープン・ポーカー、クローズド・ポーカーが代表的である

ではここでルールの確認だよ！

霞の席は完全固定、勝者が霞の隣に移動していたってシンプル！  
分かった？分かったよね？

はい、深娜がおおくりしました！

「……………加弥さん……………」

「ごめん。調子乗りすぎた」

「ところで俺が勝ったらどうすんの？」

「……………どうするコウちゃん？」

「どうしょ？」

相談を始める三人組

これはアレね？私が隣よね？

加弥さん、何処をどうすればそうなるのよ

そうだよ加弥ちゃん！私だよ！

先塚さんも何言ってるのよ！

「あのー皆さん？」

『何！』

「俺が勝つたらその場の現状維持はどうだ？」

・・・・・・・・・・・・・・・・

『採用！』

それではスタート！

慎

「最初からブタか。なんか嫌な出だしだな」

霞

「スリーカード。ボチボチだな」

加弥、先塚『ワンペア・・・』

深娜

「フラッシュよ」

前　霞、深娜

後　慎、加弥、先塚

「先手をとられた〜！でも勝負はこれからよ！」

「え？加弥、これは何回勝負？」

「何言ってるの？私が隣になるまでよ！」

「加弥ちゃん！卑怯だよそんなの」

## 五回勝負、二回戦目

加弥

「いやっほ〜！フォーカード！」  
残り

「ワンペア……」

前 霞、加弥

後 慎、深娜、先塚

「霞、あんたなんでそんなにくつついてんのよ！」

「いやいやいや、加弥がこっちに寄ってるんだよ」

「んふふふふ〜。妬いてるな深娜ちゃん」

「何を馬鹿な事を」

## 三回戦目〜以下略

ファイナルバトル！

前 霞、深娜

後 加弥、慎、先塚

「く、ここはなんとしても勝たなきゃ隣に行けないわよ!」

「あら加弥さん、大人げないわね。たかが席一つで」

「深娜、君も十分大人げない」

「それよりも最後だから菓子も賭けるか」

慎の提案で一人一品賭けにだす

ファイナルディーラーは加弥である

「運命のカード、きなさい!」

配り終えたカードをめくり、加弥はものすつごく笑っている

深娜は手持ちのカードを吟味し、二枚捨て引いた

「・・・・・・・・くっ」

どうやら失敗の様だ

先塚も慎も同じ様な感じた

「ふふふ」。勝負よ。くらえ!」

加弥はストレートフラッシュを叩き出した

確率で言うなら深娜がクラスの皆の前で笑うぐらい低い

「ま、負けた。悔しいぜこんちきしょー!」

慎はフォーカード。なかなかの健闘だ

因みに深娜と先塚は共にブタである

「さあ深娜ちゃん。そこをどきなさい」

勝ち誇る加弥は物凄く上から見ています

見下してます!

「・・・・・・・・」

深娜は非常に悔しい顔で席を立とうとした

「まあ待て深娜、君は移動する必要はない」

俺は笑いながら皆の菓子を徴収する

「ストレートフラッシュ。確かに強い。だがすまないな。俺はロイヤルストレートフラッシュだ」

テーブルに広げられた五枚のトランプ

スペードの10、J、Q、K、A

確率で言うなら深娜が頬を赤らめながら耳元で『大好き』って言うぐらい低い

低すぎる

「中々運が良いね」

早速加弥のポ○キーを食べながらトランプをまとめる

「イカサマは余り感心出来んがな」

先程の加弥の手札の角が少し削つてある

よくある手段である

「それは……その……」

うなだれながらゴニョゴニョと弁明をしようと試みてる加弥の頭に手を乗せる

「別に席なんて気にしなくてもいいだろうが。様は楽しけりやさ」

そう言つてポ キーを口に入れてやる

「楽しむんだろ？」

「………うん！」

加弥に釣られて俺も笑う

その時加弥の頭の上にある俺の手首を深娜は確りと掴む

「いつまでそうしてるの？」

ミシミシメキ

「あぎゃゝ。イタイタイタイ。止めて！なんか分かんないけどゴメンナサイ！」

すっかり後が残った手を大事に抱えながら震える俺

俺は何かイケナイ事をしたのか？

そうだ、京都へ行こう

なんてテンションで来るわけがない  
ハイテンションですよ

定番名所、清水寺  
ここで簡単な説明をしよう

京都市東山区にある北法相宗の寺であり、西国三十三所第16番の  
札所  
山号、音羽山  
本尊は十一面観音立像

開山は延鎮

805年、坂上田村麻呂によって寺観が整い、平安時代以降観音の霊場として尊信される

本堂の前方、懸崖に臨んで舞台を架し、眺望に富む

「と言うわけだ」

『へ〜』

クラス一同神妙に頷く

「因みにそこ流れてる三本の水だけど飲めば健康、恋愛、学問に効くらしい。後その石を目を閉じたまま触れたら恋愛成就するとか」男女共に一斉に走りだす

残るのはお馴染の五人

「じゃ、皆集合時間に遅れないでね」

俺はさつさと移動しようとして見事に捕まる

「どこ行くの霞」

「いや、いきつけの店に」

「え？霞、あんた来たこと有るの？」

「なんだ霞、皆に言ってないのか？」

慎はカメラ片手に聞いてくる

「いや、皆知ってると思ってたからな」

慎のカメラを奪い舞台の如く清水寺から……

「マイキヤメラ〜！」

慎も清水寺から……

「霞君、慎君が……」

「心配いらないうて。意外に生存率高いんだよ。飛び降りた人の」

「で、話戻すけど来たこと有るの？」

「ああ、ほぼ毎年正月はこっちに来てるな。何回来ても飽きないか

ら」

すると見知らぬじいさんがヨレヨレと近付き挨拶をしていく

「……誰？」

「三田倉米吉さん、今年で89になる」

「誰だよ！」

「いや、だから加弥、三田倉さんだつて」

「知らないわよそんなこと」

まあ深娜の意見は最もであるが

「その団子屋行くだけだよ。来たかつたらついて来てもいいけど・

・絶対騒ぐなよ」

「なんでよ？」

「それはだね深娜、あそこで働いてる人はとても静かな人でうるさいのが嫌いだからだ。ついでに言えばキレると平気で人を刺すからな」

注意を言い残し、団子屋『笹時雨』に向かう

「すいませーん。おすすめ一つお願いします」

「はい」

暖簾をくぐって来たのは朱色の和服に白のエプロン。銀の鈴の簪が凄く似合う女性が現れた

「お久しぶりで裕米さん」

裕米と呼ばれた女性は10秒位ピクリとも動かず霞を凝視して

「霞」。会いたかったよ。やっぱり二人の仲は切れないのね。

こんなに早く会えるなんてそんなに私に会いたかったのね！そうよね！ああ……幸せ……」

「ちよ、ちよつと裕米さん、頬擦りやめてよ！」



後ろでは揺らめく闘気が目に見える塊になっていく

「霞……その女は誰？」

加弥は指をパキパキツと鳴らし

「もう許さないからね」

先塚は近くの竿を確りと握り

「最低のたらしね」

深娜は腕の力を抜きまるで鞭打の勢いです

その闘気に気付き、裕米さんは鋭く睨む

「私と霞の仲を邪魔するなんていい度胸ね。裕々（ゆゆ）！みずち蚊を！」

暖簾から出てきたのは裕米さんそっくりの女性。ただし頭に白の帽子を被り白い粉があちこちについている

裕々は黒い鞆に収められた長刀を渡し、奥に引つ込み戸を閉めた

「さあ……始めましょう」

鞘から引き抜かれた刀身は紫色に染まり妖しい光を放っていた

「まちだりゅう襠褌流の神髓見せてあいた〜！」

裕米さんは頭を抑え蹲りながらプルプル震えている

その頭上には赤いフライパン、『裕米専用』と張り紙がついている

「裕米さん、いい加減にしてください」

呆れている俺の後ろから裕々さんが出てきた

「終わった？」

頷くと裕々さんは裕米さんを店の中に引きずり込んだ

いや〜ゴメンナサイ裕々ちゃん、私がふざけ過ぎたゴメン〜！許して！

……ダメ

い〜〜〜や〜〜〜

「改めて紹介するよ。姉の裕米さんと妹の裕々さん」

裕米さんはすすり泣きながら頭を下げ裕々さんは頭を下げると直ぐに店に引っ込んだ

加弥は袖を引っ張り

「裕々さんって人見知り激しいの？」

「いや、店が忙しくて今日の注文がイッパイイッパイらしい」

「有名なの？霞君」

「隠れた名店ってとこかな」

八橋を食べながらお茶をすする

「急に老けたわね」

「知るか」

和やかですよ？

ボンボン

肩を叩かれ振り返ると裕々さんが顔を出してる

「間に合わないから手伝って。お代はいらないから」

「んの〜！」

襟を掴み有無言わぬ内に引きずり込まれた

## 二時間経過

「いやー終わった」

蒼の和服に白の帽子の格好で出てきた俺は早速お茶をすすり  
流石に二時間もたってるので他を見に行ってる様だ

「ふう……」

お茶が美味い

隣に置いておいた八橋に手を伸ばし……空をきつた

「あれ？」

その隣にあつた菓子は無く、代わりに裕米さんが口をムグムグさせてた

「裕米さん？」

「にやにや？」

「殴るよ」

ビシ

「霞が殴った。でも霞ならいいや」

後ろから忍び寄る裕々さんの手

「いや……」

「霞、また後でね」

戸がしまり悲鳴が聞こえたが当然の報いだ

着替を済ませ、集合時間まで一人ぶらぶらと歩きだす

他の生徒はおっさん臭いと後日言ってた

さて、今光世高校二学年一同は京都滞在中の旅館、『ゆきしろ』の前にいる

生徒代表の方通りの挨拶を済ませたのは俺ではなく隣のクラスの室長俺はと言うと

「さっきから何してるの霞」

「しっ！静かにしてくれ」

こっそりと頭を出しながら様子を伺う

どうやら気付いてないようだ

先生の先導で中に入ろうとすると

「霞さん、何隠れてるんですか？」

七代目女将、つきしまれんか月島恋花さんにはっこり笑う

白い肌後ろに束ねた艶のある黒髪、薄い化粧に朱色の簪。そして何より気品ある存在感をかもしだす純京美人である

「あ、恋花さん、お久しぶりで」

「はい、お久しぶりです。黙っていくなんてルール違反ですよ」

恋花さんは懐から小さなマイクを取りだしスイッチを入れる

「皆さん。霞さんが来ましたよ」

するとあらゆる場所から仲居さんがわんさか現れた

「霞ちゃんだ〜」

「捕まえてやる〜」

「着せ変えごっこだ〜」

「いや〜〜」

私欲丸出しの仲居さんから全力で逃げる俺、  
しかし相手は34人！

アツサリ捕獲された

「いや〜〜！」

「おとなしくしなさい」

「今日こそ仲居の服着せてやる〜」

「今日こそ私の部屋に泊めてやる〜」

危険思考垂れ流しの仲居

そんな光景を微笑ましく見守る恋花さん

「はい、皆さん終了ですよ。霞さんの勝ちですよ」

月島さんの後ろを悠然と歩く俺は旅館へと足を踏み入れた

『か、霞ちゃんが二人！』

仲居さんはびつくりしてますが深娜は仕掛けに気付いているようです

「また影武者ね」

「そゆこと〜」

笑いながら仲居さんの方を向き

「お久しぶりで。皆さん」

『お久しぶりです。お孫様！』

現在四時半

今回の宿泊部屋は、通常六人部屋を使用しているが、俺と慎で一部屋。

深娜、加弥、先塚で一部屋となっている

そして皆俺の部屋に集まってるのだ

「で、なんだったあの仲居達は」

「ああ、小一から毎年この旅館に泊まっていたな、ここの人達とは大分付き合いが長くてね。今も変わらずおもちゃ扱いな訳だ。来た時に先に玄関に入れば自由。捕まればおもちゃ。必死だったよ」

加弥は人の布団を占領してゴロゴロしながら

「ふーん。で、お孫様ってのは？」

「爺さんの孫だからだ。この辺は爺さんの顔が広く稀に言われるんだよ」

お茶をすすりながら特別設置している電話を取り

「月島さん、現状は？」

「はいはい、調理場はちよと慌ただしいみたいです。乙島さんいつしまが熱海が俺を呼んでいる！」って言ってカイパン姿で飛び出したんで今頃追われてますねきっと」

「そうですか。で、救援は必要ですか？」

「はい。棹島さんたくしまが叫んでます」

分かりましたと伝え電話を置き気付いた

「慎は？」

『あ………』

ぶるるるるる

ぶるるるるる

「……もしもし」

「ああ慎か、今どこだ？」

「・・・ゴメン。大山崎」

「国に帰れ」

電話を切り皆を部屋から追い出し白の調理服を着る

「よし、完了。後はこれを・・・」

後ろ髪を付け毛で伸ばし、赤のゴムで縛る

見た目は確実に女性である

これは月島さんの気遣いである

その後部屋の隅の隠し扉から一階の調理場に向かう

「棹島さん、助けに来ましたよ」

「おお！来たか霞、じゃなかった<sup>へき</sup>霹さん」

ここでは霞ではなく霹として名前を通してしている。仲居さんが勝手に決めたのだ

「すまねえな。乙島の野郎が逃げたからよ。」

あとで身体中に爆竹つけてキャンプファイヤーの中にぶちこんでやる！」

「棹島さん、今はそれよりもやること済ませましょう」

「おう。霹がいりゃ百人力よう。やるぞお前ら！」

『お～～』

あ、調理場の方は棹島さん以外は女性ですから。男で『お～～』  
は不味いからね

六時半

豪勢な夕食に舌鼓をしながら談笑する光世高校生徒一同

その途中で警察の人に連れられて慎もやってきた

慎はしきりに

「警察恐い警察恐い」

と連呼していた

流石に旅行一日目はテンションを上げすぎて、意外に静かな夜だった  
例外を言えば仲居さんが部屋に七人も隠れていて危うく拉致される  
寸前だった位だ

明日は自由行動

さ、一人楽しく秘密の場所へ行きますか

あ、慎ならさつきからパンツ一丁で寝そべってるから

あ、今チラッと・・・



27・そうだ、京都へ行こう（一日目！）（後書き）

いやゝいきなり大変だったね

「て言うか慎よく生きてたね」

生存率60%位あるらしいからね

「そうなんだ。つまり半分ぐらいの確率で慎二度と出なかったんだ」  
うん。でもこれコメディーだからいいんじゃない？

「そうだね」

はい、次回は先塚が来てくれますよゝ

## 28・そうだ、京都に行こう（宝物と戦争）（前書き）

はい、ようやく皆様の前に来れました。今回のゲストは先塚洗夜さんです

お久しぶりで皆さん

今回は二日目の京都ですが色々あります。新キャラ登場ですよ！

霞君、それ以上言ったら不味いんじゃない、作者さんが奇行に走っちゃうから

ぬう、仕方ない。では本編どうぞです！

お楽しみに！

## 28・そうだ、京都に行こう（宝物と戦争）

京都の町に昇る朝日

光広がる景色を眺めお茶を飲む

「いい日だ」

午前5：20

霞だけ起床だった

今日と明日は自由行動。そんな分けて朝飯時からテンションが高い  
一同は仲間同士で行き先の検討中  
まあいつものメンバーも同じである

「霞、今何て言った？」

加弥はさっきまで摘んでた煮豆をポトリと落とす

「今日一日俺個人で動きたい」

漬物を口に入れる。美味い

「何でかな霞君？」

先塚のお椀を持つ手は小刻に揺れ、味噌汁が波打っている

「うむ、行きたい場所があつてな」

焼き魚を口に入れる。美味！

「私達もついていっていいわよね？」

深娜の持つ箸はミシミシと音をたてる

「ん〜、断固拒否」

味噌汁を飲む。温かい美味さだ

「因みに何処だ？」

慎は豆を異常な早さで食べている

「秘密」

食べ終えて一服お茶を飲む。日本人で良かった

波乱の修学旅行二日目の朝だった

部屋に戻った俺は慎が来る前に秘密の抜け穴から外に出る

旅館の裏で待っていると月島恋花さんが現れた

「あらあら御早いですこと」

女将の格好ではなくピンクと白の着物姿でまさに京美人。としか言えない程綺麗なのだ。因みにまだ20代とか

「さ、行きましょうか霞さん。御要望の場所へ」  
優雅に差し出されたその手を掴み笑う  
「よろしく御願います。恋花さん」

メシッ

壁に走る亀裂

風情ある京都の町に似合わぬ鬼神のオーラ

ハッキリ言おう

今世紀最大のオーラだ

「何かしらこの光景」

私は壁から手を離し拳を握る

深娜ちゃんもやっぱリイライラしてるみたいでコンクリートに輝か  
はいつてる

慎は羨ましい顔してるけどまあいいや

「加弥ちゃん、どうしようか？」

乾いた笑みのコウちゃん、三人の気持は一緒みたいね

「なあ、今行かないで泳がすか。決定打が来たら集団リンチとか」  
慎は笑いながらの提案

『ふふふ、そうね』

これから地獄のカウントダウンよ

霞と恋花さんは笑いながらも町を歩いている  
手はつないではないがとても仲良く見える。まるでアツアツの力  
ツプルです

「あらあら霞さんも大変ね」

「大変ですよ。みんな何か知らないけどつかかって来るんだよな」

「あらあら霞さんモテモテじゃない」

「いや、いじめられてるだけな気が・・・」

「あらあら可愛い顔」

何かしらあの光景

「さて、待つんだ加弥、バス停のやつは殴る道具じゃない！」

「止めないで慎！後生だから！」

しかし深娜ちゃんもコウちゃんも止めに入る

「まだよ。まだ溜めるのよ。そして一気に・・・」

「そうだよ。これじゃあ二、三回しか殴れないよ」

コウちゃん、変わったな。いいことだよ！

「加弥！霞が角曲がったぞ！」

直ぐ様追い掛ける私達は霞と悪の手先がとある建物の中に入っていく

素早く建物の横に周り壁に耳をつける

会話が聞こえる

「霞さん。いいですよ」

「そうですか。では失礼します」

扉の開く音

「特別なんですからね。誰にも見せてないんですよ」

「心得てます。本当にありがとうございます」

扉が閉まる音

「さてさて。それではいよいよお披露目ですね」

布の擦れる音

「ああ……綺麗だ」

「あら本当？お姉さんなんか嬉しくなっちゃう。特別に触ってもいいわよ？」

「そ、そんな！流石にそこまでは……………」

「でも釘づけよ」

「その…………まあ」

「霞、なんと羨ましい！京美人のお姉様とあ……あんなことやこんなことを！」

慎はさつきから痙攣を起こしてる

でもそんなのどうだっていいわ

「殺そう。今日は霞の命日よ」

「そうね。この地に眠らせてあげましょう」

「さよならだね。霞君」

もう限界だよ

「それでは失礼しまーす」

「うふふ、どうかしら触り心地は？」

「予想以上です。素晴らしいですよ。国宝ですね」

「あらあら。それなら今回は更に特別、それ食べてもいいわよ」

「だ、駄目ですよ俺なんか手を出したら！バチが当たります」

「いいのいいの。今回はお姉さん何も見なかった事にしてあげるから」

「いいんですか？」

「どうぞどうぞ」

「それでは・・・いただきます」

「ちよつと待ったゴオラァー！」

壁を蹴破り突入！

「今日という今日は絶対に許さないからね！このハレンチたらしめ！」

ビシッと構え睨みつけるその先には、正座して和菓子に手を伸ばしかけの絶句する霞と相変わらずニコニコ笑顔の恋花さん。そして霞の目の前にあるのは鬼の像の様な物

長い沈黙

「あら霞さん、約束破っちゃいましたね」

どことなく悲しい表情の恋花さんは紫の布を像に被せる

「いや、これは・・・不可抗力でして！お願いします。もう一度だけ見せてください！」

必死に説得する霞だが無情にも

「最初に約束しましたよ。霞さん以外は絶対に連れてこないって。残念です」



静かに立ち上がり重い扉を閉める

『・・・・・・・・』

実は自分達とはとても勘違いと壮絶な過ちを犯したのではないか。四人は嫌な汗をかきながら霞に視線を向ける  
背中しか見えないが小刻に震えている。

まるで怒りを抑えている様にしか見えないほどだ

「その・・・・・・・・霞」

加弥の呼び掛けに返事は無い

「おーい霞」

慎の呼び掛けにも返事は無い

「霞君・・・・・・・・ゴメンね」

先塚の呼び掛けに返事は無く、霞はゆっくり立ち上がる

「霞・・・・・・・・」

深娜の呼び掛けに返事は無く、霞は玄関に向かい歩き出す

「霞、ちよつと待って!」

加弥は急いで霞に駆け寄り腕を掴む

「失せろ」

低く押し殺した声は殺気すら漂わせ、その腕は加弥の手を弾く

今まで見たことのない霞の豹変振りとその恐さ  
呆氣にとられている四人を残し、霞は建物を出た

力任せに閉められた戸は室内に木霊していた

なんだろ、この気持……

霞に避けられた

違う。嫌われた

明らかな拒絶だ

霞に嫌われた

「あら？霞さんは？」

奥の部屋から現れた恋花さんはいまいち状況が掴めていない

1 霞さんはいない

2 三人程呆然としてる

3 女の子が泣いてる

「霞さんったら女の子泣かせたわね！」

一人納得している恋花さんに慎は話しかける

「あの〱女将さん、霞と何してたんですか？」

「霞さんに大分前からお願いされてた物を見せてたんです」

「さっきの像ですか？」

「はい、一般には知られてない大変貴重な像です」

「ああ、やっぱり。霞がああなる訳だ」

がつくり肩を落とす慎

そこに深娜が割って入る

「やっぱりって何か知ってるの？」

「ああ、中学の時にもああなっただよ」慎は詳細を語り出した

「中学の頃友達になった俺は霞から本を借りたんだ。珍しく俺が本に興味を持ったから彼奴嬉しそうに本を貸してくれたんだ。んで珍しく俺が本読んでるから俺の友達が読みたくなったらしくて貸してくれて言われてさ。つい又貸ししまったわけ。んでそいつが無くしまったわけだ。霞に謝りに言ったらマジでキレててさ。一ヶ月以上なんも口聞いてくれなかった、ってわけ」

溜め息を吐く慎

「ハッキリ言えばあの時よりヤバイ。こりゃ半年はなんも会話ないかもな」

その言葉に加弥はビクツと震えた

「嫌だよ。霞に嫌われたまんまなんて嫌だよ！」

泣きながら床を叩く加弥

先塚に至ってはなけば放心状態に近かった

「たかが本でそこまで怒るなんて子供みたいね」

深娜は呆れ顔だが内心は何故か焦っていた

何故自分がここまで焦っているのか

本人に知るすべは無かった

「普通はな。ただ彼奴は自分の宝は意地でも守る奴なんだよ。それが物だろうが人だろうが必死に守るんだ。どんなに小さくても」

慎は恋花さんの方を向いて頭を下げた

「お願いだからもう一回だけ霞に見せてください」

それに続くように加弥も頭を下げた

泣きながら必死にお願いしている

先塚も今では泣きながら頼んでいる

嫌われたくないから必死に頼んでいる

深娜はその光景を後ろで眺めている

果たして自分は何を望んでいるのか

自分は霞を失うことに抵抗は無いのか

自分は霞に嫌われることに抵抗は無いのか

自分は霞をどう思っているのか

深娜は立っただまま頭を下げた

失いたくは無い

霞は自分の最初の友達でもあり

今の自分を迎えてくれた家族であり

失ってはいけない仲間だから

ふと顔を上げると馴染みの店の前にいた

箒片手に鼻唄を歌いながら裕米さんが掃除をしている

こっちに気付いたのか恐ろしい速さで向かってきて

「かゝすみゝ。会いたかったよ！」

飛び付いてきた

しかしあつさり横に避け笹時雨の長椅子に座る

避けらるた裕米さんは泣きそうな顔で飛んできてさっきから人を叩いている

「かすみのバカゝ。避けるなんてあんまりだよ！転んだよゝ」

でもその内余りにも反応が無いのが心配になつてこちらを覗き込む

「かすみ？なんかあつたの？」

「・・・・・・・・」

「裕々ちゃん、かすみが変だからちよつと来てゝ」

お店に向かつて裕々さんと呼ぶ

「何かあつたの？」

「何したの？」

姉妹に挟まれ、俺は重い口を開いた

「ふゝん。そうなんだ」

お茶を飲みながら裕米さんは肩をポンと叩く

「それで加弥ちゃん殴ったの？」

「殴れないよ。殴れるわけないよ」

「ちっ」

裕々さんは赤いフライパンで容赦なく裕米さんを叩く

「ふえゝん。冗談通じなゝい」

「姉さん、時と場合を見計らって」

裕々さんはこちらを見る

「それで、霞はどう思ってるの？」

「俺にも責任はある。いくら浮かれてたからってろくな説明もなしに来るなって言っちゃった。冷静になればあいつらが追って来る事は分かってた筈だ」

「それで？ かすみはどうしちゃったの？」

「ガキみたいに怒って奴当たりして逃げ出した。自分が情けないよ」  
組んだ手に頭を沈める

「俺はまた自らの手で宝を捨てるところだった。」

嫌な記憶だ

「あの時は運が良かった。一歩間違えば二度と帰ってくることは無かった」

「でも霞は失ってないよね」

「友達のかすみを信じてたよね」

あの時あいつは会う度に頭を下げていた

それでも俺はあいつを拒絶し続けていた  
どうでもいい様な子供地味な考えが頭から離れなかった  
それと同時に自分の小ささに嫌気がさしていた

「多分皆で謝りに来るんだから許してあげなよ。友達なんだしさ」  
裕々さんは立ち上がり頭に手を乗せる

「子供は子供らしく直ぐに仲良くならなきゃ」  
裕米さんは笑いながら抱きつく

「そうだよ。あいつら敵だけどこのままじゃ張り合い無いから仲良  
くしなきゃ」

俺は失いたくない  
最高の宝を

「そうだね。なら俺も謝りに行くよ」

後ろで姉妹仲良く見送ってくれた

結局女将さんは首を縦には振ってくれなかった

ただ一言

「霞さんを信じてあげて」

それだけを言い残し建物を後にしていった

今だ泣き止まない加弥と先塚をなだめ、今は霞の行きそうな所を巡って歩いている

二人はすすり泣きをしながらも必死に霞を探している

彼奴は許してくれるかな

そう疑問に思ったが直ぐに止めた

女将さんにも言われたじゃんか。信じてあげてって

人気ない小さな公園

ベンチに腰掛ける俺は頭を上げた

足音が近付いてくる。多分あいつらだな



そんな気がしていた

まず見えたのは憤だった。その後ろを眼を赤くした加弥と先塚、そして深娜

胸が痛い。俺は最高の友を泣かせてしまった。俺は最低な奴だ

最初に気付いたのは加弥だった

俺を見るなりまた泣き出したてこっちに走ってきた。それに続く様に皆が走ってくる

俺は立ち上がりゆっくり歩き出し、皆の前で止まった

加弥は真っ先に頭を下げて謝った

泣きながら必死に謝っている

ごめんなさい、許して、嫌いにならないで

その一言一言が辛かった。謝らなければならないのは自分なのだから

「みんな、すまなかった」

俺は深く頭を下げた

「か、霞！」

「加弥、俺がガキだった、くだらない意地で皆を失うところだった。すまない」

「そんな、私が悪いんだよ。勘違いして霞に迷惑かけたんだもん」

「そうだよ霞君！謝らないでよ」  
「いや、俺が悪かったんだ。許して貰えるならなんだってするさ。  
だから許してくれ」

今まで黙っていた慎は俺の前に来た

「なんでもするのか？」

「ああ、それで許してもらえるならなんだってやるよ」  
すると慎は笑いながら右手を出した

「あの時も確かこれだったな？」

「あの時は俺が最初だったな」

固く握り締めた手は力強く温かった

「すまなかった親友」

「気にするな親友」

男同士の仲直りなんてこんなものなんだな

さて、お次は加弥かな

「加弥、俺は何をすれば許してもらえるだろうか？」

泣きやんでいる加弥はうつむきながらボソッと

「・・・ハグ」

「・・・え？聞こえない」

「ハグ！」

ハグ、つまりは抱きしめる？

「……ダメ？」

少しだけ頭を上げてこちらを見る加弥

「いいさ」

そう言つて加弥を抱きしめた。小さい体はすっぽりと収まる

『!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!』

加弥自信して貰えるなんてミジンも思つてなかったので直立不動で体から湯気が出るくらい真っ赤になっっている

先塚も深娜もいまいち現状を理解できていないせいか、呆然としている

「許してもらえるかい？」

「は、はひ！ゆゆゆゆるひます！」

加弥から離れると物凄く真っ赤だと改めて分かる。もしや風邪？

「か、かかかか霞君！」

同じく真っ赤な先塚は一步前に出て

「わ、私もハグで！」

またハグだ。流行りかな？

ちよつと疑問に思つたが余り気にせず先塚を抱きしめた

加弥同様、直立不動で真っ赤な先塚、面白いほどに焦点の定まらない目で幸せくと呟いてた

さて、最後は深娜だが果たして何をしたら許してもらえらるうか？

「別にいいわよ。気にしてないし」

そっぽ向いとる深娜はなんか不機嫌だ。まあ許してもらえらるならそれでいいが

「おいおい見せ付けてくれるな兄ちゃん」

公園の入り口に何処にでもいるような今風の学生、20人近いその数でゾロゾロと公園の入ってくる

「ヒュ」。マジ可愛いぜこの子達」

「マジだよおい。スタイル抜群だぜ！」

いつの時代もこんな連中はいるもんだ

「なあなあカワイ子ちゃん。一緒にどっか行こうぜ。楽しませるか  
らさ」

「そつだよそつだよ。絶対俺達といった方が楽しいって」  
ニヤニヤと笑う男達

しかし今はそれどころではない  
霞の様子が変だ

最初に気付いたのは慎だった  
妙に震えている霞の顔が笑っているのだ  
物凄く邪悪に

「お前らも可愛いって思うか？」

笑う霞はゆつくりと男達に近付く

「マジ可愛いぜ。な。一人ぐらい譲ってくれよ」

わざとらしく手を擦り合わせる男とそれを笑う男達  
しかし霞はただ笑っている

「可愛いだろ、俺なんかにもつたいないくらいよ」

髪を掻き上げる仕草はいつもと違い男らしいのだ（いつもならカワイらしい、色っぽい等と言われる）

「だろ、もったいないんならこっちにくれよ」

「はっ、てめえらに渡す方が1億倍もったいねーよ」

「・・・・・・は？」

男達はしばし呆然としてた

「てめえらみてーな糞ガキにやその辺ぶらついてる金と男しか頭にない様な糞女がお似合いだよ」

「あんだとコラッ！」

「死にてーのかコラッ！」

「黙って女渡しな！」

しかし霞は笑っている

不気味なくらい笑っているのだ

加弥はその豹変ぶりに驚きながら話しかける

「か、霞？」

霞は振り返り

「違う、違うな可愛い嬢ちゃん。俺は霞だが霞じゃねー。名前は・・・・まだねーや」

笑いながら問掛けた

「おい霞、俺の名前はなんだ？前に決めとくように言っただろ」

自分に問掛けるその姿は異常にしか見えない

男達も気味悪いがったり馬鹿にしている

「ああ、それで・・・・なんだよ。もつとましなのねーか？・・・・・・はいはい分かったよ分かりましたよ」

溜め息を吐きこちらを見て笑う

「名前は夕月ゆづげだとさ、日と月、一時以外決して同じ時に見れぬ二つの星、故に我はその一瞬の存在なり」

夕月と名乗った男は高らかに笑い男達の方を向いた

「さあ、始めよう。短くも愉快的なダンスを。喜劇の様に舞い踊りたまえ。愚鈍で愚かな下等な存在よ」

惨殺的なショーの始まりだ

夕月の拳が男の腹にめり込む

血と嘔吐物を吐き出しながら転がる男に容赦なく蹴りを入れる  
後ろから殴りかかる男の顔をわし掴みにして地面に叩き突ける。

前歯が碎け鼻血を流す男を地面に擦りつけ他の男に投げ飛ばす

「どうした！どうした愉快的踊り子よ。何故舞わない！何故踊らない？聞かせる歡喜の歌を！響かせる苦渋の叫びを！」

高らかな笑いと共に響く男達の叫び

数分と短い時間で幕を閉じた惨劇

虫の息状態の男達の中に一人夕月が立ち、その手には一人の男が首を掴まれ軽々と吊られている

「なあ糞ガキ、聞こえてツか？」

「がっ、かは・・・はい」

「よしよいいガキだ。今から俺が言うことをしっかりと頭に入れとけ」

目の笑っていない笑顔で呟くように話す

「今後この制服着た奴にちよっかい出したら残りの学校生活は病院で過すことになるからな」

「ひっ」

ビクつく男は涙目で震えている

「今すぐこの連中連れて俺の視界から失せろ」

放り投げられた男はよつんばいになりながら逃げ、それを追うように残りの連中も逃げだした

「さて・・・と」

振りかえる夕月を見て深娜と慎以外はビクつと震える

「おいおいそんなに怖がんなよ。何もしねーよ」

相変わらず笑っている夕月に慎は話しかける

「四年振りか？」

「おお！慎・・・だったか！久しいな喧嘩仲間」

その顔は無邪気に笑っている

「慎、こいつ知ってるの？」

深娜の質問に夕月が答える

「こいつは無いぜグラマーなねえちゃん、俺は夕月だ。まあ別にいいが詳しくは霞にでも聞いてくれ。俺が表に出てる時間は限りがあるんでな」

「あの～夕月さん？」

ようやく会話に参加した加弥は話しかける

「夕月さんって何なの？二重人格か何か？」

「んにゃ、知らん。俺は俺としての人格が有るし霞は霞の人格が有る。お互い少しだけなら会話出来るし聴覚を通して会話も聞き取れる。その上で二重人格と呼べるかどうか。まあその代わりあいつとは趣味も特技も女の好みも違うがな」

やれやれといった感じで頭を振る

「俺が出るときは霞が限界超えてキレた時だけなんでな。霞に感謝しとけ。あの時殴らずに済んだのはあいつが必死に抑えたからなんだからよ」

霞ではない夕月は加弥の頭を撫でて深娜の方を向く

「そーいや何でもするから許せて事で色々やってたけどあんたには何もしてないな」

「別にいいって言ってるでしょ」

そっぽ向く深娜を見て夕月は笑う

「そうかい。なら勝手にするぜ」



何の前触れもなく夕月の唇が深娜の頬に触れた

「・・・・・・・・！」

目に見える程に驚き赤面になる深娜に更に追い討ちをかける夕月

「俺は霞と違って女はちゃんと選ぶんでね」

固まる四人を横目に再度頬にキスをする

「俺は中々あんたの事が好きだぜ」

霞の声と霞の顔で笑う夕月は忍笑いをしながら

「戦いは俺の役目だ。後処理はお前の仕事だぜ」

そう言い残し夕月という存在は眠りについた

開かれた目に最初に入っただのは今まで見たことのない表情の深娜

そして固まったままの三人

取り合えず一番近い深娜に話しかけてみた

「おい深娜？どした？」

「ひあつ、か。霞！」

ひあつ？深娜かこの人は？

後ろを見ると完全に停止している三人

慎をつついたらそのまま後ろに倒れ

「慎！そつちには階段が」

止めるのも虚しく慎を視界から消えた

仕方なく諦め加弥を……

「か、霞？今は霞？」

「ああ、夕月なら引つ込んだよ」

「夕月さんが何したか知ってる？」

「いや、聞くだけじゃいまいち分からん」

加弥は霞の肩と腰をしつかりと掴んだ

「かゝすゝみのバカ！」

力一杯に空へ射出！

優雅な空の旅の中、霞は悟った

夕月は厄災の元凶だ

そしてその場の皆は災害だと

さて、奇跡的に慎の上に墜落したので怪我することなく生還出来た俺は、ゆつくりと温泉に身を沈めている

あれから三人とは全く話していない。とゆうか逃げられている彼奴の言った後処理とはこの事か？

「ふうゝ・・・」

夜空に昇る満月は光り輝いている

この温泉は霞専用といった感じで一人にしてはそれなりに広い毎回使っていたので恋花さんが別けてくれたのだ頭にタオルを乗せのびをする

今日は一段と疲れた

夕月には後で色々と尋問するとして、今は休もう

温泉から上がり、浴衣に着替え廊下に出ると深娜がいた

いたと言つか偶々通りかかったのだろう  
眼が合うなり真っ赤になつて走り出した

「お、おい深娜！何逃げてんだよ！」

「関係無いわよ！いいからほつといて！」

「そうゆう訳にいかないって。夕月がなんかやったのか？」

すると深娜は走るポーズのままピタリと止まった

まるで錆びたロボットの様に首がギギギとこちらに向く

あ、また赤くなつてきた

「な、なななん、何にも無いわよ！」

「すまん深娜、多分誰が見てもお前がおかしくなつてると気付くぞ  
そりゃそうです

転校当時は氷の女王なんて呼び名が付く程無表情だったのに今の深  
娜は

《可愛い悪戯のバレたツンデレ少女だな》

・・・・・・・・・・・・・・・・

「何言つてんだ夕月」

《いやゝ可愛いな深娜ちゃん。流石俺の惚れた女》

「成程、四人がおかしくなつた理由が分かった気がする」

《マジで？キスバレた！》

何？キスだと

「貴様、やってはいけないことをしたようだな・・・・・・・・くらえ

！」

頭に広がる知識の波

今まで覚えてきた知識を全て夕月に流し込む

《いやゝじゃゝ、ナンダこの単語はゝ！崔浩？知らねゝ・・・・・・・・  
・グハツ》

ふん、思いしつたか

「もしかして夕月？」

少しかだけ治まった深娜は逃げる準備もちやっかりしている

「ああ、何か非常にすまない事をしてしまったようだ。すまない」

「別にいいわよ、夕月が勝手にしたことだから。それよりも詳しく事情を話してもらいたいんだけど」

と言っわけで今俺と深娜は旅館の屋根の上にいる  
何故屋根の上かって？他の連中（主にクラスの馬鹿共）に見られたらうるさいからだ

「さてと。まずは夕月が初めて出てきたのは慎との喧嘩が終わって少ししてからだな。慎の友達の奴は無くしたって言ってたんだがよ、日課の古本屋巡りをしてたらあったんだよその本が」

「何の本があったの」

「Emile、ルソーの教育小説の初版だ。おっちゃんに聞き出したら光世の制服着た学生が売ってたってな」

「それで？」

「記憶なし、気付いたらボロ雑巾になったゴミが転がってた。後に慎が教えてくれたから稀に会話が出来る様になったんだよ」

「それにしてもここまで性格が違うのね」

「ああ、そのせいで俺のファーストキスは消えた」  
なんかシヨックだな

知らない内に部屋のフィギアが親の手によって消えたときってこんな気持ちなんだろうな

「悪かったわね私なんかで」

「いや、もしかしたら今後無いかもしれないからな。その点では光栄かな」

そっぽ向いてた深娜は赤面でむせる。月明かりの中、白と水玉の浴衣姿の深娜

いや、ぶっちゃけて言うよ。普通に今の深娜は可愛いぞ

「何ジロジロ見てるのよ」

「浴衣が似合う人を久しぶりに見たんでな。うん。やはりお前は可愛い」

危うく屋根から落ちそうになった深娜

何とか無事を確認し、容赦なく俺を殴った

割くる様に頬を打った

「ねえ、なんで殴ったの？人の意見とか黙殺するタイプだよね？」

「ふざけた事を言ったから修正するために手を出したまでよ」

「酷いや」

殴られたことに馴れてしまっている自分が悲しい

「まあ別にどうでもいいわ」

「そうか。まあなんだ、夕月の事はすまなかった。嫌な気分になせたら」

深娜はゆっくり立ち上がり背を向ける

「別に嫌じゃなかったから気にしなくていいわよ」

「ん？」

「良いか悪いかわ、選ぶなら良いを選ぶ。ただそれだけよ」

顔だけこちらに向けて笑っている

「深娜、笑ってた方が似合うぞ」

「お世辞は何も生まないわよ」

素早く蹴りを入れて屋根から降りていく

「さいですか」

一人で月を見ながら思い老け込んだ

「さてさて、深娜を変えたものは何なのか」  
究極の馬鹿は月を眺めながら考えていた

そして今現在、

大川深娜は自室である【睡蓮の間】にて拘束されている  
正座させられ後ろで手足を縛られている

「さあ深娜ちゃん、覚悟はいいかしら？」

ズゴゴゴゴと物凄い擬音が見えるくらいの気迫である

「今日深娜ちゃんは霞（この場では夕月と霞の両方を指す）に、キ

キ、キキキスされたけど深娜ちゃんは霞のことこれっぽっちも気にならないんだよね？」

危機迫る迫力の加弥に無言を返す深娜

「気にならないんだから私達が霞に手を出しても文句は無いよね？」

「・・・・・・そうね、確かに私は霞の事はどうでもいいわね」

勝利に喜ぶ二人だが深娜の発言は続いた

「でも彼方達に霞を渡すのは気に入らないわ」

深娜は無表情を崩し二人の前で初めて笑った。どちらかと言えば嘲笑った

「仮にも霞は私の家族よ。そう易々と行くとは思わないことね」

深娜の核攻撃に固まる二人に追い討ちの攻撃はさらに続く

「さつきも霞に浴衣が似合って可愛いと言われたけど彼方達はどうかしら？」

深娜は手首を外して縄を抜け、優雅に立ち上がる

「改めて宣戦布告といきましょうか」

その挑発的な態度は加弥と先塚の心に二ト口とグレネードを落とした

「たかが一ヶ月そこらしか霞と居なかった癖に私に勝てるかしら！

深娜ちゃんに霞のことは分かんないよ」

「私だって霞君譲らない。大川さんにも加弥ちゃんにも負けないんだから」

「なら正々堂々と戦おうじゃない。霞に対する強制は無しで」

睨み合うこの三人のオーラを感じたかどうか知らないが、霞は盛大なクシャミをしてた



明日、京都旅行は雲行が怪しくなりそうだった

28・そうだ、京都に行こう（宝物と戦争）（後書き）

はい、デンジャラスな一日でしたね  
うん。ごめんね霞君

いや、謝るなって先塚、こっちも悪かったし  
でも夕月さんが・・・

言うな、鬼がこっちを見てる

そうだね。鬼がいるね

はっ！ここにもいた！いやっ許して！

・・・だめ

ひっひっ

次回は俺様！慎が来るぜ！

29・そうだ、京都に行こう（波乱万丈編）（前書き）

慎 いえええい慎だぜ！

霞 うざ！何この無駄テンション

慎 あたぼうよ。俺様晴れのち行方不明のメインパーソナリティーだぜ！

霞 ああそうだったね

慎 知ってたか、あの作品のサブキャラとか中学時代の作者の友達の名前多く出すらしいぞ

霞 いや、そんなの暴露ってたら作者がまた奇行にはし……

作 食らえ慎！必殺デえりいういゝトゆゆ

霞 ああ！慎の服がどんどん透けて……やめろ！せめてパンツだけは、パンツだけは……

慎 いやゝゝゝ

## 29・そうだ、京都に行こう（波乱万丈編）

さて、今日も良い朝を向かえた俺は旅館の屋根の上に座っている  
昇る朝日を眺めながら洪めのお茶をすすする

「ふう」

自室で何やら三人組の声が聞こえる  
逃げてよかった

寝る前に中居さんの優実さんから電話の警告があつたので助かった。  
後で何かお礼でもしよう

飲み終えた椀片手に立ち上がる

さて、朝は霹として頑張るか

朝食の支度を終え、手早く着替を済ませてからなに食わぬ顔で部屋  
に戻る

中では布団に巻かれた慎が昇天顔で宙吊りになっている

そしてそれを殴る浴衣姿の三人娘  
気付かれない様に忍び足で近くの布団入れの棚に入り戸を閉める  
携帯を取りだし部屋の電話にコール

じりりりガチャっ

「もしもし不法侵入してる人ですか？」

「か、霞！」

どうやら電話に出たのは加弥だ

「何処に行ったのよ！折角起こしに来たのに！」

「今は一階のロビ」

ガちゃん

ドダドダドダドダ……

嵐は去ったか

直ぐに部屋に鍵をして慎を下ろす

「おゝい生きてるか」

グーパンチで5、6回殴る

「み、見えた……加弥の白いぱ、パパパパ……！」

そのまま気を失った馬鹿

さて、台風が帰って来る前に移動するか

手早く私服に着替える

今回三日目なので私服で出掛けることができる

ジーパンに白のシャツ、その上からグレーのパーカーを這おって部屋を出る。服に無頓着だとよく言われるがどうでもいいもんだ

それよりも今は、朝飯朝飯

殺氣に近い視線を飛ばし続ける加弥と羨ましそうな視線を飛ばす先塚  
朝食の席で被害を最小限にするため端に座ったらいつの間にか隣に  
深娜が座っている

「何かありましたか？」

「別に、気にしなくてもいいわよ」

いつも道理の無表情でたくあんを口に運ぶ深娜  
まあ別にいいが

呑気に味噌汁を飲む俺、美味しいな

部屋に戻った俺は28人の中居さんに捕まり別室に連れてかれた  
「な、なんですかいい！」

しかし中居さんはただただ笑顔で廊下を風のように走ります

そして連れてかれた俺は文字通り着せ交え人形となった

「す、ストップ山中さん、ズボンは勘弁して！着るから。自分で着るから！」

ズボンを死守して一人で着替える

## その結果

「何故に着物？」

慎の表現ではただ女装した様にしか聞こえないので訂正する  
着物と言っても男物の浴衣に近い物だ

蒼い生地を主に使い、黒の帯を締め、胸元を広げ左骨の辺りが見える様になっている。更に髪は整えられ

「結局女っぽい顔付きにされたな」

クソッ、言い返せない！

まあ仕方ないので（私服等は全て抑えられた）このまま行くとしよう

靴もいつの間にか草履に変わり何とも古人の様な気分だ

慎は何故か下は制服、上はワイシャツに黒のジャケットと不思議な組み合わせである

多分未だに頭から加弥の帕が付く何かが離れないんだろうな

多分慎が見たのは浴衣の裏地の白だな

集合場所の庭先に行くと三人は既にスタンバっている

あ、先塚に見付かった

すると先塚は頭上高くカメラを投げる

赤いランプが点滅を始めどんどんその間隔が短くなり、先塚は慎を突き飛ばし見事に隣に並ぶ

ピピピピピピ、カシャッ

「先塚、器用だな」

「えへへ、まあ……ね………?」

先塚の動きが止まる

遠くで深娜と加弥が猛ダッシュで近付き

「抜け駆けなんてズルイよコウちゃん!一人ではし………る?」

「先塚さん、さっきフェアプレーって言ってた………わ」

「???どうした三人して」

「なにその格好?」

「いやな、中居さんに捕まってこうなった」

「なんで違和感がないのかしらね」

「ふむ、老けるからだろ」

「でも似合うよ霞君」

「ありがと。先塚も中々似合ってるぞ」

先塚は黄色のリボンで髪を結わえ、薄茶の短いめのジャケットにレース付きの白いワンピースで質素に飾っているが大人びた雰囲気がとても似合っている



先塚は頬を赤らめながら

「ありがとう霞君」

「かすみ〜！私はどう？」

先塚の間に割り込みながら全面アピール

モノトーンボーダーのキャミにパステルピンクのパーカー、灰色の段付きミニスカートをヒラヒラさせている

「うん。可愛いと思うよ。加弥らしいね」

すると加弥と先塚は深娜の方を向きニヤリと笑う

深娜は鼻で笑いながらゆっくり近付き霞の腕に自分の腕を絡める

深娜は淡い黄色のニットに茶色のタンクトップにカーキのカーゴパンツと俺と選んだときの服装だ

いやまさかホントに着るとはな

しかし……

「深娜、熱でもあるのか？」

額に手を当てるが平熱の様だ

「別に。他意はないし気にしなくてもいいわよ」

「いや、俺早死にしたいくないし、なんか肘に当たってるから離れて下さいお願いします」

すると左の手を握る者あり、先塚さんですよ

「大川さん！なにやってるのさ！」

そして後ろから飛び付く者あり、加弥だよ

「深娜ちゃん！コウちゃん！オフザケスギダヨ〜！」

「彼方こそ何おんぶされてるのよ。子供じゃあるまいし」

「大川さんだって好きでもないのにそんなにベタベタして！」

左右後ろから罵声が響く、うるさいのだ

加弥の私服にブリッチ状態で悶絶する馬鹿に呼び掛ける

「慎、三人は置いて団子でも食いに行くか」

ちよっとした動作で三人の拘束を難無く抜け

慎を引きづりながら階段に向かう

「や、やめれ霞！あた、頭がぎよいあい」

スタスタズルズルと歩く俺にとびかかる三人  
しかし俺は手で制し、目を細める

「何が原因かは知らん。だが喧嘩はいかん」

慎の足を掴んでた手を離し腕を組む

「いかん。いかなお前等」

「うぎよっ、ぶごっあが、いかんのお前ぎよからはったかつ！」

キキードカン！

「でも・・・」

「加弥、俺は楽しくあつてこそその修学旅行だと思っただがな」

「それはそうだけど・・・」

「先塚、何故そこまでこだわるかは分かんが話し合うことも可能  
だろ」

「それが出来ない時があるのよ」

「ならば仲間を集え。三人で分かんなら俺等に相談すればいいだ  
ろ」

「でも霞、一名見当たらないわよ  
ん？」

「あ！慎！生きてるか」

「じ、じぬかとおもった」

階段を這いながら登ってくる慎

「お前引かれなかった？」

「後少しで頭がミキサーになるとこだったよ」

まあ何かあっても別にいいか

「さて、何をそんなにもめていたんだ」

三人は目をそらしながらモゴモゴと言葉を詰まらせる  
すると加弥は物凄い名案が浮かんだように表情が明るくなる

「実は日頃から霞にお世話になってるから今日一日楽しんでもらおう  
と思うて」

加弥の考えに気付いた先塚も後に続いた

「そうだよ。それでただやるのも何だから誰が一番か決めてもらおう  
と思うて」

「なるほどね。それは嬉しいがそれだと逆効果だぞ」

俺は時間を確認する

今は丁度九時、一人二時間でも十分間に合う

とゆうことで第一回おもてなし選手権を開始します

順番は加弥、慎、先塚、深娜となりました

では、スタート

鼻唄混じりにご機嫌な加弥はスキップしながら俺の前を進む

体が浮く度スカートがヒラヒラと揺れるので俺としては目線をやや  
斜め上で歩いている

「霞、そこのお店行こ」

我先にとさっさと店に入っていくのを苦笑いをしながら続いて入っ  
ていく

物珍しい視線を投げ掛けられるがまあこの格好では仕方あるまい

俺は羊羹と焙茶を頼み、加弥も同じものを頼んだ

「久しぶりだな。二人でこうゆう店に来るのは」

「うん。最近は皆で来るからね」

「そうだな。中学の時以来かな。今思うとあんま変わってないな加弥は」

「ひどい。霞だってそんな変わってないじゃん」

「違うない」

微笑ましい光景に割って入るのは店のお姉さん

「お待ちどうさまで。羊羹二つに焙茶ですってお孫様。お久しぶりです」

「どうも。店長はお元気ですか」

「はい。いつも朝から乾布摩擦しながら鼻水垂らしてます」

「ははは、駄目じゃないすか」

「それはそうとそちらの子は彼女さん？」

急に話を振られ焦る加弥

「えーいや、その・・・まあ、何でしょうか」

はぎれの悪い加弥の心境を微塵も察することなく

「違いますよ。そんなわけじゃないですか」

「ホント！なら私にもチャンスあるんですか」

「その両眼に写る金の文字が消えたら考えましょう」

「ぬぬ、バレテイタカ」

「おーいよっちゃん、仕事仕事」

「黙ってる禿げ店長！ズラ剥ぐぞ！まあ仕方ねえか。それじゃ、お孫様」

悪魔から天使に早変わりして去っていく悪魔

「ねえ・・・」

「ああすまんすまん。ま、ゆっくりしてこうか」

なんとも複雑な表情まましばしの時間が過ぎていった

霞と二人っきりで歩いてる

笑う霞はとても素敵で優しくて、皆の事を大切にしてて

他にも沢山あるけど、結局私は霞が好きだ。きっと初めて話しかけたその日から霞は特別だったんだ

のんびりと人の見当たらない公園を歩く二人。俺の後ろを加弥は付いて来ている

「どうした加弥？さっきまで元気だったのに」

「……………」

無言の返事を不思議に思い振り向くと、加弥はうつ向いている  
「どした？」

「…………。霞、私の事どう思ってる」

小さな声をなんとか聞き取り少し考える

「大切な友達だよ。記念すべき最初の」

「・・・それ以上はないの？」

「例えば？」

「その・・・世界で一番大切な人とか」

「大切だよ。俺は友達の事を世界一だと思ってるから」

すると加弥は頭を上げ真っ直ぐに目を合わせる

「・・・私、霞のこと好きだよ」

「ふむ、俺も好きだよ加弥の事は」

加弥は声を張り上げた

「違うよ！私は霞のことが好き！世界で一番大切な人なんだよ！」

「え・・・」

「深娜ちゃんよりもコウちゃんよりも霞のことが好き。愛してるんだよ！」

時が止まり、一時的に思考回路が破裂。 只今復旧作業中

脳内フリーズが少し解凍した辺りで俺は真先に近くの茂みに蹴りを放つ

虚しく空を切り葉が宙に舞う

「くそ、ドツキリでスタンバってる奴は何処に逃げた！何処だカメラ〜！」

テンパる俺を殴り正気に戻してくれた加弥

「真剣なんだから茶化さないで」

「ああ・・・すまん。しかしマジか？」

「うん。マジ」

頷く加弥は霞の手を握り真剣な表情で

「返事は今すぐじゃなくていいから。でも返事は必ず口で伝えて」

赤面の加弥はその場を風の如く去り、俺はベンチに腰掛け途方に暮れながら時間を潰した

11時になり約束の場所に行くと慎が待っていた

「うつす霞、どうだったって何かあったか」

「ああ、問題ない」

「いやいや霞、ものすっぱー困り顔だぞ。口がへの字で綺麗なお顔がだいなばるぎゅー」

取り合えず殴っておいた

ぶらぶら歩きながら一部始終を話した

「なんだと！貴様等々告られただど！許さん！許さんぞ獣〜」

「ああうつとうしい！黙れ」

慎の頭を掴み地面と熱いキスをさせようとしたがギリギリで耐える慎

「か、霞。落ち着くから離しててくれ。このままじゃハトの落し物と口付けしてしまう」

「あ、すまんすまん」

とゆうことでちょっと早めの昼食をとりながら二人して愚痴っている  
「しっかし羨ましいね、加弥に告られるなんて」

「お前も結構人気ある癖によく言うよ」

「あ？お前しらね」のか、お前校内の女子に結構狙われてんぞ。主に先輩に」

「うわ、知りたくなかった」

等とたわいもない会話だった

「んで、本題行くけど、加弥はどうすんだ」

「どうするか、ん、ぶっちゃけ答えは準備してる」

「ほう。YESか？」

「お前の答えにNOだ。知ってるだろ。俺は捻くれてんだよ」

「つまり加弥への答えは問いで・・・か」

「そゆこと」

ソバを平らげ立ち上がり慎は真剣な顔で

「ただし霞、加弥を嫌な意味で泣かせるなよ。その時は容赦しないからな」

「多分だいじよぶだ。泣かないし泣かせない。それに多分悩むんじゃないかな」

「かもな」

笑いながら慎は俺の肩をポンと叩く

「YESって言ったら二年やかた年報道部八形に連絡するからな」

「やめろ！そしたら一分以内に全校に伝わるじゃね」かよ。それな



ら貴様の『加弥ベストアルバム』が露見することになるぞ」

「やめろ！俺が加弥に惨殺される」

「・・・・・・・・・・お互い黙ってようか」

「・・・・・・・・・・うん」

固い握手を交し、またもやその辺をブラブラしながら色々と情報交換をしていた

知りたくない情報多かったが

先塚は妙に距離を空けながら隣を歩いてるいる

「・・・・・・・・・・どうした先塚？」

「い、いやわナンデモナイヨ」

「何かあったのか？・・・・・・・・・・加弥とか」

ビクッと震える先塚は辺りを見回しとある店を指差す

「か、霞君！そこのお店行こ」

店に飛込む先塚を眺め店に入る  
ここ午前来たのに

「いらっしやいませってまたお孫様？新しい女連れこんでウハウハ？」

無言でデコピンをかまして隅に座る

目の行き場を失って先塚の目はいろんな場所に向かっている

「先塚、まゝ何か頼んどけ」

「………うん」

適当に頼んだ先塚はやはり目線が定まっていない

「まさかとは思うが加弥が言ったのか」

「うん。告白したって」

「あいつは………なに考えてんだか」

溜め息を吐く俺は妬け気味に団子を食べる

「霞君はどう思ってるの？加弥ちゃんのこと」

「前も似たことを言ったと思うが好きだよ、友として。仲間として」

「………なら霞君は加弥ちゃんの事愛してるの」

「………その答えを今言うべきかな」

周りは物凄い静かで聞耳を立てている

一瞬で赤くなる先塚は脱兎の如く走り去った

「うわゝ置いてきぼりにされてるお孫様」

やっぱりデコピン（大強）を食らわしてやった

先塚は先程来た公園のブランコに座っている  
何故だろうか  
物凄く嫌な予感がする

「先塚、大丈夫か」

「は、はひ！さっきはごめんなさい」

素早く立ち上がり何度も頭を下げる先塚。泣きたいのを必死に我慢  
してるようだ

なんとか落ち着かせブランコに座る

「それで、さっきの回答は必要かな」

「それは・・・聞きたいです」

「では教えよう。答えはどちらでもない」

「え？」

「俺はまだ正式な返答は出していない。それにおそらく俺の答えは  
答えではない。だから今先塚に教えることは出来ない。納得したか  
い？」

「・・・・つまりまだチャンスはあるんだ」

ボソツと呟いてたせいでいまいち聞き取れない

「何か言ったか先塚」

「なな・・・なんでもないよ！」

先塚はブランコから下り俺の前に立った

その顔には決意が浮かび上がって見える

大きく息を吸う先塚を見ながらいやゝな汗が流れる俺  
もしや・・・・・・・・

「私は霞君が好き！加弥ちゃんよりも大川さんよりも！」

うわゝ当たっちゃったゝ、やべーや

「返事待つてるから」

加弥どうよう疾風のように消え去る先塚を見ながら、またもや途方に暮れながら時間を潰す自分が悲しかった

ただいま三時

「・・・何かあったの？」

「ああ、問題ない」

「その疲れきった顔で言っても説得力に欠けるわよ」

「あゝゝ、お前は加弥から何か聞いてるか」

「いえ。ただ加弥さんは勝ち誇った顔だったし先塚さんは真つ赤だったは。何があったか白状しなさい」

物凄い眼光を必死に避けながら誤魔化し笑いをしてなんとか逃げようとする俺

「ならその店で詳しく聞こうかしら」

襟を掴み引きづりながら店に拉致られる俺

またこの店かよ

「いらつしゃいまお孫様！また新しい女連れこんで！タラシです。お孫様は女に飢えた獣です！」

力一杯ホッペをつねってやる

「いくら年上でもしまいにはキレますよ?」

「ひよへんなひゃい」

又々隅に座り（質問＋尋問）×拷問の図式が始まった

「さ、話してもらいましょつか?」

「ストップストップ!その熱いお茶は何をするため!」

「話すのを止めたりしたら」

ポタポタ

「ギャ~~~~熱いつ!地味に熱い!」

「なら全て話してもらおうかしら」

ええ話しますよ。話せばいいをでしょ!

とゆうことで個室に移動。洗いざらい全部吐かされました

そして顔の引きつった深娜は今にも手に持つ湯飲みを碎かん勢いです

「ふふふ、やってくれるわね。まさかここまで直接的な攻撃を仕掛けるなんて」

その寒気をする笑みから視線を反らしお茶をすす

「これで全部だ。次はそっちの事情を話してもらおうか」

「何の事情よ」

「何故急にこんな事をやり始めたか。恐らく昨晚何かあったのだろう」

「それは・・・その」

「今なら分かるが俺に関してだろう。くつつき過ぎとか手を出すなとか」

「・・・・・・」

反論のない深娜に更に追い討ちをかける

「あの二人の気持を知った以上俺は答えを出さねばならんしそれが義務でもある」

「・・・・・・でも・・・・・・」

うつ向く深娜を見据えながら続ける

「深娜、君は俺の事は特に気にしてはいないのдар。なら口出しは出来ん筈だ」

「でも！……でも……」

「なら問う。お前は俺の事をどう思っているんだ？」

黙る深娜を横目に立ち上がり壁に向かつてお茶をかける  
隣の部屋で何かが叫んでいるが今は無視

壁に寄りかかりながら深娜を見続ける

長い時間静寂が続いた

「……私は」

そして深娜はその重い口を開く

「今の形を崩したくはない。霞は私の最初の友達、そして家族として迎えてくれた人。もし霞が誰かのところに行けば私はまた一人になるかもしれない。それが怖い。一人になりたくない」

深娜はうつ向いた顔を上げ霞を見据える

「だから私はあの二人に霞を渡さない。ただそれだけよ」

「……成程ね」

ゆっくりと近付いて深娜の前に立ち、軽く小突く

「俺はそんな薄情者じゃねーよ。何があっても家族を一人にしないさ」

笑いながら深娜の頭を撫で部屋を出る

それに深娜も続き店を後にしてなんと馬染みな公園に来た

「まったく。今日一日でこんなに疲れるとはな」

ベンチに横になり目をつぶる俺の横に深娜が座った様だ

「それであの二人に何て言うの」

「それはお楽しみだ。今日の8時に屋根上に来るといい。俺はそこで答えを出すつもりだ」

「そうするわ。いざとなったら霞を突き落としても阻止するからね」  
冗談に聞こえない深娜の発言を頭の中に確りと刻んで考える  
果たして皆納得するのか

ガシッ

おや？

誰かが俺の頭をガッシリホルドして持ち上げたぞ

ポムッ

おやおや？なんか弾力のある場所に頭が乗ったぞ

ゆっくり目を開けると最初に見えたのは下から眺める深娜の顔、  
そして幸澤が馬鹿事をほざいてた確かにデカイ胸

いや、俺を殺す気？

誰かに見られたら俺生きて京を出れないよ

「あのー深娜さん？」

「質問は受け付けないからね」

「さいですか」

死と隣り合わせの中、相対性理論に則って、時間はユックリ過ぎていった

そして只今7時50分

先程四人に別ルートでここに来るようメールを送り静に待っている  
涼しい風に目を細めながら遠くの街の灯りを眺めている



ドダドダドダ！

台風が現れたか

「霞！なんで深娜ちゃんにコウちゃんと慎がいるのよ」

「霞君！なんで大川さんに慎君がいるの！」

「霞、何故俺を呼んだ！俺は男に告白されたおぼぐるはっ！（瓦ヒツト）」

「・・・・・・・・・・騒がしいわよ」

俺は思った

運が悪けりや慎はここから夜空へダイビングだな

「さてさて。では君達の問いの答えを伝えよう」

「ストゥップ」

加弥は大きく息を吸ってゝ吐いてゝ 吸ってゝ吐いてゝ

「ば、ばっちこゝい！」

気合いをいれ直した加弥

「いいすか？」

四人は頷く

「まずは率直に。答えはYESでもNOでもない」  
『へ？』

「加弥も先塚も俺を好きだと言ってくれた、深娜も本心を言ってくれた。俺は君達の答えに問いで返す。捻くれた俺は君達に問う。それを踏まえた上でもう一度答えを聞きたい」

「霞君、いまいち意味が分からないよ」

「簡単に言えば俺は謎かけをする。そして君達は答える、それだけだよ。了解？」

『り、了解！』

「でわでわ……」

とある人は夢の地に憧れを抱いていた

とある人はその地を目指し走り出した

しかしとある人は自分を知らず、夢も知らず、夢中になって走った

とある人は夢の地に着いた

見るもの、聴くもの、触れるもの、全てが美しく、己の心を満たしてくれた

しかしそれと同時にとある人は気付いてしまった

自分は自分を知らない

自分はここを知らない

自分は世界を知らない

ジブンハナニモシラナイ

とある人は悲しんだ

戻れないあの世界を懐かしみ悲しんだ

とある人は悲しみに潰されて消えてしまった

「さて、理解したかな？」

『?????』

加弥と先塚は頭を90度に曲げながら考えている

しかし深娜は呆れていた

「まさかこんな簡単なの？」

「ああ、俺の問いはいたってシンプルですから」

裾に手を入れながら立つ俺に深娜は近付いてくる

優しい風は深娜の浴衣を揺らす

目の前に来た深娜は少し笑いながら

「これからもよろしく。最初の友達にして私の家族」

「こちらこそ。俺の大切な仲間にして大切な家族よ」  
自然と手を出し握っていた

その手は細くて温かく、優しかった

その光景をポカーンと眺めている二人組は我先にと走りだし俺と深娜の間に割ってはい

「どうゆうこと霞！」

「答えてアレなの？」

深娜は呆れた顔で二人の肩を掴み俺の前から引き剥がす

「分からないの？つまり霞は私たちの事を知りたいのよ。いま以上に多くの事を。恋人からじゃなくて友として先に」

「……む」

いまいち納得いかない加弥だが先塚は納得したらしく手を差し出す

「これからもよろしくお願いします。霞君」

「ああ、こちらこそ」

先塚の笑顔は綺麗だったし、頬を赤らめたその顔は可愛かった

先塚な先を越された加弥は焦りながら割って入り

「よろしく霞！いつもどうりにね」

「ああ、よろしく。俺の最初の友達」

「……てい！」

二人の隙を付いて抱きつく加弥

「大好きだから」

「はいはい、分かってるよ」

苦笑いする俺

加弥はいつも明るく可愛い。だからこそいつまでも笑顔でいてもらいたいな

そこからは大混乱である

加弥の抱き付きを先塚が必死に剥がそうとして、その加弥に深娜が勝ち誇りながら膝枕事件を暴露！

怒り狂った加弥は俺を抱き締めたまま腕に力（ベキツ、ボキベキグキ！）

がぁぁ目の前が黒く！黒くブラックアウト

はっ！生きてる

そこは屋根の上、三人申し訳なさそうな顔で座っている

ん？また柔らかい感触が頭を

「あの〜加弥？」

「口〜テ〜シヨンです」

「さいですか。つつかそろそろ俺らのクラスの入浴時間だぞ」  
「あ！そうだった。深娜ちゃんにコウちゃん、早く行こ」

嵐は去ったか

俺はその時気を抜いていて気付かなかった

慎の眼が何かに飢えた野生の眼だと

29・そうだ、京都に行こう（波乱万丈編）（後書き）

慎 霞、ありがとな

霞 気にするな慎、たかが上着一枚の貸しだ

慎 マジで！助かるわ

霞 下半身に人の上着巻いた状態じゃ威厳も気迫もクソくらえだな  
慎 でもあれだぞ。意外にこのフィット感にそよ風がマッチして股  
下

霞 次回はお嬢襲来ですよ！

？ やつと私の出番ですわね



30・そつだ、覗きに行こう！（前書き）

霞 はい、今回は菊池財閥令嬢、菊池麗奈様に御越し頂きました

麗 ・・・・彼方本当に霞？

霞 何をおっしゃいますか。私はいつもと変わりませんよ

麗 幸澤！今すぐ霞に尋問を。正体を突き止めなさい

幸 かしこまりました

霞 こら幸澤！話がちがつ、こら離せ！いやっ、いやっ

30・そうだ、覗きに行こう！

温泉

それは人類の楽園

絶景を眺めながら浸るその湯は神秘的にすら感じ、心と体を癒し、明日の希望を見い出すこと出来るまさにエデン

そう

それは男達にとって楽園以外のナニモノでもないのだ

「すまない皆、少々用事が長引いてな」

「いえ構いません中佐殿。予定時間にはまだ若干余裕があります」

そこは旅館ゆきしろの中でも大部屋に部類する【無彩の間】

そして2のCの男子の9割が集まっている

「それではこれより作戦最終確認をする」

慎中佐はホワイトボードを指差す

「二日間の視察の結果、我々の聖域は三力所である。まずは北北西1kmの山中。長距離望遠レンズで最も安全を確保された聖域である。次に北西500mの茂み。ここは通常望遠でも可能だが下手に動くと発見される可能性もある。最後は女湯隣だ。調べた結果毎日壁の検査を行っているのでその場で穴を開けて直視する。一番危険な聖域でもある」

勇敢なソルジャーは身動きせず真剣に耳を傾ける

「今回は各班に二台づつの高性能カメラを配備。万が一他の班が失敗しても記録さえしていれば家宝になる」

ソルジャー達のボルテージがどんどん上昇する

「我等は今、一つの試練を迎えた。それは余りにも大きく、代償は遙か彼方程巨大だ。しかしそれをなし得た時に獲るものは人生の宝そのものだ。我々は今一つなり！」

『ウオオオオオオオオオオ！』

部屋を震わす気迫はもう誰にも止められない

「これより任務開始を命ずる。散！」  
そして勇敢なソルジャーは部屋から一瞬で消え、残ったのは誰のか  
解らない白のブリーフだけだった

「ほら早く早く。何恥ずかしがってんのコウちゃん」  
「だって加弥ちゃん前みたいにふにふにしそうなんだもん」  
「ダイジョブダイジョブ。長くはやらないから。えいっ」  
「きやあつ。ちょちよつと加弥ちゃん！ダメだよ！やめ……や  
めてよ」

「ぐふふふふ。よいではないか」  
「あつ……ダメだよ。やめて……んっ……やめてよ」  
「」

「貴方達、少しは静かにしたら。場所を選びなさい」  
「だ、だって……加弥ちゃんがさっきからオジサンみたいにふに  
ふにっ触るんだもん」

「ネーチャンきれいな肌だねーモチモチするー」  
「ひゃうっ。だからやめてよ！どうしたの急に」

「加弥さんならさっき甘酒飲んじやったみたいよ。何と間違えたの  
かしらね」

「それって大川さんが飲ませたんじゃない！」

「知らないわね」

「バフパフ」

「二人とも酷いよ」

$\frac{1}{8} \times$

ソルジャー達の耳に響く声は彼等のイヤラシイ心に核を落とした

男湯（A地点）で拾われた音声はマイクを伝いソルジャーの元に運ばれる

心の叫びは森の動物達すら恐れ逃げる程の気迫だ

山中部隊（C地点）

「中佐殿！我々は幸せものです。この声だけで佐久間、津田が倒れました」

茂み部隊（B地点）

「神の領域です！これは神聖なる神の領域です！」

A地点

「諸君！気を抜くなよ。敵は常にいると思え！」

『イエッサー！』

「ふいっ……気持ちいいね」

肩まで浸り手足を伸ばす加弥

少ない凹凸だがそれはそれでとても綺麗で華奢に見え、可愛い

笑顔で目を閉じる

「そうだね。さっきまで大変だったけど」

微妙に距離を開けるながらも、いつも止めている髪を解き、加弥同様手足を伸ばす先塚

身長割に（161cm）恵まれた体で綺麗でモチモチの肌（加弥検証済み）どこか大人びた様な雰囲気を出している

「まったく。少しは落ち着きを持ったら」

スラリと伸びた細くしなやかな脚に胸の前で腕を組む深娜。校内でもトップクラスのスタイルの持ち主はもう大人顔負けです

「それにしてもさ。よくよく考えたらうまく霞に誤魔化されたね」

「そうだね。なんか最後は手の上で踊らされてた感じだね」

「仕方ないんじゃない。それが霞って事ですよ」

C地点

「中佐！獣に対する攻撃許可を！」

B地点

「我々はその男を許すわけにはいきません！」

中佐

「しかしそうなれば今度の敵は余りにも相手が悪すぎる。あの三人の女神の逆鱗に触れたら俺達に残されるのは死のみだ。今は作戦のみ頭に入れる」

## C 地点

この拠点には主に肉体派が配備している。

大型望遠レンズ越しに女湯にピンと合わせているがどうしても湯気の量の多さに女神を見ることが出来ない

「くそつ。湯気のせいで認識不可能。この地点では撮影は無理かと」  
「仕方ない。残りの二班に望みを託すしかないまい」

「それではカメラを残し撤収」

その時森の中で何かが動いた

## B 地点



「フウウウウオオオオ。班長！女神の顔を確認！加弥嬢です！」  
『なに！』

湯気の中から見える加弥の姿にソルジャーは悶えながら必死に想像を膨らませさらに盛大に悶える

「カメラ作動確認しろ！あわよくば三人の女神を！更によければ全体を！……！」

「作動確認！問題なく作動しております。我家の家宝が目の前にアリマス……！」

「よし、中佐殿に撮影開始の報告だ。少しでも多くの時間と部分（想像にお任せします）を撮り続け」

茂みの中を何かが走った

## A地点

蒸さ苦しいソルジャーは腰にタオル一丁の姿で壁に密集し、手動ドリルで穴を開ける

勿論それは中佐殿です

血走る眼と荒い呼吸で壁に密集するソルジャーは変態以外の何者でもありません

ゴリゴリゴリゴリゴリゴリ

ゆっくりと着実に進むドリル。このドリルには男のロマンが託されているのです！

進めよ鋼の体！突き破れよ現実の壁！俺等を止める壁などズタズタにしてしまえ！

ゴリゴリゴリゴリゴリカラッ

『!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!』

破られた鉄壁

ゆっくり引き抜く鋼の武器を床に置き、全員が感謝の祈りを捧げた

神（手動ドリル）よ。彼方は我々に勇気と希望を与えてくれました。

我等は一生忘れず、毎年この日この瞬間に祈り捧げる事を誓います

もう一度感謝します

ありがとうございました

ゆっくりと眼を開き中佐は屈み込んで大きく息を吸う

この先に俺等の楽園があるんだ！

その時男湯の扉が開かれた

「お初お目に掛ります。私、旅館ゆきしろ、対視き対策特殊迎撃部隊隊長、宮蔵夜喜<sup>くぐりやき</sup>。皆様、お早く御着替ください」

タオル一丁のソルジャーはタオル投げ出し湯船に潜り込んでいる唯一の猛者慎はタオル一丁で仁王立ちしている。ぶっちゃけ情けないの一言だ

「何故かね。何故一思いに我等を捕まえない」

一応小言で話す慎に合わせる様に中居姿の宮蔵さんはにつこり笑い「既に山中と茂みの方々は排除しました。しかし彼方はお孫様の御友人です。ですのでこれから勝負です。私達に勝てば全て黙っておきます。さらに今入浴なさっている三人のお嬢様の入浴写真を進呈いたします。ただし負けたら・・・ふふふ」

指をパチンと鳴らすといつの間にかあらゆる場所から中居さんが現れた

皆さんゴツイ重機関銃（無論改造エアガン）を肩から下げ湯船のソルジャーに向けられている

ソルジャーを守るものは少し薄い湯気と必死に掻き回して出来る泡だけなのです。文字通り丸腰です

「断れば・・・」

「湯を抜いて蜂の巣にします」

「・・・分かりました。皆、服を来て戦闘準備を」

ソルジャーの慌ただしい手が止まる

薄れる泡の湯船に投げ込まれる純白のタオル

「賢明な判断です。それでは着替が終わりましたらこちらの場所に」  
宮蔵さんは一枚の紙を渡し、湯気の中に消えていった

「しっかし遅いな慎。長湯しすぎだろ」  
ジリリリリ。ガチャッ

「はい」

「ああ霞さん、実はまた厨房が忙しくて。お手伝いよろしいでしょうか？」

「分かりました。すぐ行きます」

しっかし遅いな慎

森の奥深く、そこに立つ7人の武人、彼等の目の前には先程の中居、  
宮蔵夜喜さんが立っている

そしてその後ろには木に吊された下着姿の哀れな落武者×11が開脚状態という屈辱的な格好で気を失っている

「それではルールを説明します。これから皆さんに銃を御渡しします。勿論ただのペイント弾です。私の色は赤、皆様は青です。命中した時点であの様な格好にされます。ただしヒット数は皆さん三発までとします。勿論私が一発でも当たれば私の負け。制限時間は30分。時間以内に全滅したら負け。生き残ればドロー。もし勝てばこの写真を差し上げます」

封筒からチラッと見せる

「なんだ！湯気が無い！これはもしかや丸見えではないか！？」

「ええ。皆さん羨ましいくらいスベスベお肌ですよ」

武者は立ち上がった

銃を片手に放つ雄叫びは大地を揺るがすエロパワーだ

「それでは開始です」

男の戦が始まった

「霹さん、飾り終わりました」

「わかりました。それではこの煮物の盛り付け御願います。あと雪野さん、今煮込んでるのに酩加えと言って下さい」

慌ただしく動く厨房で指示を飛ばし手際よく進めるまったく御えらい政治家風情がこんな時間に来るな

「霹さん、味見御願いますか？」

「すぐ行きます」

厨房って戦場なんだよ

ピシッ

「のあ~~~~」

「山下！」

山下は足に絡まる紐により宙に吊される  
そしてそこに続く三発の重い銃声

腹、額、顔面に赤いペイントがベチャツと広がっている

「つつかなんだよあの音！ペイント弾とか絶対嘘な音したぞ！」

「はい。今回はデザートイーグルを使用しております」

木の枝から逆さまに現れた宮蔵さん

「うわっ、デザートイーグル二丁連射するやつ初めて見た！」

「化け物めが！」

三人の武者はマシンガンを乱射するが既に宮蔵さんの姿は無く、野中の横顔に続けて三発のペイント弾がぶつかる

声にならない悲鳴を残し地に倒れる野中、ひっと短い悲鳴をあげ、筑波と岩井は森の奥深くに逃げ出す

「筑波！岩井！離れて……」

森に響くデザートイーグルの叫び

崩れ落ちる二人を見ながら慎は膝を付き、崩れ落ちる

「何故だ、何故こんなことをするんだ！」

隣の弥倉はワルサーを構え茂みの中に乱射する

「ふふふ、何処を見てまして？」

宮蔵さんは影の様に弥倉の真下から現れ左手をアッパーの様に突き上げ宙に浮く弥倉を地面に叩き付ける

それと同時に武器を持つ手を踏み付け銃口を眉間に押し付ける

「質問に御答えします。彼方達が女の敵だからです」

零距离から発射された銃弾は顔を真っ赤に染める

古い懐中時計を開き時間を見る

「慎さん、残り13分です。正直失望です。彼方はもう少し勇敢で果敢な方かと思ってました。それが仲間の死（生きてます）に心折れるとは」

「……」

「そろそろ終りにしましょ」

「……どうしてですか……」

「ん？」

「彼方はどうしてこんな事をするんですか！」

「……ちよつとキャラ違いませんか？」

「彼方は間違つてる！なんで戦争なんか始めるんだ！」

「だから違いますかキャラ！」

慎は戦友の残した二丁の銃スミス&ウェッソンのM5906とハドボーラーを掴む

「彼方がいけないんだ！」

二丁の銃の引金を絞る

一瞬の判断で避け素早く応戦する

「よく分かりませんが少しはマシになりましたね」

「あんたって人は！」

その時慎の頭の中で種子がはじけた

それは凄まじい戦いだつた。両者一步も退かない攻防、あらゆる物を駆使し闘い、互いの命を掛け闘い続けた



二人は互いに銃を向けあっていた  
慎は左肩と腹部に赤い液が広がっている  
宮蔵さんは膝と脇腹の辺りの中居服が裂け、お互い肩で息をしている状態だ

「どうやら時間切れですね」

「はあ、はあ、強いよあんた。手加減してくれよ」

「手加減していたら私も危なかったです」

ホルスターにデザートイーグル二丁をしまい指を鳴らす

またまたいろんな場所から湧き出る中居さんは亡骸（生きてます）を一人三体担ぎ旅館へ走っていく

「それでは慎様、肩を御貸しします。早く戻らなければ疑われますよ」

「くつ、逆がいいのに」

本心垂れ長しで素直に肩を借りる慎

物凄い満足顔に豹変してしまった。それはそうです。隣の宮蔵さんからは何とも大人の女性の匂いを発し密着するその柔らかさ！

「……やっぺ。いいかも！」

「慎様何がいいんですか？」

「すいませんすいませんイーグルしまってください。何故に足と足の間に銃口向けるんですか！」

「獣の粛清です」

「ひひひ勘弁して下さい！」

ズギューン！

白眼の慎を引き擦りながら宮蔵さんはゆきしろへ向かっていった

「ふう、疲れた」

戦場終えの一服に軽く風呂に入りさっぱりした俺は部屋に戻る  
そこにはいつ戻ってきたのか慎が布団に四つん這いで寝ている

「なんつー格好で寝てんだか」

まあ次の日きついのはこいつだからいいか

今日も長い一日が終わったか

30・そうだ、覗きに行こう！（後書き）

霞 はい、いかがでしたか？

麗 文じゃ分からないけどテンション低すぎよ

霞 あんたのせいだよまったく

麗 ふん。御自身の責任でしてよ

霞 はあ、そういやお嬢、次かその次出演だつてよ

麗 え？なんで私がその様なことを

霞 なら断つとくか。おい作者、お嬢出演拒否

麗 幸澤！やりなさい

霞 ぐきや！何をする幸澤！止めろ！やめろ！

次回是谁かな？

31・沖縄良い気分（浜と城と常夏の島）（前書き）

霞 物凄い久しぶりですね

ウ いやー最近残業凄くてね。寝てないし書けないしで散々だよ

霞 それにまた企画立ち上げて。収集つかなくなっても知らんからな  
ウ でも出演は君だよ？

霞 あ・・・

ウ キエーキエっキエっキエー。お互い頑張ろうではないか。地獄  
の底まで

霞 いやだ〜！誰かこの作者に休日を与えてくれ〜

ウ アグッ・・・だ、誰だ・・・

### 31・沖縄良い気分（浜と城と常夏の島）

只今二学年一同は旅館ゆきしろの前に整列している。よくあるお礼の言葉である

教師が承認するようないきなりのお礼の文を読んで皆一斉に『ありがとうございました』  
いや〜いつ見ても白々しい

そんな感じで終らせ俺は個人的にお礼を言いに行く

「恋花さん。御世話になりました。今度は多分正月辺りに来ると思  
います」

「いいえ。こちらも旅行中にお仕事手伝ってもらってすみませんね。  
後で美味しいのを贈りますから」

和やかに会話する俺を後ろからは鋭い視線を送り続ける方々、止めてよ

「そつえば霞さん。慎君はどちらに？」

「慎？あいつならそこに」

妙に内股気味の慎は少し辛そうに手を上げる

「ああいました。宮蔵さん。いましたよ」

すると奥から宮蔵夜喜さんがゆっくり歩いてくる

慎は小さな悲鳴と共に更に内股へ！って何をした慎

「慎様、昨晚の怪我は大丈夫でしたか？」

「・・・はい。朝確認出来ました」

「下ネタは厳禁ですよ？」

「すみませんすみませんズキューンは勘弁してください」  
につこり笑う夜喜さんは目を細め

「まあ昨晩は楽しかったですよ。久方ぶりに熱くなりました」

「慎……お前等々犯罪に手を……」

「ち、違うぞ！断じて違うぞ！そうだろソルジャ―達！」

皆首を横に振る

「裏切り？裏切られたの俺！？もう泣きたいよ俺」

しゃがんでの字を書く慎を悟すように肩にそつと手を乗せる夜喜さん

「でも私は彼方のそういう所、結構気に入ってますよ」

「夜喜さん。ありがとう。彼方だけですよ信じてくれるの」

泣きながら手を取る慎

見てて可哀想としか思えないのは何故だろう

「またいらして下さいね。待っていますから」

「はい。正月に霞に便乗して来ますから」

「それではこれは約束の印ですよ」

夜喜さんは素早く慎の頬にキスをして足早に旅館に消えた

……へ？

「あらあらあら、まあまあまあ」

口に手を添えにこやかに笑う恋花さん

その光景を目を丸くして見つめる三人娘

そしてその犯行現場を見つめる群生

「……え？慎って夜喜さんと付き合ってるの？」

「いいえ。宮蔵さんも大胆ですこと。もしかしたら一目惚れでしょうかね」

相変わらずにこやかに笑う恋花さん  
一応確認するため慎に聞いてみる

「おい、生きてるかまこ  
」  
その場に横倒しになる慎

「！どうした慎！すっかりって心配停止してる！夜喜さ〜ん。彼方の慎が死にそうですよ〜早く心臓マッサージを」

ズゴン！ズゴン！ズゴン！

慎の胸に三発の銃弾（模擬弾）

そして慎は多少痙攣しながら死の世界から復活を遂げた

そんな慌ただしい事件も一段落し、今は沖縄に向けて飛び立つ瞬間です

つまり飛行機です！

隣の慎も先程の事件を忘れ呪文の様に

「鉄は空飛ばない鉄は空飛ばない鉄は空飛ばない鉄は空飛ばない」

お前いつの時代の人だよ

とまあ馬鹿をやってるうちにアナウンスが入りどうやら離陸ですあれですよ。外から見るとゆっくり助走つけてると思うかもしれませんが、いきなりスピードつけて飛ぶんです

女子とはこうゆう時ほど驚いて声を上げます。はっきり言えばうるさい

何故なら俺はノートパソコンとにらめっこしながら必死に文字の羅

列を打ち続けてるのだ

ええ、もう隠すのもなんなので教えます

俺小説家です

と言うわけでサイドから覗かれない特殊シートを貼ったパソコンで  
思い付いたネタを打ち込んでおく

隣の慎はもう何処かふつきれたらしく虚ろな目でジュースを飲んでる

「霞。旅行の時くらい休んだらどうよ？」

「もう少して終る。それに修学旅行のレポートも頼まれててな。お  
陰で疲れるよ」

データーを保存してロックをして閉じる

「霞。飛行機初めてだよ」

後ろから顔を出す加弥、間一髪だよ

「俺もだよ。って言ってもほとんどの人が初めてだろ」

「そうだよな。それよりも沖縄楽しみだね」

そりゃー楽しみですよ。首里城に組躍、ゴーヤに三線、ジラパにパ  
ーランクー

「楽しみだね」

ドッキドキが止まらない！

「子どもね霞」

「深娜、人は一つくらい熱くなるものがあるのだ」

「そうだよ深娜ちゃん。霞の事になると熱くなるクセに」

「彼方達は何もしなければ済むことよ」

「はは。ん。つまり霞は譲らないって事かな」

「ええい！止めなさい止めなさい。争うな！」

頭の上で始まる口論を止めてみたが無理だった。二人ともドンドン  
ヒートアップしていく

そんな中先塚は普通にしている

「はい霞君。京都で買ったお団子」

「お！ありがと先塚。ありがたく頂くよ」



「ねえ霞君、苗字じゃなくて名前で呼んでほしいな」

頬を赤らめながらモジモジ話す先塚。名前ね。そういやずっと苗字だったな。まあ京都の一件もあるしいいか

「ありがと洗夜」

「どういたしまして」

につこり笑う洗夜。うん。可愛いですな

『抜け駆け禁止!』

まだまだ嵐は過ぎぬか

## 沖縄

日本最南端の県。沖縄本島をはじめ琉球諸島を含む。

面積は2265平方km。人口約129万5千。

太平洋戦争の激戦地となり、敗戦の結果、アメリカが施政権を行使。1952年4月、自治体琉球政府がおかれたが、その施政の範囲には制限があった。

72年5月15日、米軍基地の存続など問題を残し施政権は返還した

「とまあこんなところか」

パソコンを閉じ空を見上げる

透き通るような青空。熱い日差しを和らげるそよ風

「来てよかった！」

ビバ！沖縄！！

そして今俺の前に広がるのは首里城！

もうインスタントカメラ一個使い切りました

「霞〱お城ばつか撮ってないで私も撮ってよ〱」

「はいはい了解」

カシャ

「んふふ〱。次は二人で・・・」

「ちよつと加弥ちゃん抜け駆けだめだよ！」

ああまたかよ

すると何の違和感もなしに隣にいる深娜はカメラを取りだし何気無い素振りで城をバックに俺を撮る

「・・・深娜さん？」

「別に気にしないでいいわよ」

いや、あの二人が気付いてないからいいけどさ

「それより今は城城首里城〱」

もうスキップしながら守礼門に近付こうとすると先生に止められた

「ちよ、ちよつと待ちたまえ霞君」

「いくら先生でも容赦しませんですよゴオラアツ！」

「いや、実は先程市から連絡があつてな。なんでも何処その富豪の娘さんが一週間程首里城を貸し切つたらしくて」

「・・・は？」

「だから貸し切られて見学が出来な

」

メキッ

コンクリートに輝か入る

周りの連中は物凄く引き吊つた顔で物凄く離れる。深娜も流石に離れはしないが引き吊つてる。

「そうかそうか。貸し切りか。はっはっはっ」

深娜曰く、今までで見た中で一番邪悪に笑ってたそうだ

そうかそうか貸し切りか……

一步一步守礼門に近付くと人の輪は破れ道を作る

その場にバックとカメラ、その他必要なものを捨て全力で走る

「誰であろうとぶつとばす！」

坂を登り門を抜け目の前に広がる正殿

ああ、綺麗だ！

「何処の誰だ貸し切った馬鹿野郎ってノー！」

素早く海老反りしながら横に飛び退く

パシユッパシユッパシユッ！

「誰だ貴様！誰の許可を得て来た！」

「まさか襲撃か？」

「学生か。まったく市は何をしていたんだ」

銃を構える黒服のお兄さんお姉さん

「どうしました皆さん」

おやゝ聞いたことあるこの声

「おや？霞君ではないかね、どうしたんだい」

「幸澤。お前がいるって事は貸し切った娘さんってのはアヤツだよか」

「あら、何してるのかしら？」

お嬢かよ……

「つつかお前、何貸し切ってたんだよ」

「暇潰しですわ」

ブチッ

「まあ余りここの別荘も使って無かったし気晴らしよ」

ブチブチッ

「まあこの城、さして何が良いのか分かりませんわ」

プツン！

「ん？なんだここは？」

頭をかく俺は取り合えず周りを見渡す

黒服のある程度訓練された人間が24人、派手な服の女とその隣の執事。まあこの執事が一番戦えるか

「霞君、どうしたのかね？」

ああこいつが幸澤か。すると隣の派手が菊地麗奈か

「ああなんだ、俺は霞じゃねえ。夕月だ。説明は面倒だから聞くなよ」

京都の馬鹿学生みたいな顔してるが別にどうでもいい

「取り合えず霞からの伝言だ。『クタバレ馬鹿ども』」

身を低くして隣で銃を構える男の足を払い体勢の崩れた男の顔を馬蹴りにする

一瞬の隙を突かれたSPも直ぐに反応して銃を構え直し引き金を引く

しかし一瞬の内に背後に周り足の裏を背に付け力任せに脚を伸ばす吹き飛ばすSPを確認すること無く宙で身を回し近くの男の顔に回し蹴りを放ち倒す

着地すると同時にその場から消え10m程離れた場所の男の前に現れる

「霞は出来ね〜が俺には割りと簡単に使えるんだよ縮地が」

溝に手を添え軽く押す

銃を構える者程懐に入った後の攻撃は楽だ。どんなに銃の威力があ

ろうと当たらなければただの鉄クズ。しかもこの男は直立で両手で銃を構えるボンクラときたもんだ

案の定簡単に退けざるバカの無防備な腹に正拳突きを叩き込み、ついでに他の男も巻き込む

後は倒れた付属野郎も殴って黙らせる

さ、野郎共は終了。お次は女性の方々

といっても情けは掛ける気はこれっぽっちもない。まあせめて当て身程度で許してやる。さつきから頭ん中で霞が女には怪我させるな  
ってしつこいんだよ

「つつう訳だ。後は幸澤だったか？取り合えず殺る？」

「私もお嬢様を守る身なのでね」

ネクタイを緩め構える

「夕月君だったね。お相手願おうか」

「はっ、いいねその気迫。嬉しいぜ幸澤さんよ！」

言い終わると同時に顔面めがけて裏拳を叩き込む。

それを難無く防いだ幸澤はそのまま手首を掴み肘に手を添えおもいつきり捻るが素早く反応してその場で身を捻り手を振り払う。着地と同時に顔スレスレに回し蹴りを放ち素早く下段回し蹴り、後方に飛び退き避ける幸澤は直ぐ様宙に跳び踵落としを叩き付ける。身を低くしている俺は地に両手を着き腕の力で空に跳び足裏を幸澤の踵に当て膝を曲げる。それにより衝撃を分散させ、脚を伸ばして飛び退き距離を稼ぐ

「幸澤。お前には合格点あげるぞ。75点！」

「微妙ではないかなその点数は？」

「おいおい、そこら辺に倒れてる連中は5点だぞ。15倍だから喜べ」

「結局微妙ではないかな」

「まあそうだな。ほんじゃ次で終りな」

言い終わる前に縮地を使った

一瞬の内に間合いを積みストレートを溝に叩き込む

しかし幸澤は予め予測していたのだろう

突き出す右のストレートを左腕でギリギリで反らし、身を低くして前屈みの俺の懐に入る

縮地とは様はめっちゃめっちゃに速く移動すること。基本的には一直線にしか移動できないのだ。予め何処で曲がるか決めていれば直角には曲がれるがその分の移動時間はどうしても無駄になり余り良い戦法ではない。

「私とて初めての技ではないのでな。対処はいくつかあるのだよ」

懐に潜り込んだ幸澤は肘を向ける

お互い勢いのある状態で衝突すればそれ相応の威力になる。縮地とはそういう意味では脆刃の剣なのだ

「評価アップ。84点だ」

だが俺にはさして障害でもない

幸澤の目の前には誰もいたかった。先程までいた夕月が視界から消えていた

「なっ！」

「上だよ上」

俺は幸澤の肩の上で逆立をしている

さつき懐に入られたのはある程度予測していた。さつきSPをノシている時こいつは眉一つ動かさず観察していた。それだけでもただの執事でないことは想像できた

「さて幸澤。ゲームオッバクだが何か言うことは？」

「お嬢様に手を出すことは許さん」

「いいねその殺気。ま、俺はレディーには優しいから安心しろ」

逆立中の俺は、勢いよく膝を首筋に叩く付けてやった

「と、ゆう訳でハロー、エレガントなお嬢さん」

「あ、貴方本当に霞なの？」

「そう脅えるな。つうか俺は夕月。霞と混ぜて考えるなよ」

一歩一歩ゆっくり近付きながら右手を伸ばす

「霞からの伝言だ。『今すぐ一般公開してコイツにイジラれるか、泣いて謝るまでイジラれて一般公開するか、貸し一つ作って一般公開するか』だそうだ。時間は5秒スタート5432」

「速すぎですわ！三番目で！他の二つは論外ですわ」

怒るお嬢の前に立ち右手を顎に添え上を向かす

見方ではキス寸前みたいである

「ふむ。なかなかいい眼だ。強い眼だな」

「なっ！離しなさい！」

勢いよく振られたビンタを軽く止める

「成程成程。深娜とは別に強い眼だ。例えるなら深娜は断涯に勇ましく咲く花。あんたは咲き乱れる中でひときは大きく美しく咲く薔薇ってところか」

「ばっ、馬鹿なこと抜かしてないでさっさと離しなさい！」  
真っ赤になりながら身を擦るが更に顔を近付ける

「だが深娜ちゃんと張り合うには足りないな。心の弱さが」

そして目線を下げる

「ついでに胸も」

「大きなお世話ですわ!」

改心のビンタを素直に貰っておいた

(おい夕月、いい加減にしろ!)

「ん?なんだ霞。ヒガミか?」

(ドアホ!いらん仕事するな。さつさと引っ込め)

「それがよう、何故か知らんが入れ換えの時間長引いてるって気付いてる?」

(.....あ!)

「それとだ。ちよつと前に加弥つちが二重人格って言ってたよな」

(まあ前文は無視するが確かにそう言ってたな)

「素晴らしい情報を教えておく。まずは俺以外に最低でも一人、他の人格がいる」

(はい?なんだと)

「そしてお前は俺と他の人格を束ねて統率する人格。又は俺等を隠すための人格」

(なんだそれ!なんでそんなことを知ってた!)

「寝てる時に頭ん中に文だけが羅列しててな。そん中で俺が記憶出来たやつだ」

(.....)

「ついでにお前が今気を失えば俺が一時的に俺としての時間が延びる」

(.....はっ!やめ)

「くらえ!うなれ小宇宙。いくぜ、ザ・世界!」

(イヤ~~~~!うぎや~~~~ナンダコレは~~~~あ、意外と細いんだってなんじゃこりや~~~~!!!グハッ)

「ふっ、勝った」



そんなやりとりを間近で見せられた麗奈嬢はまだ顔を赤くしながら  
「な、何を一人で騒いでいるのよ」

「いやな、霞を黙らせるために溢れんばかりの俺の知識を流し込んでやった」

「知識って？」

「R20指定並の男のロマンをな」

お嬢思考中・・・

お嬢思考中・・・

お嬢思考中・・・

クリア

「ばっ！馬鹿ですの彼方は！そんなハレンチな思考を！」

「おうおう勇ましいこと。まるで未だにキスしたことも男の人と手を繋いだ事もない純白純情可憐なお姫さまだ」

再び視線を下げる

「だから育たないのか」

「大きなお世話ですわ！」

やっぱり改心のヒントを素直に貰っておい

そんなこんな騒いだ後、幸澤を叩き起こしてこの場から撤収させ悠々と皆の所に戻る

「おい野郎共。見学できるからサッサと行け」

『・・・・・・・・霞かアレ？』

無理もない。今の霞（現在夕月）は制服のボタンを三つも外しポケットに手をつ突っ込んで、男らしく髪をかき上げているのだ。二年生の誰もが呆然と眺めているのだ

「ちっ、鈍いバカ共だな。さっさと行け！」

迫力満点で睨みながら叫ぶと我先にと慌ただしく走り出す生徒と教師残っているのはお馴染の四人

「霞じゃなくて夕月さんだよな？」

「そうだと思う。霞君あんな格好しないもん」

「あゝあ。俺しらねゝからな」

「それはいいけどなんでまだ夕月が出てるのかしらね？」

『・・・・・・・・さあ』

皆首を傾げるばかりだった

「よつす深娜ちゃん。相変わらず魅力的なボディーだな」

話しかけるなりいきなり肩に手を回す

「さあ行こうかお嬢さぶがっ」

横つ面を殴られ後頭部を石で殴られた

「いった！痛いっつか誰だ凶器使ったのは！」

「夕月さん！いくら違う人でもベタベタ引っ付くな！」

なんか黒い染みの付いた石を手に加弥は怒る

「怒るな加弥っち。カワイイお顔が台無しだぞ。笑顔が素敵じゃないきや補えないよ」

なにげに最後の辺りで加弥のコンプレックスをグサツと一突きしたがそこまで思考が進む前に止めの一撃を使う

「笑顔が素敵なお嬢ちゃんには素敵なお褒美が待ってるぞ」

そう言つて顔を近付ける

「か！かか霞！」

完全に混乱する加弥っちの耳元で囁く

「幸せあらんことを」

そのまま首筋に口付けして離れる

直立不動で真つ赤になった加弥っちはそのまま後ろに倒れ慎はギリギリで支えた

慎はアイコンタクトでしきりに（ありがとうありがとう）と伝えてくる

相変わらずのバカだこいつ

そんな光景を両手で顔を覆い指と指の隙間から覗くコウちゃん上から下と視線を巡らせ納得

ナイスボディー！！

思わぬ伏兵に心踊らせながら冷静に接する

「やあコウちゃん。君には刺激が強すぎたかな？」

「こ、コウちゃん！」

うん。もしかしたら麗奈嬢より純情かも

ならば落とすのは簡単だ！とゆうことで早速コウちゃんの右手を取り手の甲に口付けする

「いかがですかお嬢さん？」

「はうっ！き、キキキキス！」

やっぱ真つ赤になったコウちゃんはそのまま倒れやっぱ慎が支えた

今度は涙を濁流の様に流しながら（ありがとうありがとうありがとうありがとつ）とアイコンタクトを送る

ウザッ

さーて本命の深娜ちゃんでも頂きますか

「みくなくちグボツ」

渾身のストレートをもろ顔面にくらい退け反る。続け様に脇に食い込む指

「いった！痛いぞ深娜ちゃん。流石に抜きては不味いつて」

「黙りなさい夕月。今すぐ霞と入れ替わりなさい」

「いや、彼奴が起きないと無理だつて」

「なら無理矢理起こそうかしら」

次々と放たれる拳をギリギリで避け続ける。つつつか幸澤より速っ

「おおおお落ちて着け深娜ちゃん。冷静に冷静に」

しかし聞く耳持たない深娜ちゃんは容赦0の殺戮マシーンです

ピンチ襲来の俺は最後の賭けに行く

ギリギリで避けた拳を掴み引き寄せ空いた手を深娜ちゃんの顎に添

え上を向かせる

間近に迫る顔に真っ赤になる深娜ちゃん

「可愛いな深娜ちゃんは」

「ば、バカじゃないの！早く離しなさい」

しかし返事することなくゆっくり顔を近付ける

「か、霞……」

後数cm！

その時夕月の頭の中に響く声

（夕月……遊びすぎたな）

霞！いいとこなんだから引つ込め！

（終りにしてやる。くらえ！相対性理論英語版！エンドレスザ・世

界！)

流れ込む数式と分け分からん英文の山！山！山！！！！  
夕月、意識消滅

目の前の霞の様子がおかしい事に気付く深娜  
一瞬白眼になり再び元に戻り焦点を定める

「・・・深娜か」

「霞かしら？」

「ああ・・・！！！！！！！！！！」

あの野郎！何をする気だつたんだ！

素早く手を離し深娜から飛び退き土下座

「すみませんすみません犯人は夕月です。堪忍してください。俺は  
キスするなんてこれッポツチも思っけませんそんな不屈きな思想持  
ってませんすみません」

マシンガン謝罪をしながら頭を下げる

殺されるよオレ！

しかし意外なことに深娜の地獄突きの嵐はなく、そっぽ向きながら  
顔を赤らめ

「別に。気にしてないわよ」

そう短く言うただけだった

なんか知らんが命拾いしたよ

視線を横にずらすと倒れる二人と泣く馬鹿

「深娜、どうしたんだあの二人」

「夕月よ。あんた以上のタラシよまったく。あんなこと平然とするなんて」

「あんなこととは？」

顔を赤く染めながらボソツと呟く

「・・・首筋と手の甲にキス」

あの馬鹿野郎が

追加制裁

>やる

やらない

決行！

「はあああああああ！！」

流し込むハーゲンポアズイユの法則

もう悲鳴すら上げることなく散っていった

「まああれだ。行きますか首里城」

二人を起こして（加弥は真っ赤になりながらおもいつきり照れ笑いして殴り、洗夜は真っ赤になりながら手の甲を擦り物凄い熱い視線を送っている）守礼門をくぐって行った

夢の中

数限りなく辺りを埋め尽す文字の羅列

統率支配世キ界弱タさ悲シアエみ仲間タ裏切り破ネ壊蘇ワタシ生戒  
律ノナ混沌欲力ノワ求憤タシ怒衰退弱ハヤクミ者閃光汚ツケテ染怠  
惰情熱清廉隻影寂寞

目覚める寸前

ようやく聞こえた

マッテルカラ

熱い日差しの中閉じた目を開ける

降り注ぐ日光と吹き抜ける潮風

ホテルの前のビーチの椅子に腰掛け記憶を辿っていた

夕月の言っていたもう一つの人格。確かに存在した

断片的で無駄な情報の中に少しだけあった事実。どうやら氷山の一角並の小さな情報だろう

とまあ難しい事は今は忘れ楽しむ事にした

だって目の前には澄みきった海が広がるんだもん！

海面から顔を出す馬鹿共は興奮しながらはしゃいでるし女子は女子で気楽に泳いでるし

そろそろ俺も泳ぐかな〜等と考えてると海面の馬鹿クラゲ達から歓声が聞こえる

ゆっくり首を回すとそこには水着姿の三人

加弥      ピンクと白の花柄でヒラヒラの付いた水着

洸夜      何故か真つ白のスクール水着（我が校ではこれが基本）

深娜      黒のビキニ（直視出来ないほどのスタイル）

俺だってこれでも男なんです



あんな姿の三人といつも通り接しろ？無理だつて

あ、加弥と洸夜が走ってくる

その場で屈伸運動して体をほぐす。そしてその場で右向けゝ右！  
目の前に広がる大海。待つてろ、今行くから！

現実逃避の如く全力ダッシュで走り透き通る海へダイビング！脱兎  
よろしく猛然と泳いだ

「あ、霞が逃げた！待てゝゝ」

「霞君待つてよゝ」

直ぐ様海に飛込む二人。こら、体操しないと体に悪いし足釣るよ？  
案の定足を釣った

「かつ霞！助け、助けて！ツツタ！つつちゃった」

洸夜に至つてはガボガボと顔が半分沈んでいる  
つて冷静に観察するな俺！

直ぐ様Ｕターンして二人を仰向けにして岸まで泳ぐ……が

「怖かったよ霞ゝ」

「ケホケホ。ありがとう霞君ゝ」

「あゝ引つ付くな。泳げない！泳げないし言葉で表現し辛いナニカ  
が当たつてゐるって」

ほんと必死でバタ足しました。俺死にかけたし海水飲んで素晴らし  
く苦しい。昔を思い出す。昔親父と海に来てゴムボートで漂流。空  
気が抜けて死ぬ気で泳いだ200m。あの頃俺は5才だったな

苦しい過去を引きずりながら何とか岸に辿りつく。二人は未だ腕に  
しがみ付いてる

そして目の前に立つのは深娜さん

ビックリする程細くて凹凸のある体に黒のビキニ

目の保養って言うより目に毒並にキツイ

相変わらずの無表情だが妙に青筋が目立つ

「おかえり霞」

「グフツ」

まるでリンチの様に防御出来ないボディーに一発

飛び欠けた意識をなんとか押し止めて何をすればいいか瞬時に考えた。無理！何をやっても消される！

（ふ、御困りだな同士）

貴様、まだ生きていたか！

（どうする？俺のアドバイスを聞くか？確実に許して貰える術を知ってるぞ？）

くつ、本当に許して貰えるのか？

（無論だ。加弥っちとコウちゃんは好いてくれてるが深娜ちゃんは家族なだけなんだろう？）

うむ。確かにそうだが

（ならば簡単だ。つまりはゴニョゴニョゴニョゴニョゴニョ~~~~）

その間僅1秒

そして早速試す俺

ゆつくりと腕にしがみ付く加弥と洸夜を丁寧に解き深娜の手を取り真剣な眼差しを送る

「うつ・・・」

赤くなり言葉に詰まる深娜

「すまなかつた」

深く頭を下げると深娜もどうしていいか分からないので取り合えず「べ、別にいいわよ。その・・・気にしてないし。いいから手を離して」

許しを得た俺は顔を上げ笑う

「ありがとう深娜」

「~~~~~!!!!!!」

真つ赤になる深娜は無理矢理手を振り払いさっきまで俺がいた椅子の方にズンズン歩いて行く

それを見届けるや否やいきなり足首を掴まれ引つ張られた

「ブアップ！」

砂浜に顔を埋めて倒れる。そして倒れた俺の背中で何かが物凄い速さで動いた

「かゝすゝみゝ？こんな常夏の島で深娜ちゃんだけにラブラブ接待ゝ？」

「アダダダダだイイイイイ！ギブアップ！海老反り固めギブアップ！」

冴夜は頭に砂を山盛りにしている

「霞君、どうしていつも大川さんにはあんなに優しいの？」

「それは誤解ですよ冴夜さんんガアアアア！痛いタイタアタアアアアアアアア」

今度はいつの間にかボウ&amp;アロー！（アシュ マン、サン シ イン地獄コンビネーションの下の方の技）

ミキミシと背骨の悲鳴に吸い寄せられる様に飛んでくる黒くて針千本な勝手に採ると密漁になる食べ物。海栗！うに！ウニ！UNI！

「クソ霞ごラアアア！羨まし過ぎだクソやるゝ！」

「なんだそのハーレム！羨まし過ぎだクソやるゝ！」

「なに天使と密着してんだ羨まし過ぎだクソやるゝ！」

暴動と化した海パン変人の波が押し寄せる

そんな地獄の軍団に立ちはだかるのは改造手術されかけた人型バツタてはなく、さっきまで俺をなぶつてた加弥と冴夜ではありませんか！

「あんだ達、霞に手を出したら許さないよ」

「私も。許さないから！」

さっきの勢いが嘘のように女々しく内股で震える地獄の軍団

二人が一步踏み出せば地獄の軍団はヒイツと悲鳴を上げる

悲しいの一言である

と、まるで虫とゆつか悲しい微生物を見るような目で見てると後ろ

からポンと肩を掴まれる

ゆっくり振りむぐユホ

首を掴まれ物凄い力で引きづられてというか地に足つかない速度で拉致られてる。まあ犯人は北の將軍様ではないから安心ですが加弥と洸夜が軍団を叩き潰す光景を眺めながら自分の命を少し心配した

そして連れてこられたのはちょっと離れた岩場で周りには人の気配は無い

まあなんでしょう。アイアンクローってこんなに痛いんだなもう悲鳴を上げる気力も沸きません

あ・・・俺がいる・・・なんだ、夕月が見えてきた・・・誰だろう後ろに立つてる人はグホッ

「起きなさい。寝るのはまだ早いわよ」

「なにか私に落ち度がございましたか？」

「お嬢様に御会いたみたいね？」

ちよつと力が緩んでくれました

「はい会いました。やったのは夕月です俺じゃありません」

「ちよつと夕月！お嬢様に何をしたの！何かなきゃあんなにあんたの事言わないわよ！」

肩を掴みガツクンガツクン揺らす深娜

「ひゝ怒らんで下さい。ワシは無罪です。やったのは夕月！」

さつきから夕月の野郎笑ってやがる！

「だから夕月！さつきと出て来なさい！何をしたの！」

「だから俺はか！す！み！！夕月は出てない！」

「ならさつきと出しなさい！」

「無茶言っな〜！」

20分経過

お互い肩で息をしながらその場に座っている  
結局俺が3発程殴られ俺は夕月に日本国憲法を説き夕月が失神して  
幕を閉じた

「はぁ・・・疲れた」

「こっちもよ。夕月をなんとかしなさい。お嬢様に迷惑をかけるわ  
左様で。怒らないよう努力します」

徐々に日は傾き海を朱に染め、潮風は深娜の髪を揺らす。何処か神  
秘的に見えるこの光景。会った時は想像することも出来なかった

「深娜も変わったな。良い意味で」

「何がよ」

「前より笑える様になったじゃんか」

「・・・ふん」

そっぽ向く深娜だが前なら確実に殴っただろう。皆のおかげで変わ  
ったんだな

「ま、笑った方が可愛いぞ。せめてあいつらの前ぐらい素直に笑っ  
とけ」

「うるさいわよ」

「素直でないのは相変わらずか」

「だからうるさいわよ」

二人は黙って海を眺めていた  
波の音、潮風。どれも心地よく暖かった

深娜は思った

二人でこうしてるのは悪くない。むしろ何故か心地よかった

懐かしい心地よさ

忘れていた記憶

笑う親

笑うあの方

懐かしい。そして苦しいから忘れていた

今思う。失うのは嫌だから

この心地よさを失うのは嫌だから

あの二人に霞は譲れない

それは深娜も気付いていない小さな小さな新しい気持ちだったのか  
もしれない

### 31・沖縄良い気分（浜と城と常夏の島）（後書き）

霞・・・作者、安らかに眠れ

夕　　つつく世話のかかる馬鹿だ

霞　にしても人気投票微妙ーな人数だな

夕　　ああ。合計五人はちよつとな

霞　皆様、作者に代わりまして、御無礼ながら細やかな協力をお願いします

夕　　せめて一位で10票位は欲しいからな

霞　これからも温かい感想や御協力を糧に日々頑張らせてもらいます。それでは

夕　　また何処かで

### 32・沖縄いい気分（迷子と子猫と彼女の告白）（前書き）

謝辞

ウドの太木「新年あけましておめでとうございます。年明けまで引っ張ってしまいまして本当に申し訳ありません。もしまだ忘れていなかったら読んでください」

野崎霞「新年あけましておめでとうございます。早々駄作者の奇文誠に申し訳ありません。しっかり粛清しますのでこれからよろしくお願い致します。それではどうぞ」



### 32・沖縄いい気分（迷子と子猫と彼女の告白）

水平線の彼方から昇る太陽。眩い光は大地に一日の始まりを告げるように輝きを注いでいく  
綺麗だ

言葉として口から放つのが無粋とすら思うこの光景に心中で呟く俺

野崎霞 17歳

地上85mのベランダより宙吊りされながら迎えた沖縄最初の朝日  
だった

無事慎により救出された俺はバイクキング形式の朝食を食べ、部屋で着替を済ませて三人に拉致されかけた  
実際既に拉致されてるんだろうが慎も一緒だから多分防いだ筈だ

どうせお買いものにも付き合わされるのかと思っていたが、意外な事に着いたのは街から離れた民家の並ぶ風情ある町

観光に適しているとは言いがたいのだがその独特の雰囲気は沖縄本来の物なのだろう

「霞、気に入った？」

こちらを覗き込む加弥。なんと云うか無意識に頭を撫でていた

「ああ、ナイスだ加弥」

嬉しさの余り抱きついて来たのはまあ見なかった事にしよう

「よし、早速ブラブラしようぜ」

慎は早速と言わんばかりに歩いていく。その進行方向にあるのは・

・・・女子校・・・

「セイヤアツ!!」

殴っておいた

ブラブラ歩いて早二時間

何故か知らんが加弥と洸夜の手には大量のお菓子が収まっている

「何この山？」

「おばちゃん達がくれたよ」

加弥はゴーヤチップを口に放り込み額に皺を寄せている

「霞君も食べる？」

そう言って差し出してくれたかりんとうを素直に貰い食べた。手作

りつて素晴らしい！そんな和やかな雰囲気を見つめる鋭い眼光

にやゝ

『！！！！！！』

こんな声を出す生物はこの世に一匹！

にやゝ

「ひっ！」

「ひい！」

加弥と洸夜は一瞬にして俺の後ろに隠れカタカタ震え出した

「ああああ悪魔だゝ！全身けむくじやらの悪魔だ！」

「いやだゝ。猫怖いゝ」

皆の周りに一人くらいはいなかっただろうか。何故か知らないのに猫とか犬とかに近付くと物凄い威嚇攻撃をされる人が

何もしてないのに近付いたらフウウーって毛を逆立てて構えられたりする人が

加弥と洸夜は典型的なそんな可哀想な人なのです。これでもかって言うぐらい嫌われてます

しかしその逆のタイプの人間がいるのは事実である。何故なら俺が

そうだからだ

「……………」

(じ〜〜〜〜)

にゃ

「……………」

(じ〜〜〜〜)

にゃ

「……………」

(じ〜〜〜〜)

にゃ

「にゃ〜」

ふらふらと猫の魔力の虜になり近付く俺を必死で押さえる加弥と洸夜。まるで恋人を引き留めようと必死になる乙女のようにしかし勝てなかった

俺は猫の頭を撫でたり喉をゴロゴロしたりお腹をわしゃわしゃしたり……………」

「可愛い〜〜」

もうめっちゃめっちゃ可愛いよ。何ていうか猫一匹で一週間楽に過ごせる位可愛いよ

そんなやりとりを遠くで悔しそうに眺める加弥と洸夜。行きたい、しかし近付くとキャッツアイがキラーンと輝いて見えるのです

「悪魔め〜〜！しこたま呪ってやる〜〜」

呪術の波動を手から放出し続ける加弥とそれに習って真似する洸夜。はたから見ればただ可愛い仕草だけである

すると今までの気持ち良さそうにゴロゴロしていた猫は何を思ったのか霞の膝に飛び乗りそこから肩へ、そして肩車のようになって霞

の頭の上に顔と前足を乗せている

「……可愛い」

深娜の小さな呟きに過剰に反応する呪術者二名。

「深娜ちゃん、まさかとは思うけど……猫LOVE?」

「割と好きよ。あの気ままな性格が」

「……深娜さん、まさかとは思うけど……触りたいの?」

「そうね。撫でたいわ」

そのまま猫の元に向かう深娜。それを瞬時に阻止しようと回り込むとする二人ぐ

にやゝゝ

『イヤゝゝゝ!』

無理だった

「おおゝ。はたから見れば仲の良すぎるカップルじゃないか」

あ、慎が捕まった。民家の裏に連れてかれて……

「ほよほよほよ。久しぶりの若者じゃよトメさん」

「そうじゃなくミさん。ありがとなお嬢ちゃん。こんな若い性を連れてきてくれて」

「ぎゃああああああああああアアアアアアアアアア……」

「あれは天罰だなチビ」

にゃ〜

すっかりフレンドリーでした

お昼に豚の角煮を食べ店内で大きな声で『このラフティ〜ウマ〜イ  
!』と叫んだ馬鹿をしこたま殴って店員の方に何回も謝った

そして現在

「か〜す〜み〜何処へ〜」

「霞く〜ん。ドコ〜」

「霞〜、暫く帰ってくるなぎゃらばはっ!」

三名迷子確定

事の発端は店を出てすぐ、頭の上のチビが高らかに可愛らしく鳴いたのが始まりだった。



「・・・・・・・・どうするの？」

深娜は足元の子猫を抱きかかえながら訪ねる

「あのアホに任せるしかあるまい。携帯だってあるんだ」

開いた携帯の隅には圏外

『・・・・・・・・』

どうしょ

迷子の迷子の三人はさつき駄菓子屋で買ったアイス片手にバス停に座っている

「ちよつと待つて、なんで二人のはキンキンに冷えたイチゴシャーベットで俺だけ若干沸騰気味なの？しかも渡されたのが箸！」

そんな問掛けに応えてくれる人はこの中にはいない。二人ともテンションガタ落ちだから仕方ないのです

「ふい〜〜霞〜〜」

「はあ〜〜霞く〜ん」

「アツアツ！ホットイチゴがアツアツ！」

誰も寄り付きませんでした  
一人を除いて



にゃゝ

「ん？どしたチビ  
にゃにゃゝ」

「いや・・・お空を飛びたいって言われてもさゝ」  
にゃんにゃゝにゃゝニユム

「なんだよニユムって、って一人ツツコミするなよ」  
「・・・あんた馬鹿？」

「酷いぞ深娜、冷たい視線で馬鹿って言っなんて」  
にゃゝにゃゝ！

駄菓子屋のベンチに腰掛けアイスを食べる二人。周りにはいまだに  
8匹の猫とチビが（頭の上から肩に移動）いる

「あいつら何処まで逃げたのやら」

「そうね。でも案外近くにいるかもね」  
のんびりアイスを食べる二人だった

「で？何が分かりました？」

加弥の目の前の小さな水晶に手をかざす男、見た目は40手前、無精髭に小さなお洒落眼鏡をした男は神妙に頷き

「なんとまあ・・・女難の相有りときたか」

男は笑いながら煙草に火を付ける

「なんと言つか、さつき占った子と同じ結果だね。相当モテモテなんだなその子は」

「笑い事じゃないですよ！なんとかならないんですか！」

加弥は近くにあったスタンドを掴み振りかかるが間一髪で慎が犠牲になった

「まあなんだろうね。チャンスは五分五分かな。いかにして霞君にアピールするか。その場のシチュエーションがだいじかもね」

「・・・？なんで霞の事知ってるの？」

「そりゃー可愛い愛娘からテレフォンがきたからね。京都の団子屋で働く裕米ちゃん裕々ちゃん。知ってるだろう？」

『えええ~~~~~!!!!!!』

「何そのあから様に年齢的にどうよみたいな視線！まだ39だよ俺！嫁は36だけど」

えええ~~~~~!!!!!!』

占い屋『流命』（りゅうめい）は久し振りに声だけで停電になった

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「可愛いわね」

にゃん

俺は非常に困っていた。ビックリするほど困っていた

何故襦袢さんがここに？

まちだれんすい

襦袢蓮翠。裕米さんと裕々さんの母親にして襦袢流居合術の生みの親でもある

「襦袢さん。どうしてこちらに？」

「ようちゃんと旅行中なの」

「ようちゃん？」

「ああ、深娜は知らないか。ようちゃんってのは襦袢さんの旦那さんで影月さん。占い師で結構当たるんだよ」

「そうだよ、ようちゃんに任せれば落としたコンタクトレンズからお菓子のシークレットおまけシールまで分かるんだから！」

えっへんと旦那を自慢する襦袢さん。相変わらずの旦那LOVEだ  
「それはそうと霞ちゃん。ちょっとお願いがあるな」

既に期待に満ちたその眼の輝きは純粹です。断れない

「お昼まだだから好み焼き作って。この店の台所使っていいみたいだから。材料も揃ってるしようござんすか？」

「ようござんすよ。断って前みたいにイモリの燻製とか送られたら困るし」

渋々お好み焼き作りが始まった

「・・・・・・・・・・」

にゃん

「かゝわい」

私に何をさせたいのよ

深娜は非常に困った。いくら霞の知り合いとはいえ面識のない人間

と会話するなど私には到底出来ない

にゃん

「にゃん」

眼の前に飛び出してきたチビ。そしてチビを抱える襦袢さん

「・・・なんでしょうか？」

「んん」。悩み有りと睨んだ！お姉さんが相談のるよ。女の秘密は絶対もらさないもん。男の秘密は公開するけどね」

「なら霞の秘密は？」

「えっつとね。去年旅館に来たときの寝言が『ネコ・・・何故あなたはマッシュルーム』だったかな」

意味不明ね

「それでその前が『その肉球で世界を落とせる。いけ70mm猫パンチ！』だったかな」

布団の中でそんな寝言を呟く霞を想像し

「・・・」

肩を震わせ笑いを必死に堪えた

「どお？なんなら更に前の年の寝言聞く？『猫一匹の命は慎7万人より遥かに上だ』だったね」

「ぷっ！」

不覚にも声が出てしまった。そんな私を下から覗き込みにっこり笑う襦袢さん

「どう？相談言う気になった？多分今深娜ちゃん自分の心境の変化に戸惑ってるんじゃない？今まで知らなかったモヤモヤに困ってるんじゃない？」

何故だろうか。何故私は襦袢さんが霞と同じく感じてしまうのだろうか。霞の前なら笑える。そして襦袢さんの前でも笑えた。分からない。分からないけどこの人は信用出来る気がする

何故聞かれても明確な答えは思い付かないけど・・・私はこの人になら相談出来る気がする

「・・・・・・・・・・！」

私は意を決して全てを話した

「さうてどうしたモノか。災い遮る物、時過ぎて遅しとでたが」

影月は眼の前で今にも泣きそうな顔の少女を眺める。霞君も鈍感過ぎだが彼女達も奥手過ぎたか

「霞盗られる、深娜ちゃんに盗られる」

頭を抱えイヤイヤと頭を振る加弥となんか凄い落ち込んで部屋の隅に行っちゃった洸夜

さてさてどうしたものか

「・・・・・・・・仕方ない」

影月は立ち上がり奥の部屋の棚から小さな気箱を二つ持ってきた

「お二人さん。ちよいこつち来なさい」

手招きして二人を椅子に座らせる

「この中には小さな貝殻が入ってる。いいか、今夜浜辺でもし霞君に会えたら渡すといい。君達の願いを聞いてくれるはずだ。但し霞君が同じ物を持っていたら願いは聞いてくれないからね。つまり自力でガンバみたいなの？」

「貰っていいんですかこの貝殻！」

「いいとも。俺はレディーにはスウィート並に優しいから」

「よく分からないけどありがとうございます！」

二人は慎を蹴って踏みながら走り去った

「もつと！もつと踏んで！もつと蹴って！」

影月は一応病院に電話した

「ふむふむ、なるほろね」

駄菓子屋にある酢ダコをモチユモチユ食べながら神妙に頷く襦袢さんは更に10円チヨコに手を伸ばす

「あれだね。多分恋じゃない？」

深娜はその一言に驚き否定した

「それは違いますよ！ただ霞が理解出来ないだけで恋とかそんなのじゃ」

突然口にチヨコを押し込まれた

「深娜ちゃん、否定の言葉を吐くのは簡単だけどその後も吐き続けなきゃいけないんだよ？それくらいなら何も言わないでいるのも一つの方法だよ？」

更にチヨコを押し込み口を塞ぐ

「それに分らないもんなんだよ。恋なんて自覚ない事が多いんだよ。私もそうだったし あははははっ」

笑いながら隣に伸びてる紐を引っ張る

ガチャーン

「ノオオオ！！皿がああああ！！」

にやああああムニイ

「さ、時間が延びたから話そうか」

深娜は少しこの人を疑うことにした

結局散々駄菓子を食べさせられ霞のお好み焼きを食べ店を後にした  
そして襦袢さんに勧められた店の裏の占い屋に足を運んだ

「って影月さん！何店放つらかしで沖繩きてるんすか！」

「おお霞君！超久しぶり！相変わらず女に不自由ないみたいだがぶらあが！」

近くにあったスタンドで殴っておいた

「痛いぞ霞君、武器は反則だぞ」

「黙れ。蓮翠さんとの結婚に反則技使った癖に」

「なんでそーゆー昔のネタ暴露するかなああああああ！！！」

泣きながら掴みかかる影月だがすぐに止めた

「まあいいや。来たんだし占ってやるよ」

あつさりと泣きやみ席に座る影月

「霞君、秘密厳守ついでにお茶を頼むよ」

「へいへい分かった。わざわざ薄くしてやる」

そう言つて奥に行つた

「さてさて深娜さんだったね。占いという名目の相談事やってるけど何かあるかい？恋とか分からない感情とかモヤモヤとか」

笑いながら影月は小さな氣箱を脇に置く

「……何か知ってるんですか？」

「占師は意外に物知りなんだよ。例えばさっき嫁とお話してるとかも」

そう言つて脇に置いておいた木箱を押し出す

「まあ無駄に色々言つても深く考えたり勘違いしたりするから簡単に言つよ。この箱の中身を持って夜に近くの海岸に行くと良い。但し時間は9時。そうすれば霞君に会えるから」

「なっ、なんでそんな事を！なんで霞に会わなきゃ」

しかし次の言葉は突き出された指で呑み込んだ

「誤魔化しや否定は本心を濁らせる。何も語らないのも一つの方法だよ」

笑つた影月は無理矢理箱を渡し席を立つ

「それじゃ俺は退散するよ。多分霞君の入れたお茶には毒物が入っ



てると思うから」

そう言つてさつさと店を出ていった

残された深娜は渡された木箱を開けてみた。中には小さな貝殻を繋げて作られたブレスレットが二つ

「・・・・・・なによこれ」

非常に困つた深娜は取り合えずしまつておいた

流石に8時の海岸は静かだ。裸足で歩く砂の上は昼間のような暖かさはなくヒンヤリと心地良い

月明かりに照らされて輝く波と潮の香り。空には星が輝いていた誰もいない海岸に腰を降ろし海を眺める。何もかも忘れる程に美しかった

「一人で眺めるのも悪くないな」

「あら、なら私は邪魔だったかしら？」

そんな独り言に答えが帰って来るとは思ってたなかった振り向く先には深娜が立っていた。白のワンピース姿は月明かりでいつも以上にとても綺麗に見える

「何でここに？」

「貴方も同じじゃない。外出時間は等に過ぎてるわよ」

「俺は心配ない。先生落としてるから」

「私はお嬢様に会って伝えてるから問題ないわ」

そう言って深娜は隣に腰掛ける。いつもある緊張という悩みがふつ切れたのか、心にゆとりが出来たのか

深娜の表情はいつもより柔らかい気がした

「あの夫婦に何か言われたのか？」

「別に。ただのお節介じみた助言よ」

「あの二人は京都随一の占師だからな。もう嫌ってほど情報筒抜けなんだよ」

「だから寝言も知ってるのね」

「……………なに？」

「……………深娜さん……………」

深娜は刻々と語りだした

三分経過

「出来るだけの事はしますので何卒内密にして頂けないでしょうか」  
その場で頭を下げ小さな希望に賭けてみた

「いいわよ」

案外あっさり承諾してくれたのがたまらなく嬉しかった

「本心を聞かせてもらうわ」

深娜の眼に強い光が宿っている

「私はお嬢様の為に今彼方の家に住んでるわ。ゼオンを見付けるまでの期間だけでも彼方は私を家族と言ってくれた」

俺は深娜の強い視線を見据える

「それは来週かもしれない。半年先かもしれない。来年かもしれない。いつあの家を出ていくか分からない様な状態の私を今まで通り家族と言ってくれる？」

深娜はやはり俺の目を見続ける。強い意思の中に不安を隠すように問掛けてくる

「彼方は最後まで私を家族と言ってくれる？」

「バカか」

俺は素早く深娜にデコピンをかましてやった

「いたっ」

「わざわざ聞かなくてもいいだろ。むしろ何も言わないで出てくような真似したらひっぱたいてでも連れ戻してやる。でもってこつてり説教してやるよ。礼儀の知らない家族を叱る為にな」

忍笑いの後視線を海に向ける

「いつまで居ようがいつ出ていこうが関係ない。お前は俺の家族の一員だ。変な心配はするなよ」

深娜の表情は分らない

「霞……」

長い沈黙の後、深娜は口を開いた。それは自分の心に偽り無く、そして自分の心の中を精一杯に表現した

「いつまでか分からないけど・・・彼方の隣にいてもいいの？」

「いいさ。咎める理由も無いし。それに家族がいなきゃなんか寂しいだろ。少しは信頼しろよ」

「・・・うん」

目を閉じ深娜は思う

私はまだ霞を信じきれていなかった。こんなに私を信じている人を信じきれていなかった。あの人の様にいつまでも優しく、いつも厳しくあつたあの人の様に

私はまだ霞を信じきれていなかった

「霞・・・これ」

それは影月さんがくれた二つのブレスレットの一つ

「・・・今日なんかあつたっけ？」

「いいの。ただのプレゼントだから」

深娜は半場強制的に渡しそっぽ向いた

そんな今までで一番深娜の可愛らしい奇行に思わず笑みが溢れる

腕に付けたブレスレットは月夜に反射し輝く

「ありがと。大切にするぞ。どうせ影月さんの事だから同じのあるんだろ？」

深娜の腕には同じものが輝いている

「ははっ、やっぱりな」

深娜は恥ずかしそうに手でブレスレットを隠し頬を朱に染める

「なら俺からもちよつと早めの旅行プレゼント」

それは影月さんに言われてお茶を入れた時テーブルの上に手紙と一緒に置いてあった物

珊瑚を削り羽を型どったシンプルなネックレス

手紙には『夜の浜辺で最初に会った女性にあげるといい』とだけ書いていた

「ほれ、付けてやるからちよつと後ろ向け」

素直に従う深娜の首にそつとネックレスを着ける

深娜は恥ずかしながらもその姿を見せてくれた

「ホントに似合うな。浴衣姿も良かったけどやっぱり綺麗だなお前は笑いながら素直な感想を言った俺だが深娜は少しムスツとした感じで睨んでくる

え？俺地雷踏んだ？

すると深娜は少し強めに体を預けてきた。左腕にショルダータックルは効いた

「・・・深娜さん？」

「少しこのままでいて。疲れたから少し休ませて」

「・・・あいよ」

月明かりと波の音だけが。相変わらず変わりなかった

「そう言えばお揃いのブレスレットなんて恋人みたいだな」

笑いながら軽く放った言葉に物凄く敏感に反応した深娜は恐ろしい速さで掴み掛りガツクンガツクン振り回し

「違うからね！そんなじゃないんだからね！」

「わわわ分かってる！そんなムキになるな！」

月夜の浜辺で小さな取っ組み合い（一方的）が始まった

そんな光景を眺めているのは勿論加弥と洸夜である

「はあああああああああ！何あのラブラブ感！何であんなにロマンチックなのよ〜」

「深娜さん酷いよ！やっぱり霞君好きなんだよ〜」

双眼鏡を使う加弥

「って言うか霞の腕のやつ私達が貰ったのと同じじゃない？」

双眼鏡を借りて洸夜も拝見

「本当だ！影月さんがくれたのと同じだ！」

二人は心の中で叫んだ

『影月さんのバカアアアアアアアアアアアアアアアア』

ゾクッ

「どうしたのようちゃん？」

「いや、分かつてて聞くつて酷くない？」

占い屋命流の居間にて一組の夫婦は寄り添うように座っている

「深娜ちゃんホント純情だね」

「そうだね。昔の蓮翠さんと同じくらい」

「そんな純情な私に夜這いかけた挙げ句出来ちゃったで駆け落ちなんてしたのは誰だったかな」

「酷いぞ蓮翠さん！何事も無いようにサラッと言わないでよ！あの頃僕は若かったの！」

「まあいいじゃない。それより強引に話変えていい？」

「いいよ」

「あれつて良かったと思う？」

「それは分からないよ。分かるのは深娜ちゃん本人だけだ。最もそう感じるのはまだ先の話だけだね」

「彼女は余りにも運が無さすぎたわ。彼女の未来には大きな虚空しか見えない」

「それでも彼女は必死に生きなきゃいけないんだよ。あらゆる負を背負わなきゃいけないんだよ」

「それでも彼女は決して認めはしないだろうね。己の心のままに意地になって逆らうしか選ばないでしょうね」

「たがら彼女は強いんだろう。誰にも譲れないモノを心に秘めているんだから」

「それが誰も望まないモノであつてもね。可哀想だよ。なんで深娜ちゃんがこんな未来を背負わなきゃいけないんだろ」

「それが彼女の未来だからさ。それに彼女の隣には霞君が立っているよ。同じくらいの負を背負っている霞君がね。最も霞君は既に背負つて歩き出してるんだけどね。耐えられるかな？」

「そりゃー愛娘が認めるカスミンだよ。うまーく乗り越えるよ」

「うわっ、夫として軽く嫉妬心全開！呪つてやろつかな霞君」

「そうなたらこの書類に判子ね」

「さあ愛しい妻、今夜もイチャイチャしようじゃないか。愛娘に力  
ワイイ弟妹が出来てもご愛敬で許してもらおう」

「きやつ 軽くセクハラ言ってる狼ようちゃん。捌いちゃうよ」

にゃ〜ん

「おうチカちゃん（本名、近松文座えもん。雄猫）ナイスタイミン  
グ！ご苦労様。猫の誘導ありがとね」

にゃ〜にゃ〜

「うんうん。偉い偉いしてあげるよ（なでなで）」  
にゃ〜

「チカちゃんもやつぱ心配か？」

にゃにゃにゃ〜

「はいはい。そんな事より晩御飯だもんね。ミルク持ってくるから  
待っててね〜」

「なあチカちゃん、あの二人は乗り越えられるかな？」  
にゃ〜

「そうだね。今見える未来は所詮台本の一部だもんね。アクション  
トはいっ起こるか分からないもんね」

にゃにゃ

「はいはい蓮翠さんにもしっかり言っておくよ」



「それにしても……深娜君は9時の予定をやっぱり8時に行くとはね。やっぱり好きなのかな霞君の事が」

シャー……！

「ノオオオオオオチカちゃん！まさかのシャイニングウィザード！！蓮翠さん早くミルク下さーい」

「チカちゃんミルクだよー」  
にゃー

「霞ーその腕のやつどこで買った？」

「ん？これか？多分特注だぞ」

「んー沖縄で新しい愛人とは貴様もなかなか強くなったな」

月夜に照らされとある一室にて、今まさに惨殺ショーの開幕の鐘が鳴った

ぐぼっ！ツガッ！ギユッフ！ブゴッ！霞！止めちゃってくれへんか！  
だーめ

ギャー！マサかの人格変化！

### 32・沖縄いい気分（迷子と子猫と彼女の告白）（後書き）

霞 いかがでしたか？楽しんで頂けたら幸いです

作 それでは今年も皆様が良い年でありますことをキャー同願っております

霞 それでは今年も

一同

『よろしく願います！っぴ』

典時 こらああノイン！なんだ最後の『っぴ』ってのはああああ！  
ノイン ヒイヒイ！典時が怒った〜

### 33・沖縄良い気分（夢と理想と彼女の想い）（前書き）

霞 あ、お久しぶりです。皆さんお元気ですか？

慎 ホントに久しぶりだな。何やってんだ作者

霞 なんか危険物の封印を解除したらしいぞ

慎 危険物？

霞 ・・・・精霊

慎 うわぁ・・・

?? 緊急速報！緊急速報！緊急ソクホオオオオオオオオオ？

### 33・沖縄良い気分（夢と理想と彼女の想い）

修学旅行も今日でおしまい。朝食を済ませるなり海に飛び出して行った

慎他男子は何やら綿密な計画を実施するらしく最終確認を隅っこで話し合っている。よからぬ事が有れば即私刑にするつもりだ

「……全員顔から体までシーサーの似顔絵ペイントしてやる。色は敢えてピンクで」

パラソルの下、イスにゆつたりと腰掛けながらジュースに手を伸ばす「かゝすゝみ」。早く泳ごーよ！」

後ろから顔を出すのは相変わらず可愛らしい水着の加弥。ただし今回は浮き輪（8の字の二人用）持参。ホテルの貸し出しのを持ってきたんだろ

「加弥、ちよつと待っててくれないか？あの馬鹿共が何かやらかす気がするんだ」

「ふゝん。まあいいよ。隣いいよね？」

了解する間もなく素早く座りジュースに手を伸ばす

「って加弥！それ俺の！俺のメロンサワー」

「あれ？ゴメン霞、ちよつと飲んじやった」

手を会わせて謝る加弥だが何処となく幸せそうな顔だ

まあ別にいいとして、ちよつと加弥に飲まれたメロンサワーに手を伸ばそうとすると……

カチャーン！

伸ばした手の先にある筈のコップは見事に粉々になり、メロンサワーは大地の栄養として瞬時に吸収された

「あら、ごめんね霞、ちよと石を蹴っちゃったみたい」

振り向く先にはまるで豪速球を放った後の様な格好の深娜と私は何も見てないよ的な感じで海を見る洗夜が立っていた

「深娜、俺の楽しみを返せ。今すぐ」

「霞、細かい事を何時までも引くずる男はみつともないわよ」

「はっはっは、なら君は女々しいと言うか嫉妬心全開の乙女じゃないか。間接キスがそんなに嫌だったか？」

「彼方のその捻れて歪んだ心の方が百倍嫌だわ。今すぐ海底探索に連れてくわよ。潜水艦代りにドラム缶の生コン詰めで」

「そうかそうか。その時は学校中にお前の笑顔を咲き乱れさせてやる。楽しみにするがいい」

二人の乾いた笑みが響く。監視員やクラスメートから、加弥、洸夜に至るまで誰一人視線を合わせていない

「……まあそれ位にして、コップ代は流石にホテルに出しとけよ」

「お金の出る場所は同じだしいいじゃない」

「まあそうだけどさ、俺そろそろ新しいパソコン買うから無駄に金を出したく無いわけよ」

「まったく、ワガママよそれ」

「お前にだけは言われたくないな」

苦笑いの後深娜に席を盗られて砂浜に腰を降ろす

深娜曰く、『日光はお肌の敵なのよ』だそうだ。随分女の子らしい考えじゃないか

等と歳寄り思考になつて俺の隣に腰掛けたのは洸夜だ

「霞君、なんで泳がないの？」

「いやね、なんか嫌な予感がしたもんで……」

すると何処かで聴いた事のある曲と共に、海パン野郎達がノリノリで走ってくる。そして最初に付いた順にリズムに合わせて踊っていく。一緒乱れぬ踊りは中々見事である。そして最後の海パン野郎慎が到着して皆がその場で華麗に回りキメポーズ。これは……もしか！

『ウォーター坊、s!!』

危な！今すっごい危ない橋を渡ったぞ

流れてくる南風にノリながら軽やかに踊るウォーター坊、s

あの馬鹿共もここまで来れば見事としか言いようがないな

静かに曲の音色が消え、ウォーター坊、sはゴーグルを装着し深く息を吸う

「Are you read？」

『YES!』

あの直訳『指五本』の名曲と共にウォーター坊、sは浜辺の観客を巻き込んだパフォーマン스에突入した  
皆もノリノリで指五本の名曲を熱唱です

海面に潜ったシンクロ野郎は高々と宙に翔び満面のスマイルを送ります。いつもは単純にフェチキモイ慎やその愉快的仲間達も今はスポーツマンでありこの修学旅行に想い出のページを刻む英雄なのです

息の合ったパフォーマンスもいよいよ終盤。なんと彼等は5段楼を組み立てる気なのです。難易度の高い楼を海で行うのは無謀とは思えない。しかし彼等ならきつと……そんな気持ちの観客達は固唾を飲んで見守っています

『せーのっ!』

一段目がゆっくり海面から浮上し、周りがサポートに付く。二段、三段と立ち上がり、四段目が立ち上がった

観客達も歓声を上げる。そして最後の一段。そこに立ったのは

「山下!？」

憤ではありません!何故余り目立つことしない山下が?  
すると山下は大きな声で叫んだ

「2のAの由香里さん!僕は彼方が好きです!付き合ってください  
!!」

うわっ!まさかの展開。って言うかテレビでもこんなんあったよな?  
皆の視線は由香里さんに注がれます

突然の告白に戸惑う由香里さんだが意を決して叫んだ

「喜んで〜!」

周りは拍手喝采です。俺もつい拍手をしてしまった

楼組のウォーター坊'sも叫びます

「裏切ったな山下!」

「振られると思ってたに・・・裏切り者!」

「貴様には死すら生温いぞ!」

あれ?何この展開?

二段目の二人は山下を引きずり降ろし、両サイドから首に手を回し  
脇の下に頭を入れる。そして腹筋に力を入れ

『ダブルブレンバスター!!』

「ギヤアアアアア」

背中から落下した山下に追い撃ちを掛ける様に三段目が空から降っ  
てきて次々と山下の上に降下していく

止めとばかりに四段目は山下を担ぎ上げ、浜目掛けて射出した

浜に着弾して虫の息状態の山下に駆け寄る由香里さん

「大丈夫!山下君」

山下もギリギリで頷いている

由香里さんは海から歩いてくるウォーター坊'sを睨んでいる。そりゃー出来たばかりの彼氏があんな目になれば誰でもそうだろうしかしウォーター坊'sは気にする事なく背を向ける。誰一人何も語らず歩きだした

しかし彼等のゴーグルの中は溢れる涙で一杯だ。皆山下の勇気を称え、彼の幸せを心から祝福していた

うわー。なんか凄い良い展開。彼奴等もやれば出来るじゃないか。そんな良い光景を写真に納めていると憤が歩いてくる

「どうだったよ？俺等の演技」

「素直に凄いぞ。よくやった」

「ふっふっふっ、密かな練習が実を結んだのだよ。夜中にプールに侵入した甲斐がある」

胸を張る憤、そんな憤を見てふと違和感を感じた

なんだろうこのゴーグル、なんか変だな。なんと言うか……少しでかくない？

俺は当たり前の様に軽く語りかけた

「どうだゴーグルのカメラの具合いは？」

「中々性能が良くてね。後の現像が楽しみ　　っはー！」

「そうか、やはり貴様等は落ちる所まで落ちていたのか」

ゆっくり立ち上がり、監視員さんの所に行く。そして痴漢撃退用アサルトライフル（無論模擬弾）をしっかりと握りカシャン！とスライドさせる

「他の女子ならまだ許したかもな。しかしあの三人を撮るのは極刑に値する。と言うわけで悶絶して死ね」

問答無用で引金を引いた



物凄い早さで次々とクラスの皆を倒していく霞君。前より物理的制裁の割合が多くなったと思う

最近夕月さんみたいになつてきてるから心配だな

「でもあの三人って事は私の事もちゃんと考えてくれてるんだ」

思わず漏れてしまった言葉に焦った。しかし二人は気付いていないみたいだ

そうこうしている内に霞君が帰ってきた。男子の皆は浜辺に打ち上げられた昆布みたいに力なく波任せに揺れている。大丈夫かなと思つたけど霞君の事だから手加減してるよね

「ったくお前等。盗撮するのはいい加減止めろ。素直に交渉すりゃいいだろうが」

エアガンを返してきた霞君は私の隣に腰掛ける

「まったく。いつになったら犯罪から足を洗うのやら」

「そ、そうだね」

急な振りになんとか答えれた。視線だけを向けて霞君を見る

女の子みたいなスベスベしてそうな肌に細いけどしっかりした体つき。かつこいいな。っていつ見ても思う

霞君は浜の昆布さん達に向かって話しかける

「別に撮影許可が取れたら写真撮ってもいいんだぞ。そんな時は邪魔する気はね。し。本人の意思なんだしよ」

その瞬間昆布・sはいきなり飛び起きて何処からともなく現れた力メラ片手に走ってくる。血走る目が怖い

昆布・s改めクラスの男子は三つのグループになって私と加弥ちゃん、大川さんの所に走ってくる

『加弥さん！撮影許可をお願いします！』

「うん……駄目かな？」

『大川さん！撮影許可  
消えなさい』

大川さん相変わらず厳しいね。霞君の前と全然違うや

そんな事を考えていると私の前にクラスの男子が二列に並んで直立で立っている

『先塚さん！撮影許可をお願いします！』

「ええ！えつと・・・その・・・少しなら」

『よつしやあああああああ！！』

すると目の前の男子は物凄くはしゃいでいる。そして目にも止まらぬ速さでカメラを構えると次々とシャッターを切っていく

は、恥ずかしいよ！

「あの、ちよつと立って貰っていいですか？ついでに膝を少し、こう・・・気持ち内側に」

「ええ！その・・・こうですか？」

「スライディングフラッシュ！！」

下から見上げる様な角度から次々とシャッターを切っていく

「ひゃあつ！」

思わず手で隠そうと身を捻った瞬間

「ナイスアングル！フライングフラッシュ！！！」

空高く跳び跳ねてバズーカ砲みたいなカメラでシャッターを切られた。若干前屈みになったのが仇になったみたい

「ひえええ！」

直ぐに胸本を隠ししやがみ込み。すると背後に砂浜きを上げて滑り込む音がする

しまった！と思った瞬間骨と鉄を見事にぶつける音が響く

ゆっくり振り向けば笑顔の霞君が立っている。霞君の踵はカメラを砕き、高下君の顔を遠慮なく踏んでいた

「お前等、加減も分からのか？分からないんだな？そうなんだな

？」

踵をグリヨツと捻り高下君に一撃浴びせた後ゆっくり私の前に立つ

「取り合えず……………死ね？」

視界は闇に染まった

ゆっくりと目を開ける。そこには夕月の視線であの馬鹿共を血祭りにするようなドキドキ惨殺ショーではなく、俺が立っていた

髪も、顔も、服装も。全てが同じ俺が立っている。直感でそれが夕月だと分かった

「夕月だな」

「初めてだな。顔合わせは」

笑う夕月はその場に腰を降ろし俺に座る様指示する

鏡に話しかける訳でもなく、全くの他人に話しかける訳でもない

俺と俺の中の夕月の会話だ

「なあ霞、俺が前言った事覚えてつか？もう一人の人格」

「ああ。あの後確認出来た。かなり情報が少なかったがな」

「そうか……………」

夕月は視線を反らし上を見る。周りは何も無い只の虚空が広がっている

「なあ霞、お前は俺がどんな存在に見える？」

「どんな存在？・・・いきなりな質問だな。単純に考えれば多重人格、つまり元は俺だ」

「多重人格ね・・・ぶつちゃけ全然違う。そんな都合のいい存在じゃねーよ」

視線を戻し俺を見据える

「今話せるのは三つ、一つは俺ともう一人の存在は居るかどうかも分からない神の侮辱。二つ目はこの先お前は必ず壁にぶつかる。とんでもない壁に。三つ目は・・・」

夕月は立ち上がると方膝を地に付け頭を下げる

「俺ともう一人は彼方を守る存在であること」

「・・・等々頭がオカシクなったか？可哀想に」

「うわっ！別の角度からエグッたな！」

「だって急な敬語がキモいし。ついでになんでお前がそんな事を知っている？」

頭をかく夕月はいつも通りの口調で

「んー、実はな、お前には今からもう一人に会ってもらう。そいつは全部知ってる。俺の事もお前の事も。そいつに全部聞け」

夕月は立ち上がり、背を向ける

「表は任せろ。お前は全てを知ってこい」

視界が又闇に染まった

広がる視界が、海と青空と雑魚と人魚姫

「霞の野郎も楽しい世界をエンジョイしてんな。ったく」

小さく笑うと雑魚共に向かって歩きだす

「我が主に害なす輩よ。一度しか言わぬからその心に刻め。そして生きていれば広めるがいい。我は太陽と月が交わる一時の存在。故に我は加減を知らぬ。短き時を快楽に染め、短き時が知らぬ間に過ぎ去るその時まで、我は我の主の意思のままに働こう」

夕月の黒い瞳は一瞬だけ真紅に染まる

「我が名は夕月。存在もせぬ神の領域に土足で踏み込んだ無知なる愚者にして、霞の進む道に付き従う片割れだ」

予告もなしに近くの雑魚を蹴り飛ばす。三回ほど水切りをして海に沈んでいく。周りの連中は何が起きたのかさっぱり分かっていない。つまり

「今のお前等は俺以上の無知だ」

さあ、ドキドキ惨殺ショーの始まりだ

結局1分で終わったドキドキ惨殺ショー。海岸には打ち上げられた瀕死のほ乳類が転がっている。まあ無視しよう

さてお次は

「あの、夕月さんですよね？」

振り向いた俺は愕然とした。こう・・・なんと言つか・・・スク水がここまで凄いとは

「こう・・・心の下辺りから・・・グツと何かが持ち上がってくるね」

「なんかいきなりアップ入ってませんか夕月さん？」

「心配しなくていい。現実を受け入れるのに時間が掛っただけだ」

「あの・・・さも当たり前の様に足下に寝て見上げるの止めてくれませんか？」

「ふっ、ここは俺の特等席だ」

言い終わると同時に七色のパラソルが真横に突き刺さる

冷や汗を流しながら視線をズラすとパラソルの柄を確り握った深娜が殺意の眼差しを向けている

「夕月、早速死にたいみたいね。動かなかったら楽に逝けるわよ」

「深娜ちゃん、ビキニのキワドイ食い込みが堪らないね」

瞬間的に砂を巻きあげ突き刺さったパラソルを振り上げる

俺はパラソルに手を添え力を抜き、パラソルの力に任せて回転し着地する

直ぐに振り上げられたパラソルは軌道を変え上段から下段、そこから体を回転させ力を乗せた横薙の一閃を放つ深娜

しかし全て紙一重で避け距離を取る

「悪いな深娜ちゃん、今俺は俺自身を自覚しちまったんだ。だから負ける訳にはいかなかったんだよ。悪いな」

縮地で深娜の懷に滑り込み軽く押してやる。そのまま深娜は綺麗な弧を描き海に落ちた

「改めて言う。悪いな深娜ちゃん」

さてお次は加弥っちの番か。まあ軽く飛んでもらうか

「ゆ、夕月さん」

一歩後退する加弥に合わせて一歩前進する俺

「大丈夫。痛くない。痛くはないから。多分」

そう言つて深娜同様に軽く押して弧を描き海に落ちた加弥うんうん。多分次会ったら霞殺されるな

苦笑いの後最後の一人、コウちゃんに近付く

「ひiiiiい！」

怯えるコウちゃんは尻餅をつきながら後ろへと逃げていく。低いアングルから覗きたいのだが今は我慢だ

「コウちゃんコウちゃん。ちょっと待った」

簡単に捕まったコウちゃんを軽々と起こし猛スピードで泳いでくる二人に聞こえないように

「今すぐ着替えて二階ロビーに来てくれるかい？ちょっとデートついでにお話したくて」

「で！デート！」

確実にあの二人に聞こえる大声で叫ぶコウちゃん

あ、二人の動きが止まった

「え〜っと・・・早くしないと捕まるよ？」

先程の3倍近い速さで進行する二人に悲鳴を上げたコウちゃんは早足に更衣室に逃げた

そして俺は二人に見事に捕まった

「夕月、もう終りよ」

「夕月さん。一回でいいから死んで」

「二人共いきなりセメント発言だね。第一お誘いは俺の自由だ」

グツと怯む二人だが直ぐに開き直った

「そんなのどうでもいい！今はなんでコウちゃんを誘ったか聞いているの！」

「いや、加弥つちよりグラマーだし」

「ガ〜ン！！」

崩れ落ちた加弥は砂浜でふてくされながら泣いている

「それに深娜ちゃんよりガードが硬くないからちよつと頼めば色々遊べそうだし。こう・・・」

虚空に手を伸ばし何かを揉む手付きになる

「なっ・・・ゆ、夕月！いい加減にきなさい！」

「はっはっは！己のガードの硬さを悔いるがいい。サラバ！」

身を捻り素早く深娜ちゃんのサイドを抜けて男子更衣室に逃げる

楽しみはこれからだ

今はブラブラと商店街を歩いている。コウちゃんは制服だが俺は私服だ。霞はちいと無頓着過ぎるから俺の気分でさっき買った。金の方はお嬢から毎月振り込まれているのを使った。まったく、毎月10万以上入ってんだから使えよな

「さあコウちゃん、どつかのんびり話そうか」

「はい！え〜と〜」

辺りをキョロキョロと探索するコウちゃんは焦りながら一軒の店を指差す

「『喫茶店・de・やんす』勝負に出た店だな」

とまあ中に入って注文を済ませた俺等だがコウちゃんは下を向いて黙んまりで頬を赤らめている

「コウちゃん、どした？さっきから黙って」

「はっ、はひっ！その……」

う〜ん。どうしたもんか

「もしかして初デートだったかな？」

勢いよく顔を上げ何かを言おうと口をパクパクさせるが結局何も出てこないためやっぱ黙った



「ふー。コウちゃんは何で誘われたか分かる？」

「え？それは・・・何でなの？」

「霞っぱく言うけど質問に質問で返すのは無料というものだぞ」

「あう・・・。えっと、二人より選びやすかったから？」

「まったくもって不正解。罰として今から言う事に全てYes o

r Noで応える様に」

「・・・はい」

マンゴーパフェと抹茶アイスがつつきながら始まった

「自分はあるの二人より可愛いと思うかい？」

「・・・Noです」

「自分よりあの二人の方が霞と釣り合うと思うかい？」

「・・・Yes」

「自分では霞の隣に立てないと思うかい？」

「・・・Yes」

コウちゃんの声は徐々に低くなり視線も下がっていく

「自分より加弥っちは可愛いと思う」

「・・・Yes」

「自分より深娜ちゃんは綺麗だと思う」

「・・・Yes」

「友を失う位なら自分から身を引いた方がいいと思ってる」

「・・・Yes」

「自惚れるな！」

他の客を無視してテーブルを力任せに叩いた

テーブルには拳を中心に輝が入るが気にしない

「先塚洸夜、お前は怎樣だ？何故お前は確かめもせぬ仮定を鵜呑みにするのだ？」

押し黙る洸夜は震えながら下を見る。

ただ同じ言葉をひたすら呟いていた

はい・・・と

「お前の友はこの程度の事で仲間を切り捨てる様な奴か？この程度の事で嫌う仲間か？」

洸夜は何も喋らない。ただ下を見続ける

「先塚洸夜、お前が抜け駆けしてあの二人はお前を嫌ったか？避けたか？答える先塚洸夜」

洸夜は何も喋らない。ただ下を見続ける

「なあ洸夜。霞は皆の事が好きだ。いつも一緒に笑っていられる仲間が大好きだ。その霞が見誤るとでも思うか？小さな薄っぺらの友情に気付かないとでも思うか？そんな奴霞は友と認めねーよ。彼奴はいつまでも変わらぬこの仲間が大好きなんだよ」

俺はゆっくり立ち上がり洸夜の隣に腰掛ける

洸夜は震えながら下を見続けている

「自分の価値を自分で決めるな。自分の行いに自信と誇りを持て。洸夜、お前は加弥よりも深娜よりもいい女だ。俺が保証してやる。だからよ」

俺は震える洸夜をそつと抱き締めた

「泣くな。自分の信じた道進むのに遠慮なんかするな。どんな結果であれ仲間なら最後には笑って迎えてくれるんだからよ。最後まで泣かずに歩け。仲間信じて歩け」

洸夜は声を殺し泣いていた。俺は時折震える体をなだめる様に背を叩きながら洸夜の気が済むまで泣かせた。

周りの連中は物珍しい視線を送ってくるので笑顔を送り返した。「物音一つ出してみる。生きてる事を後悔させる」と言う無言のセリフ付きで

それからコウちゃんは暫く泣いた。そして泣き終えたコウちゃん今は元氣になっている。元氣にマンゴーパフェの桜ん坊の奪い合いをする程元氣になった

ぶつかり合うスプーンと重なり合う金属音

宙に舞う桜ん坊はテーブルに落ちる事なく弾かれ続けている

「くのっ！くれ！チェリーくれ！」

「駄目です！私も好きなんですから！えいっ！」

桜ん坊は見事に洗夜のスプーンに収まり口に運ばれる

「ああ！チェリー！チェリー！ちえりiiiiiiii！くっ、コウちゃんのケチ！」

「私の桜ん坊を勝手に奪おうとしたのに逆ギレですか！」

段々と白熱した口論になっていくが二人ともその事を楽しんでいた

そろそろホテルに戻る時間になり、二人はホテルに向かって歩いている

「なあコウちゃん、コウちゃんはこれからどうすんだ？」

「……闘います。正々堂々闘います。遠慮もしません」

「よしよく言った。それでこそコウちゃんだ。そんなナイスガールに俺からの必勝方を伝授しよう」

俺は耳元で囁いた

「ほっぺにチユウ位しとかないと今までの差を縮められないからな」「ち、ちちちゅう！」

余りの爆弾発言にコウちゃんは叫びました。ここは人通りの激しい大通りであることを忘れているみたいです

おお快なり！！

「コウちゃん、何奇言を声高らかに叫んでるんだい？ストレスが溜ってるのかな？なら一緒に叫ぼう『おお快なり！』と」

「夕月さん！彼方にだけは言われたくないです！何ですほっぺにチユウって！」

「コウちゃん声を荒げるな。そして叫ぶな。出来れば声を低く。ここは人通りだよ」

「はうつ、でも、いきなり何言うんですか！」

「いやな、そろそろ霞が起きるから。伝える事つたえとかないたさ。それに………後」

洸夜は物凄く嫌な予感がした。今までの感じなかったが今背中に鋭い刃物みたいな視線を感じる

振り向いちやダメ。ダメなんです。だけと振り向いてしまう

ゆっくりとぎこちなく、まるで錆びた機械のように振り向いた先には………いた

涙が出そうな程恐かった。と言うかちよつと泣いてた

「やっぱマジギレしてるか。まあ後は霞に任せっからいいか」

ゆっくりと近付く二人を横目にコウちゃんにだけ聞こえる声で囁いた

「最後の助言だ。本当は規約違反なんだが・・・霞が初恋も無いって言ってたろ？」

恐怖に震えながらなんとか応える

「言ってたよ。遅咲きの原で、それがどうかしたのってうわぁ！目が合った」

「あれは嘘だ」

「・・・え」

コウちゃんは恐怖を忘れ振り向く

「それって・・・どうゆう事？」

「彼奴は一回だけあるんだよ。忘れる事を誓い、記憶に縛りつける事を望んだ矛盾の恋をな。と言っても危ない恋じゃないからな」

笑った後でふと頭の中で何かが響いた

どうやら俺の時間が降りらしい。霞も全部知った事だし引込むとするか

俺は残り少ない時間でコウちゃんに顔を近付ける

「それじゃそろそろ引込む。しっかり霞を捕まえるよ」

そう言って頬にキスをする

固まるコウちゃんを横目にやり過ぎたかなと思いながら俺は静かに目を閉じた

ん？

「あれ？洗夜どうした」

「・・・」

ゆっくりと体か傾き・・・そのまま・・・

「つと危な。しっかりしろ洸夜。どうしたゝ風邪か？顔真っ赤だぞ」  
しかし洸夜は全く反応がない。そして何やら後から殺気が近付いている。まあ夕月が全部悪いだろうな

洸夜を支えながら立ち上がる。振り向けば加弥は何故か京都で買った『Made in Japan』の彫刻入りのヌンチャクを片手に走ってくる。深娜は加弥が買った『日本古来の伝統！鎖鎌』等と間違った文化を紹介してる店で買ったやつを借りている。用途正しく使うみたいだ

「夕月さんのバアカアアア！」

寸分の狂いもなく飛来するヌンチャクと鎖鎌

どうしたものか。まあ洸夜もいることだし避けよう。まだ制約行使には時間があるはずだ

自分の頭の中。根本に存在する存在。そいつに語りかける

「すまん。少し頼む」

「うん。今回は多目に見てあげる。だから時間は10秒ね」

「恩に着る」

その瞬間全てを理解する

左からくる鎖鎌を右に少しだけ動き難無く避ける

通り過ぎた鎖に腕を軽く当てる。鎖はそこから湾曲して首に当たり、弧を描いて右側を通過する

そのまま加弥が振り回していたヌンチャクに丁度よく当たりヌンチャクは軽い音と共に空を飛ぶ

クルクルと回るヌンチャクは深娜の持つ鎖に当たり深娜は鎖を手放す  
「タイムアップ。時間切れだよ」

「助かった。制約は予定通りで結構だ」

「はい。後で皆に紹介して下さいね」

「分かった。それじゃ」

「はい。それではまた。あ、夕月さん。何で逃げる気なんですか？

まだノルマ達成してませんよ。早くぴかちユウの鳴き声のモノマネ残り80回してください」

「イヤダアアアア！もうイヤダアアアア」

「まだまだこれからですよ。次は一人でスゴロクですよ。勿論コマも一つで20回連続。それから意味もなく全身タイツでエアロビ5時間ですよ」

「かすみいいい。助けてくれええええ」

「………ついでに意味もなくも熱唱してもらえ。曲名は『会津磐梯山』でどうだ」

「いいね。それじゃそれも追加ね」

「鬼かああああああああああ」

無視しよう。後は雫の仕事だ

頭の中から聴こえる夕月の絶叫を封印していると横っ面を力一杯につねられた

「あだだだだだだ！痛い痛い、早く離して！」

「黙りなさい夕月。今日こそ消してやるわ」

「観念して成仏しなさい、オリヤ！」

ボディーに三発くらい膝を叩き込まれ前屈みになった無防備な顎に綺麗なアッパーが入る。冴夜を残して宙を舞う俺は漫画の様に頭からズシャアと落ちた

ピクリとも動かない事に疑問を持った深娜は一応聞いてみた

「もしかして霞？」

「普通……殴る前に聞くだろ」

「……連帯責任よ」

「さいですか」

ゆっくり起き上がり顎を擦る。まあ大丈夫だろう。引っくり返っている冴夜は直ぐに目を覚まし、俺を見るなり真っ赤になって頬を押さえながら口をパクパクさせている

「ゆ、ゆゆゆ夕月さん何するんですか急に！するなら一言言ってお下さいよ！心の準備が必要なんですよ！」

「ああ、すまん洸夜。夕月は今非常に厳しい罰を受けている」

「あ！霞君なの、え〜っと、その、気にしないで下さい。逆に嬉しかったんで」

頬を赤らめながらはにかむ洸夜。新しい一面をみた気がする

しかし……

「まったく。夕月ときたら。すっかり仕置してもらわないとな」

「仕置つて？霞がするんじゃないの？」

「いや、今は適任者が現れてね。名前は雫だ」

「雫ね。夕月と違って割りと普通の名前ね」

「ははっ、まあそうかもな。まあ深く考えるな」

笑いながら帰路に着こうと歩き出す。しかしそれを遮る様に洸夜は訪ねてくる

「それって……霞君の初恋の人と関係があるんですか？」

「……」

歩きだそうとした足は止まり息を呑む

そして頭の中で何かが這上がって来た。忘れる事を望み、記憶に縛

りつける事を誓った最良で最悪の記憶

一瞬蘇った過去の記憶に体が軋む

忘れる

しかし苦しい、辛い、締め付けられる

三人に背を向けているのが責めての幸いか

ゆっくり息を吸い記憶の奥底に全てを縛りつける

どうにか息を調える

「洸夜、何言つてんだよ急に」

「夕月さんが言ってたの。あれは嘘だつて」

「……あの馬鹿野郎が」

頭の中で再び夕月が叫びを上げる。完全に黙殺した上でさらに意識下の中で殴り続ける

「霞、初恋つてどうゆう事かな？」



加弥は怒りのオーラを纏った泣きそうな顔で近付いてくる

「……気にするな。夕月の奇言だ」

しかし納得する気のないこの二人はもう爆発寸前のナパーム状態だ

「霞、納得のいく説明はないのかしら？」

「ならこう言おう、全てが過去の出来事であり、全ては過去で終りを迎えている。だから気にする必要はない」

そうだ。あれは全て終わった。完全に終わった過去だ。今更引き擦り出す必要はない。たった一つを残して

「夕月の言った事は忘れてくれ。そうすれば俺はあの過去を思い出さずに済む。そうすれば俺は皆の事を見ていられる」

今どんな顔してるのか

加弥の体から怒りのオーラがどんどん小さくなっているのが眼に見えて分かる

「霞、いいよ。もう気にしないから。だからそんな顔しないでよ」

「過去で忘れてるならもういいわよ」

深娜は深々と溜め息をついて腕を組む

「すまん」

笑ったつもりだが二人は相変わらず沈んでいる

「まあ気分悪くした分の埋め合わせはするつもりだ。なんでも言うてくれ」

俺がそう言つと真先に手を上げたのは洸夜だった

「あのっ、こんなのはどうでしょうか？」

洸夜は多少控え目に話した

「おい。準備出来たぞ。先ずは加弥だったか」

慎は冴夜のカメラを三脚に立てピントを合わせる  
海をバックにそれぞれ記念写真

それが冴夜の提案だった

俺の隣に立つ加弥はまだ少し元気がない。頑張っ  
て笑ってるつもり  
なんだかいつもの明るさは無かった

「ねえ霞」

加弥はカメラの方を向いたまま話しかけてくる

「私霞の事好きだよ。深娜ちゃんよりもコウちゃんよりも」

そつと手を握る加弥の手は力強く、そして微かに震えていた

「霞はどうなの？」

「今は答えないのが華なのかな？」

苦笑いを返すと加弥はようやく笑ってくれた

「いいよ待ってるから。いつも通りで行こうね」

「ああ。そうだな」

加弥の満面の笑みと共にシャッターは切られた

次は冴夜の番だ

隣に立つ洸夜はいきなり頭を下げて謝った

ごめんなさいと

「おい洸夜、もういいって。気にするなよ」

「ううん。私があんな事言っただから霞君はあんな苦しい顔になったんだもん」

「・・・気付かれてたか。バレないと思ったんだがな」

「なんとなく、苦しそうだった。いつもの笑顔じゃなかったから」カメラのタイマーが徐々に近付いている

困った顔の霞君をチラッと見て覚悟を決めた

「ねえ霞君」

「ん？」

タイマーの音が早まる

「先に言っとくけれどごめんね」

シャッターが切られる前、ほんの少し背伸びをして、沢山の勇気を出して頬にキスをした

唇が触れた瞬間シャッターが切られた

「・・・洸夜さん？」

「先に謝りましたから。それに夕月さんと約束したんです。正々堂々闘うって」

につこり笑う洸夜は再び頭を下げた

「これからよろしくお願いします。いつもみたいに一緒に笑おうね」

分かったと返事を返そうと思ったが横つ面を思いつき蹴られた  
正確にはドロップキックなのだが迷いのないえぐる様なキレのあるドロップキックだ

砂を巻きあげて吹っ飛ぶ俺。そして蹴った張本人の加弥は直ぐに洸夜に飛び掛る

「こ・う・ちゃ・ん！何してるのかな？」

涙目の加弥だが洗夜はいつもみたいに泣いたりはしていない

「これが私の覚悟だから。もう遠慮しないって決めたの」

涙目の加弥は暫く理解出来なかった為若干の間が空く。そしてようやく理解した加弥は涙を拭い笑う

「コウちゃん、うつん洗夜ちゃん。これで私達公平になったんだね」「ごめんね、今まで遠慮なんかしてて」

和解した二人を砂の中から見てて思った。割と頬のキスは重要じゃないんだなと

と、いきなり頭を踏まれた。足で風船を破るようにスタンピングしている

「やけに嬉しそうね霞。ニヤけた顔して何か言うことあるかしら？」

「次は君の番だが準備はいいんですかね？」

今度は更に強く踏まれた

深娜は大変ご立腹です。さっきから足を踏まれています

「深娜、いい加減に止める。痛いから」

「あら、踏んでたの？早く言ってよね」

それでも足は動かず、更に圧力が増した

「深娜、お前は どうしてそんなにへそ曲がりなんだ？遠回しに攻めずに言いたい事はさっさと言ってくれ」

「あらそう。なら雫について初恋について詳しく聞かせて貰おうかしら？私が納得するように」

「やめろ。それは過去だ。掘り返すな」

「なら我慢してなさい」

私は怒っているかしら。家族と言ってくれた人が苦しい過去に縛られ、誰にもその重荷を分けず、ただひたすら背負っていく霞に対して何故軽くしようとしなののか？  
何処かで私を信用していないのか？  
ほんの少し悲しくて悔しい

「話してよ。家族なんだから話してよ。それともまだ私は信用されてないの？」

「・・・・・・」

霞は黙っている。その表情は困っている様で何処か嬉しそうでもあった

カメラの前に立つ私と霞

「後一年」

霞は突然語りだした

「俺は後一年皆に答えを返すことは出来ない。俺はあの時約束したんだ。『十年間僕は彼方を忘れない』と。まだ子供だった俺が初めて恋をした最初の人との約束」

私は霞の表情は見て後悔した。本当に辛そうで苦しそうで、それでも笑おうとする霞がいた

「だから待っていてくれないか。後一年」  
「霞！」

手を差し出し霞の体を支える様近付く

だか突然背中に衝撃が走る

何かがぶつかった

「ふふふ」。深娜ちゃん、霞にキスなんかさせないからね」

加弥は物凄い勘違いをしていた

何か小声で話す二人、まだ我慢できた。しかしいきなり深娜が霞に近付いた時直感した。止める！と

直ぐ様低い姿勢でダッシュし、深娜の腰を目掛けてタックルを放ち阻止を試みた

だがそれは仇となった

深娜は思わぬ奇襲と砂地によりバランスを崩し霞に倒れる

霞は直ぐに手を差し出し深娜の肩を押さえなんとか止めようとした。だが先程の苦痛がまだ抜け切れず力が入らない

「危ない！」

洸夜は叫び慎は止めようと走る。カメラは慎の足が引つ掛かり傾く。だがタイマーは刻一刻と近付いていた

傾くカメラはその一瞬を見事に捕えた  
カメラの電子音と重なって響くガツという音

洸夜はその光景を見てそのまま砂浜に倒れた

慎は直ぐ様爆笑して砂浜を転げ回った

加弥はついに涙腺が決壊して泣き出した

深娜は現状を理解出来ずに思考が停止した

そして俺はというと、痛いと思っただって歯と歯がぶつかれば  
誰でも痛いから。そして次に出てきたのは……  
あれ？歯と歯がぶつかる？歯と歯？

目の前には深娜の顔がある。完全に焦点が定まっていない。と言う  
か近い。深娜の顔が近い  
そして気付いた。唇に何か柔らかい感触がある

そのまま後ろにひっくり返る。俺の上に倒れる深娜は漸くスイッチ  
が入った。入るなり深娜は俺の胸ぐらを掴み激しく揺すった

「霞！何かあった！無かったわよね！何も無かったわよね！」

「いや、なんと言っか……ねえ」

「何よその返事、あんたも否定しなさいよ！」

「おいおい。自らキスを肯定する様な発言はやめたまえ」

「キキッ、キスって言わないでよ！」

「まあそう騒ぐな。減るもんでもあるまい」

「減るわよ！最初だったんだから」

「俺もだ。と言いたいが最初は大概親だから安心しろ」

「夢を壊す発言は止めなさい！」

深娜は盛大に怒鳴った後顔を隠すように俺の胸に押し付ける

「まったく・・・なんて雰囲気のないキスだったのかしら。最悪ね」

「悪かったな最初が俺なんかで。雰囲気ぶち壊してわるーごさいました」

「あんたねえ、少しは自覚したら。最初の相手ぐらい好きな人とするものよ多分」

「ああ、なら問題ない。俺は深娜も加弥も洸夜も好きだ。誰に奪われても本望つてもんだ」

「・・・呆れた考えですこと」

「それならお前もそうだろ。好きでもない俺なんかとキスしちまったんだ。悪かったな」

「・・・別にいいわよ。好きか嫌いか選ぶなら好きを選ぶって言ったでしょ。それに減るもんじゃないのよ」

「見事に最初に言ってる事と全然違うな」

「黙りなさい」

「って言うか深娜ちゃんいつまで霞の上で寝てるの！早くどきなよ！」

加弥は悲鳴に近い声で叫ぶ。しかし返って来たのは冷静な口調の二人

「いや、加弥が乗ってて立てないよ？」

「加弥さんがさっきからホールドして放さないから動けないのよ」

「いいから退きなさ～～い！今すぐ！」



帰りの飛行機の中は寢息に包まれていた。来る時はあれだけ騒がしかったのが嘘の様に静かだった

今聞こえるのは俺が打つパソコンの音と奇怪な寝言位である

「ああ、リチャード……そこはダメだ！そこは彼方のキルンパ！」

まあ慎だ

記録も一段落してパソコンを閉じる。あの三人も今は静かなので一安心だ

「それにしても……まさか最初が深娜とはね」

忍笑いの後もう一度パソコンを立ち上げ、洗夜のカメラのSDを抜きパソコンに射し込む

一枚一枚眺めていくと最後の一枚は夕日が丁度逆光になり黒い人影しか写っていない

二つの影は重なるように写っている

「まあ減るもんじゃないからいいか。多分」

パソコンを閉じてゆっくり息を吐く

「どうして俺はこうも上手く立ち回れないのかね。複雑っていうか・  
・・・. なんと言うか」

「背負い過ぎなのよ」

「・・・・・・起きてたのかよ」

「ええ。馬鹿に言いたい事があったから」

前の席にいる深娜がどんな表情かは分からない。そんな深娜がただ一言いった

「気長に待つてるから焦るのは止めなさい」

それだけ言って深娜は黙ってしまった

ちよつと自分の聴覚を疑ったが無理矢理納得した。だから一言返した  
「ありがとな」

どうやらこの修学旅行で皆成長できたんだろう。俺も少しは変わった  
ただろうか。そうであってほしいな

「リチャード、ぴエールがリチャードキルンパアアアア・・・・・・」

俺は寝てるだけで空気の読めない馬鹿の顔に濡れたタオルを乗せて  
やった

### 33・沖縄良い気分（夢と理想と彼女の想い）（後書き）

チャラッチャチャッ〜チャラッチャッチャッチャ！！！！！！！

ノイン 緊急ソクホオオオオ！遂に始動『いつもいつでもどこまでも』ぱーとテウ〜！

典時 ったく態々ここでやるなよ

ノイン 脇役は黙ってなさ〜い！私が主役よ！

典時 ……

ノイン てんじいいいい！話してよ〜独りにしないでよおお

典時 お前無茶苦茶だぞ。少しは考えて発言しろよ

ノイン 脇役が指図するなんて生意気よ！私がプリーティー主役なのよ！

典時 いや、もう話すな。それでは皆さん。近日御会い出来ることを楽しみにまっています

ノイン うわあああん。典時が無視したあああああ

### 34・妹恋人注意報（前書き）

加「加弥で〜す」

洸「洸夜で〜す」

深「・・・」

加「加弥で〜す！」

洸「洸夜で〜す！」

深「・・・深娜よ」

加「さあ今回は前書きをジャックしました！スタジオジャックです」

洸「メインパーソナリティーの霞君はソコで縛られています」

霞「モガモガ！モガ！」

加「今回私達出番無いからここ位出ないとね〜」

洸「でもここって何すればいいの？」

加「・・・何だろ」

深「ネタバレしない程度の本編紹介よ。と言ってもページ切れね」

加「ええ！ちよつと早くない？あ！あ！本編始まる、ええつとええつと、か、霞大好き！」

洸・深「加弥さ〜ん（ちゃん）！！」



「別にお巡りさんが見ても『ああ、八百屋の慎君か』で済むわよ」

「おおい母上！あんたはそんな風に息子を育てた！」

「そうよ。その分みっちゃんが賢く見えるわ」

あ、目頭に熱いものが

「いいからさっさと行きなさい」

涙を拭ってジャージを履いて渋々配達に行く俺だった

「ふあああ……………」

ゆつくりと布団から起き上がり眠そうな顔で10分位ボツとするのが好き女の子

寝起きなのにさして乱れないちょっと長い髪の子はボツとしている。細く開いている目でボヤけた自分の布団を眺めている

徐々に頭の中がハッキリしてきた。アレ？今日って日曜日だった？

……………

「おやすみなさい」

そのままパタンと二度寝に入る慎の妹、みっちゃんだった

「二人とも朝御飯食べなさい」

母上のお呼びだった

まったくパシって帰ってきたばつかなのにすぐ飯か。山市さん家って隣町だぞコンチキショウめ

部屋を出て隣の部屋の戸を軽く叩く

「妹さ〜ん。母上が飯だとさ〜」

「・・・・・・分かった〜」

うつむ。相変わらずの眠り姫だ。絶対10分以上は下に来ないな

「母上、我が家の眠り姫は相変わらず寝てるぞ」

漬物に手を伸ばす俺と俺の獲物を根こそぎ奪う母上。鬼か

「いや、キュウリ寄越せ母上。漬物寄越せ」

「ならみつちゃん呼んできて〜」

仕方なく二階に上がり眠り姫の部屋を叩く

「眠り姫〜起きろ〜。俺の漬物の為に〜」

返事がない。どうやら妹は寝ているようだ

慎

戸を叩く      > 叫ぶ

部屋に入る      踊る

「みつちゃん〜ん。起きろ〜〜〜!」

返事がない。どうやら妹は寝ているようだ

慎

戸を叩く      叫ぶ  
部屋に入る      > 踊る

慎は不思議な踊りをした。腰使いのキレが増した。慎の不思議な踊りはLv2に上がった

「いや、起きろよ」

そうこうしてると部屋の戸が開いた

「おはよ兄さん。朝から元気だね」

寝間着姿の妹、みつちゃんこと未知流。我が妹ながら将来が楽しみな女の子だ

中学三年の未知流は頭が良いらしく成績は上位をキープしてるらしいその上家庭面もお手のもの、流石は我が妹だ

「兄さん、早く下行こうよ。母さんにまた殴られるよ」

「うむ我が妹ながらストレートに言うな」

妹に袖を掴まれながら仲良く階段を降りていった

結局漬物は全て食べられた。泣きたくなつた  
もうふて寝してようと二階に上がろうとすると 下で未知流が呼んでいる

「兄さん、手紙だよ。え〜と京都からだっ〜」



はあああ！ま、まさか夜喜さんからか！  
全力ダッシュで駆け降り手紙を受け取る  
「よっしゃあああああああああああ！」  
夜喜さんからじゃーん

素早く二階に上がり封を切る

拝啓

春の陽射しに漸く暖かさを感じる季節となりましたが如何御過ごし  
でしょうか

桜の木々の蕾も大きくなり、いずれは京中を染め上げ見事な桜吹雪  
を魅せる事でしょう

本日この様な手紙を出したのは近日慎様の御宅に伺いたく存じ、  
その確認の為送付致しました

もし快諾して頂ける場合は窓を開け手を叩き、御断りの場合は窓を  
開け手を二回叩いて頂きとう存じます

大変御手数ですが何卒宜しく御願致します  
ガラガラガラパシーン！

ふっ、我ながら良い音だ

さあ！さあ来い夜喜さーん出来れば武器なしで！

~~~~~10分前~~~~~

未知流はいつもの様にポストの中を調べる

いつもは新聞だけなのに別の手紙が来ていた

「珍しいな。兄さんに手紙だ。誰からだろ……!!」

宮蔵夜喜……名前から察するに多分女性。しかも達筆だ

「夜を喜ぶって……なんかイヤらしい」

「名は親が願って付けたものであり、それに準ずる義理は無いので偏見は訂正願いたい」

「ひあああ！」

驚きの余り叫んでしまった。でも兄さんより変じゃないもん

「だ、誰ですか！びっくりしたじゃないですか」

「これは失礼しました未知流様。何分気配は常備消しておりますて」

「ちよつと待つてください。沢山言いたいことがありますが取れず……」

ピシッと指を射す

「鉄砲はしまつて下さい。あと一応家に入ったらお邪魔しますって声掛けて下さい」

ちよつとツッコむ所が違う気がするが夜喜さんは律儀に守つたのだ

「で、宮蔵さん？兄さんの部屋を盗聴しないでください。一応兄さんにも人権有ると思うんで」

「そこに何故確信が無いかは聞かないでおきます。後隣に来て一緒に盗聴するのはどうかと」

気にしちゃ負けです

二人並んで隣の部屋をLet's wiretap!

c a p i t a l i s m !
c a p i t a l i s m !
c a p i t a l i s m !
いずれ潰れるideal}

m i l i t a r y p o w e r !
m i l i t a r y p o w e r !
m i l i t a r y p o w e r !

所詮はe n d o f a c e n t u r y

「・・・・・・」
「・・・・・・」

二人の女性はゆっくり立ち上がり、ベッドに腰掛ける

「あ、所で宮蔵さんって京都の方ですか？」

間を空けるのが堪らなく苦痛なので兎に角話題を振りましょう

「はい。幼少の頃より『ゆきしろ』に勤めております」

「あ、それから何で私の名前知ってるんですか？兄さんが言いましたか？」

「いえ。此方に来る前に市役所に忍び込んで戸籍表を見たからです」

「あの、私は兄さんと違ってプライバシーが有りますから」

そうでしたかと軽く流した夜喜さんはっこり笑う

「あの日の夜は久しぶりに熱くなりましたから」

夜喜さんの笑顔は物凄く裏が有りそうな笑顔だとゆきしろの中居さんは口にする

そしてみつちゃんは見事に術中にはまった

「あ、あの日の夜って兄さんと何したんですか！まさか破廉恥な事ですか！」

「いいえ、違いますよ」

「何ですかその微笑みは！何でそんなに頬を紅くして目を反らすんですか！」

既に隣の部屋の慎は下に降りていた

「grain! grain! grain! 所詮イナゴのfood」
最近クラスの男子が歌っていた曲だ。何故かこう……前向きな気持ちになるのだ

いつもみたいに母上のエプロンを装備して霞仕込みのチャーハン作りに励むのだ！と言いたいが今はお手軽チャーハンなのだ。やはり

熱い料理をする時は薄着に限る

さて、応援が来るまで歌でも唄いながらチャーハンするか

「chestnut」。ケーキで食べれば齒の裏に～。caramelと同じ～～～～ホアチャアアアア！」

油跳ねた！

「あ、いらっしゃい霞君。久しぶりだね」

「お久しぶりです。いつもお元気ですね。あ、それからドーナツ作ってきたんでどうぞ」

「あら本当にありがとうね。もう家の子なら良かったわ」

「それを言ったら慎の立場が無いですよ」

「元々無いじゃない」

お互い笑った後霞は部屋に上がると台所から奇声が聞こえる

見知った通路を通り台所の戸を開ける

「慎・・・・・・・・」

そこには膝まで伸びるエプロンをした慎が立っていた。しかし上は裸で下はパンツ一丁

前を向いた姿はさらに酷い、もう裸エプロンじゃねーか的だ

そのままゆっくり戸が閉まる。これは夢だ。夢に違いない。深呼吸して戸を開ければ普通の慎が・・・普通の慎は居ないか

ゆつくり戸を開けるとそこにはやはり裸エプロン慎が中華鍋を振るつてる

「おう霞、よく来てくれた。取り敢えず手に持つてる下ろし金で俺を擦ろうとするな」

「ならばボンを着ろ」

「で、何の用だ？」

「うむ、実は今日夜喜さんから手紙が来てな、これなんだが」

手紙を受け取った霞は一通り読み終えたとおもむろに壁を叩き始めた

「何しとんだ？」

「いや、夜喜さんなら壁に擬装してるか屋根の上に居るか畳の下に
いると思つてさ」

「へへ。あの人忍者？」

「家系はね。曾爺さんがそうだったらしいぞ」

うーん。流石はくノ一（読みづらかったら平仮名にしよう）

「それで、慎はどうしたいわけだ？夜喜さん出迎えるのに俺の助力が必要なんだろ？」

流石は霞。お見通しか

「ぶつちやけ夜喜さんって好きなの何？あの短期間じゃ何も分から
んのだよ」

すると霞は笑つてある一点を指差した

「お前じゃないか？」

宮蔵さんはさつきから隣の部屋を盗聴している。しかしどうもさつきと雰囲気が違うみたいで何故か銃を持っています

「だから鉄砲はしまつて下さいよ。危ないじゃないですか」

すると宮蔵さんは勢いよく跳躍して部屋の天井に張り付いた！

ええ！角とか無いのに張り付いてる！スゴオイ！

「みつちゃん。霞君がドーナツ作って来てくれたから持ってきたよ」

「あ！は、はい」

母さんが戸を開ける時

物凄い焦ったけど宮蔵さんは開いた扉の僅かの隙間から直ぐに出ていった

あの人なんなんでしょう。まるで忍者だな

母さんが出てった後残された私はドーナツを口に入れる

「おいひーな」

霞さんって料理上手だな。教えてもらおーかな

マイペースなみつちゃんはのんびりドーナツを頬張った

「なゝ霞」

「ん？どうした」

「・・・これってどんな状態だよ」

「いろんな意味で四面楚歌。違う？」

ちがわなゝい

壁際に追いやられた俺に銃口を向ける夜喜さん。そして何故か天井から逆さ吊りの中居さんが二名短剣を構えている

「お久し振りです慎様。御元氣そうでなによりです」

「お久し振りです夜喜さん。取り敢えず武装放棄してくださいませんか？あ、中居さん、何で頭と体を押さえるの、い・・・痛いな、痛いな痛いなそんなに回らないよ俺の首あゝあゝ160。突破しそうアアアアアアアアあ！」

「坂下さん、大宮さん。慎死にますよ。取り敢えず手を放してあげてください」

すると中居さんは直ぐに解放し、夜喜さんの後に回ったあゝ、生きてる。首くつついてる。嬉しいな、嬉しいな

「そ、それで夜喜さん、今日はいつたい何用でございましょうか？」

すると夜喜さんは後に立つ中居さんに合図を送る。すると中居さんは霞を脇に抱え部屋を出ていく

「ってアレエエ？何で霞拉致っちゃうんですか！そして霞は抵抗無しですか！なんかしろよ！」

「生きて帰ってこいよ」

「まさかこれって最後の言葉ですか！」

しかし俺の叫び虚しく霞は部屋から出ていった

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

ああ、沈黙がキツイ

ごろゝんごろゝん

布団の上で転がっている私は変でしょうか？

兄みたいに布団にくるまって部屋を徘徊するより遥かにましですね？

それにしても宮蔵さんは何処に消えたのでしょうか。まさか兄さんの部屋ですか！

宮蔵さんが置いていった（作為的）集音機で隣の兄さんの部屋を盗聴してみよう

「あのゝ夜喜さん、なんで態々家に来たんですか？」
「御迷惑でしたか？」

「いいいいいいええええ！ゼンツゼンOKですよ！」

「そうですか。それを聞いて安心しました」

「笑顔が可愛いぞコンチキショオオオオオオオ」

兄さんオカシイね。脳の配線ズレたかな？

「あ、元からズレてたかもね。でも兄さん……もしかして宮蔵さんの事が……！」

ダメです！ダメですダメですダメです！

みつちゃんは部屋を飛び出すと一目散に隣の部屋に突入を図った廊下で霞先輩が宮蔵さんと同じ服を着た人に挟まれながら挨拶をしてくれたので軽く一礼して兄さんの部屋に突入した

バガーン！

「兄さん！」

「オオオオ！どうした妹、夜叉の波動を放出して。怖いぞsisster」

みつちゃんは無視して部屋を見回したが肝心の宮蔵さんがいません

「ムムウ……はっ！上ですね！」

勢いよく上を見ると先程みたい天井に張り付いてる宮蔵さんを発見した。そして目に飛び込んで来たのは

「なああ！そ、そんな大人の下着でもままま負けませんよ！黒がなんだい！白も素敵なんだい！」

「クウウウロオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

神速の域に達した憤はスライディングしながら宮蔵さんの真下に滑る

見事に夜喜さんに顔面を踏まれた

悶絶する兄を無視して一歩ずつと前に出た

「宮蔵さん。兄さんをどうする気ですか？」

「どうする・・・とはどの様な意味でしょうか？」

「そ、そりゃゝあんな事やこんな事や・・・と、とにかく変な事です！これ以上兄さんを変にしないで下さい！」

宮蔵さんは困った顔で兄さんに視線を送る

「未知流様は家族思いですね」

「くうう、誤魔化さないで下さい！宮蔵さんは兄さんの何なんですか！」

「・・・・・・・・（ポツ）」

「何なんですかその意味深な微笑みと赤い頬は！もう何か憎たらしい！」

地団駄を踏みながら確り兄を踏んでいるがこれは無視しよう

あゝそこそこ。いい感じだみっちゃん

腰の辺りを地団駄してもらって超絶快樂真っ只中な俺は口論する二人を眺める。しかし口論と言ったものの一方的にみっちゃんがマシガントークして夜喜さんが微笑んでるだけなんだけどな
「しかし・・・・・・・・アレだな」

ちよつと視線を変えれば夜喜さんの中々なバストが拝見出来る

あと前に15cm進んで角度を7°補修すれば完璧なのだよ

「ならば行かねばなるまい！匍匐前進！始め！1、2！1、2！1、2！1にびいびい！」

神速の夜喜さんキックが炸裂した

な、中々やるじゃないか夜喜さん。後少し防ぐのが遅かったら失明の恐れ

「はうつ！」

目の前が真っ白に……ふつ、予想外な伏兵がいたか

「……無念」

燃えたよ……萌え尽きたよ……真っ白に……

うわぁ……。痛そうだな。ま、大丈夫だろ

慎の身に何が起きたのか？それは至って簡単

地団駄していた未知流ちゃんの足が股の間を見事に捉えてしまったのだ

二人して奇声を放った慎を見下ろしている

未知流ちゃんはゆっくり足を退け、燃え尽きた兄を見て夜喜さんに視線を移す。自分のせい？みたいに首をかしげ、夜喜さんは沈痛な

面持ちで頷く

夜喜さん他人が起こした事故に関しては割りと普通に反応する自分が殺つたらもう当たり前前みたいにしてる所が酷いだろうな

「夜喜さ〜ん、未知流ちゃ〜ん。取り敢えず落ち着いたら？」

二人は俺を一瞥した後慎の両手両足を掴み布団に投げるとその場で正座した

「宮蔵さん。兄さんは多分気絶してると思うので正直に言ってください。兄さんの事が好きなんですか？」

「はい」

即答だった。みつちゃんとしてはもう少し間が欲しかったが仕方ない事だ。だから話を進めた

「私は認めませんからね。まだあなたの事信用してませんから」

「ならば何れ認めて貰えることを願いましょう」

そう言うとき夜喜さんは立ち上がり部屋を出ようとした。しかし何かを思い出したらしく振り返り笑いながら一言

「私、これでもまだ14ですから」

未知流ちゃんは絶叫した

「ん……あ、あれ？ここ何処だ？」

起き上がり頭をかきながら周りを見渡す。あ、俺の部屋が立ち上がるうとしたが妙に股の間が痛くてその場で転ぶ痛い、猛烈に痛い俺のドラゴボール

「お、漸く起きたか」

視線を上に向けると椅子に腰掛けながら本を読む霞がいた

「おう、夜喜さんは何処に行った？」

「夜喜さんか？夜喜さんなら帰ったよ。ついでに未知流ちゃんも部屋に戻った」

うつむ。夜喜さんは何しに来たんだろうか？分からん！分からんぞなもし

「それから夜喜さんが最後に聞いてたな。『私の事をどう思ってる？』だって」

「……そりゃー夜喜さんは大人の魅力満載した最高の女性だよ。けどよ、俺夜喜さんの事これっぽっちも知らないんだよな」天井を見上げて考える

「お前と似てるかもしれないけど、まずは友達からってとこかな」すると霞は笑いながらメモ用紙を投げてきた

「夜喜さんの番号とアドレスだ。たまに連絡してやれよ」

そう言っただち上がった霞はさらに一言

「未知流ちゃんが言ってたぞ。『私が認めるまで兄さんの恋人は私だ』だってさ。モテる男は辛いね」

バガーン！

「兄さ〜ん！」

「あばはあああ！み、みつちゃん！何事でゴザルか！」

「私が当分恋人だからね！宮蔵さんには負けないんだから！」

「ななな何を言っておる眠り姫！はよう離れんしゃい！いいお年頃
なんだから頬擦り止め！」

「駄目です。宮蔵さんには負けませんからね」

「かつ！霞！help！」

しかし親友はにつこり笑いながら部屋を出ていくき満々です

「慎、妹に手を出そうものなら人間として最下層を猛進するからな」

霞は笑顔で人としての最終防衛ラインを提示して部屋を出ていった

ダダダダダダダ！

ダダダダダダダ！

俺のケータイから何やら不吉な着メロが流れる

そして通話ボタンを押してもいないのにいきなりケータイから声が
聞こえた

「慎様？分かってますよね？ウフフ・・・」

よよよよ夜喜さん！怖！恐怖のドン底！

「兄さん？いつの間に他の女に番号教えたの？」

みみみみみつちゃん！怖！奈落の恐怖！

四面楚歌！これが四面楚歌！死を目前にした今の心境ハートフルエ
キサイディング！

恐怖恐怖恐怖のfear！

l
i
f
e

c
a
r
d

{
}
続
く
!

34・妹恋人注意報（後書き）

加・洸・深「はあ、はあ、はああ・・・」

霞「モガ」

加「あ、後書きなの？え〜っと、洸夜ちゃんにパス」

洸「ええ！いきなりですか？その〜どうでしたか皆様、楽しんで頂けましたか？」

深「本編が本編だけに気分を害したんじゃないの？アイツがメインだったし」

加「（神妙に頷く）」

洸「こ、これからも頑張りますので宜しく御願います！」

加・深「（作者が作者だし無理だろ的に首を振る二人）」

番外編・・・無題（前書き）

不可能とは所詮、机の上で導かれた数字の羅列に過ぎない
可能とは所詮、机の上で導かれた数字の羅列に過ぎない

その両方に属さないモノを、或いは奇跡と呼ぶのだろうか

その両方に属すモノを、或いは奇跡と呼ぶのだろうか

奇跡とは所詮、己の意に反する全てをそう呼ぶのだろうか

若しくは総ての事柄が奇跡なのだろうか

K u n i m i t i ・ e t i z e n

番外編・・・無題

暗闇が辺り一面を包み、小さなライトが唯一の安息を注ぐ

「漸く・・・完成したのか・・・」

ライトに照らされた一人の男。右のこめかみから口にかけて酷い火傷の爪痕を残す男はゆっくりとライトの下に歩み寄る

「永かった。余りにも永かった。時を忘れる程に・・・」

「それでも貴方は成し得た。皆が不可能と決め付け無謀とすら思えた絵空事を貴方は成し遂げた」

闇に木霊する靴音は徐々に近付きライトの手前で止まる

長い銀髪をなびかせ片目を包帯で被う女性は優しく語りかける

「遂に完成ですね」

「ああ・・・君のおかげだ。ありがとう」

「頭を御上げ下さい。私はただ貴方が必要とするモノを扱っていただけに過ぎません」

「しかし貴女でなければ成し得なかった」

二人は暫し沈黙する

互いの言葉を求めるように。互いの罪を認めるように

「どれだけのモノが犠牲になっただろうか」

「178名です。内91名が男性」

「男の最後の犠牲者は何と言う名かな？」

「フィンランドの死刑囚、Oraru・gureigaです。前科26で18人を殺害した連続通り魔」

「女性の方は誰かね？」

「アメリカ出身のNeiru・affection。交通事故により下半身不全。及び右腕切断」

男は押し黙り、ゆっくり瞳を閉じ黙祷を捧げる

偽善だと彼は知っている

それが無駄であると彼は知っている。だがしなければ心が折れてしまいそうだと彼は知っている

「果たして私は許されるのだろうかね」

「何にですか？」

「総てさ。あらゆるモノの一つにでも私は許されるのだろうかね」

「……許されるでしょう」

「はは、無理しなくていいさ。私がした事は居もしない神の侮辱さ」

「許されますよ。少くとも私が」

「……有り難う。それだけで私は救われるよ」

男はライトの照らされるモノにそつと触れる

「私は思っただよ。この先に有るのは血塗られた闇しかない」と

「……何故そう思われるのですか？」

「……天罰さ。神様って奴の怒りだ」

「なら貴方を産んだのも神です。貴方の罪は神が償うものでしょう」

「君には敵わないよ。その発想力には」

二人の小さな笑い声が広がり、直ぐに静寂に包まれる

「ここは何日持つか？ 後3日は欲しい所だが」

「善くて5日。早ければ明日には踏み込まれるでしょう」

「困ったな。いくら偽装してもあの連中をそう長い時間騙せないな」

「こればかり運次第ですね。もし予定より早い突入があれば……」

「」

「分かっている。その時は私が壊すさ」

すると男の懷から小さな電子音が鳴る
素早く取り出し耳に当てる

「私だ。．．．君か。助かったよ。私の方は全て終了した。後は君次第だ。．．．そうか。．．．分かった。早めに頼む」
無線を懷に戻し溜め息をつく

「彼からですか？」

「ああ。2・3日もあれば来てくれるそうだ」

「そうですか。やはり運次第ですね」

「その様だ」

銀髪の女性はゆっくり歩み、ライトの下に照らされるモノに触れる

「コレに見入られた人は残りの余生を全て狂わせられるのですね」

「ああ。少くとも私は既に狂っているのだらうね」

「貴方だけではありませんよ。私も、そしてあの者達も。既に狂っているのですよ」

「．．．．．そうかもな」

その時軽い衝撃が走る

遙か頭上で響く破砕音と複数の足音

「来たようだね」

「その様ですね」

「さて、逃げ切れるかまだ分からないが……コレに名前を与えようと思うんだがね」

「名前……ですか？しかし正式な名は既に」

「それはあくまであの連中が付けた名だ。あんな名を喜ぶ奴なんていないさ」

「確かにそうですが、しかし我々に名を付ける資格が有るのでしょうか。狂気を創った私達に」

「ならこう言おうか。神様がその責任を背負ってくれるさ」

「神様ですか。都合の良いモノですね」

「人なんて皆そう思ってるさ。さて、私としては貴女の頭文字を一つ頂きたい。そして最後の贅の二人の頭文字を一つつつ」

「貴方のもですよ」

「いや、私のは流石に気恥ずかしいよ」

「許しません。貴方の産んだのですから」

困ったなと頭をかく男は懷からメモ用紙とペンを取り出す

Z e s i k a ・ m i r a n

K u n i m i t t i ・ E t t i z e n

O r a r u ・ g u r e i g a

N e i r u ・ a f f e c t i o n

「Z、K、O、Nか、並べかえても中々良いものになりそうにない

な」

「なら貴方の名字を先にすれば良いでしょう。この国ではそうなの
でしょ。それならZeon。こう読めるでしょう」

「Zeonか、そうだな。そうしよう」

断続的に続く破砕音の中

二人はソレに名を与えた

5日後、そこには二つのモノが横たわっていた

一つはこめかみから口にかけて酷い火傷の爪痕を残す男

一つは銀髪に片目を包帯で被う女

二つのモノは微笑んだまま動かない。胸に鮮血の花びらを散りばめ

一人の女性はゆっくりと一冊のノートを開じる
ボロボロに汚れた日誌にはこう記されている

『大沢章一郎』

これは父の旧名である

これから数年後、今の名に変わったそうだ

「御父様の部屋からこんな物が出てくるなんて」

ノートをテーブルに置き、カップに口をつける

喉を潤しカップを置くと脇に立つ青年は一礼して片付ける

「幸澤、調査の方は？」

「只今上層部プロテクト解除の段階です。考案者が考案者だけに
解除は難航しております」

「そう、引き続き作業を続行しなさい。それから……」
ノートを幸澤に渡す

「これは厳重に管理するように。内容に関しては伝えなくていいわ」
「……かしこまりました。しかし宜しいのですか？彼ならこれをヒントに見付け出すことも可能では？」

「……或いはそうかもしれないわね。ゼオンに関しては殆んど記載されていないノートから私にも気付く事が出来なかった何かを見付けたかもしれないわね」

麗奈の表情は険しくなる

「でも御父様が本気で私に見付けて貰いたかったら何か言い残していたわ。それにもしそんならあんな厳重な所に保管していないもの。書斎の事務金庫から出てきたということは少くともヒントと呼べるモノは無いわ。……それに」

麗奈は微笑む

「あの子、ここに居た時より明るくなったと思わない？」

「……御優しい事で何よりです」

「そんな事はいいいわ。さ、早く仕事に取り掛かるわよ」

「かしこまりました。それではこれよりカナダの貿易商との会談がありますので別室に。14時より政界の方との会食が。18時より……」

「幸澤、明日の16時以降は開けときなさい」

「……私用ですか？」

「ええ。珍しくあつちから夕食の誘いがあつたわ。仕事は全てキャンセルよ。問題ないわね？」

「了解しました」

菊地麗奈は優雅に立ち上がり部屋を後にした

亡き父に近づく為に

35・僕と私のみつかせんそうへ厄災の襲来（前書き）

霞「どうもこんにちは」

大木「こんにちは」

霞「そろそろ梅雨明けで夏らしくなりますね」

大木「そうですね。鬱になりそうです。winter come back!」

霞「英語使ったからってまともには見えないよ」

大木「シヨボーン」

霞「鬱陶しいですね」

大木「霞君、最近深娜みたいに毒舌が目立つね」

霞「作者のせいだよ」

大木「シヨボーン」

霞「作者を無視してどうぞお楽しみ下さい」

35・僕と私のみつかせんそうへ厄災の襲来

ピロピロピロ
ピロピロピロ

旅行後に控えていたテストをほぼ満点で通過した深娜はソファアに
腰掛けコーヒーを飲んでいた
社会で何故か聖徳太子の隣に立ってた子供の絵を描けとか言われて
空白にした

ピロピロピロ
ピロピロピロ

国語で作者、カマキリりゅうじ（実在します）の詩を書けとか言わ
れて空白にした

ピロピロピロ
ピロピロピロ

そんなこんなで満点を逃した深娜は大変ご立腹です。教師側に抗議に行きたかったのだが霞に宥められ、結局うやむやにされた

ピロピロピロ
ピロピロピロ

だから深娜は未だに鳴っている受話器を取りません。取る気零です
そしてこの家の主は只今入浴中なのです

ピロピロピロ
ピロピロピロ

しかしかれこれ一分鳴り続ける電話に流石に嫌気がさした深娜は漸く受話器を取った

「どちら様ですか？」

超絶不機嫌です。もしこれがどこぞの詐欺勧誘者なら絶対警察に捕まります。と言うか深娜が突き出すに違いありません

しかし返って来たのは機械的な言葉だった

『パスワードをどうぞ』

「パスワード？何言ってるのよ貴方」

『パスワードをどうぞ』

「だから何の事よ！いい加減にきなさい！」

『パスワードをどうぞ』

爆発秒読みが始まりました。二秒前です

「そんなの知らないわよ！ふざけてるの！」

『……パスワード確認。夜分失礼します霞様』

「……は？」

鎮火しました。と言うか予想外の回答が返ってきて深娜も大変困りました。しかしすぐに再燃を始めます

「何なのって聞いてるでしょ！」

『ヘルプの要請でしょうか？』

「……そうよ」

『ヘルプ確認。ヘルプ内容をどうぞ』

「そちらの会社、若しくは組織名は？」

『会社名、O W C』

O W C、王刻ワールドコーポレーション。世界各国にネットワークを拡張、急成長を続ける組織。しかしそんな所と霞との接点がない

深娜は暫く考え別の質問をする

「野崎霞とO W Cの接点、若しくは関係は」

『野崎霞様はO W C代表取締役、王刻豪一郎様の特別監査を担当』

「特別監査ですって！何よそれ。もっと詳しく説明しなさい」

『……情報規制作動。O W C及び野崎霞様より以下の質問に対する回答を規制されました。15桁のパスワードをお願いします』

深娜は内心で舌打ちをする。流石にさつきみたいなまぐれで当たるとは思えない

「さっきの質問はキャンセルよ。なら野崎霞が特別監査に就いた日は？」

『2006年8月19日。19時20分に正式に就任されました』

「野崎霞の特別監査としての主な仕事は？」

『言葉で殴る。物理的に蹴る。ロープ、ワイヤー等で押さえ付ける。磔にする。公開尋問、及び公開拷問が主な内容です』

深娜は呆気にとられていた。なんとも無茶苦茶な事である

「は？それって代表取締役に対して？」

『はい。今現在までに行われた内容は公開尋問までです』

つまり磔にはしたのだろうか。深娜は酷く興味をそそられたが今はそこを追求してる暇は無いだろう。取り敢えず聞き出せる情報は全て聞き出そう

「それなら野崎霞がここ最近OWCで特務監査として仕事をした日は？」

『2007年6月12日。午前2時12分に東京支部に出勤。40分に渡りロープで拘束。1時間磔後、4回蹴って帰宅されました』

深娜はこれ以上聞くべきだろうか本気で悩んだその時廊下から霞の足音が聞こえる。深娜は出来るか分からないが咄嗟に受話器に向かって早口で伝える

「今現在までの会話全てをクリア。5分後にリダイヤル」

受話器を置く音と霞が戸を開ける音が重なる

「あ、風呂上がったから入っていいよ」

「ええ。わかったわ」

乱れる心音を誤魔化しいつも通りに対応する

何食わぬ素振りで居間を後にする深娜を見送る霞は受話器を取りボタンを押す

「野崎霞。認証パスワード、『知らない』バックアップ機能作動・・・・再生」

内容を聞いた霞は更に幾つか情報を聞き出し受話器を置いてソファーに腰掛ける

「・・・・もうそんな時期になるか。ま、気にする事でもないか」

霞はそのままグダグダとソファー寝転がった

「・・・・・」

「お久です霞さん」

「久しいな霞殿」

「今晚わお二人供。早く着きましたね」

「・・・・・・・・」

「だって最近夜中にしか出勤しないじゃないですか」

「体調を考慮されよ」

「ああ御免ね。ここ最近忙しくて」

「・・・・・・・・霞」

「ほえ？」

「む？」

「ん？」

深娜は思いっきりソバットを叩き付けてやった

グワングワンと頭を揺らす霞と何してんの今時の若者的な顔をする二人組。因みに片方は中坊っぽいセミロング茶髪でもう片方は大和撫子っぽい黒髪ポニーテール
どっちがどっちかすぐ分かる容姿である

「で、誰なのその二人は？今すぐ言いなさい」

「いや・・・・ちよつと待て。首が・・・・はあっ！」

ゴキツと鳴らして漸く居心地が良くなった霞は取り敢えず自己紹介から始めた

「この二人はOWCの社員で童顔の方が久我つぐみさんで背の高い方が佐乃飛高さん」

左右に座る二人は同時に霞を殴った

「童顔って言うな！」

「好きで長身ではない」

取り敢えず深娜は無視した。しかしこれで数日前の電話が正しいことが分かった

「で、そのOWCが何の用なの？」

「ああそれ。今日家に爺さんが来るんだ」
「……爺さん？」

霞 OWC代表取締役の特別監査 代表取締役は王刻豪一郎 OW
Cの社員が来た。そしてその話題の中、霞の祖父が来る

まさか……

「そのまさかじゃ！」

突然の奇声にやたらビクツと震えた深娜

急いで振り向くとそこにはやたらテンションの高い人が立っていた
白い髭と短く逆立った白髪頭の老人

180以上あるガツシリとした体つき。はち切れんばかりの肉体を
スーツで覆い不適な笑みで構えている。何処と無く目元が霞に似て
るこの老人？こそがOWC代表取締役の王刻豪一郎だ

「……言うか何で考えてたのが分かったのよ」

「気合いじゃ！」

だそうだ

そして王刻豪一郎は霞を見るなり叫び出す

「孫ゝ。元気じゃったがばあはああ！」

モロに裏拳が決った

悶絶する豪一郎は三秒で復活し跳び跳ねる

「四日ぶりじゃのゝ余生エンジョイしとるか？」

霞は何処からともなくゴルフバットを取り出すと、豪一郎の脛をフルスイングした

マジで悶絶する豪一郎を無視して霞はソファァーに再び腰掛ける

「俺の爺さんの王刻豪一郎。OWCの社長だ」

何となく霞の友達に似た奴がいたなと思う今日この頃だった

そして改め対談する事になった

テーブルを挟んでOWC組と一般市民組に分かれたのだが何故かテーブルの上には様々な物が積み重ねられている

「ほれ。前頼まれとった『アマロ神父の犯罪』と『はてしない物語』
見つけてやったぞい」

「お、サンキュー。しかも初版じゃん！流石爺さん」

「わしの収集癖舐めるなよ。さらにホレホレホレっ！」

「おお！マテ茶に老酒。コリアンダーじゃんか」

「楽しそうですね」

「・・・そうだな」

「・・・何よこれ」

「アカコッコの剥製。知らない？」

「知らないわよ」

とまあ30分位若干マニアックな会話が飛び交った

そして漸く本題に突入したのだった

「で、じゃ。改めて初めましてと言おうか大川深娜さん。わしは王刻豪一郎。霞の祖父で一応社長じゃ」

「初めまして。何故名前を知ってるかは聞かないでおきます」

「ははは。いやすまんな。悪いが色々調べさせてもらったよ。君のご両親についてもね」

「・・・」

「正直に言えばその所在も掴んでいる。が、言わないで欲しいって顔つきじゃな」

「・・・ええ」

親なんてどうなっていたって構わない
もう関係ない。私にはもう家族が居る

「さて、しんみりした話しは終いで、次はちよつとマジ話。つぐみ
つち」

「セクハラで訴えてやるゝ。ほいつ！」

本音をぶちまけた久我さんは霞に数枚の紙を渡す

霞は一通り目を通すと深くため息をつく

「結局養子を貰う事にしたのか」

「お前も匡彦君も継ぐ気ゼロじゃないか。まだ続けとるんじやろし
ようせつばああああ」

左右に座る二人に思いつき殴られた

後半は奇声のインパクトが強すぎて聞き取れなかった

そこへ更にコンボが極る

割と本気で霞が殴っているが左右の二人も一緒に殴るのはどうかと
思う

床で煙を上げながら倒れる一応社長の豪一郎を無視して話が進んで
いく

「霞殿。王刻殿は25日前に日本のとある孤児院にいつもの様に援
助金を届けに行かれました。その際一人の孤児を自分の養子にする
事にしたそうです」

「全く。相変わらず突発的衝動で物事を決めるものだ。それで、そ
の子は何て言う子なんです」

「イツツ！show time じゃああああ」

変人が蘇った

正直後小一時間黙っててほしかったが生き返っては仕方ない。本当に霞の知り合いの変人そっくりだ

鬱陶しい

「はいソコオオ！心の中眠る闇の毒を舌に乗せない！」

鬱陶しい

変人はちよつと挫けそうになったが気を取り直し再開した

「透サン、核サン。やってしまいなさい」

「嫌です。めんどい」

「謹んで辞退します」

あ、挫けた

一人泣きながらなんかセットを始めた変人
見てて本当に会社のトップに立つ人間とは思えない。御嬢様には見せてはいけない光景だろうな

「グスン。それじゃ……わしの養子の黒希美鈴ちゃんじゃあ
あああああ！」

このテンションは何なんだろうか
床にセットした筒から伸びる紐を引き抜くと勢い良く煙が吹き出し
廊下を真っ白にする

変人は玩具のラッパとタンバリンで激しく演奏を始める

「霞、あの人がいつ？」

「今年で58になる」

「……」

「正直俺の人生に名を刻む汚点だよ」

二人で悲しい視線を送っていたがふとある事に気付いた
白煙が薄れてきたが一向に黒希美鈴と言う人は現れない

皆が首をかしげ、変人が廊下を覗いてみた

「美鈴ううゝお爺ちゃん置いて何処行つたああああ！」
廊下に飛び出し外に向かって走り出す

ぽてぽてぽてぽて

変人が走り出した方向の逆方向から一人の女の子が歩いてきた
そしてそのまま玄関の鍵を閉めた

そして居間にぽてぽて歩いてきたのは長い黒髪のを赤いリボンで
縛り、黒のワンピースに黒のスカート。整った顔立ちだが細められ
た目と表情の無さが余り良い印象を与えていない。そして手には

「猫の手？」

霞の疑問は最もである。少女の手は猫の手の形をしたグローブが着いているからだ

ぼてぼてぼてぼてぼて

歩いてくる。あ、スリッパも猫仕様だ

ぼてぼてぼてと私と霞の前に立つと霞をじっくり凝視する
これでもかと言うほど凝視する。霞も困った顔をしながら笑っている

「霞お姉ちゃん？」

美鈴の第一声は子供らしからぬ綺麗な声だった
霞の第一声は怒濤の猛抗議だった

~~~~~

「長いですね。反省会。お菓子無くなっちゃった」

「仕方あるまい。私達の時もそうだったろう」

霞は未だに美鈴を叱っている。しかし叱られている当の本人は床に座り込み霞を見上げている

崩した正座姿で見上げている美鈴はまるで話を聞いていない

「分かった？俺は男だからな？返事は？」

「……………（コケン）」

頷く美鈴を確認した霞はため息を吐いて隣に腰掛ける

すると美鈴は素早く立ち上がりぽてぽてと駆けて来て私の前に立つと無理矢理間に潜り込んできた

「ちよっ、ちよっとなのよ！」

しかし私の抗議を無視して霞の隣を占領したコイツは相変わらずの細められた目と嬉しそうな表情で霞に寄り掛かっている

絞めてやろうかしら

心の中に殺意が渦巻くのを他所にコイツは猫の手で霞の頬をつついて  
いる

霞も霞でされるがままで笑っている。絞めよう

しかし何なのだろうかコイツは。猫みたいになつきから霞に擦り寄ったり膝に寝転んだり霞が手をヒラヒラさせるとそれに飛び付いてネコグロップでじゃれている

猫かコイツは

「にゃはあ。相変わらずネコラブだね」

「度が過ぎるのが難題だか仕方あるまい」

二人は完全に傍観に徹している。止める今すぐ

すると窓をカリカリと引っ掻く音が聞こえる

皆で見してみると変人が悲しい顔で窓を引っ掻いている。鬱陶しい

するとコイツと霞は立ち上がり窓に近付き

シャアアアアアアッ

カーテンを閉めた

「うわーん。二人がイジメタ」

外で嘔泣きする変人は近所迷惑この上ない

嘔泣きを止めない変人を放っておくわけにもいかないので仕方なく部屋に上げると直ぐに泣き止んだ。鬱陶しい

「深娜君、スツゲエ毒舌じゃのう」

「話し掛けないで下さい。霞、対応してよ」

「え、嫌だよ。鬱陶しいんだもん。なあ美鈴ちゃん？」

「・・・・（コクン）」

「鬱陶しいですね」

「ああ。鬱になる」

「・・・・帰っていいかのう？」

急に老けたみたいだ

「いいよ。用件言ってそろそろ帰ったら。仕事まだあるだろ」

「分かった。少しの間美鈴を預かって貰えんかのう。ちいと野暮用があつてな」

な、なんですって！コイツが家に住み着く気なの！嫌よ。絶対私の

平穩荒らすわよ

睨み付ける様にコイツを見下ろすが我関せずといった感じで霞の手にネコパンチをして遊んでいる

本気で絞めるか

「実はのう、関西の佐々木さん所で秘密の薬草を販売してるみたいで。のう。ちよつと見学に行くことにしたんじやよ」

「秘密の薬草ね。三日で済むか？」

変人は短く笑う

「なあに。所詮数とトカレフしかないアホ達じゃ。経路辿って根刮ぎ掃除してやるよ」

変人（豪一郎）は立ち上がり背広を正す

「じゃ、娘を頼んだぞ孫。手出したらその爪へし折ってやる」

「……お爺ちゃん……メッ」

子供に叱られてメソメソ泣く変人を連行する様に左右の腕を引つ張って消えていく久我さんと佐乃さん。しかし我が家にはまだ厄災が住み着いているが一先ず忘れる事にしよう。ストレスは肌によくないし所詮子供の戯事

そんなことに一々腹立てているのは大人気ない

「霞おね……お兄ちゃん」

「ん、どうした？」

「ご飯……まだなの」

「おおそつか。俺も深娜もまだだし歓迎会でもやるか？」  
「・・・何でこつち見るのよ」  
「お姉ちゃんここのボスなの」  
「なんで肯定なのよ！ボスって何よボスって！」  
「・・・<sup>ドン</sup>首領」  
「言い方なんて聞いてないわよ！」  
ああもうイライラする！

ああもうイライラする！

「何で睨んでるんだよ。食べ辛いつて」  
「黙りなさい。アンタも何やってるのよ！絞めるわよ！」  
「ボス・・・恐いの」  
「だから誰がボスよ！」  
「・・・（ビシ）」  
「指差さない！」  
「こらこら食事中に喧嘩するな。絞めるぞ」  
何か霞が変な事言わなかった？気のせいかしら

「霞お兄ちゃん・・・・・・・・ご飯」

コイツは口を大きく開き霞特製猫型オムライス（命名・霞＋コイツ）をねだる

霞はスプーンで掬い上げるとそのままコイツの口に運ぶ

オムライスを頬張るコイツは至極幸せそうな顔をしている。霞を絞めたら次に絞めて殺ろう

食事を終えた三人は居間でくつろいでいる。くつろいでいるのはあくまで二人であり、私はストレスが溜まりすぎで爆発しそうである落ち着け私。所詮子供の戯れ事  
平常心、平常心

「霞お兄ちゃん。お風呂一緒に入ろう?」

深娜は二時間前に消えた変人が早く帰ってくる事を心の底から祈った

「あはは、どうしようかな」

取り敢えず霞を絞めよう

35・僕と私のみつかせんそうへ厄災の襲来（後書き）

霞「こんにちは」

大木「はいこんにちは」

深娜「・・・」

霞「恐いですね？」

大木「恐いですね」

深娜「・・・（ジャキイイイン！）」

霞・大木『ぎゃあああああああ』

深娜「滅しなさい！今すぐ滅びなさい！」

大木「次話で会えたら素敵だね？大木でしたあああああああ」

ズパアアアアン

### 36・僕と私のみつかせんそうへ黒い子猫が黒いわけ》（前書き）

ウドの大木「お久です。前回深娜さんに斬りつけられたウドの大木です」

霞「前回作者を生け贄にして逃げました野崎霞です」

《《「通りすがりの#\*ですってあれ！名前伏せ字になってる！」

大木「やあ々　さん。久しぶりだよね？」

「何で疑問系かなああ！」

霞「五月蠅いな。消えればいいのに？」

「何で疑問系かなああ！つつか何この名前！」

大木「じゃ、本編です」

MrX「無視！」



### 36・僕と私のみつかせんそうへ黒い子猫が黒いわけ

暖かな陽射しの下、カーテン越しに射し込む光に優しく包み込まれる様に一人の少年が静かに寝息をたてている

まあ野崎霞少年である

「……………あ、肉球柔らかい……………甘いな……………グスン」

「何の夢見てるのよ」

深娜の的確な指摘も霞には届きはしない

456

そして深娜の天敵としての地位を確立した美鈴ちゃんはと言うと……………

「……………おはようございますお姉ちゃん」

固有名詞がボスからお姉ちゃんに昇格することにしたらしく、しっかり朝のご挨拶をしている

昇格理由は昨夜の入浴時間まで遡る

~~~~~回想~~~~~

「はぁ……………」

「……………」

にこにこ縁に手を掛ける美鈴ちゃんと溜め息混じりに眺める深娜

「ボス、頭洗つて」

「……………。子供じゃないんだら一人でやりなさいよ」

「……………」

とっても寂しい表情で深娜を見ているが知らんぷりです

すると美鈴ちゃんは視線をやや下に下げ目を見開いた。そしておもむろに……………

ペタペタペタ

「……………何よ」

モミモミモミ

「……………何してるのよ」

そして自分を見下ろし落胆の表情になる

だが直ぐに気持ち新たに決心をしたようで、拳を握り明日の未来に夢咲かせた

~~~~~回想終了~~~~~

と、言うわけである

そして朝の挨拶を済ませた美鈴ちゃんは窓際ですやすや眠る霞を見付けるとぼてぼて駆けていき、気持ち良さそうに寝る霞を眺め、腹の上に馬乗りになった

・深娜は耐えるのコマンドを選択した

美鈴ちゃんは上から眺めていると寝ぼけている霞はゆっくり手を伸ばし、両手で美鈴ちゃんの頭を撫で、そこからぽふぽふと美鈴ちゃんを確認していく

・深娜は耐えるのコマンドを選択した

「…………よしよし…………チ力ちゃんもお昼寝か…………一緒に寝るか…………」

どうやら襦袢家の家族、近松文座えもん（愛称チ力ちゃん）と勘違いしているようでそのまま美鈴ちゃんを抱き寄せて静かに寝息をたてている

美鈴ちゃんも最初は目を見開きかなり驚いて硬直したが直ぐに目を細めて抱き着く

そしてそのままウトウトと目を閉じ律儀にご挨拶

「お姉ちゃん…………おやすみなさい」

・深娜は耐えるのコマンドを解除した

『いただきます』

さて、ちよつと遅めの朝食です。起きてから妙に脇腹とか腹部とか

人に見えづらい場所が痛みますが深娜曰く

「寝相が悪くてその辺の角にぶつけたのよ」と言っている

美鈴ちゃんに聞いても深娜を見てから

「知らないよ」と首を横に振っている

ああ痛いな

「霞お兄ちゃん。牛乳ある？飲みたいの」

「牛乳？あるけど何味がいい？イチゴ？バナナ？キウイ？」

「・・・キウイ」

と言うことなんで早速ミキサーの中に氷とキウイと牛乳を入れてス  
イッチON

ギューイイイイイイイイイ

ゴリゴリゴリゴリゴリゴリ

ほゝら美味しいキウイ牛乳の出来上がりゝ

美鈴ちゃんは腰に手を当てごくごく美味しくそくに飲んでいる

「深娜も飲む？」

「一応貰つとくわ」

とまあ三人揃って飲んでいると本当に家族の様に思えてくるのは老  
化の傾向だろうか

そんな思いに老け込んでいる中美鈴ちゃんは自分の胸を見下ろし深娜と見比べる

「まだ勝てない」

やっぱりガツクリと肩を落としている  
深娜はやっぱり知らんぷりしてました

さて、日曜日の朝は何処のご家庭ものんびり過ごすわけであり、野崎家ものんびり過ごしたいわけである

「霞お兄ちゃん、お散歩しよ。お姉ちゃんも一緒に」

ソファーに腰掛け新聞に目を通す深娜の袖を掴み片付けをする俺に呼び掛ける

「散歩か。俺は構わないよ。ただ深娜はどうだろうかね」

期待と不安入り交じる瞳で深娜を見上げる

深娜はと言うと非常に顰めっ面で新聞に目を通してている。美鈴は子

猫の様な目で見上げながら袖を掴む手に力を込める

「お姉ちゃん一緒にいこうよ。少しでいいから」

「……霞、何とかしてよ」

あ、逃げる気だ

あゝあ。美鈴ちゃん泣きそうだよ

「たまにはいいじゃん散歩ぐらい」

「忙しいのよ」

ほう。忙しいのか

「なら仕方ないな。美鈴ちゃん、二人でお出掛けしようか。最近才  
ーブンしたカフェ知ってるし親戚にもなった事だしお買い物にも行  
こうか。勿論俺からのプレゼントだ」

「本当！」

「ああ。二人でデートだね。おお、俺は初デートだ」

デートの辺りを強調しながら深娜を見ずに声高らかに言ってみた

案の定深娜は新聞をバシンっとテーブルに叩き付け、物凄い勢いで  
自室に戻っていった

「霞お兄ちゃん。お姉ちゃん怒ったの？」

「違うよ。深娜お姉ちゃんは今猛スピードでお仕事を片付けている  
んだよ。一緒に行きたいから」

それから30分程ランプで時間を潰していると深娜が自室から出  
てきた。御丁寧に着替えも済ませ準備万端だ

「・・・何よ」

「いや。そんなに行きたきや素直に言えばいいのにつて思つて」

「ふん。あんたが変な事しないか見張るためよ」

「お姉ちゃん、変な事つて何？」

「あんたは知らなくていい事よ。ほら、さつさと行くわよ」

ちよと強引なお散歩の始まりです

夏も間近に迫るこの季節。少し暑いがそれもまた良し。季節の移り変わりは早いものです

「何年寄り臭い顔してるのよ」

「失礼な」

「お兄ちゃんが年寄りだと嫌なの。お爺ちゃんつて二人になつちゃう」

「まあ爺さんみたいには絶対ならないから安心してよ」

「分かった」

美鈴ちゃんは俺の手を握り仲良くお散歩している。ほら深娜、怖い顔になつてよ

そんなたわいもない事を話していると一人の女性が駆け足で追い越していく

「あ、佐々木さん。おはようございます」

「おはよう。美人と可愛い女の子二人なんて両手に華ね」

「この子は親戚の美鈴ちゃんですよ」

「おはようございます。美鈴です」

「おはよう美鈴ちゃん。可愛いお兄さんと美人のお姉さんがいてま



るで家族みたいね」

「はは。家族だつてさ深娜お母さん」

「はあ！」

変な声出したら駄目だよお母さん

「ママ。早くお買い物行こうよ」

「誰がママよ！つてちよつと引つ張らないでよ」

美鈴ちゃんは俺と深娜ママの手を引いてぐいぐい引つ張って行く。  
その顔は歳相応の可愛い笑顔だった

「お兄ちゃん。何してるの？」

「うむ？いや珍しい本があつてつい。それより買つのは決つた？」

「これ欲しいの」

『ネコまつしぐら写真集。子猫編』

よし絶対読もう

するといつの間にか深娜が背後に立っている。無音は止めてくれ

「霞、これもよろしく」

「……………」

「……………何よ」

「いや……………何故に料理本？しかもここ見る。小学生におすすめとか書いてるぞ」

「・・・・・・・・別にいいじゃない」

あゝあそつば向いちゃった。素直じゃないこと

「後で教えるから一緒に作ってやるよ。クッキーでも作るか？」

「・・・・・・・・分かったわよ。焦がしたらしょうちしないからね」

そんなやり取りを美鈴ちゃんは下から見上げていた。笑いながら深娜を見ていた

それから洋服コーナーに向かい美鈴ちゃんは猫耳帽子をねだり深娜は頑として許さず、何故かゴスロリで妥協しやがってレジに持って行かされた

「可愛らしい姉妹ですね。妹さんとても楽しそうですね」

レジのお姉さんはニコやかに笑っている

「はは。そうですね。ちょっと頑固者の姉が混じってますがね」

「仲の良い三姉妹ですね。羨ましいわ」

数秒後、姉妹は大人気ない女の子を押さえに全力で走った

何とか二人に宥められ、今はちょっとしたアクセサリショップに寄っている。と言うのも美鈴ちゃんが深娜が首から下げているネックレスやブレスレットに目を付けたからである

「お姉ちゃん。その綺麗なの何処で買ったの？」

「これ？・・・これはその・・・」

宙を泳ぐ視線は俺を捕らえる。あ、赤くなった

そして深娜の視線を辿り俺に到着した美鈴ちゃんはにっこり笑う

「お兄ちゃんからのプレゼントなんだ。お姉ちゃんはお兄ちゃんの彼女なの？」

「ば！馬鹿言わないでよ！そんなわけ無いじゃない！」

「深娜。店内では御静かに。美鈴ちゃんもお姉ちゃんを困らせちゃ駄目だよ。深娜が俺の彼女なわけ無いじゃないか。ファーストキスは深娜だけどぼおっ！」

クリティカルヒット

「あんたはっ！何でっ！そういうっ！事をっ！平気でっ！喋るのっ！かしらっ！」

一言一言区切りながら重い膝蹴りを繰り返して、俺は一瞬朝のメニューを思い出してしまった

方膝を付きどうにか耐えた。ふう。日に日に耐性が付いているのは良いのか悪いのか

「深娜・・・ごめんなさい。もうボディーは勘弁して。お昼食べれないから」

「二度目は無いからね」

それは俺の魂だろうか

とまあそんな経緯を経て今はちょっとしたレストランに来たわけだ

「お兄ちゃん。オムライスある？」

「ん」。日の丸の旗が刺さってるのしか無いな。オモチャのセットだよ」

「それでいい」

素直にお子様ランチを頼むこの子は実は12歳

少し将来に不安を覚えてしまった

「私はムニエルでいいわ。ワインは……止めときましょ」

「当たり前だ。それじゃ俺はサイコロステーキでも食べるか」

さして待つことも無く運ばれたランチを食べる三人。食べさせてとねだる美鈴ちゃんをどうにか説得し、やっぱりワイン飲もうかしらって言いやがる深娜から呼び鈴を遠ざけ平和なお昼が過ぎる

そして屋上

にゃ〜



で泣いている。母猫を呼ぶように悲しい叫び声だ

「ごめんよ。両サイドの猫が許したら今すぐ行きたいんだけど・・・」

ずるずると両腕を掴まれ名残惜しくもその場を後にした

荷物は配達サービスに任せ、今は開店して間もない『L f r a n  
o f s o u l』に来ている。直訳は著作権に引っ掛かりそうな危  
ない店だ

この店では本格的な紅茶や珈琲を堪能でき、絶品デザートも揃えた  
女性向きのお店となっている。さらに店内に流れるクラシックでち  
よつとした大人の世界です

「うわあ。綺麗」

美鈴ちゃんも運ばれた苺タルトをキラキラした目で見ています。俺か  
ら見ても完璧な盛り付けだ。バランスよし、尚且つ主役の苺を引き  
立てる様に散りばめられたフルーツもよし。そして型は遊び心ある

羽を広げた蝶

「素晴らしいパティシエがいたものだ」

「そうね。貴方より上手いんじゃないの？」

「俺は未々未熟者だぞ？比べるだけ野暮だ」

そんな話をしていると二人の分も運ばれてきた

深娜はチーズケーキを口に運び目を細める

「美味しいわ。久し振りに良いケーキ」

「・・・・・・・・」

深娜の感嘆を他所に俺はシュークリーム最初の一口で止まる

そして

「・・・・・・・・くくつ、ははは」

思わず笑ってしまった

「お兄ちゃん、美味しくて壊れたの？」

「いや・・・この味には覚えがあつてね。ちょっと失礼するよ」

俺は席を立ちマスターの元へ行き、少々会話をして厨房へ消えた

そんなこんなで取り残された二人は美味しそうにケーキを食べる  
何時の世も甘い物は女性の味方なのだ

だがふとした時、美鈴は食べるのを止めていた

「お姉ちゃん」

美鈴のいつもと違う陰のある声に不思議に思った深娜は自分も止め向き直る

「どうしたの」

「お兄ちゃん……どうしてあんなに優しいの？」

「それは……」

深娜は答えに詰まる

分からない訳ではない。むしろ身を持って知った自分に分からない訳がない

だからこそ詰まる。言葉で説明する事が余りにも難しい過ぎる

「どうしてお兄ちゃんは私にあんなに優しいの？」

「……」

家族だから

答えはそれだけなのだ

しかし美鈴の眼を見ると優しくされることに苦痛を感じているとすら見える

澱んでいる



まるで昔の自分を見てるような錯覚に陥る

「何故いまさらそんな事を聞くの？」

その間に美鈴の頭を下げ服を掴む手に力が入る

「お兄ちゃんには言わないで。お兄ちゃんにだけは知らないで欲しいの」

震える声に深娜は深く溜め息を吐く

「それなら仕方ないわ。聞いたら忘れてあげる。だから気にしないで言ってみたら」

重い空気を出来るだけ払おうと軽い口調で話す深娜に美鈴は顔を上げ微笑んだ

初めて見せる力ない笑みで美鈴は語りだした

厨房では忙しなく歩き回るパティシエ

その一角で盛り付けをする青年は俺に気付くと手を振ってくる

「かすみっち！久し振り！略してカス久！」

「相変わらず無礼ですね。兄弟子なんですから後輩を大事にしたらどうですか？」

「ははっは。気にするなかすみっち。略して気カス」

「ここにあるミートパイ投げ付けて殺ろうか？」

「あ、いや。ごめん」

金髪で長身。蒼い眼の青年は本気で謝った

「分かればいいですよフォンデュさん」

フォンデュ・イクイップはアメリカ生まれで祖父は有名なパティシエとして世界に名を列ねる有名人で幼くして指南を受けていた  
そして日本に店を構えて間もなく常連であら、古くから親しい豪一朗に連れられてきた孫、野崎霞を気に入る短い期間ながら手解きをしたのだ

「それにしてもまさか店を構えるなんて驚きましたよ」

「いやいや。ここは爺さんの知り合いの店でちよつと修行がてら働いてるのさ」

「へえ。なら師匠はどうしてるんですか？」

その間にフォンデュは表情を暗くし、言葉に詰まる

「爺さんか……」

「まさか……師匠は」

「爺さんなら店で可愛い従業員とイチャついてる所を婆さんに見られて国外逃亡してるよ。最後の連絡はカンポジアだったよ」

「そうか。お互い苦労する祖父を持ってたね」  
「まっただ」

二人は深い溜め息を吐いた

「これが私の全部。言わないでね。お兄ちゃんには言わないで」  
美鈴は淡々と語った

己の過去を

平静の仮面で感情を押し殺し、信じる相手に全てを語った

「そんな……事が……」

無いとは言えない。言えるわけがない。私も受けた最悪の仕打ち

家族に裏切られたあの記憶。薄暗く腐敗臭漂う裏路地で生きる為人をも殺し生き長らえた忌まわしい記憶

そんな時厨房から霞が歩いてくる

美鈴は慌てる事無く仮面を被り笑いながら霞を向かえる  
深娜は背筋が震えた

12の歳で感情を殺す術を身に付けた少女に

「いやゝごめん。このケーキとか作ってるのが知り合いだったから」  
「ううん。気にしてないの。お姉ちゃんは寂しかったみたいだよ？」  
「そ、そんなわけ無いじゃない！変なこと言わないでよ」

咄嗟だったがなんとか誤魔化せた

私はパパとママと仲良く暮らしてたの

「お兄ちゃん。他にも頼んでいい？」

「ああ。どんどん頼んでいいよ。知り合いの人の奢りだから」

「オイコラ霞っち！略してオコラっち！」

でもパパとママは沢山お金を使うから沢山借金を作ったの

店内に流れるクラシックに反して霞達のテーブルはとても賑やかだ。それに釣られる様に他の客も頬を緩め楽しんでいた

だから私はおっきなお屋敷で働く事になったの。パパとママにお願いされたから。パパとママに笑って欲しかったから

深娜はゆつくりとチーズケーキを口に運ぶ  
ほのかな甘味が広がる

そこのお屋敷の人はとってもいい人だったの。でも何時からか夜になると私を部屋に呼んで体を触る。嫌なの。怖いの……。でもここで嫌がったらパパとママが悲しむの。お金貰えなくて悲しむの。だから耐えたの。耐えて耐えて耐えて耐えて耐えて……。  
……。今でも怖い。皆怖い。夜が怖い。手が怖い。人が怖い。何もかもが怖い。

カフェを後にし三人並んで帰路に着く。美鈴は霞と手を繋ぎ笑いながら帰る。仮面は既に外している

その一歩後ろを深娜は歩く。二人の歩く姿を眺め、美鈴の笑顔を見据え後を追う

その後二人は一緒に夕飯の準備をし、深娜は一人自室のパソコンを立ち上げ菊地財閥専用ネットワークを開く

でもお爺ちゃんが助けくれたの。真っ暗な部屋をいきなり壊してお爺ちゃんが来たの。すっごく怖い顔だったの。お爺ちゃんはお屋敷の人を何度も何度も叩くの。血が出て骨が折れて潰れる音が部屋一杯に広がるの

やはり居ない。いや、存在していない事になっている  
美鈴から聞いた屋敷の人間は何処を捜しても存在しない

菊地財閥の力をもつてしても親族すら見付けられないのならこの世には居まい

深娜は深い溜め息を吐きパソコンを閉じる

王刻豪一郎

恐らく菊地財閥裏方と同等、或いはそれ以上の事をしている恐れがある

「霞はここまで知ってるのかしらね……」

すると部屋の戸を叩く音

「お姉ちゃんご飯なの。今日はチャーハンなの」

ゆっくり戸を開け顔を覗かせる美鈴。深娜は美鈴の過去を忘れるように頭を軽く振り部屋を後にした

夕食後、片付けをしている俺の服を美鈴ちゃんが引つ張る

「お兄ちゃん、お風呂入る？」

「んゝ無理。まだ死にたくないから。ほら、法に触れるしこの場で消し炭にされちゃうから」

ねだる美鈴ちゃんをなんとか説得しようとしていると、思わぬ助力が駆け付けた

「美鈴、お風呂入るわよ。早く仕度しなさい」

「……深娜？」

「……うん！分かったの姉ちゃん」

美鈴ちゃんは嬉しそうに着替えを持って深娜の後ろに続いた  
暫く呆けていたが笑ってしまった  
まるで本当の姉妹だ

浴槽にて

「・・・美鈴」

「なに？お姉ちゃん」

「いい加減触るの止めなさい」

「目標なの」



36・僕と私のみつかせんそうへ黒い子猫が黒いわけ（後書き）

加弥「加弥と！」

洸夜「洸夜の！」

加・洸『テレフォンショッキング』

加弥「今回初のテレフォンは菊地財閥の副社長？幸澤故雪さんです」

幸澤「お久しぶりです。大甲加弥さん、私は副社長ではなくあくまでお嬢様の秘書ですから」

洸夜「でも実際は上の役職ですよ？」

幸澤「そうですが私の上には五老院という役職がありますよ。それに私個人の力は微々たるものですから」

加弥「じゃあ最後に麗奈さんに一言お願いします！」

幸澤「お嬢様。御願いですので一人で厨房に立つのはお止めください。卵は電子レンジで温める物では御座いません」

加・洸『常識は大切に』。テレフォンショッキングでした！』

37・僕と私のみつかせんそうへ高校デビューと可愛いあの子へ（前書き）

霞「……………うわ」

夕月「いきなり失礼だな。何だよ急に」

霞「急に俺が二人も居たら嫌だろが」

夕月「まあそうだけどき。それよりそろそろ世間はクリスマス近いだろ」

霞「近いな。で、それがどした」

夕月「クリスマス版恋愛短編小説を作者が書こうかなだつてさ」

霞「辞めとけ。恋愛なんて作者とは無縁だろ」

作者「失礼な！」

夕月「で、実際は？」作者「さあ元気に本編読んでいこう！」

### 37・僕と私のみつかせんそうへ高校デビューと可愛いあの子へ

せかいなんてぐうぜんのかたまり

だれかのぐうぜんとだれかのぐうぜんがくつついたただけ  
でもひとはそれをひつぜんっていう

みらいのないせかいにひつぜんなんかないのにね

おかしいね？

「お兄ちゃんおはようございます」

「あ、おはよう美鈴ちゃん。よく眠れた？」

「うん。ふかふか枕気持ち良かったの」

朝からニコニコ笑う美鈴ちゃんと対照的に、深娜は若干眠そうな顔付きでやたら不機嫌そうだ

「おはよ。明らかに寝不足そうだが？」

「……誰かさんのせいよ。まったく」

「あう。ごめんなさい」

シユンと落ち込む美鈴ちゃんの頭を撫でながら励まし漸く朝食です  
「お兄ちゃん、今日学校なの？制服着て」

サンドイッチをモグモグさせながら小首を傾げる美鈴ちゃん。口元

にマヨネーズなんか付けて実に可愛らしい  
笑いながら拭ってあげると恥ずかしそうに頬を紅く染める。いやゝ  
妹とか娘を持つ親ってこんな感じなんだなゝ  
老化全開の霞爺の足を未だに深娜が踏みつけているのは言うまでも  
ない

「で、美鈴はどうするの？留守番させておくのは少し心配なんだけ  
ど」

深娜が心配なのは中学一年生でこの子供っぱさな所である

「うん。実に困った」

頭を捻る俺の袖を引つ張る美鈴ちゃん。なんだいその切なそうな瞳  
は。やめて、子猫が親猫を求めるそんな瞳で見ないで

「お兄ちゃん・・・お願いがあるの」

「駄目よ」

うわっ、深娜の奴問答無用で切り捨てがったよ

「どうせ連れて行って言う気でしょ？いくらなんでも無理よ。学校  
側が許可しないから」

まあ正論ですね。学校だってもし何かあったら責任を取らなきゃい  
けないのだ。態々リスクを犯そうとはしないだろう。普通の教師な  
らね

「まあ無理じゃないけどね。学校にだって理解者はいるぞ？校長と  
か保健室の先生とか」

因みに保健室の佐々木真美先生は校内No.2の強者です。教頭？そ  
んなの居ないに等しい存在です

「・・・どうなっても知らないからね。責任はあんたが取りなさ  
いよ」

深娜はサンドイッチを放り込み席を立つ

俺は苦笑いをしながら携帯を操作する

『もしもし』

「おはようございます。朝早くすいません」

『気にしないでいいのよ。デートのお誘いだったら先生うれしいわね』

「違います。実はお願いがありまして。手作りシュークリームで手を打ってもらえますか？」

『いやったあゝ。いいわよ。何でも言って』

やはり無茶な頼み事は佐々木先生に限るな

あゝるゝこゝあゝるゝこゝ。わたっしはゝ元気ゝ。あゝるくのゝ大好きゝ。ドンドンゆゝこゝおゝ

ドンドン行ってます

俺の左手をしっかりと握りながら元気一杯に歩く美鈴ちゃん。今日は白のワンピースと綺麗な麦わら帽子。赤いリボンが印象的です（因みにいつものアニマルチェンジ子猫編は禁止令が発動中）

最近は暑くなってきたし実に可愛らしいですな

「お兄ちゃん、お願い聞いてくれてありがとう」

「どういたしまして。その代わりあんまりはしゃいだり周りの目が濁った男子には近づいたら駄目だからね」

「うん。近づいて来たら鼻下にストレートか××（漢字二文字）だよね」

「中学生に何教え込んでるのよ」

「違うの。自分で本を読んで勉強したの。地下倉庫に沢山あったから」

あれ？何で地下倉庫の入り口と暗証番号知ってるの？問い詰めようとしたが我が校舎が目前に迫っていた

皆が皆振り返ります

当たり前です

何故なら校内のトップに君臨する女王深娜の手を握り、女王の下僕兼男子の敵及び三学年の密かなマスコット＋生徒会長の左腕（右は三木原さん）の霞と仲良く手を繋いで歩く女の子。美鈴ちゃんに非常に興味引かれるのです

## ヒソヒソ話の一部

「ねえねえ。あの氷の女王様が女の子と手を繋いでるわよ」

「うそお！あの冷酷女王様が？信じらんない」

「おい見ろよ。獣野郎が我らの女王様を差し置いて少女にまで毒牙を伸ばしやがったぞ」

「ゆるせねえ。町内一帯に霞ロリコン説を流して・・・ぐわあっ」  
「あんたは会長側近の柚時さんぎやああ」

「見た見た！霞くんがちっちゃい子と仲良く登校して来たよ。すっごい絵になるのよ。可愛いわ霞くん」

「うそ！あゝん見逃したゝ。ねえ写メ撮ってない？」  
「もち」

「あゝ！送ってよ！二百円でどうだ！」

あくまで一部である

「もう放しなさいよ。さつきから変な視線が凄いんだから」

「まあまあいいじゃないか。美鈴ちゃんだって緊張してるんだから」

「ごめんなのママ」

『ママ！ママですと！』

教室から廊下からあらゆる場所から人が飛び出し驚きの声を八モらせる

深娜は絶対零度に匹敵する魔眼を発動するとまるで初めから誰も居なかった様な静寂が残る

「パパ。凄いね」

「そうだね。でもママだって何回も出来ないからあんまり言っちゃ駄目だよ」

「うん。分かったのパパ。出来るだけパパって言わないの」

美鈴ちゃん駄目だよ。ほら、誰かが吹き矢吹いてきた。先に裁縫の針付いてるしきつと毒が塗ってあるに違いないんだから

mission part 1

午前中を生きるべし

霞 ランク？

双極の頂きに立つ者

属性 中立と偏見

HP>—————<

美鈴ちゃんは教室の前に来て漸く深娜の手を放した

深娜は何事も無かった様にいつもの無表情になり教室に入る。それに続き二人も中へと踏み込んだ

「おはよ〜っす」

軽く挨拶しながら入ると男子は素早く消しゴムを構えた

しかし特殊効果『黒猫の加護』発動により男子は構えを解いた

「おっはよ〜霞〜ってその可愛い子誰？」

「おはよう霞君。あれ？その子迷子？」

加弥と洸夜が美鈴に気付き首を傾げる

「う〜っす霞。ちっちゃい子捕まえてどうした」

HP>—————<

「おい、何故にHPが減ったのか？」

「お前だからかな」

慎はその場に横になり嘔泣きを始めたので無視した。あ、邪魔だから隅に行つてよ



すると先生の到着です。イソイソと席に座る皆の中、美鈴ちゃんは俺と深娜の席の間に挟まる形で小さな椅子にチヨコンと座っている

「よしおはよう。皆朝から気付いてると思うけど野崎の隣の子は野崎のお祖父さんの孫みたいでちよつとの間預かってるそうだ。まだ10歳って事で留守番させるのが心配だから特別に今日一日校内に居ることになったそうだ」

流石佐々木先生。微妙な嘘と本当の加減で見事に違和感がない。シユークリームの他にも何か作ってあげよう

「私10歳じゃないの。本当は12なの」  
頬を膨らませて怒る美鈴ちゃん。そんなホッペをプニプニつつきながらにこやかに和んでます

朝のHRも無事終わり、のんびりと授業の準備をしたいのですがやっぱり人の群れが来ました。

イタッ！誰だ叩いた奴HP>—————<  
人集りから逃げてきたのか深娜は窓に背を預け深い溜め息を吐く  
「アンタのお陰で私の休み時間が減ったんだけど。どうしてくれるのかしらね？」

「この前焦がした鍋の件チャラって事で」  
「うっ……分かったわよ」  
こっそり処理してた様だが台所事情を誤魔化せる分けないのだよ

そんなやり取りの間、美鈴ちゃんはクラスの皆の人気者。他のクラスからも参戦して質問したり写メ撮ってます

ちょっと酷いけどオロオロしながら返事するその姿がまた可愛らしい  
「あう・・・あの・・・その・・・」

オロオロしながら此方に潤んだ瞳を向ける。これが噂のヘルプアイか

「あなた達いい加減にしたらどうなの。美鈴が困ってるでしょ」

教室内が静寂に包まれる

「大川さんが庇った」

「女王様が他人を心配してる・・・夢かしら」

「安田！気を確り持て！え？『悪魔様が蘇る』現実から目を背けるな！」

「あの優しさミクロ単位でいいから欲しいな」

「欲しいな」

俺は笑顔で美鈴ちゃんの目を塞いだ

いつもの三人も笑顔で耳を塞いで窓の外を眺めている

「美鈴ちゃん、耳ふさいでね」

「うん」

「文句ある？」

ドスの効いた声で睨み付けます。まあそうですよね。誰だって親切をあんな感じで返されたらブチギレしますよ

「はいはい。授業始める……よ……」

あ、先生、気にしないでいいですよ。クラスの雰囲気は無視してくださいよ。何ですか俺にヘルプアイして。駄目ですよ、三十路過ぎたらヘルプアイは無効ですよ

「ののの野崎君、どどどにかしてよ！君の彼女でしょ？」

「ぶふああああ！」

加弥の真空跳び膝蹴り

HP>――

<

「前言撤回希望……！」

「それなら先生にやってよ！俺関係ないよね！」

「出来るわけじゃないじゃんそんな事！」

「うわ超理不尽！つか深娜さん、貴女もこの空間を造り上げた要因の一つなんですから空間調和に御協力お願い致しますよ！」

「あ？」

「いや非常に申し訳ありませんでした。全て私の責任で御座います」  
美鈴ちゃん、何故君はそんなに笑顔なんだい？何故そんなに輝く笑顔  
顔を俺に振り撒くんかい？正直今この教室内で眩しい存在だよ

「お兄ちゃん楽しいね。高校って楽しいね」

「違う！この空間に耐えれなくて精神が壊れてきてる！」

「先生！崎塚さんを筆頭に数名気絶してます！」

「えええ！ちよつちよつとどうすればいいのよ」

「先生！藤阪くん邪魔なんですけどどうすればいいですか！」

「捨てればいいと思うの。ダメ？」

「駄目だよ美鈴ちゃん、生ゴミは外の焼却炉じゃないと」

「校舎内が腐敗するからやめなさい」

「俺帰っていいのかな」

『駄目』

クラスの心が一つになったね。いや君は本当にいい立場だよ

ぐうぜんぐうぜん。いつもいつもそこにあるのはぐうぜん。ぐうぜんがかさなればそれはうんめい？クスクス。ちがうちがうぜんぜんちがう。ぐうぜんはどんなにかさなってもそれはぐうぜん  
これからもこのさきもぐうぜん

三時間目が終わった辺りだろうか、何処かで鈴の音が響いた

教室に反響し、深く深く響く鈴の音は誰にも届かない。深娜も、加弥も、洸夜も、美鈴も、慎も

鈴の音はゆっくり静まり静寂に包まれる

最初に気付いたのは美鈴だった。机に突っ伏し動かない霞を揺すり、取り敢えず背中を抱き付いてみた  
直ぐに加弥がひっぺがしに走り、ついでに霞にエルボーをかましてやった

それでも起きない霞に首を捻る加弥は取り敢えず霞の耳をハムハムしてみた  
直ぐに洸夜に捕まってガツクンガツクン振り回されながら泣き付かれた

小さく痙攣した霞はゆっくり起き上がる

加弥は胸を張って自分の判断が正しかった事をアピールしている  
しかし両サイドを洸夜と美鈴に捕まれ教室の外に連れ出された

虚ろな霞の眼はゆっくりと深娜を捕らえる

「・・・・何よ」

しかし返答は返ってこない。霞はただ深娜を見ている

そんな霞の態度に疑問を持つ深娜だが取り敢えず頬を軽く叩くことにした

手を伸ばし力を込めた瞬間霞は口を開いた

「初めまして深娜ちゃん。深娜ちゃん綺麗だね」

加弥は廊下から全力疾走してウエスタンリアットをぶちかましたしかし霞は軽く避け、加弥は空振りよろしくひっくり返ったにつこり笑う女顔の霞は、後を追ってきた美鈴をひよいと膝の上に乗せ笑顔で口を開いた

「改めて言うけど初めましてみんな。私は雫。よろしくね」

にこやかに笑う霞改め雫は人形みたいに膝の上に座る美鈴ちゃんに抱き付く

「美鈴ちゃんかゝわいゝ」

「ひゃあああ！」

一歩遅れて洸夜も到着

「あゝ！霞君何してるの！何してるの！」

「わゝ洸夜ちゃんも可愛いゝ。こつち来てよゝ」

「ほええ！えゝつとゝゝゝゝゝゝはい」

イソイソと取り敢えず駆け寄る洸夜に雫は抱き付く

「やゝん可愛いゝ」

「ひゃあううゝゝゝゝゝゝ幸せ」

「かすみいいい！！」

「加弥ちゃんも可愛いゝ。ぷにぷにゝ」

「ぷにぷにゝ」

割とカオスツてる空間をクラスの皆は生暖かい視線で眺めたり無視している

「お兄ちゃん変なの」

「はずれ〜。今はお姉ちゃんだよ〜」

「・・・お熱あるの」

「あの〜。俺忘れられてない？」

「慎く〜ん。取り敢えずどこか逝ってくれと嬉しいな〜」

慎

HP>

<

慎は全滅してしまった  
セーブしますか？

YES ・ NO

ちや〜ららら〜らら〜

お疲れ様でした。このまま電源をお切りください

37・僕と私のみつかせんそうへ高校デビューと可愛いあの子（後書き）

加弥「加弥と！」

洸夜「洸夜の！」

加・洸「テレフォンショッキング！」

加「第2回はゆきしろの若女将、月島恋花さんです」

月「御久し振りです皆様。御紹介預かりました月島恋花と申します」

洸「お久しぶりですね。旅館の時はお世話になりました」

月「私共も大変楽しませて頂きました」

加「中居さん達元気でしたよね」

月「ふふ。御孫様が居なくて相変わらず淋しがっていますよ」

加「それじゃ最後に一言どうぞ！」

月「御孫様、今年の大晦日は二人きりで年越ししたいですね」

加・洸「だめええ！」



38・僕と私のみつかせんそうへカワイイあの子はカワイイ子がお好き》（前書

作者「どうも。成人式後の同窓会で『あれって　だよね。おっさんくさくない？』と遠巻きに眺められて言われたウドの太木です」

霞「どうも。最近深娜の態度が初々しく思える野崎霞です」

慎「うっす。最近みっちゃんの過剰接待に疲弊気味の慎です」

作者「つつわけで霞！お前だけ良い思いしてんな〜ゴラァ！」

慎「そ〜だそ〜だ！このムツツリエロス！」

霞「知るか！」

作者「よって慎共々天罰じゃ！喰らえ！」

慎「俺関係無くね！」

### 38・僕と私のみつかせんそうへカワイイあの子はカワイイ子が好き

ちゃらららちゃちゃらん

おお、慎よ目覚めましたか。神よ、彼等に神の御加護を……

四時限目が始まり、皆は取り敢えずといった様子で黒板に並ぶ文字の羅列をノートに写し、面白くない教師NO1と大絶賛される国語教師の後ろ姿を眺めている者もいれば、周りと私語に励む者、はたまた机に突っ伏し爆睡する者や掃除ロッカーの前で踞り目尻に涙を浮かべふて腐れる者もいる

そんな何処にでもある学校の景色の中、今現在黒猫姫はアニマルチエンジを完了し霞、もとい雫の膝の上で静にお昼寝中である。お昼の日差しが何より眠気を誘うのでしょうか。子供の特権です

「長々と駄文列べて結局何やってんのよ」

「んふふ」。子猫ちゃん可愛〜んだもん。きやは、ぷにぷに〜」

「ん……」

頬をつつかれ軽く身を擦る子猫美鈴ちゃんは頭の位置を直し又静な寝息をたて始めた

「ん〜食べちゃいたいな〜。柔らかそ〜」

「・・・・・・・・」

「いただきま〜・・・・・・・・冗談だよ？」

「冗談の割に眼はマジなんだけど」

雫はえへ〜照れ笑いをし頭を掻く

「だって可愛いのが好きなんだもん。勿論百合とかじゃないから安心してね〜。可愛い男の子も好きだから」

見た目女顔の霞がこんな問題発言をすれば間違いなくBL疑惑が校内を駆け回り、裏報道部と漫画研究会の合作で同人誌が秘密裏に出版されるのは目に見えている

目敏く耳をたてている漫画研究会の一人が物凄い速さでノートにナニかを書き始めたが深娜が知る術はなかった

「え〜それではこの行を大罌さん読んで」

「・・・・・・・・」

「大罌さん」

「・・・・・・・・」

「大罌さん！」

語尾を強める先生に加弥はゆっくり視線を向ける

この時擬音として『ズゴゴゴ』や『ギチチチ』等の生々しい音や機械音を思い浮かべると更にリアルになるのでは是非試して頂きたい  
「何ですか先生」

表情の説明は省くでしょう。想像通りの顔です

「ぴっ！・・・・・・・・その、このページを読んでもらえませんか？」

「・・・・・・・・今ですか？」

今そんな極上スマイルをされても恐怖以外の何物でも無い

「荒れてるわね」

「そだね〜。加弥ちゃんなんだろう〜」

主犯はあえて事実から目を背ける気です

「でもあんな加弥ちゃんもかゝわいゝ」

「・・・・・・」

深娜は然り気無く机を離して視線を反らした

「そ・・・・それでは野崎君読んでください」

「はい」

先程とはガラリと180° 変わり何時もの霞口調でスラスラと朗読を始める雫。此が『猫を被る』なんだろう

そして見計らった様に昼を告げる鐘が鳴り、先生は誰かさんから逃げるように教室を出ていった

「美鈴ちゃん、お昼の時間だよ」

頬をぶにぶにつつかれ眠たげに目を擦る美鈴ちゃんは猫のように伸びをしてまずはご挨拶

「おはようおにい・・・・お姉ちゃん」

「やゝんよくできましたゝうりうりゝ」

全力で抱き付き頬を擦り寄せる雫ともう馴れたのか満更でもない様子の美鈴ちゃん

そして阿修羅神加弥と泣き虫泷夜は素早く駆け付け深娜は無視して一人黙々と昼食中だ

「よう佐々木。相変わらず汚い仕事っぷりだな」

「なあつ、テメエーは豪一郎。何処から嗅ぎ付けて来た」

「ふん。若造が何寝言言つておる。あんな幼稚な計画アホでも分かるぞ」

周りのいかにもその筋の方みたいな連中は素早く懷に手を滑り込ませる

「いかんいかな若造。こんな年寄り相手にいきなりそんな物騒な物出しちゃいかん。佐々木、教育がなつとらんな」

「うるせえ。テメエーがそんな事抜かせる程の善人かよ。『根刮ぎが』」

根刮ぎの言葉に構える連中がざわつく

「ほう。その名を口にするって事はわしが来た意味が分かつておるんだな？」

豪一郎の意味深な笑みに重なる様に木霊する足音。彼等を挟むように近付くのはつぐみと飛高だ

「全然ダメだね。弱すぎたよ。こんなか弱い乙女に負けるなんてつぐみは血と脂のこびり付くトンファーん遊ぶようにクルクル回しながら歩み寄る

「同感だ。佐々木と申したか。我等を相手にするなら百は集めるのだな。無論一対百だぞ」

つぐみ同様赤黒く染まる薙刀を素早く振り刃に付くモノを振り払う佐々木は空気を求める魚の様に口を動かし硬直、部下にも恐怖は浸透し、既に統率などあったものではない

「おいおいお二人さん。わしも入れたら4は必要じゃないかな？」

上着を丁寧に脱ぎネクタイを緩め、上着の内に収められた手甲を丁寧に着ける。軽く力を込めるとシャツ越しにはち切れんばかりの肉体が表れる

「うう・・・うわああ！化け物！」

恐怖に耐えきれず懷から抜く銃を無造作に乱射する男。だが豪一郎は気にする素振りも見せず優々と歩み寄る  
たまに腕を軽く振り銃弾を弾くその姿には余裕しか見えない

佐々木が瞬きをすると豪一郎は視界から消え、代わりに肉が潰れ骨の碎ける音が後ろから聞こえる

振り向く事すら出来ない。振り向いた所で構えていた連中は既に肉片でしかない

恐怖しか無い

恐い

逃げたい

痛いのは嫌だ

死ぬなら楽に

苦痛は恐怖だ

だが彼は既に肉片でしかなかった。心臓を抉られても死なずに生きていられるなら別であるが

「まあそんなわけなんだ。あ、美鈴ちゃんソース付いてるよ」  
「ん……ありがとおねえちゃん」

「にゃあああ。もう可愛すぎ」

抱き付こうとしたら加弥ちゃんソーセイジ付き特製銀色フォークが空を舞う

「ぱくっ」

食べ物投げちゃ駄目だよ。勿体無いもん

「納得いかない！ 雫さん美鈴ちゃんヒキし過ぎ！」

「そうだよ。その……羨ましいな」

「……」

深娜ちゃん黙々食べてるよ。あ、人參然り気無く残してる。好きな  
の？ 嫌いな？

「聞ってるの！ しずくさん！」

皆誰それみたいに此方見てる。いやん恥ずかしい

「おねえちゃん……何でクネクネしてるの」

だって熱い視線を感じるんだもん

「雫さん、隣いいですか？ いいですか！」

わくくし振りに見たこの変態。あゝ御免ね。他意はないよ

「全員少し黙って」

「……」

モキュモキュ。ソーセイジおいし

「雫、さっきの話を纏めるけど。貴女と霞は記憶の共有は無いから  
今この時間全ての事を覚えていないのね」

「そうだよ。夕月さんは霞君と感情面でリンクしているんですけど

私は完全に隔離されてるんです。だから私が何をやっても霞君は全然知らないんです」  
ポヨヨン

「だからこんなことしても霞君は全く知らないんですよね」

モミモミ

いつものメンバーが集まる教室後ろの窓際区域の空間が凍結した  
幸い関係者以外見ていないのが唯一の救いだろう

「深娜ちゃんの柔らかいね。羨ましいな」

「おねえちゃんもそう思う？深娜お姉ちゃんのは私の理想なの」

「うんうん夢はでかく。叶うといいね」

「うん！」

変態が興奮の余り机に頭を叩き付ける音で解凍

深娜、渾身の右ビンタ

加弥、顔面地獄突き

洸夜、広辞苑の角突き

雫。変態バリア

「ぐはああああっ」

慎は死んでしまった



「あ、あんた何やってるのよ！自分がした事分かってるの！」

「乳揉み」

「うつうつるさいうつるさい黙りなさい！！今すぐ消えなさい！」

「うゝん……まだむりぽ」

「滅殺！」

「お、同じく！」

教室中を逃げ回る雫と追い掛ける鬼。周りのクラスメートも面白半分嫉妬半分で眺め、揉まれた深娜は胸元を抑え物凄く深呼吸して怒りやら恥ずかしいやらの感情を鎮静させ、黒猫姫は然り気無く触っていた

「……頑張る」

「ねえ社長。なんで小物相手にここまで徹底的に潰すの？いつもなら部下に任せるのに」

「私も興味がありました。何故佐々木を消したのですか？」

小型ジェットの中、豪一郎は髭を撫でながら暫し考えにふける

「佐々木だがな、ちよいとした男に繋がっておつてな。最もしたっぱもいいところじゃがな」

「それって・・・誰？」

「つぐみ、報告資料と佐々木の機密資料に目を通したか？」

「全然。ひーちゃんがしつかり覚えてるもん」

「怠け者め」

「まあまあ、つぐみっただってひーちゃんの事信頼してるって事なんじゃから」

「セクハラです」

「気安く呼ぶな」

「わし部下に恵まれておるのか！」

ジェット機は着実に日本に近付いていた

そしてはたまた日本

ああ暇。こんな授業つまんないな

「えーっと、それじゃここアレンジして野崎君答えて」

「Makoto was caught cheating on the exam and was severely scolded」

「・・・何て言ったの？俺の名前出てた気がすんだけど」

「『慎は試験でカンニングしているところを見つかり、厳しくしかられた』って事よ。事実かしらね」

「ひでえ！俺カンニングしねっすよ！」

「知らないわよ」

慎は机を濡らし苦悶の声を漏らしている

「それじゃ次はこの文を大甲さん・・・無理？なら先塚さん読んで」

「はい。えっと・・・『I never look at those picture without thinking of those happy days』です」

「はい良くできました。それじゃ今日はここまでです。夏休みも近いからって怠けちゃ駄目だからね」

先生は軽く釘を刺し教室を後にする

あ、もう少しで私の時間終わりだ。また眠ちやうのか

「ねえ加弥ちゃん洗夜ちゃん。私そろそろ寝ちやうからご挨拶状しようかと思うんだけど」

「ふーんだ。知らないもーん」

「えーっと・・・お、お疲れ様でした？」

あゝもう可愛すぎ！食べちゃいたいよー！ああでも我慢我慢。我慢よ私！

「ばいばいおねえちゃん。また今度ね」

「バイバイ。今度一緒にお風呂入ろーね」

「うん！」

突き出された拳はヒラリ

「じゃーねー巨乳深娜ちゃん」

振り上げられた金槌もヒリヒリ

「今すぐ消えなさい。二度と出てこないで」

あゝあ。完全に嫌われちゃった

でもその方がいいのかもね。深娜ちゃんも加弥ちゃんも洸夜ちゃんも慎君もまだ何も知らないから

霞君だって今は知らない。知ってるからこそ今は知らない

「深娜・・・」

「な・・・何よ。戻ったの霞？」

「・・・頑張って。負けないでね」

大丈夫。深娜ちゃんは強いから。皆優しいから

おや？寝てたかな。休憩中に寝るなんて珍しいな

思いつきりのびをして漸く気付いた

「・・・何故に床で寝てる俺？」

天井を見る俺の視界にはいつもの面子が揃っている。見るな恥ずかしい

素早く起き上がり埃を払う。誰だ昨日の掃除当番

「あゝ・・・おはよ？かな。霞だよな？」

「何言ってるんだ。俺は俺だろ」

何故か加弥と洗夜はハイタッチで喜び、憤は何故か非常に悔しい表情を見せる。取り敢えず右の拳でアチョー！

「雫が出てたのよ。覚えてないでしょうけどな」

滑らかな動作で膝をプレゼントしてくれた

「やっとスツキリした。あいつ避け馴れてて殴れなくて本当にストレス溜まるのよ」

「私も一発！」

芯に響くいい拳を頂戴致しました。床で二人並んで流血沙汰なんて洒落にならんよマジで

よろよろ起き上がり八つ当たりでまだ寝てる奴を一蹴り

「深娜、今晚飯抜きね。加弥、一週間俺ん家出入り禁止な。洗夜、今日一緒にご飯食べよ」

頬に手を当て赤面で喜ぶ洗夜を他所に猛抗議の二人。とぼっちりで殴られてこちとらご立腹ですよ

「か、霞、二人だつて雫に散々な目にあつたんだ、許してやったつて。特に深娜殿ばはああああ」

目視不可の鋼の蹴りは彼を軽量物よろしく軽々と蹴り飛ばしゴミ箱にホールインワン

しかしゴミの言ってることが本当なら身内の責任は俺の責任か。まったく雫ときたら

まあ結局許すことで一件落着になった分けですよ

霞君。聞こえますか？

ん、雫か？つかイタズラし過ぎだろ

ゴメンね。初めてだったからついはいしゃいじゃった

まあ過ぎたからいいけど。それでどうした？

左腕を左42°に突き出して掌を広げて下さい  
あいよ

ポヨヨン

雫に言われるままやってみると物凄く柔らかく弾力ある物に触れた

そこで漸く意識覚醒

固まる五人と羨ましいそうに見る子猫

頭の中で笑う奴と羨ましいぞコンチキショオオと叫ぶ奴

俺は聞こえた。隣の彼女の指がパキパキ音を鳴らしギチギチと筋肉が収縮される音を

父さん母さん。先立つ不幸を許して下さい

その日の夕時

「あゝこりゃ全治1ヶ月つてとこかのう。氷裂骨折じゃ」

よぼよぼの医者は震える手でカルテにサインする。おい、スペル違うぞ

「しかしまた何でこんな怪我を？」

「ははは……まあ気になさらず」

改心のビントは唸りを上げ、授業準備室の戸を突き破る威力で放たれた。そしてそのまま棚を薙ぎ倒し今に至る

結局1ヶ月は利き腕が使えないか。ああ、ご飯どうしょ  
病院を後にし、トボトボ商店街を歩く俺と多少の罪の意識を感じたらしい深娜と左袖を掴む美鈴ちゃん。ちょ、ちよっとお願いだからおんぶは勘弁して

家の前には超が付く高級車がドン！と居座り、黒い服の方々が此方に気付くと深く一礼する。挨拶を返し家に踏み込むと爺さんが黒と緑の斑模様の覆面を装着し身構えていた  
「喰らえ孫！フライングクロスチョップ！」

霞HP

「

」

alert！alert！

野崎霞、活動限界です。予備も動きません！

バッテリー充電が完了したのは7時過ぎで、床にヒイヒイ泣きながら踞る老人と踏んだり蹴ったりする部下。そして菜箸で滅多刺する養子の娘

哀れ

「孫！美鈴ちゃんに何を吹き込んだ！3日見ない間に随分パワフルになったぞ！」

「俺は無実だ」

「お爺ちゃん、メツ、メツ、メツなの」

「痛っ！痛いよ娘。爺ちゃん殺られちゃうよ！」

「いいの」

「いいの！」



ふむ。和やかなり

まあそれからは何事もなく年寄りにはトランクに押し込められ、美鈴ちゃんとの暫しのお別れの挨拶である

「ばいばい美鈴ちゃん。いつでも遊びにおいでね。大歓迎だから」

「ありがとうお兄ちゃん。お姉ちゃんもありがとう」

「今度はもつと常識を学んでから来ることね。あんまり変な事は覚えなくていいから」

「うん。ばいばい！」

元気に手を振る美鈴ちゃんを見送り漸く長い三日間が幕を閉じた

「つか美鈴ちゃん三日間で大分変わったね。とにかく元気になった」

「子供はそんなものよ」

清々したと言わんばかりにのびをして家に戻る深娜だが何処と無く寂しそうにも見えたのは気のせいにしておこう

「霞、夕食まだなんだけどどうするのよ」

「・・・・・・あ」

「そついえは無理よね。仕方ない。私が何とかするわ」

深娜は何と無くだが嬉々とした弾んだ声で台所に消えた

お父様お母様。先立つ不幸を御許し下さい

### 3日後のとある会話

「なあ、何か日に日に痩せてきてないか？」

「ふふ・・・気のせいだ。気のせいだよ」

38・僕と私のみつかせんそうへカワイイあの子はカワイイ子がお好き》（後書

作者「どうだ霞！最近栄養摂取偏ってるだろ！」

霞「くう・・・外道が・・・死ねばいいのに」

慎「なあ、なんで俺同世代の皆に蔑まれるの？」

作・霞「知らね」

慎「この世は間違ってる！なあそうだろ？」

作者「読者に問うなよ」

霞「つつか出前いい？」

慎「ねえ！世界は間違ってますよね？間違ってますよね！」

霞「ねえちよつと電話頼む。チャーハンとワンタンスープね」

作「シャラップ！次話お前等出さぬからな！」

番外編・・・傍観者

汝の名を答えよ

我は『傍観者』

汝の役目を答えよ

我は『傍観』に徹する者

汝の眼は何を映す

我の眼には世界の真実を

汝の心には何を映す

我の心には只の虚空を

汝の役目を答えよ

我は『傍観者』

故に我は全てを見つめ

故に我は全てを知り

故に我は心に虚空を掲げ

我は『傍観』に徹する者

内乱による自爆テロ。

死傷者147名

暴行未遂、及び銃刀法違反による現行犯逮捕

繁華街による麻薬の密売

裏路地での集団暴行及び集団レイプ

薬物による発作、幼児死亡。両親共に意識不明の重体

銀行強盗、立て籠りの末警察の強硬突入。犯人三名重軽傷。民間人  
23名無事保護

デモ行進と鎮圧部隊衝突。75名重軽傷

アフガニスタンのAPJ 2752カハヤタミ #瘡や69  
.....  
±%  
.

ふん。コレも使い物にならなくなったか

ならば捨てればいい

ゴミは異臭を放つからな。速く消してくれ

早急に新たな『傍観者』を立ち上げる

下らん。誰か酒を注げ

相変わらず世界とはいっ見ても狂気に満ちているな

誰も貴様の意見など聞いとらん

暇ではないのだ。早々に終わらせよ

早く酒を注げ！俺を待たせるな

『傍観者』はまだか。米国のブタといるだけで胸焼けする

ほう、コレが新たな『傍観者』か

中々可愛いじゃないか。是非欲しいものだ

ゴミが

何処の国のだ。使い物にならなくなったらワシが貰う

失せろ変態野郎が

汝の名を答えよ



我は『傍観者』

汝の役目を答えよ

我は『傍観』に徹する者

汝の眼は何を映す

我の眼には世界の真実を

汝の心には何を映す

我の心には只の虚空を

汝の役目を答えよ

我は『傍観者』

故に我は全てを見つめ

故に我は全てを知り

故に我は心に虚空を掲げ

我は『傍観』に徹する者

黒く汚れ価値を失った宝石は定められた運命に導かれ、己が纏う殻を破る

宝石は己の行く末を知らぬまま、世界が求める先へ流れ行く

宝石は己が生まれた意味を知らぬ。だが宝石は己を産んだ者を知っている

我は『傍観者』

故に我は

### 39・怪我の代価と小さな仕返し（あらすじ）（前書き）

はい、お久し振りです。 目前のGWに財布が心配なウドの大木です  
今回は（あらすじ）編と言うことで次の投稿が本編的なものになります

ですので次の投稿も一歩闇で御送りします。 晴れのち行方不明やノ  
インを期待してた方はもう暫く御待ちください

それではどうぞ

### 39・怪我の代価と小さな仕返し（あらすじ）

生きてます俺

漸く完治致しました。本当に苦勞の毎日で思い出すと泣けてきま

事故から一週間

すいません栄養のある物下さいお腹一杯食べさせて下さい美味しいのを食べさせて下さい

「おいおい、日に日に痩せすぎだろ。ほらこれ食べよ」  
慎母のおにぎりを頬張る

うんめええ

「何で霞だけ糞れてるんだろ？みくなちゃん」  
「・・・・・・・・」

我関せずといった感じでサンドイッチを食べる深娜。単純にそう見えないだけでどちらも割とマジで空腹だと思う

「霞君・・・食べる？」

タコさんウインナーを箸で摘まむ洸夜。彼女から後光を感じてしま  
う程俺は空腹です

口元まで運ばれたタコさんウインナー。微かながら手が震え箸先の  
タコは逃げ出そうと懸命に震えていた

アレか？食べさせてあげようかはいあくんってやつか？

待て洸夜、この場でその行為は非常にマズイ！ほら、なんもして無  
いの椅子持上げてるよこのお嬢さん

咄嗟に慎を見ると凄まじい早さで爽やかな笑みを浮かべ親指を立て  
て俺を奈落に突き落とした

深娜に助けを求めると、既に食事を終え此方を無視していた

何故でしょう、心なしか首筋に冷たい刃を当てられる死刑囚の気分だ  
不味いぞ、早くせねばタコさんが落ちてしまう

ええい逝くしか無いのか

「南無三！」

素早く箸先のタコを頂き、席を素早く飛び退くも壊れたこの身体で  
は満足に動けません

結果捕まりました

「霞！さあ大きく口を開けなさい！」

「待てえ！なんだそのシウマイの上に山盛りの辛子は！誰だ加弥  
に練り辛子のチューブ渡した奴は！ってテメエかチビマッスル！」

「俺は無実だ」

「クソム力つく程に爽やかに笑ってんじゃねえ！夜喜さんに虚偽の  
報告するぞ！」

慎は暫し未来予想をし、その場に卒倒した  
そして間も無く俺も悶絶の末卒倒した

更に一週間

先週本格的に生命の危機を感じた俺は何故か台所への立ち入りを禁止されていたのだが強行突入した。生きるためです

「何よ」

「俺も立ち合わせてもらう。本当に毎食パンは嫌だからな」

深娜も若干抵抗したが遂に折れ、深娜おねーさんのお料理教室の始まりである

「とまあ流れで来たがお前は料理下手ではないからな。いらん物入れなきゃいいだけなんだよ」

反論は許しません

決められた材料以外使わなければ十二分に美味しい料理を作れる筈なのです。それを意味もなくその他の調味料を無駄に使うから酷くなるのだ

「黙ってたが明日お嬢来るからな」

「！！」

「料理はお前が作る。もし何か混ぜてみる。どうなるか分かるだろう？」

砂糖、塩、酢、醤油、味噌、辛子、洗剤

明らかにに入れてはいけない物が有るがその他の調味料も入れ過ぎは非常に不味い

「俺は知らんぞ。お嬢に恩が有るみたいだが仇で返すのか？」

「・・・・ぐっ」

何故深娜はそこまで考えねばいけないのだろうか。何事も挑戦とは言うが無知の挑戦は無謀以外の何物でもない

数分の脳内審議の末、深娜が折れたのは言うまでもない  
そして翌日も誰一人倒れる事無く無事食事は閉幕した。これには  
後日談もあるが又日を改めてお伝えしよう

更に日にちは進み

久し振りにのんびりと夕時を過ごしている

何を隠そう深娜が料理をしているからだ

前回のお嬢訪問以来率先して台所に立つようになった深娜はその隠  
れた才能を開花していた

まあ決められた材料以外使わなければいいだけなんだが

『いただきます』

程なく出来上がった夕飯は、利き腕の使えない俺にも優しいクリー  
ムシチューとコーンポタージュ

大変美味です

「うん。本当に美味しい。やれば出来るじゃん」

「それでもまだあんたの方が美味いじゃない。治るまでだからね」  
相変わらず素直じゃないな。まあそれが深娜らしいと言えばそうな  
んだが

これなら皆を呼んでも問題は無いだろうな

と言うことであっという間に土曜日の夕方

「久し振りにお泊まり会だあゝ。イエイツ！」



「い、いいい」

無理に合わせなくていいよ。洗夜は洗夜のペースでね

「あ……うん」

うんうん本当に可愛いな洗夜は。意味もなく頭を撫でると意味もなく加弥がチヨークスリーパー

「かゝすみ。捻るのと外すのどっちがいい？」

どちらを選んでも待つてるのは車椅子生活ではなからうか

「じゃあ加弥を膝枕って事でどお？」

「早く家に入る」

変わり身の早さは天下一品ですな

皆が中に入ったのを確認し、自分も入ろうとすると深娜に襟を掴まれた

「グエツ」

「何勝手に呼んでるのよ。料理する身にもなりなさい」

「あえて反論するが今まで俺はしてきたが？」

「あんたは別でしょ」

「うわ傷つくなその言い方。お嬢に虚偽の報告するぞ」

「その時は覚悟なさい」

「暴力は何も生まない。暴力はんた……」

玄関から伸びる手は男を掴むと有無言わせぬ間に引き摺り込んでいった

「うわあ、や、止めてくれ……うひゃあああああ！」

程なく開いた扉の奥で悶絶する男と何処か満足気な二人の少女が居た

深娜はあえてスルーした

さてさて台所は深娜に任せてもいいようだし俺は接客に力を入れますか

膝の上では既に睡眠モードの加弥と寄り掛かってウトウトし始めた  
洗夜

慎はシュミレーションゲーム『ふたまた』たる男としてどうかと思う  
最低なゲームに励んでいる  
あ、主人公刺された

相変わらず呑気なものね

鍋に具材を詰め弱火で火を通す。季節外れではあるが今日の献立は  
キムチ鍋に決った  
箸を使えない男が要ることだしたまには良いだろう

先日いらした御嬢様の話だと、あの校舎には幾つか地図には記載されて  
いない部屋が存在する。校長室がいい例だ

私達で調べ回ったが最初に貰った地図で調べていない部屋は無い

だが今回一層目のプロテクトが解除され新しく出てきた地図には知らない  
部屋が増えていた

近々霞達と話し合う必要があるし完治したら直ぐに調べよう

『ちよつ加弥！寝惚けてるのか！ヤメツ止めてくれ！噛まないで！』  
『ひやむ・・・おかし・・・おかし』  
『うわあああ！洗夜もかああ！』  
取り敢えず霞の椀にキムチの素を注いでからにしよう。後慎のにも  
『大川料理長！何かとばっちり受けそうな気がするんですが！』

ドバドバドバ

その夜いざ睡眠へと思っていると突然の来客

「・・・何だ、何かおかしいか？」

「高校にもなつてネコがプリントされた寝間着はどうかと思うわよ」  
態々それを言いに來たのか？追い出すぞ

「そんな事よりこの前はよくも御嬢様が来ることを黙ってたわね」

「うわまだ根に持つてるのか？いいじゃん料理上手くなったし」

深娜は腕を組み不敵に笑う。まるで勝ち組の様に

「近々御嬢様の誕生日があるのよ。当然既に出席扱いにしてるから」  
「・・・」

イヤーな顔をした瞬間目の前が真っ赤にいいいいいいやあああ  
あああ！！！！

叫びたい！叫びたいけど近所迷惑ううああアアあああああ！

「何て言えばいいか分かるわよね？」

「出席します是非出席させてクダサイいいい！」

「良くなりました」

漸く解放された俺は床に倒れ怨めしげに深娜を見上げる

むにいつと踏まれました

「日時は後で教えるから逃げないでね」

帰り際もう一度踏みつけ深娜は部屋を後にした

俺に慎の様な変わった快樂が無く心底ホツとした

そつ、こんな日々を乗り越え今の俺が居る分けである

頑張った俺！

利き腕も完治し、朝から腕によりを掛けて作り上げたお弁当。当分これを越える物は作らないだろう

「霞、夕飯は作らなくていいからね」

突然隣で林檎のウサギを箸で摘まむ深娜がそんなことを言った

「ん？夕飯作ってくれるのか？」

「今夜御嬢様の誕生日だからよ」

「ぶふううう！」

「ぎゃあああ！」

思わず飲んでたお茶を向かいの慎に吹き出してしまった  
ああ勿体無いなお茶

「おまつ！女の子ならまだしも男に吹き出されるお茶なんざ嬉しくも何とも無いわい！」

「同感だ。だがそれを平気で口に出せるお前は新性なアホだ」

久し振りにチビマッスルVSキリンのデスマッチのコングが鳴り出そうとしたが加弥と洗夜の乱入で即終了となった

無論床行きは慎だ

「ねえ深娜ちゃん、誕生日会って？」

「御嬢様の誕生日よ。悪いけど招待されてるのは二人だけなの」

ぶーぶー文句を言い出す加弥を言葉巧みに宥めながら逃亡を企てる

無論その度に殴る蹴る絞める引き摺るから具体的に抜き手や目潰し合気など様々な武道を駆使し拘束する我等が女王様

すいません勘弁してください目の前が真っ赤にiiiiiiiiiiや

ああああああ！！

下校時にも色々理由を見付け逃げ出そうと試みるも首輪を付けた犬（実際今腕にロープ）が如く逃げられません。トイレぐらい外してよ

「僕は無力だ」

「さっさと支度なさい」

玄関で崩れ落ちる俺はもう逃げる術を失いました

行きたくねー

「光栄に思いなさい。御嬢様の誕生日に招待されるなんて大企業の社長でもそう呼ばれたりしないのよ」

別に行ったからって何か有る分けてもないしめんどくさいし

「包丁何処だったかしら・・・」

「わぁ今スゲーお嬢を祝いたくなっただけ！早く行こうよ！」

僕は無力だ

### 39・怪我の代価と小さな仕返し（あらすじ）（後書き）

加弥「加弥と！」

洸夜「洸夜の！」

加・洸『テレフォンショッキング！』

加「今回のゲストは何故か深娜ちゃん！」

深「作者が急に決めたのよ。それで、何の用？」

洸「用って言うかここでは本音で一言言ってもらうコーナーなんです」

深「なら言わせて貰うけど。霞、帰ったら覚悟しときなさい」

加「お誕生日に何あったの！まさかお嬢様って人と！」

洸「ふえええん。酷いよ霞君。信じてたのに！」

『霞、覚悟なさい！！』

#### 40・幸と酷の birthday (前書き)

作者ーいやー長引きまして本当に申し訳ありません。言い訳しません現場のせいです

霞ーホント死んでくれないかな。いつまで生きてるつもりだ  
作者ー社会的に忘れられるまで

深娜ーなら後少しじゃない。早く消えれば

お嬢ーご自分の価値を分かってまして？

作者ーメタクソ言うなお前ら。次の話で羞恥のドン底叩き込んでやる

ー同ー消えれば良いのに



## 40・幸と酷の birthday

日は遡る

それは御嬢様がいらした夜。初めて御嬢様に料理を作ることになった私は今までに無い程緊張していたと自覚している。過去これ程緊張した事など思いつかない

いくら隣で霞が助言しても作るのは私。包丁を持つ手が震えてしまう

「深娜、見てて非常に危なっかしい」

「うるさい。好きで震えてるわけないでしょ」

呆れた顔の霞は腰に手を当て居間を盗み見ている

私には見えないが明日の打ち合わせをしているのだろう。御嬢様と幸澤の話し声が聞こえる

御忙しい最中態々いらした御嬢様に失礼な物を御出しする事は出来ない

「みーなー。手が止まってる。料理中に瞑想は危ないぞ」

手に持つ物を投げつけようかと思ったが物が物なので我慢した

「そこまで緊張するな。俺に食わせると思えばいいだろ」

「失敗が許されないでしょ。貴方みたいに器用じゃないのよ」

すると霞は自重気味に笑い棚に寄り掛かる

「昔はボロボロに下手くそだったさ。母さんが無表情で直ぐ様トイレに立つぐらい」

目を細め昔を思い出す霞

「それから毎晩母さんの横で見てたもんだ。誰も居ない時にこっそり作ったりしてな。それでもここ最近になって漸く成果が出てきたくらいだ」

霞は片手で器用に卵を割り、フライパンを取り出しコンロに乗せる  
「お前の方が多才なんだ。これぐらい軽くこなしてお嬢をもてなしてやれよ。深娜料理長」

笑う霞にボディーをお見舞して再度包丁を構える

少しだけ霞に感謝した

シンプルにオムライスでいいだと欠伸混じりに提案した男は数秒後には床に伏して悶絶している

しかし今出来るであろう料理はこれしか無く、苦渋の選択を選ばざる得なかった

御嬢様の前に出されたオムライス。出来立てのオムライスを見下ろす御嬢様は霞に視線を送る  
すると霞は徐にケチャップを取り出すと『ドナドナ』と書いた

怪我人であるのも忘れて本気で蹴り倒した  
運良くソファーに倒れたが動く気配が無い。追撃をしようとしたが御嬢様と幸澤に止められた

「まったく。私は誰が作ったか聞きたいだけでしたのに」

御嬢様は溜め息混じりに崩し、口に運ぶ

どんな評価を頂くか内心焦りながらも平静を装う

「深娜」

「・・・！」

突然名を呼ばれ緊張の余り強張る

「美味しいわよ。これは私の完敗ね」

美味し

その一言が何より嬉しかった。ほんの少しだけでも御嬢様に喜んで頂けた

「ありがとうございます。そう言って頂き幸いです」

「相変わらず堅いわね。早く霞を起こして皆で頂きましょう」

食事も済み、幸澤から新たな情報を受け取り目を通す霞。時折幸澤と意見を交換している

そのやり取りを見ていると御嬢様が指で軽くテーブル叩く直ぐ様意識を御嬢様に向けると小さな声で話し掛けてくる

「そろそろ日が近付いて来たわね」

その意味を悟ると御嬢様は一度紅茶を飲み満足そうに頷く

「今までに何度言っても裏方に回ってたのよね」

「それは・・・」

「今回は既に貴女と霞の名前を招待客のリストに載せておいたわ」御嬢様は目を細め主人として命令を下した

「今年は客人として祝ってちょうだいね」

「・・・畏まりました」

それから日は進み、いよいよ今夜御嬢様の誕生日に出席する

「はああああ。めんどいよおおお」

今すぐこの男を血の海に沈めて殺りたいが時間に余り余裕がない

「だりいいいゴポオ！」

ただ殴る事にした

「霞、余り時間が無いの。スーツは幸澤が手配してるから今すぐ準備しなさい」

「がああ！イエツサアー！だから頭を離して！」

渋々離すと頭を押さえふらつく足取りで立ち上がる霞は何故か加弥さんに電話を掛けた

「もしもし。ちよつといいかー」

『どーしたの？』

「髪切っていい？」

『ダメ！』

「何故に駄目なんだよ。これからお嬢の所行くんだよ」

『ダメつたらダメエ！』

「ええ！理由言つてよ」

『切つたら毎晩耳噛みに行くからね！』

「やめてくれよ！」

『ブツツ・・・ツーー・・・ツーー・・・ツーー』

頂垂れる霞は力無くケータイをソファーに放り髪に手を当てる

「・・・絶対お前より長いよな」

「・・・なんで切らないのよ」

「何故か加弥が切るなと連呼してな。前ほんの少し切つたら公衆の面前で『エッチ！』って叫ばれた。それから三日間地獄だった」

霞は踞り頭を抱え震えだした。時折『蹴らないで』『殺さないで』と漏らすが聞かなかつた事にして蹴った

「時間が無いの。今すぐ支度しなさい」

ぐったりする霞は深々と溜め息を漏らすとゆっくり起き上がる

「後何分？」

「20分以内よ」

20分かと呟く霞は素早い足取りで何故か台所に姿を消した

まさか逃げたかと思い直ぐに後を追う

「・・・？」

そこに霞の姿は無い

探そうかと思ったが余り時間が無い。逃げたなら血祭りにしよう  
そう誓い私も身支度に部屋へと向かった

~~~~~10分後~~~~~

居間に来た私は絶句した

未だ戸に手を掛けたまま中央に立つ男を見ている

グレーのスーツを完璧に着こなし伸びた髪は後で束ね悠然とコーヒ
ーを飲む姿。私に気付き振り向く男。霞はダルそうに溜め息を漏ら
しカップから口を離す

「なんだ、ドレスに着替えないのか？」

「・・・え・・・か、霞よね」

「これが慎に見えるか」

「見えないわ」

そこは即座に否定させてもらう

「つつか久しぶりに袖通したから着心地悪い」

飲み干したカップをテーブルに置き呆れ顔でこちらを見る

「・・・ほんつと洒落つ気無いな。少しは化粧したらどうよ」

「うるさい。御嬢様の誕生日に私が出ることで事態おかしいのよ。それにドレスなんて一度も着たこと無いからね」

「うわ勿体ねーと無感情に漏らす霞は手早く戸締まりを確認し、ふとこちらに視線を向けると髪に手を伸ばしてきた。無論叩き落とした「イツツ。なんだよ。折角後で跳ねてるの直してやろうと思ったのに」

「なら先に言いなさい。あんたのそういう行動案外誤解を招くわよ」

「はいはい御忠告痛み入ります。で、直してやるか？」

「時間がないし早くしてよ。そろそろ迎えが来る頃だから」

霞に背を向けるとそつと髪に手が触れる

ゆっくり丁寧に仕上げる霞に男の癖になんでこんなに上手いんだと疑問を抱いていた

程無くチャイムが鳴り、二人で玄関に向かう。戸を開けると20代前半の青年が深々と一礼する

「御迎えにあがりました。本日は菊池御嬢様の誕生日に出席して頂き誠に有り難う御座います」

「山下。相変わらず早口ね。少しは進歩したら」

その一言に青年は苦笑いしながら頭を上げる

「すいません先輩。やっぱ緊張しちゃって」

霞は私と山下を交互に眺め首をかしげる

「ん？深娜が先輩？」

「あ、初めまして。自分は山下明夫って言います。先輩は小さい頃から御嬢様の御側に居たんでうちの中じゃかなり長いんですよ」

「そんな事はいいのよ。早く行くわよ」

「す、すいません先輩。それではどうぞ御乗り下さい」

山下に促され車に近付く。その前に山下に振り返り

「それから元気そうね。しっかり御嬢様を守るのよ」

「・・・・・・へ・・・・・・へええええ!!」

何を狂ったか突然叫ぶ山下は霞の側に素早く移動し小声で話している。まあ聞こえてるけど

「ほ、本当にあの先輩ですか？今まで一度も『元気そうね』とか優しい言葉言われたこと無いんですけど」

「失礼な男だな。そりゃまあ昔は怖かったけど」

よし、帰りに二人を殴ろう。そう誓い車に乗り込んだ

車から自家用ジェットで移動。

どれだけ遠いんだよと外の景色を眺めながら時間を持て余す

「あゝ深娜。いったい何処まで行くんだ。まさかトランシルバニア地方とか言わないよな」

「まさか。そんな遠くないわよ」

その答えにほっとする間もなく次のお言葉が降りかかる

「日本国外だけだね」

おいおいまでまで。国外かよ。明日学校出れるかなー

「学校には休むって連絡済みよ」

さいですか。手回しが速いようで

不貞腐れてると向かいに座る山下が怪訝そうに此方を見ている

「・・・失礼ですが野崎さんは一度お会いしましたよね？沖縄ではて？沖縄でということは首里城だろう。つまり夕月が

『おうおう思い出した。あの両手で構えてたアホだ』

「夕月が『両手で構えてたアホだ』だそうだ」

「うぐっ、いきなりそれ言うっスか！勘弁してくださいっス」

いきなり語尾が変わったが無視しとこ

「そりや実戦的なのはアレが初めてだったっスけど・・・とにかく蒸し返さないでほしいっス！」

「『だが断る！』」

「先輩助けで下さいよ！俺じゃ野崎さんに勝てないっス！」

後輩の悲鳴に近い協力要請に相変わらず冷たい視線の深娜

「職務怠慢に客人に対する態度。それからその軟弱さ。後でトレーニングDを10セットこなしなさい。監視に紗智を付けるから」

その言葉に真っ白になる山下を眺め暇を潰すことにした

それから更に一時間空の旅の後、漸く目的地の島に到着した

ライトアップされた道を進むと一際明るく照らされた大きな建物が・・・と思いきや予想より若干控え目な建物だった

「あれ？お嬢にしては謙虚だな。それとも倉庫代わりか？」

「違うわ。お嬢様はいつも親しい方や極一部の客人しか呼ばないのよ」

山下に先導され玄関まで続く赤い絨毯を歩いていくと、そこにはス

「ツ姿のお嬢親衛隊が整然と並び深々と礼をしていた
『ようこそ御越し下さいました』」

頭の中で何人か顔見知りだと夕月が呟いているが別に闘う訳でもあるまいし聞き流す

「よっ！姉さん待ってました！」

突然整列していた一人がおどける
それを期に全員が駆け寄ってきた。つか仕事しろ

「先輩元気でしたか！」

「せんぱい。寂しかったですよ。連絡下さいよ」

「相変わらず仏頂面ですね。笑って笑って」

「お姉さま！会いたかったああ！」

数歩離れた位置でこっそり伺っていると何時の間にもやら幸澤が隣に居た

「やあ霞君。態々来てくれてありがとう」

「逆らえんのでな。しかしスゲー人気だな」

「そりゃあね。君の家に行く前は実質彼等のリーダーだったからね。厳しかったけど人一倍御嬢様の事を考えてたから皆からある意味尊敬されてるのさ」

周りに揉みくちやにされてる深娜を眺めて視線をずらす。さっきから深娜にタッチしてる子がいるが絶対アブナイ子だな

「つかいいのか？客人の迎えは」

「君等が最後だからね。ほら皆も持ち場に戻って。これからが忙しいんですよ」

幸澤の声に名残惜しそうに離れる周りと引き擦られていく少女
深娜は深々と溜め息を吐いて疲れた表情で歩いてくる

「・・・助けなさいよ」

「無理」

手の甲をつねられた

その後深娜は一度着替えると言い残し足早に裏手に歩いていった
俺は幸澤の後に続き会場へと向かう。途中会うボーイからメイドに
会釈されながら何年か振りの社交に繰り出した

程無く照明は落ち、スピーチを務める幸澤と中央に立つお嬢

遠目ではあるが相変わらず人形みたいに綺麗な顔立ちだ。鮮やかな
色合いのドレスに身を包み優雅に微笑んでいる

『おお。ついにお嬢のご登場か。うわ派手っ！』

ああ。相変わらず格好は豪勢だな

『つか入れすぎだろ』

入れすぎ？何が

『気付かねーならいいだろ。後の楽しみだ』

そんなやり取りを他所に進行はスムーズに進み、何時の間にやら乾
杯の音頭にまで進んでいた。つか深娜何処行った

「皆様。今宵は私の為に御集まり頂き誠に有り難う御座います。皆
様に祝って頂き心から嬉しく思います。今夜は存分にお楽しみ下さ
い。乾杯」

グラスを片手にお嬢はそう宣言し、周りは談笑と騒がしく動くボー
イとメイドで埋め尽くされた

俺はグラス片手に脇に寄り、周りを眺めている。老若男女様々だが皆お嬢を慕っているんだろう

「うむ。お嬢も中々交友が広いんだな」

「御嬢様を馬鹿にしてるの？もしそうなら……」

「うおおおびつくりしたあ！脅かすなよみい……な？」

そこにはお嬢にも引けをとらない黒いドレスのお嬢さんがいた若干紅く染まる頬と怒りゲージギリギリのつり目。まあ何と無く予想がつくが

「あいつらったら……個室に頼んでおいた服の代わりにこんなのを置いといて……」

手に持つグラスを砕かん勢いだが場が場だし大丈夫だろ

「初めて着るけど……変じゃない？」

「いや、スッゲー似合ってる。夕月もさっきから驚喜しっぱなしで零に連れてかれた」

俺の中で何が起きてるのだろう。知らぬが仏か

「そう……それよりお嬢様は？」

「お嬢ならステージ近くで挨拶してまわってる。今はまだ行かなくても大丈夫だろ」

「そう。それとくれぐれも御嬢様に失礼の無いようにしなさい」

「あいよ。軽く挨拶してすぐ撤退する予定だ」

グラスを煽り視界をずらすと目の前が茶色い毛で覆われ腹部に重い衝撃と『きゃうっ！』という悲鳴が聞こえた

倒れはしなかったが若干ワインが零れ茶色い毛のクマの人形を汚してしまった

「すみません。お怪我はありませんか!？」

グラスを深娜に預け直ぐに人形を抱え持ち主に手を差し伸ばす

「I'm very sorry. I wasn't thinking about what i was doing」

流暢な英語の返答と共に小さな手が差し伸ばす手に掴まる

腰まで伸びる銀髪に蒼く透き通る瞳。ふっくらした顔立ちでとても

可愛らしいドレスに身を包んでいる。美鈴ちゃんより小さい背丈で一生懸命人形を抱えていたのだろ

「I'm very sorry for staining the doll」

俺の返事に少女は目を見開いて驚き、直ぐに首を横に振る

「ごめんなさい。私が悪いからお兄さんは悪くない」

「ん、日本語が話せるのかい？ごめんよ。お嬢さんへのプレゼントだろ」

「はい。お姉様に渡そうと思って急いでたので。ごめんなさい」

「こちらこそごめんね。一緒に行って謝るよ」

人形を抱え女の子の手を取りお嬢の所へ向かおうとすると凄まじい速さと力で深娜に首を掴まれた

「あ、貴方何してるの！早く手を離しなさい！」

「そつくりそのまま返す。く、苦しいぞ」

深娜は素早く女の子の前に回り込み深々と頭を下げる

「ヘレナ様。ようこそ御越し下さいました。御元気そうで何よりです」

頭を下げる深娜にヘレナと呼ばれた女の子は驚きの声をあげる

「お姉ちゃんなの！凄い綺麗だよ！」

勢い良く深娜に抱き付いてはしゃぐヘレナ嬢

「very very beautiful! How lovely!」

「へ、ヘレナ様。御辞め下さい。ドレスが汚れてしまいます」

そんな事も気にせず抱き付きはしゃぐヘレナ嬢と困り果てる深娜人形を抱え微笑ましく眺めている

うん。癒される

「か、霞！御嬢様の所に行くわよ。急いで！」

ヘレナ嬢に引つ張られ人混みに消える深娜を、俺は笑いながら追った

人の間をすり抜けお嬢の元へと向かう。時折ボーイに扮した親衛隊に深娜についてあれこれ聞かれたがその度に小柄なメイドが人をも捻り殺せそうな眼で睨んでくる

無論親衛隊は忽然と姿を消し、メイドも人混みを笑顔で歩き去って行くのだった

さてさていよいよお嬢との御対面な訳だ

早速目に飛び込むのは派手できらびやかなお嬢。そしてお嬢に満面の笑みで話し掛けるヘレナ嬢。そして畏まる深娜

その隣で微笑む幸澤

そして遠巻きに微笑むお客様一同

恐らくいつもこんな感じなんだろうな

「あら、どちらのお嬢さんかと思ったら霞じゃない。良くいらしたわね」

本当なら容赦無く罵声を浴びせただろうが今日の主役はお嬢。我慢だ

「御招き頂き感謝するよお嬢。誕生日おめでとう」

「あら、貴方からそんな言葉が聞けるなんて夢にも思わなかったわ。そのクマさんは手作り？」

「お姉様。私のプレゼントですよ！でも私のせいで少し汚れてしまいました」

しゅんとするヘレナ嬢にお嬢は優しく頬にキスする

「貴女のその気持ちだけで本当に嬉しいわ。ありがとうヘレナ」

「……お姉様！」

嬉し泣きのヘレナ嬢はお嬢に抱き付き恥ずかしいのか顔をすっぱり

隠している

お嬢も優しく頭を撫で泣き止むまでヘレナ嬢を抱き締めていた

「霞君。私が預かるよ」

横に立つ幸澤にクマを渡しガチガチに緊張している深娜に話し掛ける
「で、此方のお嬢さんはお嬢とどういった関係なんだ？」

「メルル・ウインデット・ヘレナ様。御嬢様の親戚に当たる方よ。

ヘレナ様の御両親は既に亡くなられて今は母方の祖父と一緒に暮らしているわ」

「そうか。小さいながらも頑張ってるのか」

「それにヘレナ様はああ見えて電子工学に大変秀でた方だね。今では大学の卒業論文を御愛読なさっていてね」

幸澤もにこやかに笑いながらとんでもない事をサラツと言つてのけたな

ヘレナ嬢は最近学校であつた事や興味深い論文を見付けたとか輝く笑みで聞かせお嬢はとても楽しそうに聞いていた。すると人混みから長身に銀髪、皺の刻まれた優しそうな顔付きと立派な髭。ステッキを片手に現れた老紳士はお嬢の前で軽く会釈する

「御久しぶりですな麗奈嬢。御誕生日おめでとうございます」

「ウインデットの叔父様！御忙しい所を態々御越しくださつて」

ヘレナ嬢の祖父らしき老紳士は眼を細め本当に嬉しそうに笑う

「君の御母様の若い頃に本当に似ていらつしやる。御美しくなられましたな」

「ふふ、イヤですわ世辞なんておっしゃつて。叔父様も御元気そうで何よりですわ」

「可愛い孫の婿が見付かるまでは死ねませぬよ」

当の孫は真っ赤な顔で恥じらっている。うん、本当に可愛いなあもう

「ヘレナ。私は少し麗奈嬢と話をしなくてはならないのでな。幸澤君の傍を離れないでおくれよ」

「分かりましたお爺様。えっと……ゆ、幸澤さん。よよろし

くお願いします」

真つ赤な顔で幸澤の隣に移動したヘレナ嬢に幸澤は優しく手を差し伸べる

「此方こそ宜しく御願ひ致します。御嬢さんお手をどうぞ」

紳士に振る舞う幸澤に促されお嬢のとは別の意味で笑らうヘレナ嬢は人混みに消えていった

「何時の世も恋する乙女は美しきかな」

「朴念仁が何言ってるのかしら？二人の気持ちに気付かなかった癖に」

そこを即答されると非常に痛い部分もあるのだが事実だから否定しようが無い

「でもな・・・気付かないでいるより気付かないフリの方が苦しいさ」

「ん、何か言った？」

苦笑いしながら首を横に振る俺を、深娜は不思議半分馬鹿にしてんの半分で軽く睨んできた

何処吹く風の如く流した俺は深娜を残しその辺をぶらぶら歩き出した内装から細かな装飾品までどれを取っても一級品の部屋を後にしてバルコニーに出る

夜風が涼しく空に浮かぶ半月は世界を照らす

「悪いなあ。態々こんな場所に来てもらって」

「貴方が態々私を見てからバルコニーに来たからよ。そうでなければ来ませんもの」

お嬢は胸の前で浅く腕を組み、相変わらずの上から目線で話し掛けてくる

「それで、どうしてこんな所にお呼びになったのかしら？」

「いやね、あの場では渡せないプレゼントだったものでね」

するとお嬢はクスクスと笑いながら近付いてくる

「あの子にも見せれないプレゼントなんて。さぞや素晴らしいのでしょぅね？」

「さあね。取り敢えず夕月からメッセージ預かってる」

夕月の名前に一瞬顔を引き攣らせるが直ぐに元の柔らかな表情に戻る
「そ、そう。貴方が霞なんですから夕月みたいな行為はしませんものね」

彼奴と同系列にするな。力は惨敗しても人としては遥かに上だぞ

そう説教しようかと思つたが今日はお嬢の誕生日、我慢だ我慢

「つたえるぞ」お嬢。誕生日おめでとう。相変わらず派手だね。その癖そんなに仕込んで悲しくないか？どう足掻いても深娜っちやコウちゃんには勝てないんだから諦めなつて。大体の男なら許容範囲だしスレンダーなら体重気にしないでいいじゃん？ひやははそれじゃ牛乳飲めよばいびー」以上だ」

つまり入れすぎつてアレの事ね。いや確かに悲しいよな。見栄とか意地つて時に残酷だな

「・・・・・・・・・・・・・・・・グスッ」

泣いちゃつた！

「私だつて・・・・努力したんですもの・・・・でも・・・・でも・・・・」

どうやら夕月メッセージはお嬢のトラウマに直撃したらしい。深娜とお嬢親衛隊居なくて本当によかつた

「あー・・・・その、なんだ・・・・ドンマイ」

「処刑しますわよ！」

お嬢の眼がマジだったので夕月が変わつて深く謝罪しておいた雫さーん。出番ですよー

（はいはい。任してちょうだい）

夕月絶叫ボイスをBGMお嬢が落ち着くのを待つ。

ホント俺の中どうなってるんだろ

「お嬢、落ち着いた？」

「・・・落ち着くとおもいました？」

「いえ全然。つうわけで修学旅行の時の貸しはこれで無しな」

「・・・くつ。分かりました。約束は守りました」

「感謝する。それでは俺からのプレゼントでも贈らせてもらおうか」
バルコニーやお嬢の後ろ、ホールで深娜や親衛隊が居ない事を確認してから切り出した

「ここに宣言する。お嬢、何が有ろうと、何が起きようと、必ずゼオンを見付けてみせる」

「・・・それが貴方のプレゼント？」

「ああ。前は脅し半分嫌々半分だったがこのからは違う。深娜や幸澤にとつてお嬢は総てを賭けてでも護り通す存在。そして深娜は俺の家族だ。なら俺も総てを賭けて探し出してみせる。お嬢が笑えば深娜も笑う。だから探し出してみせる」

お嬢は暫し呆気にとられ、そして小さく笑った

「ふふ。あの子は本当に大切にされてるのね」

「家族を大切にすることは特別でもなんでもないさ。当たり前的事だよ」

お嬢は嬉しそうに眼を細め、ゆつくりと俺の隣に歩み寄る

何を考えているのか、眼を閉じ押し黙るお嬢

夜風は心地よく、ホールとバルコニーとはまるで別世界の様な錯覚をしてしまう

「お父様は・・・いつも笑っていらした」

お嬢は唐突に話始めた。昔の記憶に浸るように

「いつも大きくて皺だらけで、それでいて力強く優しい温かさのあ

る手で頭を撫でて下さった」

「・・・・・・・・」

「孫と取られてもおかしくない程歳は離れていたけれど、お父様はいつまでもお父様でした」

お嬢の眼は今は亡き父親を今でも尊敬する様に、力強く輝いている

「これから話す事は貴方の胸の中に閉まっでいて。あの子にだけは知られてはいけないから」

「・・・・・・・・ああ」

「お父様は・・・殺されたのよ。今だからこそ分かる。決して治らない病では無かったから」

お嬢は俯き、微かに声は震えている

「何も知らなかったから。あの頃の私は余りにも無知で・・・無力で、周りに任せるしか出来なかった。大人を信じるしかなかったから」

お嬢の握る拳は震え、込める力も増していく

「私がつと賢ければ、私がつと信頼できる部下を持っていたら、私にもつと力があれば・・・お父様は今でも優しく笑って下さったかもしれない」

お嬢はそれでも笑い顔をあげる。何時もの様に美しく優雅に微笑む

「お父様が残した最後の言葉・・・ゼオンを辿るしかもう道は残されていない。なら私は利用できる総てを使い、惜しむ事無く全力で探し出してみせる。お父様が残した意味を見付けるために」

「・・・・・・・・」

「だから命令するわ。何が有ろうと何が起きようと、必ず見付けなさい」

「了解したお嬢。家族にとって大切な方の願い。心に刻んでおく」

俺は半月の浮かぶ空を眺める。小さな星の群れの輝きは月光より遙かに劣る。だが確かたる存在を示している

「お嬢、雨に濡れるぞ」

「たまには良いものよ」

俺はそつとお嬢の柔らかい髪に手を乗せる

お嬢な何も言わず、ただ雨に濡れていた

お嬢は化粧直しに行くと言い残し、別室に姿を消す。そこへ間髪を入れずにバルコニーに飛び込んできた深娜は殴り掛かってきた

「つてあぶなっ！落ちたらどうするんだよ！」

「御嬢様に何したのよ！泣いてたわよ！」

恐るべし洞察力。顔を合わせて無いのにそこまで分かるか

「いやまあなんだ、俺のプレゼントに感極まってホロリときたんだろ」

「突き落とされたい？」

「いえ全然」

眼がマジだ。いやしかしお嬢の約束もあるしなーでも深娜相手に下手な事いったらマジで突き落とすだろうなー怖いなー

「……馬鹿にしてるのかしら？」

「理由は聞くな。お嬢との約束なんだな」

深娜は一瞬身を強張らせたが直ぐに軽く頭を振り溜め息を吐く

「……御嬢様の意思なんでしょうね？」

「勿論。ああでも夕月は普通にお嬢泣かせたな」

その後10分程手摺前の攻防が繰り広げられ、幸澤と親衛隊数名の乱入により無効試合になった

ありがとう。来てくれなかったらマジで落ちてた

程無く無事誕生日会を終え、そのまま宿泊する事となり、用意された個室はかなり豪華で思わず飛び乗ってしまったふかふかベット。十分に堪能してから夕月に話し掛ける

「生きてるか？」

（……ああ）

精気を感じない。もう見た目やつれてるんだろな

「雫にこっぴどくやられたらしいな」

（あいつ鬼だろ。二時間ひたすら女装して見てるだけとか。生殺しやめろよな）

「見た目は同じなのになんでそんななんだ？」

（いや、あいつお前の記憶からコウちゃん引つ張り出して真似てさ。しかも深娜っち着てたビキニだぜ）

何やらかしてんだあの子は。肖像権ぐらい知つとるだろ

（しかも近付いてくると妙に生々しくドス黒い鉋出してくるんだぞ。もう恐くて恐くて）

確かに恐い。俺なら土下座が脱兎の如く現実逃避だな。いやいつそ清々しく自害するか？

（で、何か用なのか？）

「おおそうだった。最近気になってたんだが俺の中どうなってるんだ？ 雫が現れた辺りからまるで部屋が在るみたいな感じで話してるだろ」

（ああその事な。まあお前も一回来たる？ 真っ暗な空間。アレみたいなもんだ）

「成る程な。で、雫は」

（アイツなら今は居ないぞ。近々目を醒ますとか言ってたが。変な時に入れ替わるなよ）

それは雫に言えよとも思ったがどうせ無理だと思い諦めた

（で、そんな事を聞くって事はまだその時じゃ無いって事だろ）

「そうだな。知ってるけど知らない。何故俺の中に二人が居るのか。何故こんな事が起きたのか。何故ゼオンに関わるのか。理解出来ない」

（俺だって同じさ。全部知った。世界の理から俺と言う存在意義。課せられた義務。全部知ったのに理解していない。言葉にする事すら出来ない）

「雫は全てを知り、理解しながらも知らない振りている」

（まあ制約した本人だしな。何も言わず見てるだけ。傍観者ってか）

「さあな。でもまあ、傍観って程でも無いだろ」

（まあ色々教えてくれるしな。かなり偏ってるけど。いい加減青少年の美点熱く語るの止めてくんないかな）

無理だろ

そう言おうとした瞬間、俺の意識は闇に覆われた

軽いスナツプを聞かせ細かな細工まで行き届く豪華な扉をノックする
「お嬢さん、すこしよろしいですか？」

「霞？まあいいわ。入って結構よ」

お嬢さんの承諾を得て中に入る。そこにはヨーロッパ貴族のお部屋
みたいに豪華絢爛だった。わーシャンデリアめっちゃ高そー

「どうしたのかしらこんな夜更けに」

「ごめんねこんな時間に来て。挨拶がまだだったからさ」

お嬢さんは顔を引き轢らせ、数歩後ずさる

「か・霞ですわよね？その・・・敢えて言いますけどそんな女
の子みたいな口調は正直気味悪いですわ」

「んふふ。予想通りの対応だねお嬢さん。それとも麗奈ちゃんの方
がいいかな？」

お嬢さんは直ぐに備え付けの電話を取り深娜ちゃんにヘルプコール

「深娜！急いで私の部屋に。霞が等々壊れたわ！深娜、深娜！」

『はいはいこちら深娜ちゃんでーす この部屋の通信関係は全て掌
握してますんでむりですよ。それに私は霞君ではありません』

お嬢さんはまるで錆びだらけのオモチャの様に振り向く

「初めまして麗奈お嬢さん。私の名前は雫。存在しない神様の地に
立つ無垢なる道化にして、霞君の進む道に付き従う小さな従者」

私にはっこり笑いお嬢さんに近づく

「そして可愛い子の味方なのです。もう可愛すぎいいいい！」

「きやあああああ！」

防音の室内でお嬢さんを堪能しました。もういい匂いだし柔らかい
し上品だしサイコー！

「・・・もういや」

お嬢さんなんか寝れてる

「えーっとお嬢さん。そろそろ私時間切れだから今から言うこと確

り覚えててね」

「・・・何かしら？」

「プロテクトの二層目の解除にかなり手間取ってるでしょ？」

「！・・・何故それを知っているの？霞にもそこまでは話してはいませんよ」

「んふふ」。小さな道化さんは隠し事を暴くのが好きなのですよー」
まあ正確に言えば知ってたんですけどねー

「ハイネさんが書いたドツペルゲンガーって詩知ってます？」

「・・・御免なさい。あまりそういった本は読まないものでして」
「気にしないでいいですよ」。割とマイナーな詩ですから。その中のある文がヒントです。上手く当てはめれば大きく前進しますよ」
お嬢さんは素早くメモを取りペンを置く

「雫さん・・・でいらしたわね。貴女は霞ではなく、夕月に近い存在なのかしら？」

「ん」違うね。夕月君とも霞君とも違う。私と二人は意識下では別だからね。霞君が表で夕月君が裏。そして私は虚空に近い存在。気紛れと暇潰しで助言と助力を惜しまない道化師さんなのです」

私はにつこり笑いお嬢さんの眼を覗き込む。何でだろうね。心の中に恐怖が隠れてる

何に怯えてるの？

「・・・私は小さくなって世間を眺めるだけのか細い存在だよ。見てるだけで何も出来ない弱い存在。何処かの誰かさんは『傍観者』なんて言うかもね。んふふ、お嬢さんついてこれてるかな？」

「・・・色々有りすぎで正直混乱していますわ」

「そう。それでいいんじゃない？それじゃそろそろ時間切れだから最後に一言」

もう時間切れだなー。次はいつ目覚めるのかなー　楽しみ楽しみ

その前に小さなお節介

「お父さんは毒殺されたんでしょ？あの時の担当医と関係者、それからお父さんの執事と当時辞めていった部下。誰一人捜し出すことは出来ないよ。情報の欠片も存在しない。有るのはあやふやで不確かな記憶」

「――！知っているの！貴女はお父様の事を、殺した人間を知ってるの！」

「言っただでしょ？私は世間を見てきたって。それじゃあお休みお嬢さん。霞君に聞いても無駄だよ。二人はこの時間の存在すら知らないんだから」

お嬢さんは必死に叫んでいる。でもゴメンね

これは貴女が貴女の力で見付けなきゃいけないの

それがあの人の最後の望みでもあったからだよ？

お休みお嬢さん

これは私のプレゼント

試練の名を借りたお節介

何処まで強くなれる？

何処まで美しくなる？

何処まで信頼される？

貴女は何処まで冷静に冷徹に冷酷になれる？

40・幸と酷のbirthday（後書き）

慎

「慎君のテレフォンショッキング！！今回お二人は霞討伐の為お休みです！久し振りの出番だああ！さあ今回のお客さんはこの人！」
八尾木

「八尾木でせ！」

久保

「久保です！」

岡部

「岡部です！」

慎

「三人揃って夢明組^{むめい}のご登場！」

夢明「変なグループ作るなよ！テロップまで変じゃねーか！」

慎

「彼等は何処に出てたか分かるかな！分かった人は番組ホームページか脳内電波にアクセス！」

夢明「慎話聞けよ！つか」で纏めるな！！」

慎「それでは夢明組ニユーアルバム」立場がなんだいっ！」をどうぞ！」

夢明「最悪だな！」

慎「それでは次回もお楽しみにっ！」

作者 お！ひ！さ！

霞 うぜえ

作者 うぜえとか言うなよ。泣きたくなる

お嬢 作者さん。御願いですので舌を噛み千切って下さいませんか？

作者 こわっ！

深娜 ……

作者 無言で鈍器構えるのはどうかどほおお

深娜 しね、しね、しね、しね、しね、しね

作者 本編よ始まれ！

・・・・・・・・・・

爽やかな朝日

心地よい風

小鳥は囀ずり総出で朝のモーニングコールを始めています。ええ、誠意は伝わってきますけど今日はもう少し遅めのコールがよかったよいやマジで

お嬢親衛隊の皆様方は俺の横に交互に並び、皺一つ無いパリッパリの正装（彼等の場合は執事服とメイド服）に身を包み、手には統一された騎士剣が握られています

何故皆様は俺の上でブレードアーチを作るんですか？カリオストロみたいで見た目は良いんですけど縛られて棺に入れられたままだとただの死刑5秒前にしか見えません

僕は無実です

「御客人。貴方様は大変重い罪を犯しました。満場一致で極刑が下される程の重罪です」

はて、俺は確か部屋で夕月と話してる最中にそのまま寝た筈だが

「貴方様は何故御嬢様の御部屋にて御休みになられていたのですか？」

・・・なに？

「あろうことか御嬢様のシーツを羽織ってなど」

おいおいちよつと待て

「例え先輩の御友人で有ろうと見過ごす事は出来ません」

おーい話を聞いてー

「全員、構え！」

流れる動作で剣を反転、まさに串刺しの構え

「俺は無実だ！それは雫の仕業だ！」

「皆、私情を挟むな。我々は断腸の想いで彼を刺さねばならない」

「やめれ！」

全員眼に意思が宿っておりません。まさに剣を振り下ろすだけの口ポツトの様だ。死ぬな俺

「貴方達。朝から総出で訓練なんて珍しいわね。剣術嫌いの佐田まで居るなんて」

あれ、ここで深娜の登場不味くね？非常に不味くね？皆さん一斉に構えを解き深く一礼する

「おはよう御座います先輩。今日はお早いお目覚めで」

「霞の叫び声で起きたのよ。いったい何事なの」

「俺は無実だ！恐らく雫がまた暴走したんだ！」

「全員構え！」

ジャン

「結局これか！」

深娜はヒョロツとした男から剣を奪い棺の中に向ける。そこは駄目です眼球です

「御嬢様絡みなのは一目瞭然ね。死んで償いなさい」

「イヤイヤマテマテ。俺と雫は完全に独立してるから俺は一切記憶無いし。法的に見ても罰せられはせんぞ」

「私刑よ」

「結局か！」

親父様お袋様。先立つ不幸許したもうなかれ

「朝から騒がしいわね」

鈴の音をも凌駕する美しい声は屋敷二階の菊池お嬢様のお部屋から響きます。朝の日を浴び輝く金髪を靡かせ天使の様なお嬢様が顔を覗かせています（注・美化しております。本心かは定かでは御座いません）

「御嬢様。霞に・・・いえ、雫に何かされませんでしたか」

お嬢はピタリと止まり、慌てたように首を振る

「無いわ！なななにも無いわよ！」

「全員構え！これより公開処刑を始める！」

「深娜！お嬢の話聞けよ！無い言つとるがな！」

「貴方達止めなさい！霞には聞かなきゃいけない事があるのよ！」
まさに危機一髪。お嬢。今ならお前を心底褒め称えてやりたいよ

「し、しかし御嬢様」

「いいから。霞を私の部屋に通しなさい。誰も近付かないように」

お嬢はそう言い残して姿を消し、残された皆様は一斉に俺を睨む

俺は無実だ

程無く部屋にやって来たのだがお嬢の手には貴族には余り似合わないスタンガンが握られていた

「これはあくまで護身用よ。昨晚みたいな事があつたら・・・その・・・」

ほんつと信用ねえな中の二人組

「で、用事はなんだ。あいにく雫については俺にも分からんからな」

「その雫さん、お父様の事を知っているみたいなの。殺した人間も

なにもかも。何者なの」

「俺が分かるのは雫自体全くの別人、かつ俺と夕月、その他諸々の事を知り尽くしている。俺以上に俺を知っている。無論ゼオンについてだ」

「！何なの。ゼオンっていったい何なんですよ！」

「分からん。時が来るまで雫から与えられた情報は全て知らない事になっている。勿論夕月もだ」

お嬢は落胆してベットに腰掛けると此方を睨んでくる

「何故貴方が選ばれたのかしらね。お父様が残した記録から無造作に選ばれた筈が……まるで貴方でなければ解けない気がしますわ」

買い被られても困るがあえて何も言わず天井を眺める。雫は今のところ何の反応も無い。当分会話は出来ないだろうな

「仕方ありません。雫さんの事は一時保留にしましょう。それより朝食は済ませまして？一緒にいかがかしら」

「喜んで」

取り敢えず飯だな

朝からまあ豪華な食材が並んで。あらあらいいんすかキャビアこんな山盛りで。あらあらまあどう考えてもこのお肉朝食に出すようなお肉じゃないよ。メインディッシュの最高級品だよ

「あら？どうぞ御遠慮なさらず召し上がって下さい。料理長も貴方の意見を聞きたがってますのよ。それともお口に合わないかしら」

「いや美味すぎる。俺でもここまで食材の良さを引き出す事は出来んさ」

いやはや流石菊池お嬢様といった所だ

「あゝそれから深娜、構えを解け。ヒジョーに場の雰囲気にもスマッチだ。うん怖い」

「はあ。深娜、貴女が心配する様な事は何も無いわ。そんなに心配しなくてもよくてよ？」

「・・・宜しいのですか御嬢様」

「ええ。寧ろ霞が来てくれたお陰で大変有意義な情報も得られました」

「・・・分かりました。御嬢様がそう仰るなら」

深娜は一步下がり直立姿勢で待機している。周りの親衛隊も然り気無く懷から手を離す

お前等何をぶっぱなすつもりだったんだ

「それから・・・」

お嬢は眼を細め皆を一瞥し、ボソツと呟く

「彼は大事なお客様ですの。粗相の無いよう」

粗相の辺りにやたら力を込めて呟いたお陰で俺の命は保証されたらしい。皆さん冷や汗を流しながらガツガチに固まった

そんな中唯一何時もと変わらない幸澤はお嬢のカップに紅茶を注ぎ軽く手を叩く

「ほら皆さん。何時までも固まって無いで仕事に取り掛かって下さい。ここは私が引き受けますから」

幸澤の言葉に素直に従う親衛隊は素早く部屋を後にした

残された俺はやたら高級であろうコーヒーを飲み、深娜はガツガチに固まりながら直立姿勢。お嬢と幸澤は今日の打ち合わせを始めている

そういや今頃朝のHRだな

「．．．．かーすーみー。ひまああ。早く帰ってきてええ」

「はは。寂しいのは分かるがはよ宿題出そうぜ」

「霞君、今何してるかなあ。大川さんも居るしお嬢さんも居るし．．．．」

「うおーい。現実に関を向けんしゃーい。貴女も宿題出そうぜ」

「藤阪！お前が率先して宿題出さんかい！先週から滞納してるぞ！」

「先生！何故俺だけ責めるっすか！」

「二人は可愛いからだ！文句有るか！」

「成績の爲にも反論は微塵も御座いません！」

平和な朝だ

「．．．．でだ」

パチン

「・・・・・・・・何」

パチン

「1!2!3!4!5!6!7!8!9!10!.....」

「・・・・・・・・何だアレ」

パチン

「・・・・・・・・Dセット」

パチン

「4!1!4!2!4!3!4!4!4!5!.....」

「あー・・・・・・・・鬼か？」

パチン

「ふう・・・・・・・・」パチン

「ななじゅうに・・・・・・・・ななじゅうさん・・・・・・・・ななじゅうしいい!」

……

山下は軽装でひたすら腕立てをしている。その背には決して小柄とは言えない背丈の女性が座っている。深娜が言ってた紗智とやらだろつか

「山下・・・・・・・・ペースダウン。オーケー？」

「りよおお・・・・・・・・かい!はちじゅうななあ!はちじゅうはちいい!はちじゅうー!.....」

背中に洸夜背負って腕立てってところか。俺なら昇天だな

「あ、王手ね」

パチン

「・・・・・・・・」

「山下・・・・・・・・スクワット100。オーケー？」

「き・・・・・・・・休憩・・・・・・・・希望っす」

「・・・・・・・・5分。オーケー？」

「おお・・・・・・・・けいい」

仲良きかな仲良きかな

「霞・・・・・・・・ま」

「待った無しね」

「・・・・・・・・」
ビクバン

飛び散った駒を広い集め改めて周りを見渡すとあちこちで庭師やら補修点検を勤しむ人やら忙しく歩き回っている

「平日休むつてのもいいなー。今頃あいつら授業中だろうし」

いつの間にか用意されてたお茶を飲みながら慎にイタ電ぶるるる。ぶるるるる

「もしもし。元気？」

「おう。どうだったよ誕生日会は」

「まあ良いもんだった。また雫が暴走したけど」

「ああーこのパターンだとお嬢様が生け贄か？」

「うん。朝に深娜他数名に殺され掛けた」

「いやー怖い怖い」

「つか授業中にこんな長電話いいのか？」

「ん？先生ならめのま……………ごふ」

ぶつ・・・つー。つー。つー。つー。

よし。スッキリした

お嬢部屋にて

お嬢は書類の束に軽く目を通し幸澤に手渡す

「問題ないわね。このまま継続して作業を続けなさい。それと此は

雫さんのヒントよ。何処まで知っているのかは知らないけれど信じてもいいと思うわ」

幸澤は雫のヒントに目を通し待機している深娜に手渡す

「此方は直ぐに解読に回します。それとオメガより伝達が御座います。『暁の果てに牙』との事です」

「そう。でも構わないわ。あの程度でしたら私が手を下さなくとも」お嬢は書類数枚に判を押し幸澤に手渡す。そのまま何気無く外に目を向けると、そこには縦横無尽に走り回る霞と部下の姿が飛び込んできた

「・・・・・・・・」

片や笑いながら人間離れた跳躍で飛び回る男、片や何処から持ち出したのか青竜刀を振りかざす小柄な少女筆頭の武道派集団。今ここに因縁の第二ラウンドのコングが鳴り響いた

時は遡る

11時を過ぎそろそろお昼時が迫る今日この頃

野崎霞君は危機に直面していた。目の前に立つのは深娜に異様なスキンシップをしてた小柄な少女

あの『お姉様!』と叫んでたあの子だ

「ああ・・・・・・・・その、なんだ。何か様か?」

「五月蠅いです喧しいです土に帰れです」

深娜に引けを取らない毒舌だ。要は死ねというか

「俺は君に殺される様な事をした覚えは無いぞ」

「五月蠅いです。お姉様と同棲してる時点で万死です。お姉様の肌は私のモノです」

聞こえ様によっちゃR指定なのだがここは好意的に解釈しよう

「いやしかし同棲する様計らったのは他ならぬ君達のお嬢だ。文句があるならお嬢にしてくれ」

「お嬢様は絶対です。だからお前に文句言ってるです。何で産まれて来たですか」

「存在否定かよ。いい加減しばくぞ」

「貴女みたいな平凡で貧相な女には負けないですまな板」

「よしよし良く分かった本気でしばく」

ガクンと急に頭を下げる霞君。夕月の降臨です。敗色濃厚ですねちっさい子

「つつわけで俺参上。しかし俺はロリにはあんま興味ねーんだよな。やっぱボンキュッボンだろ」

「帰れます。この百合」

本当に自分の事棚に上げてますね

「何言ってるんだこのお子様。俺は男だ。霞はまあ仕方ねーけど俺はどうみても男だろ」

「お・・・男と・・・同棲」

おやおや物凄いショックを受けた様です。地に手を着き愕然としていらっしやる様です。さあここが勝機と追撃

「霞は美味しい所頂いてるぞ。うんうん羨まし限りだ。抱き着かれたり手料理作ってもらったり」

「お姉様の手料理！！なんて羨ましいです！やはり万死です」

「あと胸揉んでクスしちゃって。いや何か言ってる俺がム力ついて来たな。所持って行きすぎだろ彼奴」

「うがああああああああ！」

ちっさい子等々大激怒で我を忘れてしまった様です。しかし敗色濃厚に変わりは無いのです

「きるキル切る斬る伐るkīlī!!!」

地を強く踏みつけるとパカツと芝が開き青竜刀が飛び出して来ました

「天誅!!!」

小さな体格に不釣り合いな青竜刀を意図も容易く振り回すちっさい子しかし嘲笑う様に紙一重で避ける夕月は、一瞬で間合いを詰め刀を握る手を外に捻りながら足を払う。簡単に宙を舞うちっさい子は一瞬何が起きたのか理解出来ていない

「結局の所お前等は何時まで経っても俺を止める事は出来ねえ。例え何人揃えようが埋まらねえ決定的な溝がある」

夕月君は目の前を舞うちっさい子の背に足を添え落下衝撃を全て吸収し、ボールでも乗せてるかの様にバランスを取っている。固まったままのちっさい子と視線が合う

「自分に何が出来て何が出来ないか。経験するのは結局そこに行き着くまでの過程に過ぎないんだよ」

ボールを優しく蹴る様に宙高く跳ね上げる。ちっさい子は慌ててバランスを取り、受け身を取って衝撃を拡散させる

「鬼ごっここの時間だ。タイムリミットは俺がお嬢の部屋に行くまで。駄目ならお嬢と深娜っちにちゅうしてやる」

そう言うなり笑いながら駆け出す夕月君。そして再び憤怒に駆り立てられたちびっこ群がる様に湧き出てきた親衛隊との鬼ごっこが始まった

しかしそれはもう過去の出来事。庭で悶絶する親衛隊と悔し涙を流しお嬢の部屋を睨み付けるちっさい子
考える考える。何が出来て何が出来ないか

「よし。つつわけでちゅうするか」

「はい！」

「はあ！」

「ははは」

「幸澤！笑っていないで今すぐ夕月を摘まみ出しなさい！」

「夕月！今すぐ出てきなさい！御嬢様に指一本触れる事は許さないわよ」

「わはははははは！お嬢は頂いた！また会おうアケチ君！」

「いやああああ！」

ツツコム暇があれば逃げればいいのにな

お嬢をお姫様だっこして屋敷を疾走。ジタバタ暴れるお嬢はほっぺにちゅうして黙らせる

うわ即行ゆでダコになったよ。無駄にピュアだよなお嬢。その辺コウちゃんにそっくりだ

さてさてお嬢が黙った事だし深娜っち脅迫するか

「ここからは菊地邸監視カメラより音声のみ御送り致します。画像、仕草にしましては御想像に御任せ致します」

「そこで止まれ深娜っち。お嬢にちゅうするぞ」
「もうされたわよ」

「御嬢様！くつ、夕月！今すぐ御嬢様を離さない！」

「だが断る！」

「本気で殴るわよ！」

「どっからそれ持ち出した！つか殴るじゃ利かねーだろ」

「血だるまになりたくなかったら御嬢様を渡さない」

「そんな事言うとお嬢にちゅうより凄いのするぞ！雫並にするぞ！」

「・・・もう許して・・・お願い」

「何が目的なの！御嬢様にこれ以上近づかないで！」

「ならば深娜っち、俺にちゅうして。霞ばっかいい思いしやがってこんな時くらいいい思いしたいわけだ」

「深娜・・・もういいのよ・・・私が我慢すれば・・・グス」

「御嬢様！！」

「さあさあさあ！どうする深娜っち」

「・・・約束は守るんでしょうね」

「無論。女との約束は死んでも守る」

「・・・いいわ。だから御嬢様を離さない」

「ほいさ」

「・・・深娜・・・本当にいいんですの？」

「御嬢様の身には変えられません」

「それじゃほつぺにでいいからヨロシク！そろそろ霞が暴れるからくつ、・・・」

「・・・」

「・・・」

「ひゃっほおおい！サンキューみなぶほあっ！」

「死ね！死ね！死ね！死ね！お姉様に代わって殺して殺るです！」

「テメエどっから湧き出た！いきなり来たよなおい！」

「私に今出来るのは不意打ちです！お姉様をお救い出来ないのが腹立たいですが貴方を殺して償うです！」

「カンナ止めなさい！」

「こなくそ！限界か。霞、後は任せた！」

「これより通常モードに移行します」

暗いトンネルを抜けると、そこには可愛らし拳か唸りを上げて迫っていた

刹那の判断。右頬を掠めた拳を掴み、引き上げる様に体勢を崩して足払い。その場で反転するカンナを両手でしっかりとキャッチ

「あつぶねー。何とかなったブハッ！」

下からまさかのアップ！。テメエあのまま叩き突けた方よかったか？

「離せです離せです！こんな屈辱な格好最悪です！」

こちらら殴られてはたまったもんではない。直ぐ様カンナを離し距離を取る。夕月の様に出来ない以上口で戦うしかない。まあ暴力には屈しざるえないのだが

「カンナとやら。夕月の暴走はすまなかった。しかしそちらにも過失はあった筈だ」

「五月蠅いです喧しいです土に帰れです」

「聞く耳持たんかこのチビジャリが。ならお前の秘密をこの場でバラすぞ」

一瞬この場に居る全員が動きを止めた。最初に口を開いたのは深娜だった

「その情報源は……まさかとは思うけど」

「想像通り雫だ。無論条件を満たさない限り絶対無理だな」

「いやああああ！」

突然お嬢が自分を抱き締めその場に蹲った。

「いやあ。やめてえ……。何でそんな事知って……………」

まるで取り憑かれた様に呟くお嬢。恐らく昨夜の出来事が蘇ったのだらう。お嬢の前では雫ワードは今後タブーだな

「……カンナ、悪い事は言わないわ。雫を敵に回すのだけは避けなさい」

「でも私にはそんな秘密はないです！大丈夫です！」

「お前の部屋のタンス上から二段目の奥にある小箱の中身」

「うにやああああああああああ！」

カンナに胸ぐらを掴まれ廊下の角まで追いやられた。そのままヘットロックを極められやたら小声で怒鳴り散らす

「何で知ってるですか！誰にも知られてないのに何で知ってるですか部屋に侵入したんですか！」

「雫の提供だ」

「中身知ってるですか！知ってたら抹消して私も死ぬです！！」

「そこまでは引き出せんから安心しろ。まあ多分深娜の写真かなんかだろ。若しくは」

「言わないです！私が悪かったです！もう逆らわないです！」

見た目相応に大人しくなったカンナを従え皆の元に戻る。何故だろ。周りの視線が痛い。御免なさい悪の根源は中の二人です僕は無実です

帰りの飛行機。担架に寄せられ固定されてるので外の景色は見えません。深娜は先程なら黙り込んで睨んでいます。これでもかつて程睨んでいます。睨んでるからってのは切れる訳では無いがムズムズするので止めて頂きたい

「・・・みーなーさん」

「死ね」

会話になりません。呪詛の塊をぶつけられて終わりです

一旦会話を打ち切り痛み止の錠剤を飲みます。あいつらに手加減の文字は欠片も見つかりませんでした。何れ完全勝利を突き付けてやると心に誓い再度深娜に視線を向ける

「霞、ここから突き落とされなくなったら今は黙ってなさい」

「ごめんなさい」

勝てねーよやっぱこの人には。やっぱ夕月のキス要求がお嬢の心の傷が最大の要因だな。視線を天井に向けボソツと呟く

「やっぱ夕月のキスは嫌だったかなあ・・・」

「ふん。まさか嫉妬でもしてるのかしら？」

マジで怖いです。底冷えする程冷やかな声です。下手に返せばマジで突き落とされるだろう

「うん。羨ましいしもう二度と夕月にはさせたくないな」

ここは確実に相手を優位に立たせ此方を見下す様な立ち位置を築くしかないな。さあ後は罵詈雑言を待っただけだ

何かこんなのに耐性ついたら嫌だなあ

「はあ！・・・いや・・・ええ！」

何かものスッゴい錯乱してるんだけどこの人真っ赤な顔で近くにあったケースを豪速球で投げてきた。見当違いの方向にぶつかったが現状は所詮喋る俺と危険球を投げる深娜の構図は崩れることは無い

もう少しでベルト外れるけど持つか俺の魂

「ふふふふざけた事言わないでよ！落とすわよ！！」

「ちよつとマジ勘弁！それマジの開閉レバーだから！」

俺の涙ながらの訴えが通じたのか、大分落ち着いた深娜は担架のベルトを外して隣に腰掛けた

「えーっと、本当にふざけた戯言抜かしてすいませんした」

「二度目は無いと思いなさい。ホントなんて事言うのよ。冗談でも質が悪いわよ」

「いやまあ二度と夕月にさせないのはマジです。後雫も」

残念ながら雫は制御出来ないで周りに全力で止めて頂きたい

「はあ。疲れるわ本当に。御嬢様を御祝いする筈だったのに逆に御迷惑掛けたんじゃないかしら」

「ごめんなさい。全部中の二人の責任です。つまり保護者の俺の責任です」

「霞、勿論分かってるわよね？何を言いたいか」

「夏休みつすか」

「分かればいいのよ」

俺の夏休みはすでに予定で埋まってしまった。はあ。まあ仕方ないか

「それはそうとちょっと聞きたいことが」

「何？」

「屋敷で働いてた頃何か妙な視線とか感じなかった？」

「何で知ってるの」

「……後下着とが無くなった事無い？」

「……何で知ってるのよ。雫が言ってた」

「いや、マジでただの勘。ついでに犯人も何となく……」

「誰。その男見つけ出して生きてる事後悔させなきゃいけないんだけど」

「……」

二人を乗せた飛行機は空港へと向かっていった

「くしゅん。あの男女噂でもしてるですか」

加弥「加弥と！」

冴夜「冴夜の！」

加・冴『テレフォンショッキング！』

加弥「今回のお客様はこの人！」

美鈴「こんにちわ」

冴夜「久しぶりだね美鈴ちゃん。元気？」

美鈴「うん。元気なの。毎日牛乳飲んでるの」

加弥「でもアレに勝つのは難しくない・・・何か言ってる自分が悲しくなってきた」

冴夜「か、加弥ちゃん、元気出して！」

美鈴「！！お姉ちゃんと同じくらいおっきい」

冴夜「ひわあっ！急に触っちゃだめだよ！」

加弥「美鈴ちゃん」

美鈴「加弥お姉ちゃん」

冴夜「ええ！何で二人で迫ってくるの！指使い何かイヤらしいよ！い、いやああああ！」

加弥「成長は程々に！テレフォンショッキングでした」

美鈴「（もみもみもみ）」

42・夏休みと皆の夢？（前書き）

作者「おす！オラ作者」

霞「わー作者だー」

作者「感情の毛先も感じられないな。テンションhigh！で行こうぜ！」

霞「何その無駄なテンション。見てて哀れだよ」

作者「だって2年5ヶ月の歳月を経て漸く夏休み突入だぜ！」

霞「どんだけ時間掛けてんだよ。読者に忘れ去られるぞ」

作者「最近の悩みはまさにそれです」

霞「俺今無性に魔法学校に通って忘却魔法覚えたい」

作者「ヤメレ！」

42・夏休みと皆の夢？

目前に迫るは夏休み。夏休みだからこそ広がる夢がある

そんな彼等彼女等には野望がある

細やかな夢

壮大な夢

無謀すぎる夢

やたら現実味帯びたりアルな夢

そこには我々の知ることの無い壮大な物語が存在するのであった

先塚洸夜の場合

夏休みに入りました

宿題は最初の一週間で概ね終わり、皆で沢山遊べる時間を作りました
霞君と色んな思い出が作りたくてお父さんのカメラを貰いました
沢山霞君と一緒に遊びたいな。出来れば・・・その・・・二人
人つきりになつて・・・お祭りとか・・・行きた
いな

その後の花火で誰もいない特等席で霞君と二人つきりで花火を見て・
・・・そのまま霞君と・・・きやつ

(注 本内容は、先塚洸夜氏の多大なる妄想と、重度の霞君LOVE
の影響により、大まかに改ざんされております。今後この様なイ
ベントが発生するかは現段階では不確定であり、フラグ発生は未定

とする)

大冢加弥の場合

待ちに待った夏休み！イベント盛りだくさん！霞と一緒に居れる時間無限大！深娜ちゃんとコウちゃんという強敵が立ち塞がるけど霞の為に強引に押し切るまでよ！

霞の事だから強引に泊まりに行っても問題無し！夜になったら霞の部屋に忍び込んで・・・・・・・・きゃは。霞っていい匂いするから落ち着くんだよねー。・・・・・・・・てか深娜ちゃんって毎日霞のいい匂いに包まれてるの？羨ましい！絶対泊まりに行つてやる！夏休み中霞とラブラブしてやる！

(注 本内容は、大冢加弥氏の妄想と小学校からの付き合いによる経験に基づき導き出されたものである。実行された場合高確率でイベントが発生します。フラグ発生は加弥氏の度胸数により大幅に左右されます)

藤坂慎の場合

京都いきてーなー

夜喜さん何してっかなー。ぶっぱなしてるだろーなー若気の至りに走った青少年から中年辺りに向けて

京都いきてーなー京都いきてーなー京都いきてーなー京都いきてーなー京都いきてーなあああああ！メツさ夜喜さんに会いてええええ！時々メールとか電話くっけど生夜喜さんに会いてええええ！行くか！霞誘って京都行くか！そうだ京都行こう！新薬開発の人体実験やれば速攻金貯まるし配達手伝えば駄賃(一回200円)来る

しオツケーだ！よっしゃ！ゼッテー夜喜さんに膝枕してもらっぞ！
出来れば俺もしてあげたい！ビバ京都！

（注 本内容は藤坂慎氏の脳内より溢れ出た妄想の一片に過ぎません。放送事故を未然に防ぐため、大幅に削除致しました。例え実行しても結果は火を見るより明らかなので本内容は自動的に削除されます）

野崎霞の場合

はあ、漸く夏休みか。宿題は片付いたし久し振りにゆっくり・・・
・出来ねーよな。取り敢えずあの三人組は俺ん家入り浸るだろうから侵入対策で部屋に鍵付けるか

それにお嬢の所にも行く羽目になったし・・・あー鬱になりそあ？なに夕月・・・は？いや駄目だし。お前なんかを1日自由にしたら俺に明日は無いから。マジで黙ってなさい。今度は雫か？お前はマジでダメな。お嬢泣くしなんつーかお前の存在メンタルレイパー？つか無闇やたらと見境無く襲うな。俺に平穏な1日をくれあーそれに佐藤さん打ち合わせに来るって言ってたな。もう休みの方が忙しいってどうよこれ

あー鬱だ。いつそ京都に逃げるかな

（注 本内容は、野崎霞氏の17年で培った経験と、既に内定済みの予定で構成されております。イベントの増量は御座いますが覆る事は万に一つも御座いません。皆様御悔やみの念を込め御唱和下さい。合掌）

大川深娜の場合

はあ、夏休みね。学校に行く機会が減るから調査は暫く休みにする

しか無いわ

霞のせいでお嬢様に大変御迷惑を掛けてしまったしお詫びに行かなければ。勿論霞は強制連行ね

多分他の皆も来るだろうし幸澤に連絡は入れておくしか無いわね。

はあ、またお嬢様に御迷惑を掛けてしまっくんじやないかしら。不安ねこんな長期休暇初めてでしたまにはゆっくりしたいわね。昔使ってた無人島にでも休暇に行こうかしら・・・なんで霞と一緒に場面が思い浮かんだのよ。他の人誰もいないんだけど

まあ別に何時もとたいして変わらないし霞位なら連れてこうかしら・・・他意は無いわよ
無いからね

（注 本内容は、大川深娜の今後の予定の一部である。周囲の暴走、イベント発生により大幅に左右されます。また、お嬢第一主義のため周囲に少なからず被害を及ぼします。なお、大川深娜ツンデレ説は本人の自覚が無い、又は拒絶反応を示しているため、ツンデレ率は当社比47%減とする）

そんな彼等彼女等には野望がある

細やかな夢

壮大な夢

無謀すぎる夢

やたら現実味帯びたりリアルな夢

夏休みは審判（通知表）の先に見える世界である

「まんまみーあー」

あ、加弥撃墜された

机に突っ伏して親への言い訳を呟いている

まで、何故俺の名を出す

「よし」

洸夜は好成绩だったようだ。ウキウキしながら加弥に近付き……あ、捕まった

「通知表がなんぼなもんじゃい！」

パツとめくつてパツと閉じる。鞆の中に投げ捨て自棄になる慎。迫る母親の拳を垣間見たな

「……………」

余裕でいらつしゃいますね深娜嬢。何？ちよつ俺の通知表取るなよ。返せよ恥ずかしい。しかも見るなり逆ギレ！いたっ！蹴るなよ

「かーすーみー」

背後からゾンビの如く現れた加弥。チミも俺の通知表見たな

「かじっていい？」

「断固拒否」

「うわあ！霞君すごい！こんなに成績良かったんだ！」

「いやたまたまだよ。去年は並み位だったし。ってか通知表返して」
なんとか奪い返しイソイソしまう。いよいよ夏休みですか

悪いことしか起きないんじゃない？的な不安を拭いきれませんが二割強位は有意義な休みだと願いたい。つか高2にもなつて宿題に絵日記はどうかと思うぞ

「かーすーみー」

「なんすか加弥ゾンビ」

「いただきます」

「ぎゃあああ！マジで首に噛みつきやがった！しかも甘噛みヤメテ
！」

「なーらーばーしゅくはくー。とめてー」

震えが止まらないほど甘噛みされてます。首は俺の弱点です。ホント勘弁して

とゆうことで、強行採決で我が家での強化合宿が夏休み前日より始まる事になりました

すいませんもう疲れました。今日はもう許して

42・夏休みと皆の夢？（後書き）

加弥「加弥と！」

洸夜「洸夜の！」

加・洸「テレフォンショッキング！」

加「今日のゲストはこちら！」

お嬢「ご機嫌よう皆様」

洸「お久しぶりですお嬢さん」

嬢「突然此方に呼ばれたのですが・・・」

加「ここは一言本音を語ってもらうコーナーです。っていうかお嬢さんの本名麗奈さんですよ？」

嬢「そうですが何か？」

洸「あれ？私達の高校の副生徒会長も麗奈さんじゃなかった？」

加・洸・嬢「・・・作者！！」

43・夏休みとメリーさん（前書き）

作者「新年！あけましておめでとうございます！」

一同「おめでとうございます！」

作「21年になりました。作者は今年で22になります」

霞「知らないからそんな情報」

作「霞君のハーレム地区は拡大しています」

霞「ホント勘弁して。これ以上増員したら消えてく人出てくるから」

作「知ったことか！芸術は爆発だ！」

霞「おい誰か、ここの痛い眼鏡に虐待教えてやって」

作「群がるな！お前等我先にと群がるな！」

霞「それでは本編をどうぞ。後書きには作者の作家仲間からのコメントが届いてますのでどうぞ」

43・夏休みとメリーさん

夏休み

皆一旦家に帰り道具を纏めいざ行かん！つといった勢いで我が家に押し掛けてきたいつものメンバー。真つ先に来たのは意外にも慎頼をぶつくり腫らしながら爽やかな笑顔でやってきた慎は着替え一式と野菜の山

「いやー母上がいつも世話になってるから持つてけつてさ」

「お、すまないな。丁度欲しかったんだよ」

「気にすんな。それよか通知表見せたら案の定殴られてさ。今まで生きてて初めて『メメタア！』って叫んじまった。意外にいいメメタ」

「知らんがな。取り敢えず荷物は俺の部屋に置いとけ。二人が来たらメシだ」

「メメタア！」

慎は出来そう出来ない微妙なポーズを残し二階に姿を消した。深娜は部屋の整理をしてるみたいだしサクツと料理始めますか

せっかく頂いた野菜もあることだしパスタとサラダならすぐ出来るな。鍋に水を注ぎコンロにセット。野菜の鮮度と味は保証済みだから軽く千切つて盛り付けるだけつと。沸騰したら塩を少々。豆知識だか塩を入れておくと沸点を高めて早く仕上げてくれるし沸騰した時の吹き溢れの心配がない。是非試して頂きたい

「霞ー。お世話になりまーす」

どうやら加弥が到着したみたいだ。顔を出すと玄関には大量の荷物が積まれていた。これは・・・不味いな

「いやー暑い暑い。外凄いのよ。遠くが歪んでるもん」

「それよりなんだその荷物の量は。まさか一人で担いで来たのか？」

「まつさかー。父さんに車で送ってもらった。そしたら家族総出で来ちゃってさ……」

気まずそうに頭を掻く加弥の後からご家族の皆様が入ってきた

「えーっと、父さんと母さん。それと弟の良樹」

「すみません家の娘がお邪魔しちゃって」

加弥母はペコペコ頭を下げて加弥が恥ずかしそうに俯いている

「お構い無く。此方こそ大事な娘さんを預かる身ですので不備の無いよう努めさせて頂きます」

するとにこやかに笑っている加弥父と弟君が手招き。近付くと隅っこに追いやられた

「娘に手を出したら承知しないからな」

「兄ちゃん、姉ちゃん泣かせたらぶっ飛ばすからな」

何この親子おっかねー

「いや、加弥さんには一切手を出しませんから」

「テメエ、あんな可愛い娘に手を出さねえって気は正気か!？」

「姉ちゃんの可愛さが分かんねーのかよ兄ちゃん!」

この親子わけわかんねーよ。シスコン弟と子離れ出来ない父にも程があるぞ

「父さん!良樹!霞に何吹き込んでるの!」

加弥の一喝で逃げるように外へ走り出す親子。大聖家の力関係を垣間見た気がした

「それでは野崎さん。一ヶ月娘を宜しくお願いします」

「え?あ、はい。此方こそ宜しくお願いします」

加弥母は頭を下げお歸りになった。さて、一ヶ月とはどういうこっちゃ加弥嬢。抜き足で深娜の部屋に荷物を持ち込もうとしてる加弥はビクツとして空笑いをしている

「お手伝いするから見逃して」

「ウインクして可愛いポーズしても説明になってないから。それと深娜の部屋にその荷物は無理だからその部屋に置いといてね。慎

「寝てねーで手伝え！」

「メメタア！つかなんでバレた！」

「何分降りてきてねーんだ！さっさと手伝え！」

「メメタア！」

さつきからうつさいな

加弥の荷物を持ち上げようとすると玄関先で車の停車音。ちよい待ち。まさか先塚さんもこんな荷物なんじゃ

「こんにちは。今日からお世話になります」

意外に小さい荷物ですね。いや流石冴夜。加弥みたいに無断で一ヶ月も泊まる神経してないみたいだ

「冴夜。荷物はこれだけか？」

「ん？今から父さんに運んで貰うけど」

冴夜さん冴夜さん。貴女もそんな荷物の量ですか。素で泣きますよ

「娘をよろしくお願いするよ霞君。それじゃ記念に一枚」

然り気無く隣に冴夜が移動してツーショット。そっぴい冴夜のパパさんプロのカメラマンだったな。父母そろってニコニコ笑っているのだがパパさんのカメラ捌きがエスカレートし始めて最終的に冴夜お姫様だっこまでさせられて満足そうに帰っていった

冴夜を見ると抜き足で深娜の部屋に移動しようとしてたので捕獲

「冴夜？君何泊の予定でこんな荷物になったかな？」

「えう・・・出来れば・・・夏休み中居たいなって加弥ちゃんと話してて」

「・・・なんで相談とかしないのかなー？」

「か、霞君！？」

「んー？」

「笑ってるのにすっごいこ、怖いんだけど」

「んー。取り敢えず加弥呼んできて。説教タイムはそれからね」

冴夜は無言で何度も首を振り逃げるように部屋に走り去った

「・・・ちよつと」

「ん？どした」

「食べ辛いんだけど」

「いいのいいの。罰ゲームだから」

お二人さんは罰として昼飯抜きで。まあ自業自得でしょ

「ひもじいよー」

「おいしそう・・・」

テーブルの端で恨めしそうに覗く二人組。ニツコリ笑ってやると即座に目を反らし小刻みに震え始めた。そんな怖い？

「おうおう霞、結局二人の部屋どうすんだ？一部屋に三人は流石に狭くねーか？」

「隣の部屋使うしか無いな。親父の部屋だけど今は何も無いからな」
コーンスープを飲んで一息。未だに顔だけ出して深娜のパスタを見
てる二人の頭に手を乗せる

「反省した？」

ものすつげー早さで頷く二人に冷蔵庫からサラダとパスタを出して
やる

「ならどうぞ召し上がって下さい」

召し上がってとはいったけど問答無用で抱き付いて深呼吸はどうか
と思うよ。羨まし顔しないでよ洗夜。無茶苦茶あつついんだよ

なんとかかひつpegし、居間でソファーに腰掛ける。クーラー涼しい。
だらーっとしていると食事を終えた深娜が居間から歩いてくるので少
し端に移動。当然のように隣に座りクーラー地帯に居座る。まあい

つもこんな感じです

「あ、アイスコーヒーあるけど飲む？」

「飲む」

「ちよつと待ってる」

カップ2つに氷と冷えたコーヒーを入れて片方を深娜に差し出す

「ほらよ」

「ん。ありがとう」

来た頃の深娜なら絶対言わないありがとうも今では割と聞いている。
今の深娜の方が絶対いいね

背後からの強烈な視線を成るべく無視して読み掛けの文庫を手取る
外では蝉が短い余命を必死に泣き叫び、蝉を刈り取るべく虫網・虫籠を装備したチャイルドファイターが真夏の炎天下を走り回っている。若いつていいねえ

「何年寄り臭い顔してんのよ」

「ん、すまん」

「別に」

「なんじゃそこのラブ空間はああ！霞！取り敢えず謝って！」

何故か激怒してる加弥はズンズン迫ってきます

「謝れって言つかラブ空間って何それ？」

「深娜ちゃんばっかヒキしてさ！よくよくかんがえたら告白した私達より深娜ちゃんの方が待遇いいって男としてどうなのさ！」

「加弥もいったい所つつかない。でも改めて友達からよるしくって言って納得したよね？」

「それはそれ！これはこれ！」

台所からは洗夜の羨ましそうな視線がグサグサ突き刺さってきます
「じゃ聞くけど主に何をしてほしいわけ？ちゅーでもして欲しいの？」

「ちちちちちゅううう！それは・・・その・・・でも・・・あの」

真っ赤になった加弥は両手で顔を隠しながら一目散に逃げ出した

「はあ。霞、少し言葉を選んだら。刺激が強すぎるのよ」

「ああすりや嫌でも落ち着く。戻ってくる頃にはまともに話が出るだろ」

「質がわるいわね」

「加弥の扱いは昔とたいして変わらんよ」

「ついでに未だ台所で見てる冴夜に視線を向ける」

「冴夜はどうなの？」

「ひえっ！わ、私は・・・ゆっくりでいいと思うから」

「冴夜は冴夜なりに考えてるのかね。まあ加弥みたいに強引だったりさつきみたいに爆発しないのが助かるんだよな」

「取り敢えず頭を撫でてみると眼を細めて嬉しそうにしている。たまに冴夜のネコみみたいな仕草はめっちゃ可愛くて思わず抱き締めたくなるのだが後の制裁の為にも我慢」

ふと廊下の方を見てみると今にも泣きそうな顔の加弥がいた
深娜はチラッとみて直ぐに視線を反らし冴夜は何と無く後ろめたい
感じの顔つきになっていた

「これはあれか？私だけ仲間外れみたいなあれか？」

「霞、取り敢えず加弥に構ってやったほうがいいぞ。へたすりやその内泣くから」

「泣かれると俺の精神衛生上非常によろしくないな」

「まあ総合してお主が悪いんだからマニアックな所にキスでもしたら」

「慎、今日のお前の晩飯は味の素な」

「せめて茶漬けで！」

中指を立てて返事を返してからゆっくり加弥に近付く
うわマジで泣きそうだし。ほらもう高校生なんだからしゃっくりあげないの

「あー。加弥？別に加弥だけ仲間外れって訳じゃないからな。なんかして欲しい事とかあったら遠慮するなよ。無理な事は無理だけど」

な」

「・・・ぐすつ。いらないもん」

駄々っ子になった！え？加弥ってこんな子なの！今までの付き合いでこんな姿初めてみた！

「霞君、加弥ちゃんっていつも元気だけど打たれ弱い所あるんだ。

大川さんが来た時も家で泣いてたから」

これはまあ新たな一面ですな。取り敢えず頭をナデナデ

「・・・」

そっぽ向いて黙ってるけどその仕草が可愛いなあおい。ネコみたいだなあもう可愛いなあ我慢無理

ぽふって感じてハグハグ

「ひえっ！霞！」

それからほっぺにぷにぷにして頬擦りしてまた頭撫でていやもう可愛いな！。加弥の小動物的仕草は反則だな

「はっ！俺は何を！」

ふと我に返ると胸元にはとろーんとした加弥がものスッゲー熱い視線を注いでいる

何故でしょう。背中がゾクゾクとこう・・・真夏なのに寒気が

「かすみー」

「はい、何でしょうかお嬢さん」

「だっこー」

言うなり首に手を回し飛び付く加弥。倒れまいと腹筋背筋総動員で踏ん張りなんとか持ちこたえた。よくやった俺

昔あっただっこちゃんみたいにくっついて離れる気まるで無い加弥を仕方なくそのままにしてソファーに座り直す

自然と目線が同じになってしまい見方によっては大変イヤらしく見えてしまいます

考えるな。我無心なり

「んふふう。かすみー」

自我崩壊の危険。我救援を所望する！慎！慎はおるか！

「無理。洸夜の乱心抑えるのでいっぱい입니다」

後方でガチャガチャ音がしてるので無理か

問題は隣だ。もし闘気が存在するならテーブルのカップが砕け散っているだろう

「かーすみー。かすみ良い匂いするねー。なんでー？」

「なんででしょーね。それよか加弥、熱いし人目もあるしちよつとはしたないよ。と言うわけで離れて」

「や」

や、ってあんただんだけ駄々っ子なんだよ

（ふふふ。お困りのようだなブラザー）

テメエが出たら余計めんどくさい事になっから引ッ込んでろブラザー

（ちよっ！久し振りの登場もう少しいい扱いしろよ！）

寝てろ

夕月は即再封印してチラツと横を見る。深娜は新聞を広げているが相当不機嫌らしく心なしかドス黒いオーラを醸し出している。そろそろ限界だな

「加弥。そろそろいい加減にしろよ。夏休み中そうしてるつもりか？」

「だってかすみ良い匂いするから好きなんだもん」

「こらこら近い近い！首止めて！首だけは勘弁して！ちよっ！マジで止めて！」

貞操の危機に颯爽と現れたのはやはり深娜でした。何故でしょう。

彼女を直視するのが死ぬほど怖いんですけど。深娜から視線を反らすとそこには無言で佇む洸夜がいた

台所では慎のマジ泣きの啜り声が聞こえ、時折刃物はダメとか呟いている。すいませんコツチも怖いです

二人に両脇を抱えられた加弥はまるで人形のようにピクリとも動かず廊下へと引き摺られていった

未だ抜けない恐怖に勇気を打ち付け慎の元へと向かう

「か、霞。俺、必死に止めた。止めてたけど包丁持った洗夜がにたあつて笑ってさ・・・俺取り上げるので精一杯だった」

「よくやった・・・お前は本当によくやったよ」

二人で生きてる事の素晴らしさを分かち合い、祝杯のサイダーを飲み交わした

20分程して最初に帰ってきたのは加弥で虚空を見ながら笑っていた
「えっと、加弥？」

「カヤ？ちがうよ。わたしメリーさん」

思わず加弥の頭を優しく撫でた。早く治れ。早くいつもの加弥に戻れ
加弥は相変わらず心の無い笑みを向けている。ほんと別室で何が起きてたんだろ。程なく二人も戻ってきたが先程の様な覇気は無く洗夜に至っては加弥の傍でひたすら謝ったりしてる

「霞」

いつものポジションに腰掛けた深娜はカップ片手に此方を一瞥する

「ああなりたくなかったら少しは自重したら」

「肝に銘じておきます」

こうして僕達の夏休みは幕を開けた

43・夏休みとメリーさん（後書き）

霞「作者は逃避行中ですので作者の作家仲間、Revさんからのコメントをどうぞ」

< 明けましておめでとうございます！

<

< 『mid Knight tale』作者のRevでございます。
いや、新年ですね…え？なんでお前がここにいるかって？

<

< ウドさんに呼ばれました（．．．）

< 召集です。実は友人です。帰郷したら必ず飲みに行くぐらいの友人です。

< てなわけですね、ウドさんの粋な計らいで（ドキドキですね）
出さしてもらった訳ですが…

<

<

< 「アタシも出るつつてんだよ！離っしやが．．．れッッ！」

<

< ゴッ！

<

< 「いつてえよコラ！姉貴は酒飲めねって事バレちまったんだから少しは自重しろや！」

<

< ゴッ！バキッ！

<

<

< ええとまあ邪魔が入ったわけなのでお早めに…

< 新年これから皆様のますますの幸せを願いましてこれにて閉めさせていただきます。

<

< 是非ぜひウドさんの作品読んでくださいね！

<

< あと…

<

< お酒は控えめに…

<

<

< 「出せやコラあああああ！！！」

霞「ありがとうございます。この人飲み過ぎで作者に担がれて帰ったそうですよ。それでは皆さん良い一年になりますことを」

44・ハーレムorじーてゅーヘル？（前書き）

霞「ごめんなさい」

作者「ごめんくさい」

霞「しやはあ！」

作「あべし！何しやがるテメエ！」

霞「どれだけ更新おせーんだよ！仕事しろよ！」

作「すんませんねえ！新ネタ考えてたら止まらなくなってさ」

霞「また新ネタかよ」

作「ほぼ全て会話のみで構成。記念すべき第一話はアニメOPみたいに
なります。キャラ振り付けも書くぜ」

霞「また不毛な作品を」

作「こうご期待」

霞「他の書けよ！」

44・ハーレムoorーてゅーヘル？

「．．．．．」

「．．．．．」

「．．．．．」

「．．．．．」

「．．．．．」

カリカリカリカリカリ

『．．．．．』

カリカリカリカリカリ

「．．．．．う」

カリカリカリ

「．．．．．う」

カリカリ

「．．．うう」

カリカリガリ

「うがあああ！」

「うぎゃああ！何故に俺を殴るんですか！」

「霞！分かんない！」

「はい教科書」

「なにその態度！教えてよー」

「自分で調べるから頭に入るんだよ」

さあてと残り5ページって所だな。あー暑い

「霞君、アンコールワットってカンボジアにあるよね？」

「そうだよ」

カリカリカリカリカリ

「かーすーみー」

カリカリカリカリカリ

「かーすーみー」

「ダメ」

「何も言っていないよ!」

「アイスでしょ」

言い当てられてムスツとしたままペンを走らせる加弥。いかんせん走らせてるだけで芯が出ていないペンで字は書くことが出来ない
集中力もそろそろ限界か

俺はペンを置き、冷蔵庫からしつかり冷えたジュースとデザートを取り出す

「今日はこれくらいにしてジュース飲もう」

真っ先にペンを投げ捨て何故か俺に向かって突き進む加弥を避け居間にコップを運ぶ

ついでにフライングでイチゴに手を伸ばす加弥を灼熱光線降り注ぐ窓際に連行。動いたらダメだよ?

「か、霞君、加弥ちゃんが凄い勢いで無気力人間になってるよ」

「ちやうちやう。アレは灰人って方が近いって」

洗夜はそうかなあみたいに首を傾げているが助ける事を忘れているようだ。慎も横から下手に入んなきゃいいのに

さつきから一切会話に参加していない深娜は涼しいクーラーポジションで涼しい顔をしながらイチゴをぱくつく

「・・・なに」

「いえなんにも」

文句なんか言えるわけもなく加弥に近付く

「かやー。聞こえる?」

「あううう。霞が三人いるうう・・・だっこお」

いい具合に幼児化を始めた加弥を扇風機の前に引き摺り放置。3分もすれば治るだろ

「なあ霞、最近淡泊になってないか?前ならもっと優しく介護してたろ」

「最近学んだ。甘やかすと全て負として俺に返ってくるって」

「……だな」

さ、イチゴたーべよ

きっかり3分後に復活した加弥はのろのとソファーに座り、冷えたジュースを一気に飲み干し目に見える回復を見せた

「生き返ったあ！」

突き出す空のコップにジュースを注ぎ、暇潰しに始めた大富豪に意識を戻す

「ふはははは！さあ平伏すがよい貧民め！」

腕を組みちっさい癖に見下ろしてくる慎は9を三枚投げる

「……あう。パスで」

富豪の洗夜はなす術なくパスを宣言

「………つち」

舌打ちした大貧民深娜は大富豪を睨む。違和感が無いのは何故だ

「さあ貧民。どうする！私に立ち向かう気か！」

「10を四枚で革命ね」

民は武器を持ち大富豪宅を襲撃した

仕切り直して7三枚

「ぐふう！」

ピンポイントで直撃した慎はその場に崩れる

「やったあ」

嬉しそうに6を出す洗夜に続き深娜も4を三枚。深娜も結構手持ち弱いたいだな

結果として大富豪に成り上がった俺と最下層の慎。深娜は漸く貧民に昇格したが果たして喜ぶべきか

「霞ー。私も参加ー」

「ん。いいよ」

まあ加弥も加わったし全部仕切り直していいか

これが悲劇の始まりだったかもしれない

この時の俺にはそれを知る術はなかった。一言弁明出来るならこう言おう。悪いのは俺じゃない。加弥と夕月だ！と

「ねえ霞」

「ん？」

カードを切る手を止め加弥を見るといつの間に作ったのか数枚の折り畳まれた紙と小さな箱

「ただやるのもつまらないし大貧民は罰ゲームでもしない？適当に罰ゲーム入れといたから」

箱に紙を入れシェイクする加弥。何が怖いって加弥しか罰ゲームの内容知らないって事だよ

「加弥ちゃん。罰ゲームってどんなの書いたの？」

「ん？新聞適当に切った。私もあんま覚えてない」

あいたたた。これは非常にピンチじゃね？

慎は切り抜かれた新聞を眺めて冷や汗を流している

「かすみボーイ。不味いぜ、三面記事ザックリいつてるよ」

チラッを見るとあらやだ芸能人の不倫記事ザックリいつてるよ
ぜってえ負けねえ

順番にカードを配り手札に目を通す。大丈夫だ、ジョーカーもあるし革命も出来る

どうやら最初の犠牲者にはならなくていいみたいだ

『勝負！』

今戦いの火蓋が切っても落とされた

「ふはははは！また富豪に成り上がってくれるは！」

何気にいい手札の慎を他所にパス連続の加弥。あかん、こりゃ負け
たな

「ひやつほう大富豪！」

「っち」

結構大富豪は慎、富豪俺。洸夜、深娜、加弥の順に平民、貧民、大
貧民

「加弥ちゃん、ど、ドンマイだよ。次頑張って」

「こうちゃーん！」

泣き付く加弥を横目に罰ゲームbox発動。何が出るかな何が出る
かな

【ナイススタイル！際立つ谷間】

「うわああああああん」

うわあ。マジ泣きだ

「これは不味いつしょ。つか加弥も何故こんな記事を」

可哀想な目でみる慎とさっさとしろと言わんばかりの深娜。仕方な
い、もう一回加弥に引いてもらうか

「はい加弥。今回だけだよ。今度はマシなの引いてね」

見逃すといった考えは無い。何故なら俺にも起こりうる事だからだ
すすり泣く加弥は再度箱に手を入れ入念に吟味して引いた内容は

【魅惑のお色気】

「うわああああああん」

あ、自覚はあったんだ

二度も引くか。余りにも此は可哀想か。深娜までもが哀れみの視線
になってしまったので今回は見逃す事になった

でも加弥、君はどうしてこんな記事を切り取ってしまったの？今更
ながら俺が引いてたらどうなってたか想像し身震いした

まだ涙目の加弥から無情にもカードを奪い取る慎は心底申し訳なさ

そうに受け取り、加弥はトレードしたカードを見てへこんだ

「……あのー深娜さん？カード一枚トレードするのにどうしてそんなに睨むの？る、ルールなんだから仕方ないでしょ？え？しね？酷くね貴女！たかがゲームだよ！

殺意と共にトレードし、改めて手札を確認。今回も負けはないな

「さあ愚民よ！我輩にひざまずくがいい！」

「……革命」

「いいい！深娜ちゃんそこで何で革命なの！」

「あう。私パスで」

「革命返し」

深娜におもいつきしツネられいたたたたあ！

「痛いって深娜！たかがゲームでなんでそんなキレるかな！」

「誰があんな罰ゲームやりたいと思うのよ！」

反論できません。俺も罰ゲームいやや

「よくやった！これで俺の負けはなくなった！」

無情にも最下位は洸夜。加弥、洸夜の前で泣いて喜ぶってどうなのさ？

「ふええ。イヤだよお」

「洸夜」

「か、霞君？」

「さ、引こうか？」

我は今修羅なり。涙目で慎重に引いた罰ゲームの内容は……

【あつあつカップル】

え？これはどうゆう罰ゲームになるのかな？

「……霞君」

何故か頬を紅くして隣に座る洸夜は、俺に寄りかかり潤んだ瞳で見上げてきます

「これならあつあつカップルに見えるよね？」

これは俺にたいする罰ゲームか？理性が崩壊するぞマジでちよっ、お二方マジで睨んでるしいたたたたたあッネるな加弥ああああ！

「こうちやゝんもう終わりだよー。早く席に戻ろうね？てか戻れ」
初の命令にスゲーショックを受けてトボトボ席に戻る洸夜を慰める
慎。尋常じゃないくらい痛い頬を撫でながら再びカードを配る

・・・・・・・・さて、なんじゃこの手札。ムリムリ絶対無理

見ろ、周りの連中余裕の笑みしか無いぞ
くっ、罰ゲームこええ

「ひよほほほ。Q三枚防げるものならやってみよ！」

「えへへ。私K3枚出せるもんね。深娜ちゃんありがと」

「・・・・・・・・パス」

「・・・・・・・・っち」

「えうう。パス」

まあ、見事に惨敗です。何これ手札半分も残ってるよ

「かーすーみ。さあさあ引いてみよう」

あからさまにさっきと違う箱を突き出す加弥。横から深娜が奪い取り即開封

「何これ。加弥とアツアツカップル2時間とか」

「うわ、これすげえ。今夜添い寝って書いてるぞ」

「かーやーちゃん」

ま、これは無効だし仕方なく本物のカオスBOXから引くか

・・・・・・・・

【女装】

シユパパパパパパ

細切れに引きちぎったゴミを灰皿に投げ捨て放火

そうだ、何かの間違いだよ。あんなものは始めから存在しないのだよ
さあ仕切り直しだ

・・・・・・

「性転換って書いてるわね」

「これは無理だろ」

「いつそ女装でいいんじゃない？」

「ならまた大川さんの服でいいのかな？」

退路は絶たれた。だが諦めてはいけない。そうだ、僕は鳥になるんだ！

「逃げるな。現実逃避してる暇無いわよ」

いやああああああ

見た目はたいして変わってません。ただ深娜の服を着せられ髪を結
つてたゴムを取り特科研部特製変声機までやられて何か人として大
切なナニかを失った気持ちです

「さ、カスミン張り切っていこー」

「・・・加弥さん」

「んー？」

「もう手加減しないから。めっためたにしてあげる」

うん、手加減なんていらないよね？いらないよね

極上のスマイルと共に一瞬山札に目を通す

覚えたか雫？

もっちゃん

ならシャッフル頼む

了解

一瞬視界を失い覚醒すると既にカードの配布は終わり手札には最強の組み合わせが揃っている

「さ、始めようか？」

地獄に出發だ

洗夜に手札を二枚渡し周りの様子を伺う

最初の生け贄はやはり慎になってもらおう。どうだ？8以下の数字で固められた手札は

無論慎は惨敗。見事大富豪に成り上がった俺は優雅に勝利の美酒を
オレンジジュース
口に運ぶ

「くそお。あからさまな敵意の感じる手札だったぞちきしょう」

「さあ罰ゲームいつてみようか慎くん」

「かかってこいや！」

【ランニング】

「しねってか！この炎天下走れって」

「わーい。町内一周いつてみよー」

「いやや！これ死ぬってマジかんべぶほおっ」

玄関から蹴りだし施錠

さ、走れ走れ

10分という速さで走りきった慎は空気漏れのような細い呼吸で玄関に倒れ無事一命をとりとめた

さあ次は誰を落ちるのかなあ！。大富豪だしもうイカサマはいらないからな

適当に切り分け再開。慎は1・5のペットボトルを飲み干し痙攣気味にカードを渡してきた

ジョーカーとはいいいねえ

さあついにきたか深娜よ。とうとう生け贄に選ばれたか

「うわあ。深娜ちゃんどの罰ゲームやつてもシャレにならないんじゃない？」

「お、大川さん、怒っちゃダメだよ？」

「……早くよこしなさい」

躊躇なく箱に手を入れ掴み取った罰ゲームの内容を見て固まる深娜横から覗いて……。いや、これはまた酷な罰ゲームじゃね？

「カスミ、何て書いてたの？深娜ちゃんメツさ固まってるけど」

「……一発芸」

「うわあ。これキツツイ。特に深娜ちゃんがやる辺りが」

「深娜殿・・ファイト」

しかし深娜の一発芸。まったく想像できん

すると深娜は覚悟を決めたのかゆっくり立ち上がり何故か俺の襟を掴み立たせた。や、なんか身の危険を感じる

「霞、力を抜いときなさい。怪我するわよ」

「なにその一発芸！」

目付きが鋭くなり逃げ場を失った俺は観念した

「コウちゃん、見た目は年上のイジメツコと後輩って感じだね」

「霞君女装中だもんね」

「写メ撮ってこ」

テメエら言い過ぎだと言いたかったか突然の浮遊感。気付くと深娜が180°回って逆さまに見え床に叩き付けられた。脱力意味ねえーじゃん

「す、すごおい！どうやったの深娜ちゃん！」

「合気的一种よ。そう簡単に出来る技じゃ無いし無闇にやらない方

「がいいわよ」

やるは殺の字が収まるのだろうか。次も負ければいいのにと心で叫び、再びカードを配りはじめた

「うわぁ深娜ちゃん二連敗。次はなんだろ」

「私大川さんのダンスとか見てみたい」

「加弥っち、阿波おどりとか切り抜いてないのか？」

「確かあったよ」

「じゃそれに一票」

おうおう好き放題言ってるな勝者組。当の深娜は己の手札を投げ捨て親の仇みたいな眼差しで罰ゲームBoxを見ている

「引くのだ。さぁさぁ引くのだ。阿波おどりとか引いとけ」

お忘れの方もいると思いますが俺は未だに女装中です。見た目はいじめられっ子の逆襲だろ

恐る恐るといった感じで手を入れた深娜は吟味に吟味を重ねて引いた紙。内容を見た深娜は速攻でシユパパパパパパパ

「何よ今の！一発ギャグとかするわけないじゃない！」

「深娜ちゃん引いたの一発ギャグなんだぁ。私引かなくてよかった
あ」

「わ、私も。何も思い付かないし恥ずかしいよ」

「布団が吹っ飛んだ！は定番かつ無視の対象だろうな」

墓穴を掘ったな深娜嬢。さぁいつてみよう初公開、321きゅー

「と・ふつ・ふつ」

『はい？（注・全員聞こえています）』

「とん・ふつ・だ」

『はい？（笑）』

「布団が吹っ飛んだ！これで満足したかしら！」

「なんで逆ギレして俺殴るかな！めちやくちゃイテエーぞ！」

「うるさいわよ！なんでこんな事しなきゃならないのよ！」

「罰ゲームだからだよ！負けたでしょうが！」

「うるさい！」

「だから何で叩く！」

「うるさい！」

暴走モードに突入した深娜は何処からともなくひっぱり出した槌を振り回し俺は全力で逃げる。テメエラ止めるよ！

「また深娜ちゃん霞と遊んで・・・ズルい」

「いやアレって遊んでるのか？一方的な狩りじゃね？」

「でも霞君独り占めしてるもん。羨ましいな」

「いやアレはどうなんだろうな？」

結局二発程ボディーに頂き鎮静した深娜は二度と負けるかと呟き力ードを配る。そんな嫌なら辞めればいいのに

まあ深娜の鬼気迫る迫力の賜物か二度と負ける事は無く、三人組の独壇場となった

例えば慎が『情熱的な阿波おどり』を引き、あらえっさっさ！あらえっさっさ！と頭の上で手をヒラヒラさせながら狂ったように踊ったり洗夜が『演歌』を引いて可愛い声で与作のサビだけ歌ったり加弥が『shangrila』って引いて意味を教えたとたん俺の膝の上に座って極上の笑みになって何故か深娜に殴られたり。ちなみにshangrilaは理想境って意味。だからってこれは無いよ加弥

他にも抱擁を引いた洗夜が加弥と深娜の鋭い眼光に負けて何故か深娜に抱きついたり慎が裸って引いたとたん総出でフルボッコされたり色々あった

もう色々としか言いようが無い。追求しないで

そしてラストバトル

「こ、これがラストね」

箱を振るとカサカサと一枚だけの紙が転がる音をだす

「色々あったよね」

洸夜は何処か遠くを見ている。そりや皆の前でエアロビもどきやったら少々キツイよな

「ねえ、俺着替えちゃだめか。つかなんでこんなのあったの？」

うるさいなあガチャピン。赤い毛むくじやらがいないからって絡むなよ

「早く終わりにして課題終わらせたいんだけど」

一発ギャグの壁を乗り越えた深娜は一回り成長したのかもしれないね

「それでは・・・ラストバトル、参ります」

これはイカサマ抜ききの真剣勝負。神よ、我に奇跡を！つか負けたくない

我、カードに寵愛されし者なり！

「っしやああ！一抜けだあ（注・変声中）」

俺は勝った。全ての負を斬り捨て勝利を勝ち取った！

解放された俺は早々と抜けソファ^{ジュース}ーに寝そべり寛ぐ。ふっ、勝利の美酒は格別だな

勝負は決した。負けたのは悲しいかな加弥嬢。最後の最後に深娜の

隠し持っていたAの前に破れてしまった

「いやだああ。また変なの書いてるよ！」

「だがそれ切ったの加弥じゃん。諦めて引きなつて」

慎に諭されびくびくしながら最後の一枚を広げた

【夜這い】

「よつしやあああ！」

ガッツポーズする加弥は標的をロックオンし、猫科の動物のように飛び掛かって来たが二名に引き摺られていったのは言うまでもない

そしてその夜。寝息の他に音も無く静寂に包まれた空間

モノアイに光が灯り周囲を索敵。ゆっくりとした稼働音を響かせ立ち上がる戦士

加弥、大地に立つ

寝室を抜け二階へと歩みを進め目的の部屋の前に立つ。ノブに手を掛け捻るが施錠されている

しかし今の加弥のエネルギーゲージは通常の三倍あり鈍い音と共に解除

開け放たれた扉を越え室内に踏み込む加弥はベッドに目標を確認した野崎霞17歳。今貞操に危機が迫っているなど知る術も無く、呑気に寝息をたてていた

一歩、また一歩近づくと加弥は霞が羽織っている薄いシートを持ち上げ素早く忍び込む

物凄い勢いで深呼吸してエネルギーチャージ。ボルテージはMAX。体調万全。オールグリーン。オールグリーン。オールグリーン！

そーっと視線をあげれば無防備な寝顔の霞

「ん……」

身動きする霞は体を曲げ、加弥の顔スレスレまで近づき再び眠りにつく

加弥はといえば目を見開き真一文字の口、熟れたトマトより真っ赤になって硬直している

こうして野崎霞の貞操の危機は杞憂に終わった

6時間後

一睡もしていない加弥は未だにピクリとも動かず固まったまま朝を迎えた。6時間もの間何一つ手を出さなかったのは、理性が勝ったのかただヘタレだったのは誰にも分からない
そして悲劇は始まった

いつもの様に目覚めた深娜はなんとなく、隣の部屋を覗いた。普通なら加弥と洗夜が寝ているのだが加弥がいない。最初はトイレかと思ったが、加弥がこんなに早く起きた事は一度も無いことに気付きハッと視線を二階に向けた。足音も無く三段跳びで駆け上がりドアノブに手を駆け愕然とする。いつもされている鍵が外れている

その時の深娜を誰かが見ていたなら後世にこう言い伝えられていたろう

「な、何やってるの！」

深娜の魂の咆哮に反応した加弥は隈のある目で深娜を捉えまた硬直した

「大早加弥さん、何をしてるか分かってるわよね？」

何故かフルネームで呼び、ゆらりと闘気をたぎらせ一歩一歩近付く深娜に本能的な恐怖を感じた加弥は思わず霞に助けを求めようと顔を合わせた

霞は夢の中、ほのかにいい匂いのする猫を抱き締めるため腕を伸ばし、ふわふわもこもこの体に顔を埋めようとしていた

ちい
う

そして時は動き出す

深娜二度目の魂の咆哮は野崎邸の隅から隅まで響き渡り全員が飛び起きた

約二名ピクリとも動く気配はなかった

居間に正座させられ裁判が始まった

野崎霞は腹部を抑え本気で苦しそうにしている。あの時咆哮と同時に飛び蹴り。ベッドから突き落とした霞に追い討ちを掛けるようにスタンプの嵐を見舞っていたのだ

加弥はというと完全に魂がバルハラに旅立ったいるのでソファでぐったりしている

「で、刺されるのと引き千切られるのと引き摺り回されるのとどれがいい？」

「いや……なんつうか、すいません……ほんと勘弁して……下さい」

慎にやりわり包丁を取り上げられた洩夜はまた何処から取り出したのか深娜印の木槌を握りしめていた

「霞くん、人って何回までなら耐えられるのかな？」

何を？とは聞けない霞は産まれたばかりの子羊の様にプルプル震えている

「ってか……俺何したの？気付いたら深娜に踏まれてここに叩き付けられたけどさ」

「……………」

双方言葉に詰まり何故か慎を睨む。睨まれた慎は産まれた子羊の様にプルプル震えている

（ふ、お困りの様だなブラザー）

帰れ

（ちよっ、酷くね！お前加弥っちにキスしといて何逃げるつもりだなに。ば、バカな、そんな事が……だから俺いま滅殺されそうなのか

（ふ、ようやく己の立場を理解したかブラザー）

これは・・・受け入れねばならないのか

（まあ待て、取り敢えず早まるな。もしかしたら一人は封じる事が出来るぞ）

本当か！

（ふっ、俺を誰だと思っている。だから今から入れ替わるぞ）
頼む。まだ死にたくない

そして夕月の策略に溺れる霞であつた

「つつ訳で俺降臨」

その一言で臨戦体勢入った深娜は慎が取り上げてた包丁を構え身を低くしている

「おうおう深娜っち、殺る気マンマンだな」

「アンタ最近簡単に入れ替わるわね」

「そりゃーアレだ。漫画でもある様なシンクロ率みたいなもんがい具合に重なってだな」

「・・・話す気無いでしょ」

「まあね。雫ぐらいしか分からねーんだよ」

やれやれといった感じなりアクションをする夕月は当たり前のように洗夜に近付き当たり前の様に唇を重ねた

「は？」

啞然とする深娜を他所に洗夜は洗夜で愕然とした様子でされるがまだ

「!!!!!!!!!!!!」

更に眼を見開き驚愕の表情に変わった洸夜は完全に脱力しずるずると床にノビた

「ふっふっふー。コウちゃんデープキスGETだぜ!」

してやったりの満足気な表情で咆哮する夕月は、深娜に向かって手をシュタッと構えてその場に倒れた

後に野崎邸の怪として、唯一正常であった藤阪慎により語り継がれたかどうかは定かではない

だが藤阪慎は一言だけ語ってくれた

「羨まし過ぎんだよコンチキショオオオオオオオオオオオオオオ!」

彼の魂の咆哮は枯れる事無く叫ばれ続けている

44・ハーレムコーてゅーヘル？（後書き）

加弥「加弥と！」

洸夜「洸夜の！」

加・洸『テレフォンショッキング！』

加「今回のゲストはこの人！」

洸「……あれ？いないよ？」

加「うそお！……あれ、本当だ」

洸「すいませーん。ゲストさんまだですかー」

加「え？渋滞だからあと一時間つないで??」

洸「ええ！無理ですよ！私たちプロじゃないですから」

加「え！いきなり巻いてってそんな！えーっと……」

加・洸『風邪に負けるな！テレフォンショッキングでしたあ！』

45・僕とお嬢の夏休み（前書き）

作者「よっしゃあ！」

霞「うざあい」

作「だって俺ここまで速く更新したのひっさしぶりだぜ！」

霞「これが普通なんじゃないの？」

作「ぐはあっ！」

霞「まあこれから精進しなさい」

作「はい。ホント頑張りますはい」

霞「で、今回は突然のお嬢ネタだね」

作「うん。お嬢は夏休み中ちよくちよく出す予定だからまずはジャブみたいな？」

霞「ふーん。にしても最近の慎鎮静中だな。良いことだけど」

作「あー。それはアレだ。ポケモンでいえば我慢の状態。ドラクエならバイギルトだね」

霞「うえ。いつ爆発すんだよ」

作「私にも分からない。アイツはこの作品で唯一の独立生命体だ」

霞「消えねーかなー」

作「むりむり。さ、本編でこらしめなさい。でわでわー」

45・僕とお嬢の夏休み

サンサンと照りつける太陽。純白の砂浜に打ち寄せる波に身を任せように流される貝を眺めてから現実を受け止めようと思う。ふふふ、まるでネバーランドみたいだぜ
いつそ夢であつてほしい

「あら、お気に召しませんでした？ 私達以外にギャラリーはいませんのよ？」

「……眼を覚ましたら常夏の無人島って漫画みたいな流れはやめてほしいな。取り敢えず拉致って事で訴えるぞ」

「あらあら。警察が動いて下さるかしら？」
無理だよなー

俺他3名を無断で拉致し、三泊四日・常夏無人島ツアーに強制参加させた深娜はこのくそ暑い日射しの下、平然とお嬢の隣に立っている

「……何。文句でもあるの？」

「……ないっす」

視線を反らし海を見れば慎と両手を繋ぎ勢いよく回り始めた加弥は遠心力により大空に舞った。ガッツポーズをする慎に今度は洗夜が頼み同じ様に洗夜も空へ翔んでいった

「……」

「あら、楽しそうですわね。貴方も一緒に遊んでいらしたら？」

下から上へ向けて視線を辿れど起伏の少ないスレンダーな体格に白のビキニという深娜に対抗してかの格好。どちらかといえば加弥に近いのだが言わぬが吉とみた

「霞君、更衣室はその小屋を使うといい。着替え等は準備してある」

幸澤に指示された場所を着替えを済ませ改めて浜辺に腰を降ろす

「なんでまた無人島なんかに連れてきたんだ」

「私だつて夏休みぐらいはありますもの。これでも学生ですわ」

「……え？」

「なんですのそのえ？とは。まさか成人とでもおもつてまして？」

「いや……学校行つてたんだ。てつきり家庭教師なんか雇つてんのかと思つてな」

お嬢はクスクス笑い俺の隣に腰かける

「私だつて学校に行きクラブや委員会にも参加しますわ。まあ忙しい時は欠席していますが、それなら今度光世高校と交流会でも開こうかしら」

「何処の高校だ？場合によつては会長に相談してみるが」

「私がつつてますのは聖鳳華女子大付属高等学校ですわ」

メッさ御嬢様学校じゃねーかよ。普通に考えて一般高校なんかと交流会する事は万に一つもないな

「私、次期生徒会長ですので多少の我が儘は通せますわ」

すると今まで黙りだつた深娜が然り気無く補佐をする

「あの方が資金面を全面的に援助したおかげであの高校は出来た様なものなのよ。その御息女である御嬢様が言えば学長であっても拒むことは滅多に無いのよ」

金持ちつてのはどうしてこう……イラッとさせる程金をここまで豪快に使うかね。聖鳳華女子大つていえば海外にも名は広く知れ渡る程の一流女子大。豪華さと設備の良さは群を抜いてるからな

「かーすみー！早くあそぼ よー！」

加弥が浅瀬で手を振っている。その後ろで二度目のフライトに挑戦している洗夜が回り始めた

「ふふ、お呼びですわよ。貴方も隅におけませんわね。この子の他に二人も女性に慕われて」

深娜は何か抗議したそうだったが結局諦めて小さく溜め息を吐いた
「どうだお嬢。一緒に泳ぐか？」

お嬢は暫し目を丸くして俺を見てくる。そして相変わらず優雅にク

スクス笑うと俺に手を差し出して来た

「それではエスコート宜しいかしら？ 私同年代の方とこうして遊ぶのは初めてなの」

「俺で宜しければ御手をどうぞ。精々退屈させない様に努力するよ」
小さく真つ白な手を取り初のお嬢エスコート。うわめっちゃ華奢な
んだけどお嬢

「どういう心境の変化かしら？ いつもなら邪険に扱うのに」

「ん？ ほら香水つけてないだろ。そんだけ」

俺はお嬢の使ってる香水嫌いだからな。やたらキツいんだよアレ。
加弥とか洸夜も使ってるみたいんだけどお嬢とは雲泥の差だと思うよ
「貴方って本当に変わってますわね」

「自覚してるさ」

お嬢の隣を歩きながら深娜に声を掛ける

「お前もさつさと着替えてこいよ。ただ砂浜で立ってるだけか？」

「わ、私は別に・・・」

「はぁ、ったく。お嬢、一言言つてやれ」

お嬢は苦笑いをしながら深娜の方を向く

「昔から貴女って遠慮ばかりよね。今日ぐらい同年代の友達として
一緒に遊びたいわ」

「そ、そんな、私が御嬢様の友達だなどと」

狼狽える深娜を見てて本当に笑えてくる。滅多に見れないお宝映像
だな。俺は加弥より更に軽いお嬢をお姫さま抱っこよろしく抱えて
深娜に背を向けて歩き出す

「早く着替えてこいよー。じゃないとずっとお嬢この格好だからな
ー」

後ろで猛ダツシュする足音を聞きながら思わず笑みがこぼれる。本
当深娜はお嬢想いだこと

「・・・あの、私非常に恥ずかしいのですが」

「気にするな。ノーギャラリーなんだろう？」

5分後に深娜の脳天ドロップが炸裂した辺りで漸くメンバーが揃い、何を思ったか加弥が水面下でローキックをかましてきた

なす術なく倒れる俺に追い討ちを掛ける加弥は俺の上に飛び乗った。首筋辺りに乗り掛かり、何故か耳を手綱にして加弥が吠える

「カスミ丸発進！」

「ウオオオオオ！つて吠えればいいのか？」

肩車されてる加弥は上機嫌で足をパタパタさせ、洸夜は羨ましそうに指をくわえて期待に満ちた瞳で見てる

だがいかんせん俺は夕月でないので非力そのもの。加弥で限界なのだ

「あら、楽しそうですね。私もしていただくかしら？」

「御嬢様！危険ですのでお止めください」

深娜に止められ若干不服そうなお嬢は何故か俺に八つ当たり気味に押してきた。無論体の重心がやや高くなり不安定な肩車の要である俺を押すとどうなるか

「いやああああ！」

「うわあああ」

ざっぱあーん

「がばああお！はなぜ加弥！おぼれぶうう！」

軽く死にかけた俺は本気でお嬢に仕返ししたい。したいけど鉄壁の深娜が前に出ては何も出来ない

とそんな事を考えてたらいつの間にか洸夜が背中に張り付いてる訳で深娜にも負けず劣らずの双胸がエライことになっているねえ洸夜

さんお願いだからよく考えて行動しようねほらなんか二名ほどこえーしほら加弥なんか貝殻を武器ににじり寄ってきてるしこらなんで更に強く抱きつくかな動けない動けないウゴケナイ

「か、霞君、その・・・おんぶ」

「ふぁいつ！何を言っちゃってるかな冴夜ちゃん！」

しかし止める間もなく張り付いてしまった冴夜を力任せに振り払う事も出来ずカスミ丸2号がここに完成した。すいません冴夜さんそんなに密着しないで

「仲がよろしいですね。深娜も悠長に構えていられませんか？」

「お、御嬢様！私は別に・・・何もありません！」

「ふふ、そういう事にしておきましょう」

反論したくても出来ない深娜は腹いせにやっぱり俺に向かってきたつか人が乗ってるのに飛び蹴りってどうなのさ

それから浜で野郎VS乙女のビーチバレーで加弥の絶妙な反則技を華麗に無視した審判お嬢に抗議して返り討ちにあったり、慎を砂浜に直立で埋めてみたり何をどうしてこうなったのかお嬢に日焼け止めクリームを塗る羽目になって終わり次第リンチにされて慎の隣に埋められたり散々な目にあった。つか縛るってどんだけ非道なんだよお前等

そして夜。無人島に不釣り合いな超豪華な別荘で夕食を食べていた時、お嬢の何気無い一言から始まった

「そういえば、私肝試しをしてみたいの」

その瞬間加弥だけが時の狭間に落ちた様にピクリとも動かなくなる。しかしお嬢は気付いていない

「一度でいいからやってみたいと思っただけなの。よろしいかしら？」

加弥は動かない。しかし深娜は即答し洸夜も了承。俺はどっちでもいいと答えると加弥が本気で泣き付いて来たのは余談である

「島の中央付近には大きな古株が御座いますの。今から幸澤に目印を置いてこさせますので二人一組で取りに行きましょう」

二人一組の言葉にすすり泣いてた加弥がピタリと泣き止みゆらりと立ち上がる。加弥の脳内でどんな未来予想しているのか定かではないが威嚇する様にいつもの二人を睨む。背景に雷鳴が轟いてそんな雰囲気の中、幸澤はお嬢に一礼すると足早に目的地へ向かった俺はクジをのんびり作りながらふと思いついた。そっぴや慎掘り出してなかった

「ようお前コノヤロウ。俺はアレか？現代風にアレンジした晒し首か？」

「いやすまん。自力の脱出で一杯だったもんでつい」

「ついじゃねーべ。このすつとこどつこい！」

「あ、今から肝試しやるから着替えてこい」

「すつとこどつこい！」

よく分からない返事を残し走り去る慎に正直気持ち悪いなとか当たり障りない感想を胸に抱きながらせつせとクジを作り続けたその間中互いを牽制し合う三人とそれを見ながら微笑むお嬢。なんか肝試し慎掘りが妥当なパートナーかもな

「さて、幸澤も帰ってきたし早速引くか。ほれ慎。先に引け」

慎が引いたのは²

俺が引いたのは¹

ガッツポーズする二人を横目に箱をテーブルに

「さ、引く順番決まったら引いてく

「わ、私はまだいいよ。コウちゃん引いたら?」

「私! 私もまだいいよ。大川さんどうぞ」

「・・・御嬢様、お先にどうぞ」

確率は1/4。いかにしてその1を掴むか。互いに戦略を練っている

「それでしたら私がお先に失礼しますわ・・・あら、貴方と一緒にね?」

お嬢、お前1引いちゃったのかよ。ほらみろ、三人仲良く時の狭間に落ちたし

「それではエスコート再び宜しくお願いします」

「あー・・・うん。了解した。じゃ、行ってくる」

動かぬモノに一応声をかけ、俺とお嬢は家を後にした

月明かりの他に懐中電灯のみで森を歩く俺とお嬢。程よく整備が行き渡っているので迷う心配はないだろ

「貴方と二人だけで歩くななんて初めてですわね。お会いした時は想像もませんでした」

「まあな。俺だってそんな事考えなかったよ」

隣を歩くお嬢は後で手を組み楽しそうに歩いている。こういう仕草をみてると同年代には見えないな。つかお嬢子供っぽくね?

「それで、深娜は御迷惑かけてないかしら? あの子変な所で頑固だから」

「安心しろ。たまに暴走するけど周りに被害は出てない。俺が被害を受けてるだけだ、安心しろ。俺はまだ闘える」

「えっと・・・苦勞なさってるみたいですね」

「うん。最近打撃に対する耐性がついてきて」

ちよつとやそつとじゃ倒れないこの体はある意味日々の賜物かもしれない

「私は最初、深娜を出すのに少々不安がありました。あの子は昔の事が原因で笑う事も無く、ただ私の事を第一に考え無茶ばかりしてましたの」

「・・・」

「でもあの子には幸せを見付けて貰いたくて貴方の所へ行かせました。結果としては最良だったかもしれないわ」

お嬢は立ち止まり俺に向き直る。そして深々と頭を下げた

「霞さん。本当にありがとうございます」

「・・・いってそんな事言わなくて」

「それでも伝えなきゃいけませんもの。貴方は深娜と、私にとっての恩人ですもの」

俺はムズ痒くなり、お嬢の頭に手を乗せ少し乱暴に撫でな

「きゃっ、ちょっと何をなさいますの!」

「なに畏まってんだ。今更そんな事言われても逆に俺が恥ずかしいって」

手を退けて懐中電灯の灯りを進路に向ける

「行くぞお嬢。お前の所の可愛い可愛いお友達が心配してまってるぞ」

お嬢は手櫛で乱れた髪をサツと直し小走りで俺の隣に駆けてきた

その頃待機組はといいと

『・・・』

沈黙する三人組

「なかなかやりますね慎君。屋敷の中でもここまでやれるのは君位

だよ」

「幸澤さんもつえーよ。霞とやりあってもここまで追い込まれないからな」

無駄にデカイテレビで格ゲーやってる二人は目まぐるしい速さでコマンドを打ち込んでいた

「つか幸澤さんゲームやるんだ」

「屋敷の皆さんに誘われてやってみたら思いの外楽しかったので」

幸澤のキャラが金色の輝きを放ち慎のキャラに超必殺技を繰り出しながら術無く慎のキャラはスローでぶっ飛んだ

「あー負けた！ガード不可の必殺コンボかよ」

「君の空中殺法からの必殺コンボも流石ですね。このコンボは自分分です」

意外な接点で盛り上がる二人を他所にテンションただ下がりの三人は思い出した様にクジに手を突っ込んだ

加弥と洗夜が3を引いてはふーと溜め息を吐き、深娜は2を引いて握り潰した

「ヒデーよ姉御！」

慎を無視して深娜は深々と溜め息を吐いた

「あら、もう着きましたよ。ここが目的地の古株ですわ」

丁寧に置かれた小さな袋を手に入れお嬢に手渡す

「さあ、皆さんの所にもどりま」

ガサ

お嬢の丁度後ろの草むらで草木が擦れる音が突然聞こえる

はて、動物でもいたかな？草むらに注意を向けつつお嬢を見ると固まっていた・・・え？お嬢？おじょおー？

「・・・霞さん？」

「なに？」

「・・・何か後ろにいらつしやいますか？」

「・・・まだわかんない。何も出てきてないし」

「・・・霞さん？」

「なに？」

「・・・こちらに来ていただきますか？」

「はい。来たけど」

お嬢は徐に俺の手を握り割と密着してきた

「急いでもどりましょう。皆さんが心配です」

ガサ

無言でさらに一歩近付いて服を掴んできた

「霞さん」

「なに？」

「急いで帰ります。早く帰ります。真っ直ぐ帰ります」

「・・・あ、おばけだ」

「ひいああっ！」

背中に張り付いてガタガタ震えだしたお嬢はあらん限りの力でホルドし退路を求め後退り始めた

「霞さん霞さん！早くもどりましょう！」

「・・・ごめん。ウソ。まさかここまでとは思わなくて」

加弥並みに怖がりだなお嬢。お嬢はゆっくりホールドを解き深娜１／１０アリキック炸裂

「怒りますわよ」

「うん。割とごめん」

ガサガサ

お嬢は俺の手を取りあらん限りの速さで逃げ出したのは言うまでもない

「ただいまー」

「おかーりー」

画面から目を離さず目まぐるしい速さでキャラを動かす慎。慎と思わしきキャラは空中でやたら派手な技を繰り出している

「かーすーみー」

思念体が飛び出そうな低い声で接近する加弥は目敏くお嬢と手を繋いでいる所を発見

だが俺に向かつて来ると思いきやお嬢に近付いていく

「お嬢さん。もしかして……仲間？」

「貴女もですか？」

暫し見つめ合う二人は互いに抱き合い何かを分かち合っている

「霞君、何もなかったよね？迷ったりしないよね？」

「道には迷わないよ。一本道だし。あーそういえば古株の辺りで草むらに何かいたね」

「いやだあああ！」

突然加弥は悲鳴をあげ隅っこに走り去った。洸夜がなんとか宥めているが柱にしがみつき嫌でも離れない気だ

それに耐えかねたのか慎の襟を掴み歩き出す深娜

「あ、姉御！ぐるしいっす！歩くから離して！」

そんな二人は闇夜に消え、何故か慎の悲鳴が聞こえたり聞こえなかつたり

程なく帰って来た二人。慎の第一声は『無言つて辛い』だった。深娜は馴れないと会話成立しないからな。さて最後のチームなんだが未だに駄々を捏ねている。仕方ないので加弥に耳打ちをする

「頑張れ加弥。負けるな加弥。君なら出来る」

「よっしゃあ！」

雄叫びと共に冴夜の手を取りダッシュする加弥は俺達の半分以下の時間で帰ってきた。そして帰って早々泣き付いてきた

あーはいはい泣かないの。よーしよし

「霞い。怖いから一緒に寝てもいい？」

冴夜は加弥の襟を掴みずると引き摺っていく

「加弥ちゃん。一緒に寝よーねー」

「こ、コウちゃん？」

「寝よーねー」

「いやほら・・・私おばけとか怖いから出来れば霞と添い寝して」

「寝ろ」

「はい」

二人は扉の奥に姿を消した。呆然と見詰めていたお嬢も苦笑いの後寢室に向かい深娜もそれに続いて部屋を後にした

憤もやや暗い表情で先寝ると言い残し消え、残ったのは俺と幸澤だけになった

「・・・なあ」

「どうしました？」

「何した？」

「何・・・とは？」

「惚けるな。あんなタイミングで草むらが動くわけないだろ」

「・・・バレましたか。この海域の島は菊池財閥が保有について管理人として常に数名が巡回してるんですよ。大方イタズラ好きの山倉の仕業でしょう」

「下らねー事するなって言っとけ」

「分かったよ。そういえばこの辺りに深娜君の島があるって知って

いたかい？」

「・・・深娜の島？」

「ええ。先代、御嬢様の御父上様が深娜君の10歳の誕生日にね」

「へー。深娜島か。後で行ってみたいな」

その願いが叶うのが案外速かったのは今の俺に知る術はなかった

周りが寝静まった夜闇の中、一隻のボートが島を出た

巧みにハンドルを捌く深娜は5年振りに自分が保有している島へと向かった。人が入ってそうな大きな麻袋を乗せて

45・僕とお嬢の夏休み（後書き）

加弥「加弥と！」

洸夜「洸夜の！」

加・洸「テレフォンショッキング！」

加「今日のゲストは二回目のこの人！」

お嬢「お久し振りです皆様。菊池麗奈ですわ」

洸夜「バカンスに招待してくれてありがとうございます」

お嬢「いいえ。お二人にもあの子がお世話になってますから」

加「でも深娜ちゃんってホントお嬢さんの事になると容赦しないよね」

洸「霞君大丈夫かな？」

お嬢「うふふ。霞さんにもご迷惑かけてしまいましたわね」

加「あれ？お嬢さん霞の名前呼ぶの今回初めてじゃない？」

お嬢「あら、そういえばそうでしたわね」

洸「……麗奈さん」

お嬢「……えっと、どうしました？」

加「お嬢さん、霞の事どうおもってるのかな？」

洸「出来れば詳しくお話しませんか？」

お嬢「え？え？お二人共、どちらに連れて行く気ですか？」

加「あははは」

洸「うふふふ」

お嬢「え？ええ！？」

加・洸「危険な芽はお早めに……。ね。テレフォンショッキングでした！」

お嬢「ええええええ！」

超番外 読むな危険（前書き）

この番組は、作者が半年以上前辺りから書きたいと思い募らせ出来てしまった恐ろしい駄文

ただ危険。夢落ちを悪用したやりたい放題
危険なパクリもあります

でも我輩は声高らかに叫びたい。こんな自由に書けるって素晴らしい！

第2弾も検討中なこの超番外。みんなの声援が今後に大きく響くのは確かです

ではご覧ください

ウドの大木超大作

一歩先から闇、超番外

読むな危険

ブラウザの戻るボタンを今すぐクリック！

超番外 読むな危険

暗いトンネルを抜けた時、僕の目の前にはちよつとロリな深娜がいた

「え？」

「何よ。何ジロジロみてんのよヘンタイ」

若干性格が変わってる気もするが見た目からして深娜に間違いあるまい。小4〜中1辺りの幼さ残る顔つきながらやはり怒った時の鋭い視線は変わっていない

「あ、アンタなんかと別に一緒にいたい分けじゃないからね！」

「メーデー！メーデー！至急僕の頭をぶって！」

しかし飛んできたのはロリ深娜の弱パンチだった

「これは・・・夢か」

「そんなわけないじゃない。アンタと私は別に何でも・・・まあ友達くらいならいいけど」

これは夢だ。こんな強ツンデレロリ深娜が目の前にいる時点でこれは夢だ

「ちよつと、むし・・・しないでよ」

「あーごめんねー」

「頭なでるな！」

俺の手を振り払い自分の頭を丁寧に直すフリして何となく感触を確かめてる様に見えなくもない仕草をする深娜？

しかしこれは夢ならば出来れば早期に覚醒したい。ロリ深娜が出てる時点で大分危険な道のりだと思うが

「かーすみーだっこ！」

声のする方を振り向くと小2〜3の頃の加弥が走ってきた。そして了承も無しに飛び付いてきた

「かすみーだいすきー」

「えーっと、加弥だよ？どうみても」

「ちよつとあんまりベタベタくっつかないでよ！霞もデレデレするな！」

何処をどうみてその答えに行き着いた。親戚の子供に抱きつかれて困った叔父さんだろ

「はーなーれーろー！」

「イヤイヤイヤイヤイヤイヤ！」

「イタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイ！爪たてるな加弥！」

無理やり加弥を引き剥がすとなんか加弥がめっちゃ泣き出した。あーほらほら泣かないの。もうほら高いたかーいって速効泣き止んだ！流石夢

「おんぶ！」

もう泣かれたら敵わんから素直におんぶ

超ニコニコ笑う加弥をみてやたら不機嫌になる深娜ちゃん（仮名）俺はそつと手を繋ぐように差し出すと

「ふ、ふんっ！特別だからね！アンタが迷子になったら困るから仕方なくよ！」

もうなにこの子。深娜ちゃんでもいいや

「それで、ドコに行く気なのよ」

「え？俺に聞く？夢なんだし待ってればなんかあるだろ」

「かすみー。かたぐるましてー！」

「あーはいはい。よいこらしよつと」

「やたー！」

「・・・次は私ね」

「え？」

「な、何でもないわよ！このバカ！」

「ええ！」

突然空から愼が降ってきて湖に落ちた

「まさかの急展開！さっきまで浜辺にいなかった！」

湖に波紋が広がり女神が現れた

「うそお！なんで洗夜なの！ちよ、しかもスク水に天女の羽衣とか
エロい組み合わせだし」

「貴方が落としたの金の愼ですか？」

「無視しやがった。しかも金の愼キメエ！」

「それとも銀の愼ですか？」

「汚い愼です」

「貴方は正直者です。褒美に女の愼を差し上げましょう」

「激しくいらねえ！」

ショートカットに膝上20cmの超ミニスカにスパッツと漫画に出
そうな愼（女）が現れた

「よう霞。保育園でも始める気か？」

ややこしいので今後の表記はマコトにしよう。マコトは加弥と戯れ
ている

つか女の方が背高いし未知流ちゃんの活発バージョンみたいで普通
にモテルんじゃないね？

あれ、愼がいらなく感じてきたのは何故？

「アンタ、か、霞のなんなのよ。馴れ馴れしいわね」

「あん？俺か？俺は・・・アレだ」

気さくに肩を組んできたマコト。おっと加弥、落ちるなよ

「ダチ以上なのは確かだなうん。悔しいかおこさまー？」
「な、何よ！私より胸無いくせに！」
「て、テメエ！人が気にしてるところ言っくんじゃねー！」
「かすみ空飛んでー！」
「無理」

B A

「え？なに今のグラディウスの裏技コマンド！」
「しかも自爆コマンドだしな」
「ごー！」
「加弥が飛んだ！」
「そしと落ちた。うわぁ泣き出しやがった。な、なんとかしろよ霞」
「ええ！えつとイタイのイタイのとんでけー！」
「今お前がイタイな」
「テメエぶつ飛ばすぞマコト！」
「はっ、やれるもんならやっていでえ！テメエ女相手に本気で殴ん
じゃねえよ！」
「元は男だろが！」
「かすみイジメるな！」
「加弥も地味に脛とか蹴るんじゃねー！」
「うるさーいペチャパイはかすみに近付くなー」
「お前も似た様なもんだろが！」
「うわぁあん。マコトがいじめるー！」
「あーよしよし泣かない泣かない」
深娜（21）が現れた
『ええええええ！』
「貴女達少しは黙りなさい！」
「俺を貴女で表記すんじゃねえ！i a m m a n n！」
「うるさいー！」
ピシャーン！

「鞭とか持つてるし！つかいつの間にパピヨンマスク！」
「うわぁ似合ってて逆にこえーし」

全員が輪になり火を囲んで踊り出した

「唐突に！」

まーいむまーいむまーいむまーいむ。まいむれせせっ！

団結力が1上がった

勇気が2上がった

羞恥心が5下がった

「何この無駄項目」

全員幼児化しますか？

はい

いいえ

「即いいえだろが！」

はい

いいえ

「無視！」

はっ！こゝここは・・・・・・・・夢から醒めたのか？
「かすみだー」

「だっこー」

「ふん。速く肩車しなさいよ！」
最悪じゃねーかよ

幼児三人に連れられて歩いていると突然大きな門が現れた

「突然過ぎるだろ」

「ごー！」

「とつげきー！」

「もたもたしてるんじゃないわよ！」

開門された先にはスタジオが広がっていた

「またこんな急展開！」

デーデーテッテデー

デーデーテッテデー

テテン！

「はい今回も始まりました『朝まで討論』司会の池勇太です。この番組はあるテーマにそって討論する番組です。最初の議題はこちら！」

『聞いただけでやりたくなるもの』

「これは簡単ですねえ。セッ」

「はい誰かいませんかー。松田は？」

「CRジョジョの奇妙な冒険ハイパー」

「既に第二弾って辺りが魅力的ですねー」

「疑似連は揃う寸前で『だが断る』でスベリじゃないか?」

「突然の暗転で『ザ・ワールド!』の声が出れば一コマずつ停止で
大当たり確定だな」

「大当たり終了でバトルモード突入。継続率は70%辺りで」

「バトル敗北しても救済措置でカットイン　ビリッときたああああ
あ!　大当たりって流れもありだな」

「プレミアは何がいいですかねー?」

「ペイジ、ジョーンズ、プラント、ボーンナブの血管針攻撃シーン
とか」

「マニアックですね」

「やっぱ一発告知必要かな。告知はやっぱ『ズキユウウン!』
で決まりだろ」

「ステツプアップは?」

「1・メメタア!

2・貧弱!貧弱う!

3・こいつはくせえッ!ゲロ以下のおいがプンプンするぜッーッ
!!

4・お前は今まで食ったパンの枚数を覚えているのか?

5・ああ!う・・・美しすぎます!」

「分からない人には永遠に分からないマニアック具合だ」

「後プレミアでエイリア」

「さあそろそろ次のお題に進みますか」

「その前に一旦CM」

扉は音もなく閉じた

「何がしたかったんだいまのは。つかまだ続くのかよ」

「かすみー。かたぐるましろー」

「マコトだめえ。かたぐるまは私だけだもん！」

チビ・sが足元で喧嘩を始めそうなので二人と手を繋いで仲裁に入ってる内に深娜（21）を肩車していた

「なぜえにい！ぐうおおお！」

気合いと根性で踏ん張る。だって僕は夕月じゃないから

「何よ！文句あるの！」

「ぐうおおおおおおおおお！」

そうだね。プロテインだね

霞の力が+30%Up

「ぶあいや！！」

霞は己の限界を超えた

「つか深娜さんなんで貴女だけ21？」

「このロリコン！」

「えええ！」

「仕方ないわね。子供になってあげようじゃない。あ、アンタの為に態々なるんだから有りがたく思いなさい！」

いえ結構です。大人なんだから歩いて

訴え虚しくどんどん軽くなった深娜はやっぱり肩の上

「ありがたく思いなさい！このかすみめ！」

罵られました

「みなちゃんおりろー」

「あねご次おれー」

あーもうチビ・s暴れない暴れない。深娜も見下さないの。君だけまだ小6位でしょ。このチビ・s小2かそこらなんだからさ。君お姉さんなんだし譲り合いの精神は大切なんだよ

「霞くーん」

この声は……洸夜！ええいこれ以上増えたら処理しきれないぞ

妖精さんが現れた

「うわぁ妖精の洗夜可愛いんだけど。ピーターパンに出てくるティンカーベルみたいで」

「私の魔法で皆を元に戻してあげる」

「洗夜、今君最高だよ！ホント最高だよ！」

ティンカーベル洗夜が魔法のステッキを振りかざすと三人は光に包まれ元の17歳の姿になった

「かすみおんぶしてー」

「私がさきだもん！」

「アナタ達霞をひっぱらないでよ！落ちるじゃない！」

いかんせん精神年齢はそのままで成長したらしい。尚質が悪いわ！

「それでは霞君頑張つてね」

「ウインクしながら飛び去らないで！もうさっきのままでいいから元に戻して！ティンカーベルウウウ」

虚しくもティンカーベル洗夜は光の彼方に消えてしまった

しかしここで挫けてはいけない。ここが俺の夢の中なら打開出来る筈だ。そうだ！僕達の未来は無限大なんだ！

光の彼方に消えた

ふう。ようやく解放されたか。しかし恐ろしい夢だ

何故こんな意味不明な夢を見続けている。速く醒めるんだ俺

「霞くん」

「また洗夜が来た。今度は何だ？鎧……ああアレゲームの三国志に出てくる武将の鎧だ」

「えーい」

「あぶなああああ！何そのゴツツイ刀！そんなもの振り回しちゃいけません！」

「うええーん」

「なんで幼児化してるかなあ！ほら高いたかーい！」

「ちゅーして！」

「むり！」

「うええーん！」

ああもうなにこの空間。絶対呪いとか掛かってるって

いつの間にか消えた冴夜はこの際無視して目の前の門を開けた

「俺の意思とか無視してね！また始まんの！」

「やあ。綾萌涼琥だ」

「佐山悠一だ」

「あやめりょうこと読むから間違えるなよ」

「帰れ」

「ふっ、相変わらずツンデレじゃないか悠一。夫婦になっても刺激的だ」

「誰が夫婦だ。お前の脳は何を学んでいる」

「照れるなよ。しかし私達の出会いは衝撃的だったな」

「今すぐくたばれ」

「ビデオを借りに行った時、同じタイトルを取ろうとしてお互いの指が触れ合う」

「我が家に無断で侵入して我が物顔で寛いでいたのが発端だろうが」

「そうとも言っ」

「帰れ」

「一つ屋根の下で暮らしてる私達だ。何も心配する必要はない。まず手始めに夜の営みを」

「何故生きている。人類の為に土に帰れ」

「それにしても私は思うのだが、OPにはクラスメイトのバックダンサーが必要だろうか」

「・・・・・・」

「彼奴等とて無能ではない。私達夫婦の引き立て役にはなると思うが」

「・・・・・・」

「もしくは衣装に資金を注ぐか？その気になれば紅白も夢では無いぞ」

「・・・・・・」

「ただ悠一に合う衣装があるか。悠一は悠一だから悠一に合う衣装が中々思い付かなくてな」

「・・・・・・」

「なあに悠一と私が並べばそれだけで世界を手中にしたのも同然だ」

「・・・・・・」

「後はラジオだな。深夜の放送枠は子供に聞かせる事が出来ないからやはり19時が妥当だろう」

「・・・・・・」

「プレゼント企画として悠一生写真というのも浮かんだが悠一は私のだ。何人にも触れさせん」

「・・・・・・」

「どうした悠一。改めて私に惚れなおしたか？ふっ、私も罪なものだ」

「何故こんな人間が産まれてしまったんだ」

「悠一と結ばれる為に決まっている」

「ああそう」

「時に悠一」

「なんだ」

「ここは何処だ？そして何故立たされて見世物みたいにトーク会を開いている。不愉快だ」

「知るか」

「いや、これはやはりカメラ馴れするために用意されたのか？うむ。そうに違いない。そうだ悠一、ここに入試一週間前徹夜で書き上げたOPの歌詞と振り付けを記した書類がある」

「勉強しろよ」

「取り敢えずこの項目に目を通しておいでくれ」

「帰れ」

「それでは練習といこうか。心配するな。3回失敗したら私の壮大なる胸で熱く包容してやろう。丁度君の顔が埋まるラインだからな」

「消えろ」

門は音もなく閉じた

「え？今の何？」

ポニーテールのやたら背の高い女性と頭一つ分背の低い目付きの悪い少年だったが何だったんだ？

「おーい霞、何やってんだ。お前が最後だぞ」

「ええマコト？何が最後なんだよ」

「結婚式だよ。ったく早く行くぞ！」

「ちょ！なんで肩車して走るの！あぶなあっ！」

ぱぱぱぱーん

ぱぱぱぱーん

真っ白な教会には多くの人々が集まり、祝福の言葉を投げ掛けている。顔見知りのクラスメイトから全く面識の無い人まで様々

「ほれ。さつさと並べよ。友人代表のスピーチばつくれやがつて。柄じゃねーのに俺がやる羽目になったぞ」

「んー、いやー、その、なんだ。誰の結婚式だ」

「ほれ主役の登場だ」

新郎・先塚洸夜

新婦・大早加弥

「エエエエエエ！」

「みんなありがとー。私コウちゃんと幸せになるからー！」

人目を気にせず号泣する野郎集団とこっそり狙ってた先輩が悔しそうだったりしてるわけだが皆祝福してると思うわけでもう帰っていいですか？

「バカヤロウ。ブーケが残ってるだろうが」

「俺関係ーねーし！女の子じゃないし！」

群がる女性陣の前に新婦加弥がブーケを持ち、背を向けている俺はマコトに引つ張られながらも必死に抵抗したものの最後尾に並ばざるえなかった

「行くよー。せーのっ」

空高く舞うブーケを手に入れようと女性陣は必死に手を伸ばす。その中心で掴んでは投げ掴んでは投げを繰り返すパワフルマコトちゃんがいるわけである

ブーケはあらゆる物理法則を無視してね俺に飛び込んできた。つか人の手を縦横無尽に避けて俺に向かって来るってどーゆー事よ？

「おめでとっ！」

「お幸せに！」

「ちきしょう！好きだったぞカスミちゃん！」

「カスミちゃん大好きだったよ！。嫌な事あったら私の家において！」

「おめでとう！」

「デメエーら何好き勝手言っただコラア！」

男の俺が持つてることツツコメや！何がおめでとうだよバカヤロウ

「カスミ、早く行くわよ。身だしなみ整えなさい」

「深娜もいきなり来るなよ……ってえ？」

なんで君は純白のタキシードを着てるんだい？

そしてなんで僕ドレス？

ぱぱぱーん

ぱぱぱーん

「えええ！ちよつ待てやこの展開。誰が新婦やねん！俺男だろ！男だよ！男だよ！」

あれ？俺男だったよね……うん男だね。ほら、胸ないし。だつて水着もカイパンだし……うん。間違つてない

「あれ？なら何で俺ウエディングドレス着てるわけ？」

「ソレデは、誓いのキスをドウゾ」

エセ神父の憤が何かほざいてると思ったら深娜がズイツと一歩近付いてきちゃいました

まで、早まるな深娜。例え夢だと分かっているても背徳感MAXなわけつか俺女じゃねーし周りもキース、キースとか煽ってんじゃね

えよブオケが！何で人前でこんな恥ずかしい事しなきゃいけないんだよって言ったそばから二人つきりになるかな何でこんな時だけ俺の思想が届くかな早く目覚めるよ俺つか近い近い近い近い近い近い近い！眼を醒ませ深娜！

「その結婚待った！ですわ」

声で分かるよお嬢じゃねーかよ。見れば自分より丈の長い棒を片手に構えるお嬢。服装は・・・ああ燃えよドラゴンのあの人の服だな

お嬢は器用に棒を回転させビシッと決めたかったみたいだけど最後の最後で自分の脛を強打した

「・・・・・・・・！！」

声にならない声で踞るお嬢を見て何を思ったか上着を脱ぎ何処からともなくグローブを装備する深娜。その場で軽いステップを踏む

「例え御嬢様でも御譲りする訳には参りません」

「それでも・・・奪ってみせますわ！」

なんかエライ事になってるみたいだけどこれだけは言わせてくれ

「何故俺が新婦なんだ」

誰も答える事無く二人は互いの信念の為疾走した

下段から振り上げるお嬢に対し、深娜は右にステップを踏み避ける。振り上げた姿勢のお嬢に対し深娜は容赦無く間合いを詰める

しかしお嬢は垂直に立つ棒を右に倒す事により、左から迫る深娜に対して牽制を行い一瞬動きが鈍る深娜から距離を取る

しかし深娜も直ぐに間合いを詰めるがお嬢は棒を自分の真芯に構え正面からの隙を消す

硬直状態の中、先に仕掛けたのはお嬢だった。最速の一撃とも取れる突きに、深娜は躊躇う事無く半身の姿勢で踏み込んだ

「何故、打ち抜かないんですの？情けは無用ですよ？」

「……………私には御嬢様を手に掛ける事は出来ません。ですが力スミを渡す訳には参りません。御許し下さい」

深娜は既に戦意の無いお嬢に深々と一礼すると痛々しい痣の残る左肩を抑えながらこちらに歩いてくる。そして俺の目の前に立つとそのまま唇を重ねた

[illegible]

「！！」

何がキユンだよ！キユンじゃねえよ！脳の病気が引き起こした幻聴以外のナニモノでもねえよボオケ！夢でも行つて良いラインと悪いラインがあるだろがぁ！氏ね俺の脳内妄想！滅びる俺の中に巣くう邪心！

そこでハッと我に返ると周りには最初の景色、砂浜と海、格好も海パンに戻っていた

ようやく解放された。心底ホッとして倒れる様に砂浜に座るとまたまた目の前に門が現れた

「・・・ああもういいや」

諦めの境地と共に門は音もなく開放した

デーデーデッデッ

デーデーデッデッ

デテン

「さあ次の議題にまいりましょう。次の議題はこちら！」

『一歩先から闇をパチンコにしたらどうなる』

「取り敢えず企画の段階で弾かれる」

「間違いない」

「もしくは導入一ヶ月で減台」

「目に見えてる」

「そ、それじゃ話膨らまないから企画が通ったとして話してみようよ」

「んー。まずは役物か。右上に深娜印の木槌」

「あらゆる場面で稼働チャンス。白 赤 金 虹色の順に期待度U

P

「画面上に深娜のブローチが隠れててリーチ発展時に下りてくれば激熱」

「次はリーチです。ノーマルリーチに慎リーチ、加弥リーチ、洸夜リーチ」

「慎リーチは慎を殴り見事倒れば大当り」

「加弥リーチは逃げる霞を加弥が捕まえれば大当り」

「洸夜リーチは霞にピントを合わせて写真を撮れたら大当り」

「どのリーチも外れてハンマーが下りればSPリーチ発展か」

「SPリーチは誰だろ？」

「夕月格闘リーチと零情報漏洩リーチ」

「あと霞なら守護リーチ。仲間を守りきれたら大当り。例え倒れてもハンマー 復活で一騎打ち。その時オーラの色がノーマル 赤

金の順で期待度が変化。更に夕月or零に変われば熱い。例え霞でも冷徹残虐状態だと激熱だね。カットインは慎 加弥&洸夜 深娜の順。プレミアは一騎打ち相手が豪一郎」

「ねえ、その冷徹残虐状態ってどんなやつ？」

「んー、京都の辺りであつたじゃん。加弥殴らない様に必死に抑えてた時。あの時の状態で夕月に变身しない状態」

「こえー」

「次は深娜の恋する乙女口論リーチ。加弥と洸夜相手に口論して屈服させれば大当り。深娜が負けてもハンマー 復活で霞を捕まえに走る。その時登場キャラがお嬢 慎 親衛隊の順で熱く、服装がノーマル 赤 金で期待度が変化。プレミアとして通常三人並んで走るのが深娜だけ。プレミア登場キャラはノインちゃん」

「ノイン出るんだ」

「あらゆる場面の何処かにノイン、典時、遊思、心&美樹のいずれかがいればプレミア」

「あと鉄板SPリーチに終局の鐘ってあるけど資料未公開だ。まあその内だろ」

「疑似連どうなる？」

「1、慎・私の事を下僕と御呼びください麗奈様

2、洸夜・これが私の覚悟だから。もう逃げないって決めたの

3、加弥・私は霞の事が好き！世界で一番大切な人なんだよ！

4、深娜・いつまでか分からないけど・・・貴方の隣にいていいの？

5、霞・いつまで居ようがいつ出ていこうが関係ない。お前は俺の家族の一員だ」

「後半二つは名シーンですね。一歩間違えば告白シーン」

「あと外せないのが全回転だろ」

「全回転はプレミア全回転を含めて『誓い』『さようなら』『ファーストキス』『終演の告白』の4つだな」

「『誓い』は第18話の夜桜のシーンだな。『ファーストキス』は言わずと知れた深娜と霞のキスだろ。ならこの『さようなら』は？」

「ああこれ？これはクリスマス特別番外のラストだろ」

「クリスマス特別番外？なにそれ？」

「知らない人はまったく知らないシーンだな。また見れば分かるだろ」

「んじゃ最後の『終演の告白』は？」

「・・・あれ？このシーンは資料未公開だ。終演つてくらいだから本当の最後じゃないの？」

「まあいつ終わるか分かんないからな」

「そだな」

「あと入れるのあるか？キャラ会話とかで」

「水着とかバスタオル巻いた格好は？」

「バスタオルはプレミアっしょ。つか本編にすらまだ出てないし」

「いずれ出るかもね」

「そういや一つ聞いていい？　なんだかんだ語ったけど結局ゼオン出ないの？」

「ああそれ？ほらこの資料見てみる。」

だろ

だから？

「なんだよ」

「あー。なーる」

「つかいのこれ？」

「しらね」

門は音もなく閉じた

「こあらマコト！加弥いじめるな！加弥も応戦しなくていいから」

「かすみくん。おんぶして」

「断つてからしようね？ 深娜も地味な嫌がらせやめような？」

「ふ、ふんだ！そんな私の勝手にしょ！」

「ああはいはい深娜ちゃんごめんねー」

「撫でるな！」

あ？もう終わった？　　たくいきなりこいつら来るんだよなー。あー
疲れる

「かすみー。変身するからみててー」

「変身？」

お子ちゃま、sが一行に並び仮面ライダー風にポーズを決める
『変身！』

日曜の朝でお馴染みの少女向け戦隊の様によく分からないレインボービームが辺りを駆け回りお子ちゃま、sを包んでいく。運よく激しい閃光に目を閉じたため気付けば何時もの四人（慎はマコトのま）が制服姿でポーズを決めていた（注 深娜はどんなになっても腕を組んだままです）

「霞先生早く行こうよ！遅刻するよ」

「はっ？先生？」

「何やってんだよ先生。ボサツとしてんな」

マコトに襟首を掴まれヒョイツと持ち上げられ強制起立。洗夜が俺のと思われる鞆を抱えている

「霞先生。はいこれ」

「あ、ありがとう」

頬を染めイヤンイヤンと揺れる洗夜は取り敢えず無視して周りを見渡すと・・・俺ん家だな

「さっさとしなさい」

深娜はスーツ姿にエプロンの格好で食器を片付けている

めっちゃスーツ姿似合ってたけど。と思いつつ何故教師になったのかはこの際置いて三人に急かされる様に玄関に向かう

『いつてきまーす』

先に三人娘が家を出て続くように俺も出ようとすると背後にただならぬ気配を感じて思わず振り返る。何でしょうか深娜さん？ビシツとスーツが決まってますが何でしょう？私に何か落ち度が御座いました？

「・・・今日はしないの？」

「今日？」

「・・・いつもの・・・アレ」

「アレ？」

何でしょう。どことなく恥ずかしそうな深娜と背後から突き刺さる
 好奇の視線。まさか！スタンド攻撃か！

「……どうなのよ」

「いや……えっと……その……ねえ」

はぐらかそう。何となく一歩踏み込んだらもう駄目そうな気がする……ああもう焦れたいわね！」

ネクタイを乱暴に掴み引き寄せると無理矢理唇を重ねた

キュン

[illegible]

何がキyunだよ腐ってんじゃねーよ滅びろよ二度ネタしてんじゃねーよつか何やってんだよ俺の脳内ボオケエ！

っは！これは夢だ！気をしっかり持つんだ。ここで暴走してもなに

も生まれない。そうだ！僕には未来が待っているんだ！

「……で……。だ。今度はなんだ。いや違う。何だコレは」
「どうしたカスミ？」

「慎、率直に聞くが他の三人はどこだ？」

「アイツらか？生徒会でもう学校行ってるぞ。ほら遅刻したくねーから行くぞ」

「ちよっ引っ張るな！スカートなんだよ！つかなんじゃこりゃあああ！」

野崎霞、改め野崎カスミ

身長172cm、体重48kg

何気にDカップの女の子

よ・ろ・し・く

「なんだこのテロップ！喧嘩売ってんのか！しかもなんだよ今の紹介欄に出た写真！俺の着替え中の写真じゃねーか何処のギャルゲーだボケ！」

「なに空に吠えてんだ？さっさと生徒会室行くぞ」

慎に引き摺られながら生徒会室に入ると会長と刺繍された腕章を付け、腕を組みながらふんぞり返ってる様に見える男の深娜。違和感ねーなおい

その両隣に副会長の加弥と書記の洸夜。男としては違和感があるが

男装といえば違和感が消えてしまう不思議な二人

慎は柵から雑務と書かれた腕章を付け、更に俺にも何かを付けた

「何だよこの国宝って」

「見て分らないの？貴女の実在意義よ」

いけしゃあしゃあと何ほざいておりますか深娜？両隣も頷いてんじやねーよ。ふと見ると加弥は我慢してる犬みたいに忙しく体を動かしている

「どうした加弥？」

その瞬間信じられん速度で飛び付いてきた加弥は俺の胸？に顔を埋めてグリグリと押し付けてくる。あれ？これセクハラ？

「加弥ちゃん！なにしてるんだよ！」

洗夜が引き剥がそうと引つ張るがスッポンの如く張り付いてる加弥はビクともしない

「ああもうこの触り心地たまんない」

セクハラ継続中の加弥なだけとどうするかな。取り敢えずデコピンかましてやるか

ばちこーん

変な擬音聞こえたかがこの際無視しよう。どうせ何でもありだし

「いったあああ！何！いつもの慈愛に満ちたカスミは何処にいったの！」

「でも、これはこれでいい感じなんだけど」

「あ、洗夜もそう思う？俺もあんま違和感なかったんだよ」

なんだこの新手のカオスフィールドは。いくら夢とはいえ御免被るぞ「いつまで遊んでいる。朝礼に遅れるぞ」

深娜は何やら物騒な物を腰に下げ俺の腕を取る。待つて、日本刀いらないよな？後ろの二人もなんか武器もってない？ガチャガチャいつてるけど何？

振り替える勇気もない俺（私？）はされるがまま引き摺られている

「か、カスミ先輩！」

おや？誰でしょ。先輩と言ったからには恐らく後輩君と思われるが「す、好きです！俺と付き合って下さい！」

君の勇気は称賛に値する。けど時と場所を選ぼうね名も無き後輩A君「貴様如きが話していい相手では無いぞ」

さく

「今回は見逃してやる。さつさと消えろ」

返事がない。どうやら屍のようだ

やつちやつたああああああ！さくつとか書いてたけど間違いく『グシュ』とかつて音だよ！何やってんの深娜！君今殺人やつちやつたんだよ！つかお二方、あんたら死体踏みつけてナニしてんの？え、ゴミの後始末？あああ慎何やってんだよ！ここ3階だぞ！投げちゃダメだつて投げちゃあああ！投げやがった！こいつらただの殺人集団じゃねーかよ誰だ生徒会とかほざいた馬鹿野郎は貴様だよ
慎！

八つ当たり万歳のミドルキックで肋を少々頂き落ちた後輩A君を見る。あ、タンカーで運ばれた……。ちょ焼却炉かよ！校内で隠蔽工作かよ

もうツッコまない。固く近い朝礼とやらに出席するべく体育館に向かう。途中洗夜が恥ずかしそうに胸にソフトタッチしてきたが明らかにセクハラなのでちこーんしておいた

「これより、全校朝礼を始めます。まずは会長より挨拶があります」
慎の進行の下、堂々とステージ中央に歩む深娜（男）。貴女（貴方

?)はいつ抜刀したの?

「諸君等にはまず、再度認識してもらわなければならない」

まるでエルリックな兄弟のである漫画の大総統閣下の様に構える深娜。刀には先程の血がまだ拭いきれてません

「先程不出来な輩が我等の至宝に失礼を働いた。無論そんな輩は既に存在しない」

完全に殺害を認めましたこの阿呆

「もう一度だけ通達しておく。我等の至宝、カスミには如何なる理由が有ろうと接触する事を禁ずる。今後同じ過ちを繰り返そうものなら親族も危ういと思え」

今この諸悪の根源を野放しにしているのか。何れ世界を相手にするのかかもしれない。断つなら今しかないのか?

そんな思想渦巻く俺を他所に何事も無く朝礼は進行し校長もビクビクしながら挨拶をしている。きっと生徒会が影の支配者なのだろう

「それでは最後に、野崎カスミ嬢より御言葉を頂戴したいとおもいます」

・・・なに?

「では、よろしく願います」

加弥と洸夜に両サイドをしっかりとガードされ半強制的にステージ中央に連行。さて、話つて言われても何を言えればいいのやら

「え・・・っと、おはようございます」

『御早う御座います!』

何処の軍隊だここは

「そ、そんな畏まらなくていいから。ちょ加弥、何話せばいいのさ」

「前はギリシャ神話における民衆の文化の変化、日本神話との相違点についてだよ」

めっちゃ社会の授業じゃねーかよ。しかも絶対入試とかに役立たない内容。どうやら過去の俺は頭のネジが5〜6本ぶっ飛んでるらしいな

しかしいきなり話せつて言われても困るし・・・取り敢えず微笑んでみよう

「・・・・・・（にっこり）」

全員その場で倒れた

「ええ！ちよどつしたの！どうなってるの加弥つて君も！鼻血まで出してんじゃん！」

「か、カスミ、グッジョブだよ！もう人生に悔いは無い」

「えええ！洸夜なんかピクリとも動かないしかもう深娜どうにかしろ！」

「・・・・・・我が生涯に一片の悔い無し」

なんかひとり感無量みたいに頷いてる阿呆がいるんだけど

この空間も消え去れ！

「よう兄弟」

「やつほー。ひっさしぶり霞ー」

「・・・・・・夕月と雫か。俺が三人集まるって異様じゃね？」

「ちがいねえ。でも俺を形成するにはお前じゃなきゃいけないから

仕方ないだろ」

「まあねー。なんなら私スカートにしようか？」

「やめれ。なんか切なくなる」

「にしてもさっきのアレはなんだ？正直ただの悪夢だぞ」

「ボクハナニモオボエテイナイ」

「はいはいそーゆー事にしといてやる」

「でも楽しそーだったよね。ロリ深娜ちゃんも可愛ーな」

「・・・おい。やっぱコイツ百合かなんか？」

「・・・否定出来ないのが怖い。可愛いのは好きなのは分かるが」

「・・・だよな」

「そういえば霞くん」

「ん？どうした」

「まだ心理には辿り着いてないみたいだね？」

「・・・時が来れば分かるんだろ？」

「つか何時なんだよそれ。なんかお前その時も分かってる感じだよな？」

「んふふー。どーしてそう思うのかな？」

「お前ってまるで傍観者だろ？たまに色々喋ってるけど結局一部だ」

「夕月、お前雫が何してたか分かるのか？」

「お前が三人の頭なら俺は裏。お前より雫には近い立ち位置だからな」

「へえ。夕月くんは霞くんより少しだけ心理に近づいたんだね？」

「そうらしいな。っても結局重要な点は何一つわかりやしねー」

「・・・雫、お前は何なんだ？俺にとっての何なんだ？」

「私は存在しない神様の地に立つ無垢なる道化にして、霞くんに付き従う小さな従者」

「・・・」

「私は道化。どんな細やかな幸せもちよっと手を加えればそこには

無限の喜劇。私は全ての謎であり私は全ての答え。我が主、貴方の進む道の先に幸せはありますか？」

「……」

貴方の進む道の先に謎はありますか？

貴方の進む道の先に答はありますか？

貴方の進む道の先に光はありますか？

貴方の進む道の先に闇はありますか？

私は道化

無垢なる道化

騎士と共に主を導く小さな従者

「……なら精々楽しく待つき。下らない世の中にはならないんだろ？」

「させません。私は道化として歩む限り」

「……何があつてもお前なら何もかも全ては潰せるんだろ？」

「させやしねえ。俺がいる限りお前の上には誰も立たせねえ」

「ならいいさ。これから何も変わらない。ならいつもの様に己を騙して生きていけばいいさ」

「そね。貴方は処いこ。貴は貴ら」

「るよ。お俺も夕ってりはしい」

「局は」

「そうだな」

「・・・あれ？」

「漸く起きたわね。何か酷く魔されてたわよ？」

あれ？なんか思い出したくもない夢を見てたような・・・

「どんな夢だったのよ」

「ボクハナニモオボエテイナイ」

「・・・そーゆー事にしといてあげるわ」

2、3回頭を振りふとあることに気付いた

「・・・あれ？ここ昨日の島と違うのか？」

「あら、よく分かったわね。見た目はそんな変わってないのに」

「なんとなく。他の連中もいないし」

「そう」

二人浜辺に腰を下ろしながら水平線の彼方を眺める。深娜は修学旅行の時の様にワンピースにロングスカート。真っ白なドレスを着てるかの様に見えた

「で、ここ何処？」

「ここは昔あの方から頂いた島よ。もつとも、来るのは本当に久しぶりなんだけどね」

深娜は立ち上がりついて来るよう促す

深娜に従い立ち上がると海岸沿いにボートが繋がれ一枚の麻袋が吊るされている。人一人楽に入れそうな袋だ

「あ、拉致されて来たんだ俺」

今頃お嬢邸のある島では大騒ぎになってるんじゃないのかと不安になったが幸澤もいるし大丈夫だろう

そう言い聞かせ深娜の後を追った

超番外 読むな危険（後書き）

お疲れ様です。ただテンションだけで書き上げた内容如何でしたか？今の私には阿呆という言葉すら誉め言葉

ありがとう。ありがとう読者のみんな！
今なら俺空だって飛べるかもしれない！

注意、CRジョジョネタは実際には企画、製造等はされておりません。期待しないでください
又、CR一歩先から闇はもし実現したら作者自身ハマる可能性を否定できません

最後に、二名ほど見知らぬ方が参戦してましたね？佐山悠一と綾萌諒琥とか言ってた凸凹コンビ。一応新作ネタで思い付いたキャラなわけだがこれで投稿しようものなら破滅が待ってるので前書き後書きどっちかに登場させようと思います

それではみんな！次回作を待っていてくれ！

46・幸せとは如何に？（前書き）

綾萌「ふっ、久しいな愚民。綾萌諒琥だ」

佐山「佐山だ」

綾萌「今日からこのコーナーは私達の物だ。どうだ悠一、祝杯ついでに今晚どうだ？」

佐山「脱ぐな萎える。だすならこのバカだけにしろ」

綾萌「ふっ、照れてる悠一もいいな」

佐山「鼻血出して何言ってるんだお前。さっさと帰れ」

綾萌「私がいる限り悠一を一人にはしないのさ」

佐山「……」

続く

46・幸せとは如何に？

どうも。最近拉致という言葉を身近に感じる事が疑問でならない霞です

なんでしょうね。お嬢に拉致られてから度々連れ去られているのですがこれは一般的な事なのでしょうか？

現に今回も深娜の拉致により常夏深娜の島にご招待されたわけなのだが

はたしてその真意とは如何に？謎が謎を呼ぶ二人っきりの一時である

「で、何故我を拉致？」

「嫌なの？」

「滅相も御座いません」

「なら黙って着いてかなさい。もうすぐだから」

逆らう事の許されない一方的な指示にめげずに歩くこと数分。目的地と思われるこの島唯一の居住地にたどり着いた

お嬢別荘に比べれば大分小さいがそれでも十分な広さをもっていた埃などは無く、隅々まで掃除が行き渡っており、自家発電なのか家電類も完備されていた

「ようこそって言えばいいかしら？私も随分久し振りだけど」

「おじやましますと言っておこつか」

深娜は適当にソファーに腰掛け俺も向かいに座る

「早速だけど朝食にしない？私もまだ食べてないから」

時計を見ると9時を回ったところである。ちよつと遅い朝食にすることにした

「冷蔵庫の中身何でも使つていいのか？」

「いいわよ。1週間分の量はある筈だし」

「うわなんだこの食材。金掛けすぎだろ」

「手配したのは幸澤よ。文句はアツチに言つて」

まあ存分に使えるようだしいいとするか

「軽めでいいよなー？」

「構わないわよ」

深娜の了承もらつたしささつとやりますか
つつても切るだけ切つて盛り付けるだけー。はいカナツペの出来上がりー

「本当に手を抜いたわね。まあいいけど」

そう言つて早速手を伸ばす深娜。カナツペとは簡単に言えばサンドイッチ風の料理。西洋料理の前菜みたいなものでパンの薄切りとかクラッカーに色んな物を色どりよく盛り付けた食べ物。今回はキヤビアとかイクラとか鮭とか使つてますが気にしちやいけないぜ

「にしてもやつぱ夏は暑いな。ここどの辺り？」

「島の緯度はハワイとたいして変わらない位置だったかしら。日付変更線の近くよ」

「へえ。道理で暑いわけだ。あ、何か飲む？」

「下にワインが保管してるわよ」

「朝から飲むなよ。ジュースにしとけ」

「冗談よ」

「あー天気いいなー。今日は何かあるのかなー」

「いつもと変わらないわよ。そう言えば私も17になったし」

「そっか。加弥暴れてなきやいいんだけどなー」

「幸澤に任せてるから御嬢様に御迷惑は無いと思うわよ」

「そうか。お嬢はお前がここいるって知ってるならいいんじゃないか……あれ？」

ちよつと待て、あれ？なんかおかしいこと言ってるじゃない？

「……深娜、さっきなんて言った？」

「幸澤に任せてるって」

「違う違う。その前」

「いつもと変わらないって。あと私も17になったって」

「……え？今日誕生日なの？」

「ええ」

ええええええ！うそおおおおお！

「なんで黙ってたんだよ。誕生日なら祝ってやらなきゃいけないだろ」

「別にいらないわよ。何年もしてないし」

「よくなああい！俺が許さん。絶対祝う！」

深娜は頬杖をついて若干呆れている。なぜ呆れているのだ深娜よ。誕生日をなんだと思っている！

「しかし誕生日プレゼント……くそお今からじゃ買うにも作りにも時間がないな」

「だからいらないって言ってるじゃない」

「許さん！絶対祝う！」

こうなりや意地だ！何が何でも祝ってやる

その頃のお嬢邸は

「霞どこいったあ！」

アンギヤアアと炎を吹かんばかりの勢いで慎を振り回すミニマムモンスター加弥。既に慎は白眼でなすがまま振り回されている

「加弥ちゃん、やつぱり大川さんいない！」

パタパタと廊下を駆けて来た洸夜は、何故か振り回されていた慎に蹴りをかましていた

「お二人ともどうしました？」

素知らぬ顔でやって来た幸澤に噛みつかん勢いで詰め寄る加弥

「幸澤さん！霞と深娜ちゃん何処にいったの！」

「おや、二人ともいらつしやらないのですか？」

なかなか役者の幸澤。嘘が全く顔に出てません。ですがヒューマンポリグラフ（人間嘘発見器）の異名を誇る加弥には通じません。目を細めて幸澤を見上げます

「・・・嘘ついてるでしょ。知ってるでしょ」

幸澤は即座に相手が悪いと判断して適当な言い訳をすらすらと並べ脱兎の如くその場から消えた

代わりというか生け贄というか山下君が駆り出されてきた。語尾が

『っス』の薄幸の少年である

「お呼びでしょうか？幸澤先輩に呼び出されたっすけど」

「さっさと船準備しなさい！霞と深娜ちゃん捕獲するんだから！」

「りよ、了解ッス！」

自分より背の低い少女に胸ぐら掴まれ持ち上げられそうになった山下くんは敬礼するなり全速力で屋敷を飛び出した

山下くんは、後日同僚にこう漏らしたらしい。アレはハンマさん所

のオウガに匹敵すると

さて、そんな事が起きてるなんて全く知る由も無い二人なのだがどうやらまた何かおかしな事を言ったのか、深娜がまた呆れていた

「・・・はあ」

「おいおい溜め息とかやめてくれよ。こつちだって必死に考えたんだぞ」

「そんな事に必死にならないでよ。第一いつもとたいして変わら無いじゃない」

「んーまあな。でも改めて言うと言を思い出すよ。お前の要望（暴力）に怯えていた毎日を」

というわけで、俺からのプレゼントは『今日1日出来る範囲ならなんでもやってやる』です。バカとか言わないでよね！

「何よその怯えていた毎日って」

「君は忘れたのか？ 買い物行けって物を投げたり殴ったり蹴ったり絞めたり。今と雲泥の差だな」

「・・・悪かったわね」

深娜は視線を反らし不機嫌そうにカナッペを口に運ぶ。そういや夕飯は豪華にいききたいよなー。ケーキ・・・ああ材料足りなかったな。ならフランス料理・・・いや和食か中華も

「そっぴや深娜、夕飯何食べたい？ 今の内に仕込みとか出来るなら

したいし」

「だからそんなに氣を使わなくていいって言ってるじゃない。貴方が作った料理に文句は言わないわよ」

嬉しい事を言ってくれるじゃないですか。しかしなら何を作ろうかあんまり手の込んだ料理は流石に出来ないからな

「そっぴや下にワインが保管されてるって言っただよな？」

「ええ。私も直接見たわけじゃないから何があるか分からないけど。見に行く？」

俺は頷き一緒に地下の倉庫に向かった。

「なんじゃこりゃあ」

第一声がこんな感じです。なんだこの貯蔵量。何処の老舗の酒屋だよ

「あら、アクアビットもあるじゃない」

珍しそうに眺める深娜に混ざって俺も物色開始。いやまあしかし、流石お嬢と言うべきか。アルマニャックにカシヤツサ、キュラソーと高粱酒。見たこと無い物まで揃ってやがる。こりゃ今晚楽しみだなおい

「って何持つて上がる気なんだ。今何時だと思ってるんだ」

「いいじゃない別に。どうせ一緒に飲むでしょ」

「飲むのには反対せんがせめて夕飯食べてからにしような」

深娜からやんわり瓶を頂いて戻しておく。この子は将来絶対に酒蔵持つだろうな

「はいはい取り敢えず戻りましょうや。海でも行つて砂のお城つくりましょ」

「お城つて、いい歳して作るわけ無いでしょ。ちよと押さないでよ分かったわよ」

うんうん。最近の深娜は本当に素直になつてくれて助かるよ。昔の俺、未来の深娜はこんなに可愛くなつたんだよ？仏頂面の深娜にも根気よく接してあげなさい

過去の己に細やかなエールを送り、深娜と共に海を目指した

「野郎共！錨を揚げろ！本日よりこの船は私の指揮下に入る！必ず霞と深娜ちゃんを捕まえるのだ！」

『サーイエツサー！』

ノリのいいクルーは敬礼の後手早く出航の準備に取り掛かり、サー加弥は船首を陣取り大海原の漢よろしく大海を睨み潮風を正面から受けていた

「・・・・いつになく荒れてるね加弥ちゃん」

「おう。俺今の加弥には絶対逆らわないでおく。マジで突き落とすからだから」

神妙に頷く二人を他所に、クルー達は手を休ませる事無く作業をこなす

「そついや幸澤さん言つてたけど大川の姉御の島には最後まで近付くなつてよ」

「マジで？まあけつこつ島あるから最後だと日付変わって朝だろうな」

「仕方ねえよ。特別手当で出るし久し振りに釣りするか？」

「お、気が利くじゃん。なんか大川先輩と一緒にいた奴と二人つきりらしいし邪魔しちやワリイからな」

「アイツってやっぱ姉御の彼氏かな？」

「え？女じゃないの！うそお男なの！？うわあめっちゃ可愛いとか思ってたのに」

「俺も聞いた時おんなじ事思ってた。世の中不思議だな」

「先輩も久し振りに見たら別人に見えたからな」

「アイツのおかげってか。今の姉御の方が全然いいからな。こりゃ俺等で全力サポートだな」

「やるか。先輩にはあんな感じの尻に敷かれるタイプの男が丁度良からな。そうと決れば無線で仲間を集うぞ」

クルーはクルーで変な使命に盛り上がっていた

潮風が独特の香りを運び、降り注ぐ太陽は海面を光輝かせている
浜辺に傾くパラソルの下、椅子に背を預けグラスを煽る深娜

負けました。深娜の権力といいますか自分で言っちゃった約束のせいかまだ昼前なのに早速飲んでます。シャンパンを飲むその姿も様になってます

「霞も飲む？」

「一杯だけ貰うよ。下手に酔ったら午後に差し支える」

「酔わないくせに」

そう言いながら注いでくれたグラスを手渡し手に持つグラスを傾ける。俺も深娜に合わせキンと重ねお互いグラスを煽り俺も腰掛ける

「まさかこんな風に誕生日を向かえる日が来るとわね」

深娜は目を閉じ小さくため息を吐く。それに合わせる様に吹く風が深娜の髪を撫でる

「何だよため息なんか。お嬢達だってなんかやってたんだろ？」

「・・・じゃあ聞くけど命の恩人に誕生日を祝うって言われてすんなりありがとುತ್ತて言える？」

「・・・むり」

「そーゆー事よ」

空になったグラスを向けて来たので新に注ぐ。ゆっくりと口に運び煽る深娜は僅かに口許を緩める

「だから今は幸せなのかもね。誕生日が久し振りに楽しみになってきた」

「身に余る御言葉。至極光栄に存じます」

「やめなさいよ。似合っていないわよ」

「やっぱり？」

やっぱこんな台詞は幸澤辺りが似合うよなー

空になったグラスを戻しゆっくり伸びをする。真っ白な砂浜に打ち寄せるさざ波に耳を傾け隣の深娜に視線を向けると静かな寝息が聞こえる。思わずこぼれてしまった笑みと共に出そうだった声を抑え、深娜にとって今日の誕生日がどんな日になってくれるか目を閉じ思考に沈んだ

「はいヒットオ！でかいぜコイツ！」

「慎君ガンバレ！」

しなる竿を掴み逃がさぬよう慎重に巻く。隣で構える石田さんは目を凝らし、海面スレスレまで上がってきた獲物に素早く銛みたいなのを突き刺し一気に引き上げた

「うわぁキシヨッ！若干緑入ってる！」

「こりゃシーラってんだよ。惣菜とかでも出るんだぜ」

「大きいですね。加弥ちゃんも見えてよ」

「シャラップ！私達は遊んでんじゃないのよ！霞を生け捕りにするために船に乗ったのよ！」

「でも船長、あと40分は走らせるから藤阪君達と釣りでもしながら待った方がいいぜ」

「それにカツオかかったら刺身に出来るし」

クルーに丸め込まれた加弥は渋々ながら竿を掴み有らん限りの力で降りかぶった

「霞のバツキャロー！」

唸りが聞こえそうな速さで飛ぶ錘は鳥の群れど真ん中に着水した

「ナイツシユー。ほれ山下、お前も釣れよ」

「自分、船、弱いつス」

青白い顔でぐったりする山下は震える手でx印を作り力尽きた

「いい加減起きなさいよ。いつまで寝てるの」
「ふえ？」

目の前に覗き込む深娜の顔が飛び込む。あれ？寝てたか

「ホント見れば見るほど生まれた性別が間違ってるんじゃないかと思うわ。見る？」

携帯の写メにはあどけない寝顔の女の子らしき人物、悲しきかな俺が写っている

「遠回しに喧嘩売ってるなら買っぞコノヤロウ」

「それくらい流しなさいよ。ほら、そろそろ戻りましょ」

「あーなんかスッキリした。南国効果かね」

「知らないわよ」

深娜と並んでコテージへ戻る。帰って早速やることは今日の夕飯の仕込み。まあ仕込みなんていつてもそこまで手の込んだ料理が出来るわけでもないからお手軽クッキングで。今日のメインは『牛ロースステーキと新玉ねぎのコンポート』でも作りましようか。鼻歌混じりに材料を揃えているといつの間にか背後に深娜が立っていた。足音消してまで背後を取るその真意はいかに？

「何か手伝う事ある？」

「いいよ。今日の主役はのんびりしてて」

「なら命令。手伝わせないさい。じっとしててもやる事が無いのよ」命令ときましたか。なら断れんなあまったく

「なら外で食べるから準備してもらっていいか」

「ええ。ワインとかも出しておくわよ」

さあ早速調理開始と致しますか。玉ねぎスライスしてソテーにしてブイヨンと煮詰めてバターは余熱で混ぜて微塵切りパセリと塩コシヨウで味を整えてと

次はお肉っと。塩コシヨウで下味つけてこんがり。じょうずに焼きましたー。あとはメークインをチンしてる間に菜の花とアスパラをボイルして、メークインをカットして両面こんがり焼いてボイルしたやつも軽く焼いて最後に盛り付けすれば……はい一丁上がり！

「深娜ー。準備できた？コッチはOKだけど」

「いいわよ」

皿を持って外に出ると深娜は既に座っていた。俺は皿を置きワインを見るとボトルには1960年、また年代物を持ち出したな

「ちよつと待つてろ。瓶を割ってくる」

こういった年代物のワインはコルクが脆くなっている場合が多く、いつも通り抜くとコルクの粉がワインに入ってしまう場合がある。そんな時は専用のハサミを高温で熱して瓶を挟む。暫く挟んだら水に濡らしたタオルで握り力を込めれば簡単に割れコルクも綺麗に取れるのだ

外に戻り深娜のグラスに注ぎ自分のにも注ぐ

「誕生日おめでとう」

「ありがと」

グラスを軽く合わせ煽ると深娜と目が会う

どちらとも無く笑い談笑に華を咲かせた。二人だけでこんなに楽しく食事するのも珍しい。本当に久方ぶりに楽しい食事だ

「なあ藤阪君。アレは本当に女の子かい？」

「・・・女の子ですよ」

「じゃあ聞くけど」

日が沈みかけた海で夕飯に箸を伸ばすクルーの人、今夜はマグロだぜい

「マグロの一本釣りする子が女の子？」

「・・・女の子です」

加弥が釣り上げたマグロは軽く70kgを超えた大物だった

「慎君、ステーキ焼けたよ。加弥ちゃんも食べるよね？」

「ちきしょうバンバン持つてこい！霞のバガアア！」

「ちよっ、誰だ日本酒飲ませたの！慎、君か？」

「違うぜ森下さん。加弥が勝手に飲んだんだよ」

「カスミのばーろー！」

慎が海に落ちたのはその3分後だった

さて、月も出てきて涼しい夜風が吹いてきた訳なんだか・・・

「深娜、まだ飲む？」

「勿論」

「さいですか」

空になった瓶を脇に寄せ、ホワイトラムとレモンジュース。後砂糖一杯と氷を加えてシェークシェーク。分かる人は少ないかもしれないがキューバのある鉱山の名前がついたカクテル、『ダイキリ』の出来上がり。中甘口といったところかな？

「はいどうぞ」

「ありがとう」

軽く煽り口の中で転がす深娜は月明かりでも分かるくらいには紅くなってる。酔ってるよ

「飲んだら？さっきから造ってばっかでしょ」

「貴女様が次々空けて注文するからでございまーす」

隣に腰掛けロツクのままグラスを煽る。25ぐらいならロツクでもいける

「久しぶりに楽しい誕生日だったわ。まさかこんな日が来るとわね」
「誰にだってあるさ。多分加弥と洗夜もせがんで来そうだし」

「霞の誕生日は？」

「お前が来た数日前」

「あら残念」

もし仮に誕生日の日に来てたとしてもあの頃の深娜なら決して祝つてはくれなかつただろうな

「霞、まだ日付変わってないから言うこと聞くのよね？」

「出来る範囲ならな」

「なら夜桜の時みたいに詠ってよ」

「いきなりだな」

あの時は酔った勢いみたいなもんだからな。今の俺じゃ流石に即興で出来ないし恥ずかしいわい

「それは勘弁。いくらなんでもハズい」

「却下」

「ひでえなおい。ほれ飲んで寝なさいな」

「そつちも飲みなさい」

一気に飲み干すと流石に一瞬クラツときた。やべ、流石に少しは酔いが回ってきたな

深娜を盗み見ると目が半分閉じてたまに頭がカクンと落ちている

「寝そうならちゃんとベットに戻った方がいいぞ」

「・・・いい。このままでいい」

自然と俺に寄りかかると夜風に乗って香りがくすぐる。諦めた俺は深娜からグラスを取って脇に寄せる

「今日の誕生日はいかがでしたかお嬢さん」

「・・・」

聞こえるのは静かな寝息と草木の擦れる音。雲一つ見当たらない夜空から降り注ぐ月光に心地よく漂う潮風。寄りかかり静かに眠る深娜を見て思う

深娜は大人だ。大人になるのが早すぎた。だから少しずつでいい。少しずつ思い出を増やそう

俺がいて
加弥がいて
洸夜がいて
慎がいて
お嬢がいて
幸澤がいて

みんながいる。だからこれからも楽しい毎日を、少しでも長く、少しでも多く記憶に残そう

月夜の精よ、夜風の精よ

流れ虚ろぐ時の中を

流れ進む時の中を

阻む事無く流れる精よ

小さな幸を守りたまえ

姫の笑顔を守りたまえ

姫の道を守りたまえ

姫の心を守りたまえ

姫の眠りを守りたまえ

如何なる代価も支払おう

我の命で足りるならば

我の誇りで足りるならば

故に姫に幸せを

故に姫に幸せの涙を

気付いたら思わず呟いていた。隣からは相変わらず静かな寝息が聞こえ安堵の溜め息が溢れる

「お休み深娜。また明日も楽しいだろうさ」

そして深娜に誘われるように俺も眠りに落ちた

46・幸せとは如何に？（後書き）

さ、前書きでなんかやっちゃった感一杯の出だしでしたがいかがでしたでしょうか？

まあ何だかんだ色々書いたり新ネタ思い付いたりで気付けばきつと埋もれてしまいそうな気がします。もし、代筆としてこの作品を書いてみたいという奇特な方、いらっしゃいましたら御一報下さい。拙者よりも世に良い作品に仕上げてくれると思いますので

それではまた来月お会いしましょう

スィーユーネクスト

47・飲み過ぎと誤解？（前書き）

綾萌「寄るな愚民。私に触れていいのは悠一だけだ！」

佐山「何処を見て叫んでいる。それから黙ってる五月蠅い。つつかここを何処だと思ってる？」

綾萌「私と悠一が裸の付き合いをするに相応しい」

佐山「出ていけ！」

綾萌「ふつ。風呂に一緒に入るだけなのにあそこまで恥ずかしがる悠一もまた可愛いな　おっと。血を拭かなければ」

つつく？

47・飲み過ぎと誤解？

自然と目が醒め大きく伸びをしようとしたのに動けない

不思議に思い視線を下に向けると深娜が肩に頭を乗せたまま腰や上辺りに抱きついていていた。腕ごと掴んでいるので身動きがとれない
「・・・ううむ」

試しに腕を抜こうとしたが何かを察知した深娜は拘束を強め逃がすまいと爪までたててきた

右腕に尋常じゃない痛みを感じたので即脱出を諦め大人しくする
すると拘束は緩みまた静かな寝息が聞こえる

右腕には深娜の爪

左腕には深娜の胸

神よ、これは試練と言う名を語った嫌がらせか？

深娜島、沖約1km

丸一日掛けて走り回り遂に最後の島に辿り着いた加弥は銚を片手に船首を陣取っていた

波しぶきは闘気の様に加弥の周りを舞っている

「霞・・・覚悟！」

船尾の方では既に朝食が始まっているのだがいくら声を掛けても返事が無いので諦めて置いてきぼりのメンバーで食べていた。朝からマグロのお刺身です

「しかし霞遭遇率めっちゃ低かったな」

「うん。次で最後の島だからね。あ、醤油ちょうだい」

「あいよ。山下、生きてる？」

「あい。ギリギリ飯食べれるくらいには」

まだ青白い顔で刺身を摘まむ山下は操舵室に声を掛ける

「先輩、最後の島って深娜先輩の島っスよね」

「ああ。姉御が貰った無人島だよ」

欠伸を噛み殺しながらも巧みに船を操り目的地の深娜島を目指す

そんな会話のやり取りに首をかしげる二人

「え？姉御って島持つてんの？リッチマン？」

「凄いいね大川さん。でもなんで最後に残したんですか？一番いそうじゃないですか」

「え？だって姉御の恋人候補だろ？やっぱ邪魔しちゃ駄目じゃ・・・

」

突然会話が止まった事に疑問を持った食事組が操舵室を見ると、船首の方で銚を構えた加弥が操舵室目掛け跳躍し

「ヤイサホー！」

銚を投げた

「・・・さて、どうしたものか」

俺の肩を枕に思いつきり熟睡してる深娜は揺すつても声を掛けても起きる気配がない。そんなわけでなんかもう諦めようと思い別の事を考えていた。まず一番の問題は佐藤さんが家に来るって言うてた事だな。来週だったと思ったがどうやって深娜達にバレずに地下に行くか。いつそちよつと買物でも頼むか？しかし4人同時は難しいだろうな。慎は適当でいいけど加弥と洸夜は・・・ちよつとお願いすればいいか。深娜は・・・あつれー超強敵じゃね？でも流石にバレる訳にもいかんしかといって家にいられたら隠せんだろう

なー

「……ん」

ああ深娜さつさと起きろや！どんだけ俺耐えなきゃいかんか分かるか！分からねよな夢の中じゃ！

一応俺男だよ？そんな無防備にされたら困るわけよ。そりや信頼してくれてるのになって心の中で自意識過剰な部分があるけどそれでもやつぱ最低限守る距離はあるでしょ？ねえ聞いてる深娜？

「………」

はいはい逃げない逃げないから拘束強くしないで当たってるから胸極度に当たってるからお願いだから早く起きて頼むから

「ああもついい加減にしんしゃい！」

右腕流血覚悟で振り上げると爪痕のお土産を頂き自由を勝ち取っただが未だ寄り掛かって寝てるお子様は左腕に張り付いたままである
「みーなー。起きろー」

自由を勝ち取った右で揺すっていると深娜がピクつと動きゆっくり頭を上げた

「………」

「おはよ」

「………ねむ」

「起きろ。もしくは腕を離そうね。俺も限界ってあるんだよ？」

「……あたまいたい」

「飲み過ぎ。ベットに行つて二度寝してくれ」

「………ん」

のそつとした動きで離れた深娜はしばし隣に座ったまま俯いている

「………何時？」

「6時ぐらいじゃねーかな？」

「………眠い」

脱力して人の膝に頭を乗せた深娜は二度寝をするため頭の位置を調整し始めた。おいこらベットに行けや

「おーい深娜、なんで人を枕にしてんだ」

「・・・・・・・・」

寝やがった。はえーなおい。つーかそろそろ加弥辺りがいつ来てもおかしくないんだよな・・・・いや、来たなこりゃ。海岸で雄叫び聞こえた気がしたし。どーすっかなー

って考えてる暇ねーや。林の中がやたら騒がしいから来たな

「かすみいいい！見付けたああ！」

視界に飛び込んできた加弥は、銛を片手に砂塵を撒き散らしながら滑り込んできた

そして膝の上で情眠を貪る深娜を見付けるなり銛を構えた

「うん。加弥、落ち着くつてとつても大事だと僕は思うな」

「霞、我慢つて体によくないよね？」

どうしよう。全く会話が噛み合わない。このままだと俺串刺しにされそうだから少し強く言ってみるか

「止める加弥。深娜が寝てんだよ」

「！！！」

その場に銛を落とした加弥は信じられないモノを見るような顔でワナワナと震えだしその場に崩れ落ちた

続いてやってきたお嬢親衛隊と思われる二人は俺と深娜を交互にみて『おおお』と意味深に唸り、慎は俺と深娜を交互にみて『きい！羨ましい』とかほざき、洸夜は俺と深娜を交互にみて倒れた。そして最後にふらふらとやって来た山下は俺と深娜を交互にみて力尽きた。ほんとバリエーション豊富だよな俺の周りって。溜め息をついてから膝の上の頭に軽くチョップをかました

47・飲み過ぎと誤解？（後書き）

作者です。忘れてますね？ウドの大木ですよ？

いやー今回は短くてほんと申し訳ない。まさか我輩に短期的スランブが発生するとは思わなかった

まあ次回はもうちょい頑張ります

取り敢えず次回は深娜VS加弥&洸夜

慎、海の藻屑

霞、試練再びの三本でお送りします

また見てね！

48・海だ！宴だ！パースデーだ！（前書き）

佐山「なんだ。何か様でもあるのか？」

綾萌「いやな、最近ふと思った事があってな」

佐山「なんだ」

綾萌「来年辺りには子作りでもしたらどうかと」

佐山「くたばれ」

綾萌「何を恥ずかしがっている。夫婦なのだから当然じゃないか」

佐山「脳が濃んでいるのか？病院に行け」

綾萌「産婦人科か？」

佐山「・・・・・・・・」

綾萌「ふっ、恥ずかしがってる悠一も可愛いな」

つづく？

48・海だ！宴だ！バーズデーだ！

前回のあらすじ

睡眠系捕食者と化した深娜に捕まってしまった哀れな我輩。まあ最終的に膝枕で許してくれたんですがそんな誤解いっぱい*の我輩*を目撃してしまった愉快な仲間達＋

頑張れ我輩。きつと拳が君を待っている

さて、軽い現実逃避も程々に取り敢えず被害拡大を防ぐため皆さんを深娜邸にご招待……。していいよね？

「……………」

人様の膝の上で寝返りをうつ深娜は虚空に手を伸ばししばし迷った後、人様のシャツの端を捕まえ思いつき引っぱりやがった。繊維が切れる音がしたので慌てて捕食手を引き剥がすと代わりに手を捕食された

「ううむ。まさか大川先輩のこんな激レアシーンが見れるとは」

「大川の姉御……。なんつうか超可愛い！」

親衛隊2名がうんうんと頷き携帯を構え始めたのでやんわりと注意しておこう

「お二人さん、取り敢えず彼処に倒れてる三人部屋で寝かせて下さい。今深娜が起きたら間違いない俺もお二人も処刑されますよ」

写メを起動しはじめた二人は、構えた姿勢のままお互い虚空を見て何かを確信したのかうんうんと頷き全速力で加弥達の元に駆けていった。どれだけ怖いんだよ

さて、ギャラリーもいなくなつたし深娜には起きてもらうか

自由な手を深娜の髪に差し込みゆつくりとかきあげる。くすぐったいのか身を縮める深娜は更に手を強く握っていた

「そろそろ起きろ深娜。あらぬ誤解を解くために今すぐ目覚めろ」
髪から離れた手を肩に乗せめいいっぱい揺らしてやった。30秒ほど震度6強の揺れを続けていると深娜はうざったそうに俺の手を払いのけゆーっくり起き上がった

「・・・気持ちワル」頭を抑え俯いたままあーとかうーとか超小声で呻いてる深娜だが真相を知るよしもないので瓶の山を指さす

「あれだけ飲めばそうなるだろ。止めたのに聞かないから」

「・・・飲み過ぎね。ちよつと水ちょうだい」

「おう。持ってくるから大人しく待ってるよ」

手を上げ返事を返した深娜を残し深娜邸に突入すると魂の抜けた廃人がソファーに横たわり加弥は加弥で泣きじゃくっていた

「よう霞、なんつつか刺激的な場面を見すぎて可哀想な二人が出来上がったぞ」

「やっぱり？取り敢えずちよつと二人見といて。深娜に水渡してから行くから」

「おーっす」

慎に番を任せ深娜に水を届ける。ゆつくりと飲み干したコップをテーブルに置き一息ついた深娜は瓶の山を見て苦い表情になる

「私こんなに飲んだの？昨日の記憶が少し曖昧なんだけど」

「4割りはお前に付き合つて飲んだが残り全部君だ」

「どうりで朝から具合が悪いわけね。一応薬飲んでおこうかしら」

「そうしとけ。それから来賓の方がおみえだぞ？」

「来賓？」

「お嬢」

言った瞬間速攻でぶん殴られた

「なんで早く言わないのよ！何時からいらしてたのよ！」

「ごめんウソ。ホントは加弥達」

無言でもう一発殴った深娜はいつもの1.5倍の睨みを効かせている

「……ちょっと待つて。加弥さん達が来てるのよね」

「ああ。ついさっき到着したぞ。あとお嬢親衛隊二人と山下」

「……もしかして寝てる所見られてたの」

「もうバツチリ」

頭を抱えあーとかうーとか唸りだした深娜の肩に色んな気持ちを込めて手を乗せ諦めを諭す。うざったそうに俺の手を払いのけた深娜は何か覚悟したのかゆっくり立ち上がり俺の襟を掴み強制起立

「貴方は二人の誤解を解きなさい。私は部下に用があるから」

「いえっさー」

再び深娜邸に踏み込むと相変わらずゾンビー加弥と脱け殻洸夜がソファーに横たわっており、男三人衆は隅で円陣を組み何か小声で話している

「で、実際姉御と霞君は何処までいったの？」

「俺が思うに……あの時はお互いファーストキスだったろうな」

「沖縄の海辺でお互いファーストキス……青春まつしぐらだな」

「羨ましいなあおい。姉御美人だけど浮いた話これっぽっちもなかったからよ」

「霞はモテるにはモテるんだが一步踏み出さなかったからアレはい経験だったな」

「うんうん……ちきしょう彼女ほしーな。慎君はいるのか？」

「……友達からって事で京都の旅館の人が」

『裏切り者め』

「うぜえ！」

無言で深娜と蹴りをカマしてから深娜は部下の襟を掴み隣の部屋に強制連行。俺は憤に再び蹴りをカマして先ずは加弥の元へ。聞き取れない程の呪怨ボイスが下の方からあがってくるのを無視して加弥の頭を膝の上乗せた

「うわあああん！なんで深娜ちゃんばかりイイトコどりなのさあ

！」

膝に頭を乗せたままジタバタ暴れる加弥の髪に手を差し込みゆつくり撫でると、今度はもっともっととジタバタ暴れるので肩からうなじを指先でなぞってやった

「ひいやああっ！」

「かやー。あんまり我が儘言ったらダメなんだよ？」

「ふあっ……！か、かすみ……」

うなじから離し頬に優しく触れる。加弥は頬を朱に染め視線があっちこっちさ迷っている

「別に深娜だけ特別扱いしてるわけじゃないよ。昨日は偶々お祝い事があつたからさ」

「お祝い？」

「ああ。実は昨日、深娜の誕生日だったんだよ」

「……え？誕生日！」

「そう。だからプレゼントって事でね」

「……ずるい」

苦笑いして再度加弥の髪を撫でると気持ち良さそうに眼を細め俺の手を掴む

「なら、私の誕生日にもしてくれる？」

「加弥がそう望むならね。1日くらい二人っきりでデートでもしようか？」

「……あう」

真っ赤になつて両手で顔を隠す加弥に少々どいてもらい冴夜の隣に腰かける。冴夜は相変わらずピクリとも動かないので優しく頬を撫でる

「で、誤解は解けたのかな？」

「……うん。少しだけ納得した」

頬に触れていた手を両手で優しく包む冴夜は俺を見上げている

「なら……私も誕生日にはデートしてくれるよね？」

「勿論」

「うん。なら昨日は大川さんに譲る」

でも、と呟く冴夜はゆっくり起き上がり身体を預けてくる

「大川さんも加弥ちゃんもしてもらったから私も少しだけ」

冴夜の香りがくすぐったく感じたがしばらく好きにさせてあげた

しばらくして隣から戻ってきた深娜と後ろを歩く親衛隊。何処と無くボディーを押さえてる気もしたがきつと膾気楼かなんかに違い無い。そうに違いない

「話をついたのか？」

「ええ。勘違いって言ったから。ねえ？」

「はっ！そうであります！自分は何も見ておりません！」

「自分も朝早かったので寝惚けていました！」

「・・・だそうよ」

力とは時にナニモノにも勝る破壊力を持っている。人生の教訓を改めて実感した俺は朝食を作るため厨房へ向かった

「えー。深娜ちゃんとお酒飲んだのー。いいなー」

人の膝の上でクロールするように暴れる加弥を持ち上げて隣に置く
不服そうに突っついてくる加弥の首筋を人差し指でつつーとなぞる
と仰け反って隣に倒れなんかピクンピクンといってる。こりゃ俺と
同じ弱点だな

隣から強烈な殺気を感じたので咄嗟に頭を下げると頭上すれすれを
裏拳が通過した。しかし華麗に舞い戻ってきた元捕食手ががちり
頭蓋骨をホールドした

「ヘイマコト」

「ンー。なんだいカスミボーイ」

「オレのアタマにアルのはナニかな？」

「ンー。マドハンド」
ツッコむ前に圧壊が始まってしまった

「ウララーっ！」

深娜が乗ってきた小型船にロープで縛った木の板を取り付け水上スキーを楽しむ慎。最近思ったことは慎の奴何気に無駄スキルとしてスポーツ関係に滅法強い。なのに何故部活をしないのだろうか。多分だが慎が本気でスポーツに取り掛かれれば全国も夢ではない気がする

そんな事を思いながら浜辺で座っていると背後から人影が伸びる
「かすみー。あそぼー」

いきなり後ろから抱きついてきた加弥だが数秒後に深娜に引き剥がされ互いに牽制し始めた。洗夜はと言うと二人の仲裁をすべく孤立奮闘している。まあいつもの光景だと思い眺めていると突然三人の眼光が俺を捕らえた。一瞬殺気にも似た悪寒が走ったが加弥が突如極上の笑みを作ったので霧散していた

加弥は極上スマイルのまま俺の前にしゃがみ期待に満ちた眼で見ているので取り敢えず頭を撫でてあげた
されるがままくしゃくしゃつと撫でられた加弥は不敵に笑い深娜の前で胸を張っている

何処と無く覇気が溢れそうな深娜を他所にコソコソと近付いてきた洗夜は目の前に正座して頭を下げる。位置的にさっきの加弥と同じ辺りで停止してるので同じくくしゃくしゃつと撫でてやった

恥ずかしそうに頬を紅くしながらペコリとお辞儀すると加弥の後ろに回って深娜に対峙した

あつれー。なんとなくでやってたけどこれ深娜にもしなきゃダメ？
絶対深娜相手だとやる前にやられるぞ
しかしそこであることに気が付いた。いやいや深娜がそんなことするわけが無い。深娜ならまず

ゲスッ

こうやって人の後頭部に蹴りをお見舞いして

ぐーりぐりー

そうそうこうやって人の背中を踏みつけて

「ふんっ」

腕を組んで見下してる事でしよう。だがここにいると追撃されそうなので転がるように深娜から距離をとり中腰で回避姿勢を構える
「深娜、恩とまでは言わんが昨日の今日でコレは酷いんじゃないか？」

「彼女でもない女の髪に気安く触れて何言ってるの」

「私気にしないもーん」

「私も。嬉しいから」

「・・・・・・」

ええい。俺を睨むな。構えるな蹴りに来るな！

臨戦体勢で対峙していると加弥と洗夜が深娜を背後から押さえた

「深娜ちゃんも霞の彼女じゃないんだからあんまり干渉しちゃダメなんじゃないの？」

「大川さんばかりずるい。霞君と遊んで」

「遊んでない遊んでない。いじめられてるだけ」

美少女三人が水着姿でもつれあうのもまた刺激的過ぎる光景なのだがここは二人に感謝して逃走を図ろう

『逃げるな』

あんたらさっきまで敵対関係だったろうが。こんなときに共闘すんなや。こちら加弥、腰に引っ付いちゃだめだめ。深娜がまた圧壊とかやりはじめるから。洗夜も対抗しないの！貴女たまに大暴走するでしょ！

そんなセカンドインパクト並みの抗争を横目に男三人衆はいつの間
にやら釣りを始めていた

「いいねえ若いつて」

「うんうん。青春だね」

「ちなみにお二人どこみてる？」

「俺姉御の尻」

「俺先塚ちゃんの胸」

「俺加弥の太股」

三人はうんうんと頷き同時に海に唾をはく

「おいおいいくら姉御の彼氏候補でもハーレムはいけねえな」

「なんだあの羨ましい環境。ぜってー世界の敵だって」

「後何人増やせば気がすむんだよ」

男三人衆は見えないけど確かな絆で結ばれていた

そんな団結力をみせていると無線から聞き覚えのある声が聞こえる

『こちら幸澤。聞こえているかい？』

「あつ、こちら石田。どうしました幸澤先輩」

『もう少ししたらお嬢様とそちらに向かいます。準備をお願いします
すよ』

「お嬢様も？ああ了解しました。食料とか補充しておきます」

通信の切れた無線から視線を外した三人は未だ継続中のセカンドイ

ンパクを眺めながらうんうんと頷き同時に海に唾をはく
『気楽なもんだなあええおいこの世界の敵め!』

さて、セカンドインパクも深娜の暴走により終結したわけだが・・・
あれ？慎どこ行きやがった？

「かすみー。こっちには居ないよー」

「部屋にもいなかったよ。石田さんも森下さんもいなかった」
あれ？三人衆何処いったんだ？よくみたらガラスが割れてた船もねーや

「ほつといていいんじゃないの？どうせその内戻ってくるでしょ」
「かもな。それに沖で釣りしてるかもしれないしな」

つつわけで三人衆は放置して深娜邸の裏にある小屋から炭とバーベキューセットを運びだし浜辺に広げる。今日は皆で深娜の誕生日を祝うことになったのだ。さて、そろそろ材料揃えに行こうかね

「かすみー。手伝うー」

「あ、私も手伝うよ」

両サイドに走り込んできた二人は深娜をチラッとみてから手を引つ張り急かすように引つ張る。まあそこまでならまだ可愛い光景なのだがここに深娜が加わるとあら不思議。壮絶なるバトルに発展するわけである

「貴女達。霞にそんなベタベタくつつくのはどうかと思うわよ」

「いいじゃん別に。昨日は深娜ちゃん一晩中ベタベタしてたんだからさ」

「加弥、そーゆー表現は誤解を招くからやめようね？」

「大川さんだけいつつも霞君とベタベタしてて・・・羨ましい」

「べ、ベタベタってあれは誤解だって言ってるでしょ!」

「誤解でもなんでも一晩中ベタベタしてたのに変わりはないじゃん。

私だつて霞と一晩中ベタベタしたいのに！」

「だから加弥ー。なんかその内放送禁止ワード出そうだから少し落ち着いて！」

「私だつて……」

「ちよつ！洗夜もなんですり寄つてくるのさ！暑いから離れてよ！」

「……霞」

「あんたは真つ先に落ち着け！俺を殴つても何も変わらんぞ！」

ゴメス

「さつさと下準備に行くわよ。いつまで寝てるのよ」

ノーモーションからの飛び膝蹴りかましといてよくそんな事言えるなこいつ。加弥に支えられながら起き上がり首をさすったり伸ばしたりストレッチしているとある事に気付いた

「……？船がこつちきてる」

水平線に傾きかけた夕日をバックに3隻の船がこちらに向かっていく。内一隻は二隻に比べ大きくやたら設備の良さそうな船だ……。ああ成る程

俺はその場に座り未だよくわかつてない深娜を見上げる

「1日遅れの誕生日は盛大になりそうだな」

「……まさか」

そのまさかだろうね

船から降りてきたお嬢親衛隊の面々とお嬢と幸澤。それから何故か

慎も一緒に降りてきた

「いやぁ成り行きついでにちょっと働いてきた。ほれ肉」

他にも次々と食材が運び出され軽く見積もっても全員で2日はここでどんちゃん騒ぎ出来る量だ

「ふふ。昨日は二人つきりで如何でした？この子ったら誕生日になるといつもいなくなるのよ」

お嬢はクスクス笑いながらチラッと深娜を見る。即視線を反らした深娜に変わり答える

「楽しんでもらったみたいだぜ。ちょっと飲み過ぎたせいで大変だったけどな」

「あら。どう大変だったのか是非詳しく聞きたいわね」

「だそうだ深娜」

「はあっ！？なっ、なにいきなりフツてるのよ！ちよつと霞！」

「聞こえない聞こえないーい。さぁ晩御飯のバーベキューの準備しなきゃ。皆さーん。深娜とお嬢の邪魔しちや悪いから準備手伝ってー」

『あいあいさー！』

「ちよつと貴方達！！」

『聞こえない聞こえないーい』

みんなノリいいなー

皆さんのご協力により程よい時間で手早く準備が終わり、各場所では炭を焚き始めている

やや離れた位置ではお嬢の深娜イジリが続いているのだが……不自然な草の集合体がゆっくり背後から近づいている

不自然な草の集合体の背後にゆっくり近付き手を突っ込む

『霞は小柄なメイド、カンナを捕まえた！』

「はっ放せです男女！」

「やめるカンナ。邪魔しちゃ悪いだろうが！」

「黙れです滅びるです土に帰ろです！」

「タンス」

「・・・・・・・・」

『カンナは不自然なくらい大人しくなった！』

カンナを引き摺って炭火隊に預けて加弥達と合流。上を脱いでる慎が雄叫びと共に団扇をはたいている

「おーっす。炭の準備できた？」

「ふははは！我輩にかければあつとゆう間だ！」

「他もいい感じだよー。お肉 お肉」

はしやぎまくりの加弥なんだが・・・・はい全員集合

「加弥に缶チユウ渡した奴手を上げて」

「あ、自分ッス。加弥さんに頼まれたんで」

「はいアウト！」

「あぎやっ！」

そんな貴様にドロップキックプレゼント

「紗智さんいらっしゃいますかー」

「・・・・・・・・ここに」

「後日その物事の順序が分からない輩にDセットよろしく」

「了解・・・・山下、OK？」

「りよ、了解ッス」

さあ全ての準備が整った。後はお嬢が深娜イジリを終わらせればバ―ベキユ―の始まりだ

皆で二人を遠目で見ているとお嬢にイジられテンパってる深娜がどんどん小さくなって様に見える

「俺、今この瞬間の姉御ぜってー忘れねえ」

「先輩・・・可愛い」

「おい、誰かビデオまわせ。今年の忘年会に使いてーから」

「お姉様！お姉様あ！」

「はいはい。撮影禁止ですよー。バレたらどうなるか分かるですよー」

親衛隊は揃って虚空を眺めうんうんと頷くとイソイソとカメラを戻して炭の見回りを始めた。どんだけ怖いんだよ

程なくして大変満足されたお嬢とこの短時間で徹底的に追い込まれた深娜が帰ってきた

帰ってくるなり本気でボディーに一発頂いた

後ろの男性陣からおおと声上がり皆一様に腹を押さえている。どうやら全員頂いた事があるらしい。日頃培われた根性で起き上がると親衛隊からおおお！と声上がり拍手まで起きている

「たったぞ。姉御の一撃を受けてたったぞ」

「姐さんの彼氏候補つても伊達じゃあないんだな」

「せいやあつ！」

「た、担架！加弥嬢の一撃で森つつが倒れた！」

親衛隊もまだまだだ。加弥の攻撃は四撃目からが踏ん張り所だぞとまあ飲む前から一人脱落してしまったがこの際仕方ないで流して進行しよう

皆それぞれ炭を囲む様に座り一際大きく陣をとる我等が5人組とお嬢と幸澤、あと何かカンナも潜り込んでました

「はあ。帰ったら覚悟しなさい」

「お姉様！今すぐ土に帰しましょう！」

「あれ？カンナちゃんさつきまで私の隣にいなかった？」

「あははあもうコウちゃんねばけてるう？」

既に混沌の扉は目の前に来たわけだが諦めるしかないんだろうなそう考えてたら加弥が突然立ち上がり缶チューを一気に飲み干して

空き缶を山下に投げつけた

「あいたあつ！なんで自分に投げるツスカ！」

「彼女といちゃついてんじゃない！今日の主役は深娜ちゃんなんだよ！」

加弥の一言に驚き見上げる深娜を他所に加弥は生肉を慎の額に張り付けてから缶チユウ片手に椅子の上に立ち上がる

「え？何この肉？」

「シャラップ！！」

「怒られた！」

慎を無視して親衛隊は何か気付いたらしく、全員が手にグラスや缶を持って立ち上がる

続くように慎と洸夜も立ち上がり最後にお嬢がグラス片手に立ち上がる

「深娜、今日の誕生日は貴女の心にちゃんと残るかしら？」

「いくよ。せーのっ！」

『誕生日おめでとー！』

手を高らかに掲げ、心を一つに叫んだ。一人の女性を祝福するために

隣に座る深娜は俯いている。俺はなんとなく携帯の録音機能のスイッチをいれた。なんか御告げの様に心の中から声が聞こえた気がする
「ありがとうみんな」

全員がもれなく固まった。身動きさず呼吸すら止めてるかの様に炭の弾ける音くらいしか聞こえない。お嬢ですら啞然としており深娜に釘付けだ

俺は録音した貴重なボイスを再生してみる

『ありがとうみんな』

全員が一斉に俺の携帯をガン見した

「えー深娜の超貴重な生ボイスを録音したデータ。500円からスタート」

「20万!」

「32万!」

「ええい48万!」

「52万!お前ら吹っ掛けんなよ!」

「80万!お姉様の物は私が頂く!」

予想以上の大反響だな

「はい81万、81万の方はいらっしゃいますか。いらっしゃらないなら80万で落札されます」

「200万」

「・・・・」

お嬢、お前がマジ参加したら駄目だって

そんな視線を送っていると横からマツハパンチが炸裂。砂浜に横たわる俺を踏みつけながら俺の携帯を勝手に操作。消したなコイツ
「文句ある?」

「滅相も御座いません」

周りの親衛隊もいつせいに頷き半ばヤケ気味に飲み始めた

起き上がった俺は砂を払い席に座る。相変わらず何が嬉しいのかニコニコしてるお嬢はグラスを煽り深娜をチラッと見る

「本当に変わったわね。貴方のおかげよ」

「よせやい。変わる切っ掛けは俺かも知れんが変わると決めたのは深娜の意思だ」

「それでも貴方のおかげで変わったと私は信じていたいもの。だから伝えなきゃ。ありがとう」

「・・・・」

そう手放しにお礼なんぞ言われれば誰だって言葉に詰まる。返事の変わりに頭をわしゃわしゃ撫でてやった。しかし直ぐに手を離して仰け反る。目の前を通過したのはバーベキューの串か

「なんで避けるの？」

「あぶねーからだよ！」

「何をしてるか分かってるの？」

「おう。お嬢の頭を撫でていただけだが」

ゆらりと串を構える深娜だが手櫛で髪を整え終えたお嬢がはふつと溜め息を吐く

「深娜、夫婦喧嘩は程々にしとおきなさい」

「お、お嬢様！？夫婦喧嘩なんてそんなんっ！」

「おじよーさんー！霞と深娜ちゃん夫婦じゃなもん！」

何処から湧き出たのかお嬢の背に抱きついた加弥は愛犬が抱きつく様にすりよっている

「ちよっ、大甲さん！何処を触っていらっしやるの！」

「おっぱい」

「加弥さん！今すぐ離れなさい！」

「いやぷー」

何となく見ると殴られそうなので他の組の方に視線を向ける

何やら勝負に負けた男が突然服を脱ぎ出しパンツ一丁になると同僚の女性を呼び出した。新手の告白方法かと思いきや、最近ウエスト辺りのお肉が気になって通販のダイエット器具3つもまとめ買いして試したが一ヶ月後にリバウンドしちゃった的な事を暴露した

案の定呼び出した女性に張り倒され仲間を呼んだ女性群に文字通りフルボッコされている

隣の組では何やら皆難しい顔で何かを語っている。気になったので近づいてみると洗夜と深娜、バストはどっちが上でバランスはどっちがいいか。お嬢と加弥、どっちが下か本気で討論していた

余りにも哀れに思えてしまったので何も語らずその場を去った。だが特別講師の腕章を着けた慎、貴様は後でお仕置きだ

自分の席に戻ると加弥が何故か人の膝の上に座りもたれ掛かってくる
「かすみー。あーん」

雛鳥が餌を求める様に口を開けてるのでサラダからトマトを摘まみ放り込む。幸せそうに頬張る加弥を見てると背後からただならぬ視線を感じた

同じくトマトを摘まみ首だけ向けると洗夜が恥ずかしながらも口を開けて待っていた

「はいどうぞ」

加弥同様幸せそうに頬張った洗夜はお礼なのか串に刺さった肉を恐る恐る差し出してきた

一瞬食べるのを躊躇した時、膝の上の加弥が飛び降り肉にかぶり付いた

「か、加弥ちゃん！」

「かふゆみにあふえちゃらめ！」

何言ってんの加弥？ようやく飲み込んだ加弥は何故か洗夜の胸に飛び掛かり顔を埋めた

「うりうりうりうりうりうりうりうりい！」

「ひいああっ！」

駄目だ。酔っぱらった加弥が何を考えてるのかさっぱり分からん取り敢えず放っておくこととして視線を前に向けると泣きそうなお嬢と必死に宥める深娜。大方加弥のセクハラに耐えれなかったんだろ。さらに必死に宥める深娜の横で荒い呼吸で熱い眼差しを向けるカンナには触れないでおこう。この子はもう手遅れな気がするからなんつうか宴会場が混沌としてきたので少し落ち着いてもらおう

「はい皆さん。全員ちゅうもーく」

何事かと集まる視線。俺はにこやかに笑い慎を指さす

「共同作業って事で慎を海に投げたいと思いまーす」

「何故！我輩なんかやらかしたかいな！」

「んー。なんつうか生きてるから？」

「ヒデエ！」

しかし酒の入った大人が止まるわけもなく、まるでアリスさんの様に群がっていく。なんだろう・・・めんど

「ちよっ！皆さん落ち着こう！我輩をどうするきや！やめっズボン返して！パンツ一丁なんていやや！」

暴徒と化した大人達は慎を担ぎ上げ小高い丘を目指す。おいおい10m以上あるぞそっから海面まで

丘の頂上まで連れてこられた慎は退路を断たれ絶壁に追い込まれていた。先陣を切って追い込んだ加弥は酔っ払いパワー全快でふらふらしている

「よーしよし。落ち着こう落ち着こう加弥。ステイ、ステイ」
「うつせえ！」

「イタアッ！何素で石投げてんだよ！」

「私は腐ったみかんじゃないもん！」

「言ってねえ！イタアッ！また投げた！」

「んー。慎、いつちようやってみよう！」

「何やるの！殺るじゃないよな！」

「てへっ」

「てへじゃねえああああああああ！」

慎、君の死は決して無駄にはならない

後に洸夜から見せてもらった写真には、慎の紐なしバンジーが月の見事な演出により丘に群がる暴徒とくの字に曲がって落下する姿を見事に収めていた。特に蹴りの姿勢の加弥がとても印象的だった。酔っ払いって怖いね

まあこれは未来のお話なので現在を見てみよう

前門の深娜、後門の洸夜

「ねえ洸夜。後ろから抱きつくのは百歩までなら無くもないかもしれないよ。でも俺座ってる。君立ってる。わかるよね？」

「ん。霞くんいい匂いするね。加弥ちゃんが言ってたとおり」

「やめんしゃい！頭が埋まつてるんじゃ！」

「何やつてるのよ霞！」

「何故俺を怒る！相手が違うよな！違うよな！お嬢、アンタも笑ってないで止めるや！」

「どうして？」

「どうして？じゃねーだろ！アンタの部下が鈍器片手に迫ってるからだよ！」

「お姉様、私も手伝います！今日こそ男女の息の根を！」

「えーカンナのタンスの中には深娜のとうさ」

「うわああああ！言ったらダメですうう！」

流石に鋭利な刃物相手に耐性もなくでもないからな

その代わりといったらなんなんですが・・・ええ、殴られました。ビール瓶で

こいつ俺をいつか殺す気じゃないかと本気で危機を覚えたのは砂浜で気を失った俺を深娜が蹴り起こした辺りです。気を失ってバテないと思ってるかもしれないがあんた瓶で殴った所本気で蹴ったろ

頭を押さえながら起き上がり近くの椅子を引っ張り座る。海岸辺りではパンツから海草がはみ出てる慎目掛けてロケット花火を連射してる加弥と、その先で爆竹とドラゴンを構える洸夜。さらに周りの酔っ払いは全員ロケット花火を構えている。頑張れウェットルマン

「で、どうだったよ祝ってもらった誕生日は」

「疲れたわよ。こんな慌ただしい一日は初めて」

「でも嫌じゃないだろ」

「・・・たまにはね」

「ならいいじゃん」

テーブルからワインとグラスを持ってきて片方を渡す

「今日くらい皆と付き合つてやろうぜ。幸いな事に俺の後ろには何故かロケ花がある。後連射様の筒も」

一気に飲み干した深娜は既に装填されている8連式に改造されたロケ花の導火線に火をつけた

「貴方達どきなさい！」

酔つていても親衛隊の名は伊達じゃないのか、ただ単に深娜の存在が恐怖を超えた存在で刷り込まれてるのか分からないが一斉に壁が割れ、目標のウェットルマンが内股で防御の構えをとっていた

「霞、夏休みに何処か出掛けない？」

「いいぞ。何処に行くんだ？」

「その日の気分よ！」

高速で発射されたロケ花は寸分狂わずウェットルマンに命中し、周リから歓声があがってから慌てて逃げ出した。なんか深娜さん暴走しそうなんですけど。え？次弾装填すんの？程々にしときなよ。狙つていいの男衆ぐらいなんだから

とまあそんなわけでこの夜は盛大なロケ花戦争だった。死者ウェットルマン、軽傷ほぼ男衆となったのだがいつの間にか無敵の盾として女性陣に担ぎ上げられたウェットルマンだが次の日には何故か傷一つ無く復活を遂げていた。君って悪霊とかそうゆう類いの生命なのかな？

まあそんなこんなで慌ただしい深娜バースデーは幕を閉じ、翌日にはお嬢に一礼して帰路に着いた。まだまだある夏休みの予定に深娜と出掛けるが加わった。後で埋め合わせに皆で出掛けないとなーと思いますながら両膝に頭を乗せて二日酔い街道まっしぐらの加弥と洸夜のお守りをしていた

あ・・・佐藤さん来るの忘れてた

48・海だ！宴だ！バーズデーだ！（後書き）

えーどうも。自称作者のウドの大木です。みんな忘れちゃったかなー？忘れちゃったら拙者泣くよ？

まあそんなわけでちょっと遅くなりましたが更新出来ました

今回は謎の佐藤さん登場。どんなキャラかは楽しみつつ事で今日はこの辺で

アデュー！

49・迫り来る担当さん（前書き）

綾萌「悠一、今度避難訓練があるそうだな」

佐山「ああ。それがどうかしたか」

綾萌「うむ。混乱に乗じて悠一を狙うネズミを始末しようと思ってな」

佐山「二度とそんな気を起こすなよ」

綾萌「私を心配してくれてるのか？ふっ、思わず鼻血が出そうだよ」

佐山「後処理が面倒なんだよ。いつそ二度と学校に来るな」

綾萌「照れなくてもいい。悠一の心はお見通しだ」

佐山「・・・・・・」

続けていい？

49・迫り来る担当さん

さて、深娜島でのどんちゃん騒ぎも無事に終え、なんかやたら懐かしく感じる我が家に帰ってきた訳なのですが・・・事件は突然起こるわけです

その日の夜、居間でぐったりする我等はテレビ見たり話したりゲームしたり自由を満喫していた。そんな時鳴り出す電話にたまたま近くにいた深娜がいつも通り電話様の感情の読めない声色で対応に当たった

「はい。野崎ですが」

『佐藤だ。里山は居るかい？』

「・・・は？」

『だから里山だよ。この時間帯ならいるだろ』

「間違いです。そんな人はこの家に居ません」

『ああ？居ないわけないだろ。番号は間違ってるじゃないよ』

「だからっ！」

ヒートアップしてく電話に慌てて割って入る霞

「どうした深娜。叫んだりして」

「間違い電話の癖に態度が気に入らないのよ。里山が居るだろとか」

「・・・え？」

「だから里山よ。もう切るわよ」

「ちよちよ待て。俺が代わるから」

「は？いらないわよこんな奴相手にしないで」

「いいからいいから！」

受話器を奪い子機の方に移してから隣の部屋に逃げようように走る霞
そんな光景を取り残された四人が奇異な視線で見つめていた

「何やってんだよ佐藤さん！連絡は必ず携帯にしろって言ってるでしょ！」

小声で怒鳴る妙なスキルを発動しながら抗議するが全く効果の色は出ていない

『ああ？10回に1回のサプライズだろうが！感謝しな！』

「いるか！」

『まったく知らない内に女連れ込んで。これから第3ラウンドか？』

「今本気でアンタに殺意を覚えたよ！さつさと用件言え！」

『明日行くからな』

「は？明日っ！」

『じゃあな。まだ仕事残ってんだよ』

「ちょ！おい佐藤さん！佐藤さん！」

『ツー・・ツー・・ツー・・』

ちよっとピンチです

居間に戻った俺は子機を戻しソファーに腰掛けると膝の上目掛けて加弥がダイブしてきた

見事に着陸した加弥は隣にいる深娜といつもの攻防をしながら見上げてくる

「どしたのさっきの電話。間違いだっただんでしょ」

「んー。それなんだけどさ、ちよっと明日家を空けてくれないかな？」

『??？』

「じつはさっきの電話の相手、爺さん所の人でさ。あんまり聞かれると不味い話しくるから出来れば空けてほしいんだ」

「えー。部屋に居るのもだめえ？」

「ごめんな。日中だけでいいから頼むよ。夕方には帰る筈だからさ」
「私はいいいよ。霞君に迷惑掛けたらダメだから」

然り気無く加弥の足を引つ張って引き剥がそうとする洗夜は足をくすぐりはじめた

うひゃああ！とか言つて膝の上で鮮魚の様に暴れる加弥。鮮度が良すぎてそのまま膝の上から落ち、モロに頭から激突した

うぐうとかぬううとか漏らしながら頭を押さえてのたうち回る加弥とうわあゴメン加弥ちゃん！とか連呼しながら抱き起こす洗夜を見ながら何とかかなりそうだなーとか楽観する俺がいた

その時の深娜の眼がプルプル震えるうさぎさんを狙うキツネのような眼光だったと気付く者はいなかった

おやすみーと眠気まなこで出ていった加弥と洗夜。そこに深娜も続き残ったのは俺と慎。慎は大きく伸びて床に横になる

「なあ。さっきの電話って担当さんか？」

「ああ。いきなり明日来るってさ。ったくぜってえ酒飲んで仕事してやがるよ」

「お気の毒さま。三人はなんとか抑えっから速めに終わらせろよ」

「わりい。頼むな」

いいってことよと手で返し二階に上がった慎に感謝し地下に向かうさあてとちよつくら書斎の片付けすつか

さあていよいよ朝になっちゃった。深娜に福沢さんを数枚渡して送り出す。加弥が行ってきますのちゅーとか言つて両サイドを挟まれて引き摺られながら出ていった

「……おい佐藤さん。あんた朝とか言ってたけどよ、なんでこんなギリでくるかな。皆が出ていった3分後に来たけどちょっと早けりや俺の公開処刑だったぞ」

「おう野崎……早速だけど風呂貸せ」

「オイコラ何しに来やがった。家で入れよ自分の家で」

「ああ？帰ってなんだよ忙しくて。酒のんでなきゃやってらんねーんだよ」

「昨日も飲んでたろ」

「ああ。当たり前だろうが。ったくあのクソハゲ担当増やしやがって。腹いせに浮気の事会社内の掲示板に書き込んでやった」

「バレたらクビにされますよ。俺関係ない」

「ハッ。知ったこっちゃないね。クビになったらいつそ会社立ち上げてやんよ」

「頼もしいことで」

「よし。風呂貸せ」

「おい」

しかし話を全く聞く気のない佐藤さんはさっさと上着を放り投げ風呂場へと我が物顔で歩いていく

「ああそつだ。トランクに着替え一式入れた袋あつから持ってきたいて」

「へいへい」

仕方なく鍵を受け取り外に出る。相変わらずスッゲー車乗ってんなコブラAC427SC。車好きなら確実に知ってるであろう名車の一つ。”獲物を狙う猛獣の様な加速力“”大蛇を思わせる様なボディ”“正に名は体を表すとはこの事、なんて言われるくらいの特異な車体と加速力を持った車だ。実はこの車、純アメリカ産ではない

のはご存知だろうか？実は米英合作だったりするのだがまあこの変は余り詳しく語らなくてもよさそうだな。因みに車体価格で1680万。あの人は更に色々弄くってるらしく上乘せして軽く2000万イッてるんじゃないかと佐藤さんの後輩さん達が言っていた。車内は綺麗だけど後ろを開けるとまあ乱雑なこと。資料から機材から・・・着替えまで飛び散ってやがる。下着とか少しは隠すって事考えようぜ

袋に詰めて家にUターンすると廊下に転々と脱ぎ散らかした服。おい、なんで廊下に下着まで脱ぎ捨ててあんだよ。せめて脱衣場で脱げや。渋々回収して洗濯機に放り込む

「着替え置いときますよー。ついでにさっさと上がってくれや」

「おい霞、このリンスめちゃくちや高いやつだったと思ったけど使っぞ」

「もう勝手にせい」

コーヒーと簡単なサンドイッチを作って待っていると漸く上がったのか足音を近付いてくる

「ああサッパリした。やつぱブランドは違うな」

「そうっすか。それより食って飲んだら書斎行きますってなんだその格好！」

「あ？」

「あ？じゃねーよ！服着ろ服！」

「タオルの下にはちゃんと着てるからいいだろ」

「ダメだろ！」

なにバスタオル巻いただけとか加弥と同じ発想してんだよ。えーとか抜かしてる佐藤さんだが渋々脱衣場に向かい数分後にはスーッ姿で帰ってきた

ソファーに座り足を組みながらコーヒーを一口

「・・・なんか前来たときより生活基準が上がってねーか？このコーヒーもクソハゲが飲んでるヤツより上等だろ」

「まあちよつとした知り合いから貰ってな」

正確には幸澤経由で上等なモノを流してもらったんだけどな。ふーんとか言つてもう一口飲んでからサンドイッチを放り込む。よく噛んで飲み込んでからまたコーヒーを一口

「なあ霞よう」

「なんすか」

「俺の嫁になんね？」

「俺男、アンタ女。次言ったらしばくぞ」

「やんのかこらあ？犯すぞ年下」

「車のローン一括で払わせますよ」

「よし、仕事すつぞ仕事。ほれ早く書斎行くぞ」

ホント車第一の人生設計だよな佐藤さん

我が家の地下室は台所が入り口になっている。皆さんの家庭でも台所の下に小さな空間を設けて保存食や非常食なんか保管してないだろうか？我が家の地下室は当初そんな感じだったんだが爺さんが色々弄くって現在の大地下室が完成したのだ

大きく分けて三部屋。まずは酒蔵。爺さんの収集癖で最初に来た部屋である。自由に飲んでるけど俺の両親はその事を知らない様だ。ご免なさい父上母上

次に収集癖第二号の骨董品室。ぶっちゃけ一つ数千万とかあるぞーとかほざいてる品まで置いてある非常に傍迷惑な品々が保管されている

そんでもって俺の書斎。やたら古い本から何かの古文書的な物まで並んでいる。流石に古文書なんて読めるわけ無いのが殆んどだが暇なときには資料書片手に翻訳している。つっても最近そんな暇すら無いんだけどな

仕事モードに入った佐藤さんは今月分の原稿に眼を通して。その隣で俺も仕事をしているんだが実を言うと後少して完結してしまうのだ。かなり書き貯めていたので来年分まで書き終えているのだ。「霞、この部分の表現これでいいのか？前後の文との繋がりが少しおかしいけどよ」

「そこはわざとそうしてるんでそのままお願いします。まあ読者に対する引っかけみたいなもんですから」

「そうか。OK残しておくぞ。つかお前字の間違いとか滅多に無いから楽なんだよな。うっしならコイツは貰ってくぞ」

「お疲れ様です」

そう言つて佐藤さんは何故かソファーに座り直しタバコに火をつける

「……佐藤さん」

「あんだ？」

「帰らないんですか」

「帰って欲しいのか」

「いや、いつもならすぐ帰るじゃないですか」

紫煙を吐きながら頭をかく佐藤さんは心底不機嫌そうに灰皿にタバコを押し付ける

「嫌な話しと非常に嫌な話し、どっちから聞きたい」

「聞きたくないから帰ってくれ」

「やーな予感が脳内に響いていた」

一方追い出された四人は近くの喫茶店で夏の猛暑を凌いでいた

「あーちべたいー」

頭を叩く加弥は身悶えしながらもかき氷を口に運ぶ。そしてぬわあ
あとか言いながら両手でこめかみを押さえた

洗夜はそんな加弥をみて心配そうに笑いながらメロンシャーベット
をつつき、姉御はアイスコーヒーを飲みながら何か考え事をしている

「それにしても霞君も大変だね。お祖父さんの会社の事も手伝って」
「霞って変な所で万能なんだよねー。中学の時はフツーだったのに」

そりゃ霞が作家になったのは高校入ってからだしな。それにバレない
様に偽名から赤の他人の写真使ったりして徹底的に情報漏れだけは
避けて来たからな。知ってるのは出版社の一部と両親、あと俺と
か霞の爺さんくらいだからな

そんな事を考えながら、嫌がらせにしか思えない加弥が注文したハ
バネロミックスたる煮えたぎるマグマみたいなスープを一口

「?どしたの憤」

「シヌ。コノスープロワイ!キモカライ」

何をとち狂ったか知らんがハバネロベースにして納豆混ぜたるコイ
ッ!

呼び出しボタンを連射していると営業スマイルがまぶしい店員さんが
やってきた

「お呼びでしょうか?」

「これむり飲めたい。下げてください」

「こちらはチャレンジメニユーになっておりまして、飲み干すまで
お下げ出来ません」

「チャレンジメニユー!ちよいや加弥さん」

「カンバ慎」

「イヤや!飲めるかこんな産業廃棄物!」

「飲めない場合、ペナルティーとして此方の罰ゲームボックスから
クジを引いて頂きます」

「なにこのチャレンジ企画!メニユーにも載って無いじゃん!」

「裏メニユーです」

「知られざる新事実！つかなんで加弥知ってんの！」

「その店の員さんが教えてくれた」

「アンタかあ！」

「グイ！」

「グイじゃねー！」

俺はかーなり参っていた。いやはや嫌な話しと非常に嫌な話し最悪だな

「それで、お爺さんの葬儀はいつ？」

「葬儀は身内だけでとくに終らせたよ。悪いけど原稿料から葬儀代は引かせてもらった」

「構いませんよ。それより・・・なんとも急な話ですね」

佐藤さんのお爺さん、東次郎さんというのだが。実はこの人は俺の代わりにサイン会や挨拶等をして下さっていたのだ。一応周りに知られたくないという俺の要望に東次郎さんが力を貸してくれていたのだ

「爺の野郎、癌だったんだよ。それを徹底的に隠してやがった」

「そうですね」

「・・・」

「・・・」

暫しの沈黙。もしかしたら無意識に黙祷を捧げていたのかもしれない

「んでよお」

本日4本目になったタバコに火をつけ深く吸い込む

「次は非常に嫌な話ですか」

「ああ」

紫煙を吐き出して灰皿に灰を叩き落としてから舌打ちをする

「あのクソハゲ今度の新刊発売日に握手会をやる気だ。爺じゃなくてお前でだ」

「は？俺で！？」

「ああ。俺等が反対するの分かってるからあのクソハゲ、ネットの掲示板にお前本人の握手会をやるって書き込んだんだよ」

「はああ！？約束が違うぞ！この件に関しては俺はあくまでもゴーストライターって立ち位置の筈だぞ」

「それをクソハゲが破ったんだよ」

ああ頭痛い・・・、胃も痛くなってきた

「つつ訳でだ。お前はどのような気だ？」

「そちらの出版社を辞めさせて頂く。最初の契約でもそう書いていましたよ」

「ああ。構わねえ。約束を破ったのはうちのクソハゲだ」

灰皿に押し付けてから佐藤さんはテーブルに両手を付け頭を下げた
「すまなかった」

「謝られてもこればつかはどうしようもないですよね？」

「ああ。無理だつて分かってて伝えたんだ。しゃーねえだろ」

頭をかきながら立ち上がりコーヒーを入れる。本来なら俺が入れるべきだが先程の謝罪の件もある。だから敢えて出されたコーヒーは素直に頂いた

「んで、ものは相談」

そういつていくつかの書類を取り出した佐藤さんはテーブルに広げる
「いつそ俺が会社作ろうと思うんがよ、うちの第一号にならねえか？」

「・・・変わり身がはやいっすね」

「知るかよ。クソハゲにこき使われて辞めたい奴なら結構いるぜ。そいつら全員声掛けたから社員に問題は無いぜ。勿論お前の要望に

も完璧に応えてやる。どうだ？」

「資本金はどうするんですか？株式でも最低1000万程必要ですよ」

「車うつばらう」

「え？車売るの！」

あり得ん！あの佐藤さんがアレだけ俺にすがり付いて爺さんのコネフル活用させて無理矢理月5万の28年ローン組ませたこの人が！
「あと改造からなにから含めて2000万超えてるぞ」

「本気で売るんですか？そして本気で会社始めるつもりですか？」

「半端な覚悟でやる気は無いよ。やるからには今の会社潰すつもりでやるさ」

だからよう、と前置きして再び頭を下げた

「手伝ってくれ」

「……」

なんとも……この人は。いつも平然とセクハラ紛いの格好で部屋を徘徊したり、無茶な要求するしバレてないと思って勝手に酒持ってくし。それから後輩つれて親が居ない時間帯を狙いました様に押し掛けて人の部屋を漁って帰る怒らせたら滅茶苦茶怖い担当さんだが

「佐藤さん」

この人は嘘をついた事は今まで一度もない。嘘を言う事を嫌うし、言われる事を嫌う。だから真っ直ぐに返事を返そう

「スポンサーにOWCが就かせて頂きます。やるからには上目指しましょうか？」

「……なあ霞」

「はい？」

「今ならなんでもしてやる。やるか一発？ゴム無しでいいぞ」

「今後下ネタトークをやめてください未来の社長さん」

「社長……か。悪くねえ響きだな」

「トップに立つって所が気に入ってるんじゃないすか？元レディー

スの頭」

「よせやい」

「あ、姉御！お待ちになって！ストップストップストップ！」

「邪魔」

「ぐはっ！」

ま、不味いぜカスミボーイ。姉御の第六感ものすげー反応しやがった！

「ほら姉御、霞今重要な話してるかもしれねーじゃん。行ったら不味いつて！」

「OWCの社員ならなんとかなるんじゃないの。無駄にノリがいいから」

否定できん！

「憤も何焦ってんの？チラツと見に行くだけじゃん」

「少しくらいならいいよね？霞君のお仕事してるところも見てみたいし」

あきまへん、圧倒的に戦力差がありすぎる！このままでは霞の秘密がバレてしまう！

「それに汗で服とかベタつくから着替えたいしさ」

パタパタしてるそのチラリズムがたまらんぞなもし！いや落ち着け、落ち着くんだマイサン。今ここで焦れば霞はおるか俺まで処刑されかねん

「で、でもよ、霞に頼まれた事破っていいのか？」

「う……」

「ううう」

「……構わないわね」

御一行突入30分前

おおまかな打ち合わせを終えたので上に戻った俺と佐藤さん。直ぐに後輩や同僚に連絡する佐藤さんなんだが、時折『おもちゃ』とか『貸し出し』とかどうも不穏な単語が飛び交っているのだが無視してしよう

俺も今夜辺りつぐみさんが飛高さんに電話してちよいと迎えに来て貰わないとなー。あ、ついでに美鈴ちゃんも呼ぼうかな。夏休みなんだし

「うつし、来月には1/3の社員が総辞職」

「抜けすぎじゃね!」

「そんだけ不満があつたんだろ。作家の方も何人が引つ張ってこれそうだし上々だな」

「これから忙しくなりますが頑張つて下さいよ。俺も少なからず手助けしますから」

「頼むぜ。お前なんか人脈すげーし社内の中にも人気あつから色々世話になるだろうからな」

「あいよ。その代わり後輩連れて押し掛けたり酒無断で持つてくのは止めて下さいよ」

「・・・持つていつてないもん」

「目を見て否定しろ」

「持つていつてないもん。ホントだもん」

「嘘つけないんだから無理に意地はらないで下さい。バレバレです」

「・・・おう」

まったく溜め息をついてから向かいの席に腰掛ける。恐らく忙しくなるのは来月、夏休み中はのんびり過ごせそうだ

爺さんの説得は3分で終わるだろうし、会社は・・・新築はまず無理だからちよいと空いてる所を4、5件探しておいて・・・つとそれから社員全員にアンケートもとらないとな。辞めた理由が分からないと再発防止に繋がらん

あとは・・・・・・・・

「なあ霞」

「なんすか？」

「今何考えてる？」

「空きビル確保の件と社員アンケートについて。それから作家の担当人数の上限に有休、昇給、特別手当についての個人的意見。あそれから出版関係の会社に一筆書かないといけないか」

「・・・・・・・・なあ」

「なんすか？」

「お前が社長の方がよくないか？」

「慎んでお断りします。佐藤社長殿」

「ちえっ」

拗ねない拗ねない。佐藤さんたまに子供みたいになるからな横になって大きく伸びをする佐藤さんは肘を付きながら欠伸をする。はしたないですよ佐藤さん

「ん？スカートの中が気になるか？気になるか？」

「はしたないです。社長になるなら礼節を身に付けてください」

「うええ。面倒だなおい。代役に誰か立てるかな」

「おい社長」

「冗談だよ冗談」

よっこらせつと立ち上がった佐藤さんは鍵を指に引っ搔けながらあーあと呟く

「アイツともお別れか」

「？アイツって」

「コブラだよコブラ」

廊下に出る佐藤さんを追って俺も後を追う

「なんでわざわざ売るんですか？」

「あ？資本金作るのに売るって言っただろうが」

「O W C がスポンサーになるのに？」

「なんつうかな・・・お前ばつかに世話掛けてっからよう。年上としてのプライドっていうか・・・まあ世話掛けすぎはよくねえって思ってよ」

「大人の意地ですか」

「おう。仕方ねえよ」

「佐藤さん佐藤さん。仕方ねえって言ってる癖になんか泣きそうだよ！」

「おま、お前・・・あのコブラにどんだけ愛情注いでも思っただ！」

「なんでキレんの！苦しいって胸ぐら掴むな！」

「お前、俺がどんな気持ちで手放すか分かるか！我が子を手放す気持ちだぞ！」

「あんた未婚だろうが！あとどさくさに紛れて何で人の尻を触る！やめんか！」

「うるせえ！揉んでやるぞコノヤロウ！」

「今度は胸か！なに錯乱してんだアンタは！」

「うるせえうるせえ！」

つかなんつう馬鹿力だこの人は！元関東の女帝の名は伊達じゃないなおい。ええいだから尻を触るなど言っとなるじゃろうが！

「ならコブラはうちで買い取ります！」

「うるせえうるせえうる・・・え？」

やっと止まったか。あー気持ち悪っ！

「だから佐藤さんのコブラはO W C が2000万で買い取ります。この2000万を資本金にして下さい。そしてO W C で買い取ったコブラは社長自らの足にして貰うために、無期限の貸しにします。これでどうですか」

「・・・えーっと、つまりは・・・」

「御自分の会社が成功して、自分で好きな車を買ったら返してください。これならいいんじゃないですか」

「・・・いいのかな？」

知らんがや。暫し虚空を眺めて思案する佐藤さんは漸く納得したらしく、うんうんと頷いて俺の両肩をガツシリ掴んだ

「なんつうかお前神だ。もう何やつても許す。やるか一発？」

「だから下に走るな！」

「いやマジで」

「なお質が悪いわ！」

「まあこれくらい素直に貰っておけ」

「むぐう！」

いきなり引つ張られたかと思っただら目の前が真っ暗。そして顔全体を優しく包む弾力あるナニか。あとほんの少し香水の匂いもする

俺は一瞬思考回路がフリーズしたが直ぐ様佐藤さんの両肩に掴み引き剥がそうとした

「逃げるな若者」

「むぐう！」

離せ！離してくれ！こんな格好恥ずかし過ぎる！なんでアンタの胸に顔を押し付けなきゃいかんのだ！

だが、いかんせん関東の女帝の腕力に勝てるわけが無いので必死の抵抗も空回りしっぱなしである

「ほーれほれ。今の内に堪能しておけ若人。そう滅多に出来んぞ」

「むー！むオー！」

「わははは！無礼講無礼講！」

コイツ頭オカシイだろ！そんな失礼極まりない事を考えてたら玄関が開いた。開いた？え、ちょい御待ちになって。見えないけどなんかすげー嫌な予感するんだけど

いやいやアイツ等には夕方まで来ないよう言ったから。そうだ、きつと新聞屋とか勧誘とかに違いない。そうに違いない！

「・・・霞、亡骸は埋葬してあげるわ」

やつぱりいい！早く弁明しなければ殺されてしまう！

「むー！ムオムう！」

「なんだよったく。折角これから第3ラウンドおっ始めようと思っ
たのによ」

ええいデマを広めるな！早く俺を解放して弁明させるよ！マジで死
ぬぞ俺！

「ねえー霞？んーと・・・ね。撲殺って面白くない？」

「んん！むうう！むううむんむん！」

「あれ？何で私大川さんの木槌持つてるんだろ？ねえ霞君？」

「んううう！むううむう！むううんうううう！！！」

「あん？やんのかいガキ共？ウチには今霞が絶対必要なんだよ。盗
られる訳にはいかないねえ」

「むうう・・・んぐ」

「あ、姉御姉御。どつから鉄バット持ってきたか分かんねえけどよ、
霞がぐつたりしてんだけど」

「好都合ね」

「姉御超こええ！！！」

あれ？俺の死因つてもしかして圧胸死？

やめてくれ・・・、加弥、本の海にダイブしないでくれ。洗夜も
本は食べ物じゃありませんよ！それから深娜！テメエ本で焚き火し
てんじゃねえ！は？焼き芋？しばくぞコラア！

慎・・・特になんでもない。帰れ

ん、なに佐藤さん。ちょ、なんで迫って来るの！やめ、止めんか！やめて、マジやめたって堪忍しむぐう！むううむう！むううんううう！

「・・・・・・はあっ！」

飛び起きて肩で息をしながら汗を拭う。なんだかよく分からんが嫌な汗をかいた。どんな夢だったかな、なんか目の前が真っ暗になつて柔らかい・・・・かな？そんなクッションに潰される様な夢だったな

「お？起きたか霞」

ふにい

「むう???」

そうそうこんな感じの感触。ああそっぴいやこんな甘い匂いもしたな

「何してるの佐藤さん！霞から離れてよ！」

「あ？自分で出来ねえからって当たんなよ」

「うわああん！コウちゃん、佐藤さんが、佐藤さんが！」

「ひわあ！加弥ちゃんなんで私の驚掴みするの！」

二人が勢いよく脱線したのでこの際無視。男の意地で無理矢理佐藤さんを引き剥がして距離を取る

「おいこら元レディース。俺を圧死させる気だったのか」

「ああ？なんだよ桃源郷でも見えたのか？もっかい見るか？」

「よしテメエ俺の敵だ。今から問答無用でコブラ売っ払ってやる」

「ちよっ、ちよい待て。無償レンタルは！」

「有るか戯け！」

「やめてくれえ！それだけはホント勘弁してくれ！」

「ええいだから何で錯乱したら俺の尻を触るんだ！」

「なあマジ勘弁してくれよ！まだ首都高タイムラップ更新してねーんだよ！」

何やってんだこの人！又々引き剥がしてソファーに無理矢理座らせる

「佐藤さん、落ち着け。黙れ、場を混乱させるな。あといいい加減人の身体を無闇やたら触るなと」

「お、おう」

深呼吸して、漸く落ち着いた佐藤さんは俺の肩に手を置く

「よくよく考えたらよ、お前何気にタメ口つかよ。いやそこはまあ気にしねえけどよ、黙れはねえだろ」

「・・・すみません」

「ん。まあ世話なつたからお相子な」

「りようかい」

そんなやり取りを黙って見ていた三人娘は徐に立ち上がり、椅子の上で体育座りしてる慎を囲む

「え？標的俺つか！」

無言で頷いた三人娘は、慎を引き摺りながら俺の後ろを通りつつ殴っていく。いや、洗夜だけモミアゲ思いつきり引つ張りやがったな廊下に連れていかれた慎は、数分後に奇声を発してそれつきり何の音もしなくなり、廊下から顔を出してきた加弥と洗夜は俺をジッと見ている。なんか背中がムズ痒くなっていると深娜がずんずん近付いて佐藤さんの前で腕を組んで見下ろす

「そろそろお帰りになつたら担当さん」

やつぱバレたか。まあ突入された時点で諦めてたけどさ。達観の境地に立つ俺を他所に佐藤さんはゆっくり立ち上がる

「あ？誰にモノ言つてんだガキ。それを決めるのは霞であつて teme エじゃねーよな？」

やつぱ佐藤さんの方が背高いな。180以上あるからなこの人

「そうね。でも仕事が終わつたら帰るのが普通でしょ？」

「なんだよ。帰ってほしいのかい？」

「ええ勿論」

「ほう・・・」

一触即発の空気に慌てて廊下に引つ込む二人を見ながら二人を見上げる。漫画とかなら火花どころかオーラとかで部屋中荒れ狂ってる

だろうな

「表出なガキ。目上に対しての礼儀つての教えてやる」

「ふん。その口で何を教えてくれるのかしらね」

「・・・・・・」

「・・・・・・」

これへたすりや警察救急どっちも来るな。まったく世話の掛かる家族と担当だこと

立ち上がって二人の間に割って入る事にする

「はいはいそこまで。喧嘩はご法度だよ」

「退きな霞。さつきからコイツの態度が気に入らないんだよ」

「あら奇遇ね。私も貴女を見てるとイライラするの」

「んだとコラア」

「何かしら」

ああもうこの二人は。水と油並みに相性悪すぎるな。仕方なく心を鬼にして二人の肩に手を置く

「いい加減にしろ。これ以上続けるつもりなら二度と家の敷地を跨がせないし、今までの関係も全て白紙にするぞ。それでいいなら今すぐ荷物持って出ていけ。それから好きなだけ喧嘩しな」

それだけ言い残して部屋に戻ることにする。まあ二人供バカじゃねえからお互い妥協してすぐ終わるだろ

廊下退避組の頭に軽く手を乗せて階段を上がる。さあて電話すつか

居間にて対人する二人はどちらともなく溜め息をついて視線を反らす
「うち。流石に白けちまった。帰る」

「そうですか。今後霞に変な真似しないで下さい」

「はっ。知ったこつちやないね。霞はこれからも大事なパートナーなんでな」

「でも貴女の所有物じゃないのよ。私にだって霞は必要なのよ」

「ああそうかい勝手にしな。だがアンタの所有物でも無いのは確かだね」

「ご忠告どうも」

「はっ。達者な口だ」

そう言い残してさっさと出ていった佐藤さんを見送った退避組はソロソロと居間に入ってきた

深娜はというと苛立ち気に舌打ちするとドスンとソファに座り足を組む。加弥と洸夜はお互い視線で会話してそそくさと寝室に逃げた

一人残った深娜は10数分後にボソツと呟いた

「っていつか何で霞を問い詰める立場から怒られる立場に変わったのよ」

深娜は再び憤怒して二階に駆け上がった。ノックもせずに扉を壊さん勢いで開け放ち踏み込む

「霞！まだ聞きたいことが山程・・・え？」

もぬけの殻となった室内には一枚の置き手紙

【美鈴ちゃんを迎えに行つてきます。明日の朝には帰ります。追伸・夕飯は出前でも取つてね】

破り捨てた手紙をゴミ箱に叩きつけて一階に降りると佐藤さんと鉢合わせした

「今度は何の様で？」

「忘れもんだよ。いちいち噛みつくくんじゃねえ」

そう言い残して、脱衣場に向かった佐藤さんは乾燥機から着替え一式を取りだし袋に詰める

「人様の家でなにしてるのよ。何様のつもり」

「霞が進んでやってくれたんだよ。下着も丁寧にネットに入れてな」
「・・・・・・・・」

「はっ、嫉妬か？それとも霞の事を無節操とかでも思ったか？」

「貴女には関係ない事よ。さっさと帰ったら」

「ちっ。ホント可愛いげのねえ生意気にガキだよ。霞もよくこんなのと一緒に居れるな」

「五月蠅い。早くこの家から消えて」

「殺気だけは一人前かい。殺気だけは・・・ね」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

お互い無言のまま睨み合う。深娜が力づくで家から追い出そうとした時、佐藤さんが溜め息を吐いて玄関に向かった

「やってらんね。こんな所霞に見られたらマジで白紙にされる」

タバコに火をつけながら出ていく佐藤さんを睨み付けながら、深娜はその場を動こうとせず爆音と共に遠ざかっていく敵を確認して、漸く居間に戻っていた

「今度霞の交友関係を洗わなきゃいけないわね」

溜め息を吐いた深娜は夕飯の出前をとるためチラシを探した

49・迫り来る担当さん（後書き）

どうも。最近隣の部屋から不気味な独り言が聞こえて震えながら生活してるウドの大本です

えー、いかがでしたでしょうか？ちょっとラストが“怒”の感情一杯になっちゃいましたが次回は大丈夫。だって黒猫姫とお供のスケさんカクさんが登場です

次回は霞の女人化計画に注目？

50・黒猫姫、再び（前書き）

綾萌「悠一、大変だ。一大事だ！」

佐山「何だ急に」

綾萌「妊娠したい！」

佐山「近付くな」

綾萌「何を言っている。冗談に決まっているじゃないか」

佐山「なら何故にじり寄って来る。離れろ」

綾萌「ふっ、それは例え神であつても不可能だ」

佐山「お前無神派だろ」

綾萌「そんな細かい事を気にしてはいけない。抱きつきたい」

佐山「なっ、やめろ！うわあああ！」

つづく

50・黒猫姫、再び

早朝。深娜は不可解な圧迫感に魘されていた。苦しい程では無いのだが身動きも満足に出来ず、まるで金縛りになった様に動くことが出来ない

「……………」

不快な目覚めに、思わず陰の表情で覚醒した深娜の目の前に現れたのは

「……………みみ？」

黒いふさふさの毛に覆われた耳が2つ。綺麗な三角形は猫の耳。そして艶やかな黒髪が伸びている

「……………ふゆう」

黒猫姫こと美鈴ちゃんが胸に顔を埋めて熟睡していた

「……………」

暫しの沈黙の後、黒猫姫の頭を掴んで引き剥がそうとするが、まるで吸い付いてる様に離れない。寧ろさらに顔を押し付けてきた美鈴ちゃんに、朝から盛大な溜め息を吐いた深娜は、霞をやるうと心で誓い黒猫姫の頭を優しく撫でた

「おう。おはよう」

朝の挨拶の返事にボディー一発頂きました。最近気付いたけどさ、たまに生きてる事が嫌になっってくるんだよコレ。ノーモーションの癖に威力有りすぎ。膝についてなんとか耐えきったが、それでも許してくれない深娜は追撃の蹴りを構える。しかしそこに割って入っ

てきたのは、長身で少し古風なしゃべり方が特徴の飛高さん

「貴様。どんな権利を持つて霞殿に手を上げる」

「返答次第じゃ私達も動かなきゃいけないんだよねー」

深娜の背後にはいつの間にはつぐみさんが立っていた。つかアంత等どっから沸いてきた。今までのここに居なかったよな

「美人は神出鬼没なんだよー。霞さんもそこそこチエツクね」

相変わらず中学生並みの身長しかないつぐみさんは、ニコニコ笑いながら包丁なんて物騒な物を持っている

「して、返答は」

「今まで隠し事してて昨日本人以外の口から聞き出した。しかも詳しい説明をしないまま何も言わないでさっさと出掛けたんだけどこの男。殴られても文句言えないわよ」

「……………」

「…………ふむ」

反論の余地も無い俺と考え込む飛高さん。すると深娜の背後にいたつぐみさんが手招きで飛高さんと呼ぶ

ポニーテールを揺らしながら近付いた飛高さんになにやら耳打ちをして部屋の隅に移動。俺と深娜は取り敢えず見守ることにした

数分後に話が纏まったらしく、茶髪低身長とポニテ長身のデコボココンビが俺の両サイドに着いて立たせる。それから両腕をがちり掴み足を踏む。完全に拘束されました

「ささ、みーちゃん。今の内に一発」

「霞殿、今は耐える所です。見せ場ですよ」

「ええ！情状酌量の余地はこれっぽっちもなぐぼおっ！？」

この女、いつか俺を殺すかもしれない。本気で危機感を覚えながら現実世界にしばしお別れした

目を醒ましたら目の前に耳があった。いや冗談抜きでさ、猫耳が見えるんだよ

そつと猫耳付の頭を優しく撫でると、くすぐったそうに身を振る黒猫姫。ゆっくり起き上がった美鈴ちゃんは満面の笑みを浮かべている
「お早うおね・・・お兄ちゃん」

「うん、お早う。何を言いかけたかは聞かないよ？」

全力で頷いた美鈴ちゃんは、俺の上から退くと足早に深娜の所へ走っていき、何故か胸を揉んだ

三秒程して大変満足したらしく、極上の笑みで帰ってきた

取り敢えずこの件に関しては見なかった、とゆう事で目撃者の中で意見が一致したのでいつも通りの朝を向かえた。向かえたったら向かえた！

俺の胡座の上でご満悦の美鈴ちゃんは、背を預けて耳を揺らしている。俺の横ではうつ伏せになって美鈴ちゃんにちよつかいを出してつぐみさん。そして台所から人数分のお茶を持ってきた飛高さん。湯気が見えるが気のせいに違いない

「どうぞ。つぐみのはここに置くぞ」

にゃーと鳴いて返事を返すつぐみさんを一瞥して、リンゴジュースを美鈴ちゃんにわたす

「ありがとうひー姉さん」

「・・・ひー姉さん？」

飛高さんに渡された熱いお茶を平然と飲む深娜は眉をひそめる

「ひだかだからひー姉さん。つぐみはつー姉さん」

コップを両手で持ってゆっくり煽る美鈴ちゃんは、未だ寝てる二人の部屋を見る

「かやは・・・かー姉。こうちゃんはどう姉」

何気に呼び捨てなんだが他意は無いだろうと思って指摘はしない。
さん付けの有無は単に歳の差だろう

「霞さん。今失礼な事考えてなかった？」

「いいえ全然」

お茶を溢さないようゆっくり飲みながら軌道修正

「深娜はなんて呼ぶ？」

「お姉ちゃんはお姉ちゃん。お兄ちゃんはお兄ちゃん」

当たり前と言わんばかりに宣言した美鈴ちゃんは、お姉ちゃんこと
深娜をジッと見る

「・・・何？」

「ママじゃダメ？」

深娜が速効で噎せたのは言うまでも無い

更に小一時間程して、ようやく目覚めた二人を出迎える黒猫姫とそ
のお供

寝起きで若干頭の回転が悪い二人はボーっと美鈴ちゃんを眺めて首
をかしげる。傾げてから俺に視線を向けてゆっくり近付いてくる加
弥。何となくお茶とジューズを飛高さんにパスして美鈴ちゃんをつ
ぐみさんにパス。防御の姿勢で待ち受けると目の前でペタンと座つ
た加弥

・・・あれ？まだ寝てるなコイツ

半開きの目で覗き込んできた加弥は、そのまま俺の膝の上に座り二
度寝に突入した

「かーやー朝ですよー。早く起きてー」

「みゆう・・・」

ダメだこれは。完全に睡眠モードに突入しやがった。軽く揺すって
みるが逆に手が捕まってしまった

や、ちよつと待つて。掴むのはいいけど抱き締めるのやめてくれな
い？必然的に手は胸の方に向かつちゃうからさ。ダメだよマジで
本気で抵抗してると、立つたままボーっとしてた洺夜が漸く覚醒し
た。覚醒一発目で俺と加弥の醜態を目の当たりにしてキレた

「霞君の無節操！」

よく分らないキレ方をした洺夜は、加弥を無理矢理ひっぺかしで
俺の上に座った

「ここがいいのー」

起きてない！この子まだ寝惚けてる！重度の寝惚けに陥ってる！

弾かれた加弥は美鈴ちゃんに抱きついて頬擦りしていた

「んゝモチモチ」

「かー姉くすぐったい」

朝から大人二人に醜態を晒した寝坊助二人組は、猛省しながら部屋
の隅で体育座りしている。時折虚空を眺めて赤面し、再び頭を抱え
る行動を繰り返す二人は一時保留扱いとして、朝食作りに台所に向
かう

後ろをちよこちよこ付いてきた美鈴ちゃんは、手伝いがしたいらし
くずつと俺を見上げている。包丁は使わせちゃ駄目だから皿の準備
やハムやトマトを取ってもらっているが・・・切りたいの？

「（コクコクコク）」

激しく頭を振る美鈴ちゃんの目は真剣だったので俺は折れてしまっ
た。椅子を引っ張りだしてきて美鈴ちゃんを立たせる。包丁を持た
せて後ろから手を重ねる

昔母親にこうやって教えてもらっていたもんだ

ピザトーストの材料を切り揃え、お好みの盛り付けとイタズラ様の
不思議トーストを作製。後はトースターでチンするだけだ

「お兄ちゃん、ありがとうなの」

「どういたしまして。でも一人で包丁は使っちゃダメだからね？」
「うん。約束するの」

椅子から背中に飛び移った美鈴ちゃんを背負い直して居間に向かう
いつの間にか沸いてきた慎を含めたら男女比率2：6。なんつうか
クラスの連中に知られたら確実に血祭りにされるよな絶対
ソファーに腰掛けようとすると、近くにいた飛高さんに器用に飛び
移り肩車してもらっている

「いやあ美鈴っちと飛高さんの組み合わせ姉妹に見えるな。霞もそ
う見えね？」

「お兄ちゃんそれ誰？」

「ひ、ヒデエ！美鈴っち何気にひでえ！」

「美鈴ちゃん。コレは見ちゃダメだよ？駄目の代表だから」

「コツチもヒデエ！お前等俺に恨みでもあんのか！」

「いや、なんつうかな」

「そんざい否定？」

「俺何でこんなボロクソ言われなきゃいけないの！？」

取り敢えず殴ってから無視する事にして座りなおす。それにしても
確かに二人とも姉妹っぽく見えるな

「ねーねー、ひーちゃん的に姉妹って言われてどうなの？」

「・・・うむ」

「・・・」

肩車してる美鈴ちゃんを持ち上げて両脇に手をかけ顔を合わせる
簡単にやってるが、小学校高学年程の子を腕の力だけで支えてるぞ
この人。肘伸びてるのによく出来るなおい
しばし見つめ合っていた二人は、何かを分かりあったのか頷き合っ
てまた肩車を始めた

「問題ない」

「ひー姉さんやさしい」

まあお互い認め合っているならいいんじゃないかな？

「ひーちゃんって子供大好きだもんね」

「ああ。子供の純粋な眼が好きだ」

飛高さんは美鈴ちゃんを肩車したまま、器用にお茶を飲んでいる
ホント姉妹みたいに見えるな」。美鈴ちゃんも楽しそうにキョロキ
ョロ見回している

「昔は霞殿ともよく遊んでいましたな」

「そういえばそうでしたね」

「ええ。霞殿がまだ小学１年だった頃は此方に伺った事もありまし
たね」

「いやあ今思うと懐かしいですね」

「一緒にお風呂にも入りましたしね」

「そんな事ありまし……。殺気！」

ソファを飛び越え裏に隠れる。さっきまでいた場所には加弥が飛
び蹴りをかましていた

「なにをするのさ加弥！めっちゃあぶねえよ！」

「シャラップ！なにそんな羨ましい体験してんのよ！」

「ええ！？記憶にすらないよそんな事！」

「だまらっしゃい！コウちゃん！霞確保！」

いつの間にか背後に構えていた洗夜に成す術なく捕まり御用となっ
てしまった。飛高さん、アンタのせいだぞ

視線で飛高さんに抗議をすると、何かを感じたらしい大人のお姉さ
んは頷き台所へ向かった

全員が首を傾げる中、戻ってきたお姉さんは問題ないと頷いて見せた
「まだパンは焼けていなかったぞ」

小さい頃培われた僕等のアイコンタクトは錆びれてしまったようだ

私的制裁も無事？に終え、皆でピザトーストを頬張っている。無論
意図的にハズレを引いたのは慎である

「なんつつか、ピーマンの種って食感としちゃ悪くねーけどよ、具が種だけは無しだろ。ただのケチャップ味のパンだぞ」

「だからハズレ」

「さいですか」

とりとめの無い会話を交わしながら食べ終えた朝食。次のプログラムは合同勉強会となっている。いかにきちんと勉強して、手早く課題を終わらせ残りの夏休みを満喫するか。そんな使命に燃える僕達・私達は今日も学問に励みます

「つつわけで加弥、いい加減この公式覚えようね？去年の夏休みも同じ事やった筈だよ？」

「えうう。だって似たような式沢山ありすぎるんだもん」

「加弥ちゃん、ほら、ここの計算もコツと同じ式が使えるから思い出して？」

「あれ？いつこの問題解いたの！？」

ダメだ。加弥にここまで期待するのは間違いだ。少しずつ分かって貰わないとほんの少し前の記憶すら怪しくなる

洸夜もそう感じたらしく、前の問題から一緒に復習を開始した

一方、加弥と同レベルの慎に教えてる深娜先生はというと

「・・・姉御、ここ分かんねえんだけど」

深娜はチラッと問題を見てから教科書をパラパラと捲り、問題の部分について載っているページを開いて渡した

「そこよく読みなさい」

「・・・あざっす」

教科書を受け取った慎は俺に眼で訴えてきた

なに？スキップが欲しい？一昨日来やがれ

そう送り返して今度は美鈴ちゃんを見る。美鈴ちゃんに熱弁する飛高さんにつぐみさん。理数系につぐみさん、語学関係は飛高さんが担当らしい

「よし。みっちゃん復習いつてみよー！はい問題！」

「問1、化学式 HNO_2 とは？」

「あしようさん」

「はい正解！次いつてみよー！ひーちゃんお次のお題！」

「問2、菌類のうちで、虫に寄生しているいろいろな形の小実体をつくる菌の総称は？」

「とうちゅうかそう」

「Excellent！ひーちゃんなんかノってきたよ！次いつてみよー！」

「問3、シェークスピア作四大悲劇、【マクベス】【オセロー】【リア王】後一つは？」

「ハムレット」

「みつちゃん天才！もうおねーさん超嬉しい！」

「因みに『大根役者』の事をハムとも言うそうだ。下手な役者程ハムレットをやりたがる事から由来されている」

「ひーちゃん何気にうんちく知ってるね」

「ひー姉さん、マクベスってどんなの？」

「すると何故か俺を手招きする飛高さん。なんすかいったい。ご高説でもしろっていうの？」

「簡単に例えると、霞殿がマクベスとしたら、私やつぐみにそそのかされてそこにいる皆を倒す。そして王になるが没落するといった話だ」

間違っではないが態々俺を呼ぶ必要あったか？後美鈴ちゃんに教えてる項目ほぼ確実に夏休みの宿題関係ないよな？

「みつちゃんなら夏休みの宿題終わってるよ？後は未来の大学目指して勉強だもん」

「美鈴には、是非東大を目指して貰いたい」

大人のそんな願いを知ってか知らずか、不思議そうに見上げてる美鈴ちゃん。まあ本人がいいなら別にいいけどさ

そんなこんなで無事今日の学習を終えた面々は好き勝手楽しんでいる
慎とつぐみさんはテレビの前で尋常じゃない指さばきでゲームで対
戦している

「ふっふっふ。やるじゃんまこちー。アンタ強いよ」

「つぐみさんもつええ。幸澤さん並みにつええ」

「ほう。まこちーがそこまでいう幸澤って人とも戦いたいなあ」

「そこら辺は霞か姉御に相談して。多分ネットランキングで超上位
クラスだから」

「むふふー。楽しみだなあ。あ、因みに私のランキングゲームは『
フーミン』だから」

「うえ。つぐみさんも超上位じゃん。こりゃ楽しみだなあ。あ、俺
上位で『FUGIMAKO』ね」

「『FUGIMAKO』？ふぎになってるよ」

「あん時ローマ字とかも分からん馬鹿だったからスペル間違ったん
だよな」

「あはは。ばーかばーかふぎまこ」

「うわぁ超大人気ねえこの人！」

そんな会話をしながら、画面から一瞬も目を逸らさずコマンド入力
してるアンタ等の方が俺から見ればばーかだよ

他の女子組は美鈴ちゃんと遊んでいる。遊んでいるっていうか深娜
は読書、美鈴ちゃんも深娜に膝枕してもらって加弥と洸夜とお話。
飛高さんはパソコンを使ってちょっとお仕事。何だかんだ爺さん
を脅して無理矢理貰った有休だが、真面目な飛高さんはこんな時で
も仕事はこなすみたいだ

取り敢えずつぐみさん、あんたも飛高さんの1/5くらいでいいか
らデスクワークしろ。なんで俺がやらなきゃいかんのだ

ちょっと頭にきて、お昼の素麺の時につぐみさんとふぎまこのお椀に練りわさびを大量に入れて、少しスッキリして午後も悠々自適に過ごした俺達。無論つぐみさんから私的制裁もあったが、飛高さんと美鈴ちゃんが直ぐに助けくれたので打撲とかもなかった。あの人どっからトンファアとか持ち出しやがったんだ

まあそんなこんなでお風呂Time。女性陣に最初に入って頂こうと俺は思っんです。ほら、男が入った後に女性が入るって少し抵抗あると思うからさ。だからね、何が言いたいかって言うとなさ

「美鈴ちゃん、深娜お姉ちゃんと入ろうね？」

「いや。今日はお兄ちゃんと入る！」

「美鈴、いいから早くいくわよ！支度しなさい」

「うー！」

深娜に引き摺られながら脱衣場に消える美鈴ちゃん。つぐみさんも何故かついていったので必然的に加弥と洸夜は飛高さんに入る事になった

脱衣場の方でつぐみさんが『みーちゃん胸デカ！』とか『お姉ちゃんおつきい。っ姉さんちっちゃい』とか『ひ、ヒドイ！みっちゃん何気にヒドイ！』とか聞こえた気がするけど絶対気のせいだ。うん。僕何も聞こえない！そう自己暗示しながらお風呂上がりのでザート作り。白玉餡蜜を飛高さんと作りながらのんびり時間を潰していると居間から加弥が顔を出す

「そーいえば飛高さん達って明日もお休み？」

「いや。残念だが明日の昼にはアソーレスに向けて出発しなきゃいけないてな」

「あそーれす？え？ゲームとか？」

「ちがうよ。まあポルトガル領の諸島だよ」

「ああ。空路と航路の件で用があつてな。明日は何かあつたのか？」
加弥は町内に配られていた広告を広げる

「明日近くで花火大会があつたんですよ。皆で行きたいなーっと思

って」

洗夜も加弥の後ろで頷きながらカメラを磨いている。飛高さんはいうと心底悔しそうな顔でお団子を丸める

「そうか。是非私も参加したかったんだが。代わりと言ってはなんだが美鈴は当分ここで世話になる。美鈴と一緒に楽しんでくれ」

「えうー。二人はむりかあ。でも写真撮ったら送りますからね」

「ああ。楽しみにしているからよろしく頼む」

「りょーかいしました！私達もお土産楽しみにしてまーす」

ちやっかり物々交換の約束なんざしてる加弥だがお互い楽しそうに笑っているのでもいいんだろう

隣で丸めながらのほほんとそんな事を考えていた

少しして風呂から上がった三人組は、スタイルに一喜一憂しながら出てきた。深娜は相変わらず無表情に髪を拭き、美鈴ちゃんは自分のを見下ろして拳を握って何か決意に燃えている。つぐみさんはなんか全てを諦めた様な達観の境地に立っている。でもきつと心の中で号泣してる気がする

次に脱衣場に向かう加弥と洗夜。いつてきまーすと手を振る加弥に對して手を振る俺と飛高さん

「・・・え？何で飛高さんここに入るの？加弥達と一緒に入らないの？」

「ん？霞殿と一緒にではないのか？」

「当たり前じゃい！早く風呂入って来なさい！」

「そうか。残念だ」

何故か本気で残念そうに加弥達に続いた飛高さんを送って溜め息をつく。あの人昔もあんな感じじゃなかったかな。そんな事を考えていたら脱衣場では加弥の悲痛な声がこだました

「ねえ霞さん」

「ん？なんすか」

「霞さんって巨乳派？」

「慎！。風呂の準備しとけよー」

「うわぁなんであからさまに話逸らすかな。もしかして図星？」

「ヒガミで俺に絡むなよ。つぐみさん中学から全然変わんないって飛高さんも喋ってたし」

「うわぁぁん。ひーちゃんとグルで虐めるうう。みっちゃん慰めてえ！」

美鈴ちゃんに泣きつくつぐみさんは取り敢えず無視しておくとして、爺さんの私用携帯に美鈴ちゃんの生活用品一式を送る様に残しておいた。明日は花火大会だし浴衣とか頼んだほうがいいかな。あと寛平も着たいしなー

とか色々考えていたら飛高さんを先頭に、洸夜と加弥も帰ってきた。つぐみさん同様心の中で号泣してる加弥は、美鈴ちゃんに泣きつくつぐみさんを見付けると一緒に泣きついていた。アンタ等どんだけ心に傷を負ってんだよ

まあどうやっても俺に出来る事が無いので放置しておく事にして、慎と共に脱衣場に向かう

「なぁ霞」

「ん？」

「明日の花火大会だけだよ、お前誰かと組むのか？」

上着を脱ぐと、無駄なく引き締まった上半身の慎は不可解な事を聞いてきた

「ん？なんでだよ。皆で回ればいいじゃん」

そーなんだけだよー、と言いながらタオル一丁で浴槽に向かう慎の後を追ひ、一緒に湯を浴びる

「いやな、ちよろつと加弥達が漏らしてたんだけどよ、二人っきりでデートとかしたいなって言ってるな」

ワシャワシャと頭を洗った慎は湯に浸かり、ううういとか親父臭い

呻き声をあげている

いいな短髪は。ついに深娜を超え、加弥に追い付く勢いで伸びている髪を丁寧に洗いながら先程の事を考える

「うーん。デートねえ。でもよ、これ一人選んだら他の二人に絶対恨まれるよな」

「・・・だよな」

その辺は話し合いで是非とも解決して頂きたいんだが。湯船につかりながら、ややこしい事なんきやいいなーとか考えながらタオルを頭に乗せた

さて、先に慎が上がったのでのびのびと湯に浸かり、先程の事をもう一度考えてみた

が、結局いい案が浮かばなかったので皆で話し合ってもらった。そんな他力本願に身を任せることにして風呂から上がる

肩にタオルをかけ、髪を拭きながら居間に入ると女性陣が一斉に俺を見た。思わずたじろぐ俺を他所に、飛高さんと美鈴ちゃん意外はなんか悔しそうな眼差しを送ってくる。何だよ

「ねえ霞、なんでそんな色っぽいの！私達になんか恨みあるの！」

なんか飛び掛かってくる加弥を何とか避けて距離を取っていると、つぐみさんが人差し指を横にして俺に重ねてからうーんと唸っているそれから周りに耳打ちすると皆がつぐみさんに真似て俺を見てやっぱり唸った

「え、何？」

「霞さんの胸の部分隠したら女の子にしか見えないなーって思ってた俺がつぐみさんに飛び掛かったのは言うまでもない」

50・黒猫姫、再び（後書き）

どーも。るーるるりらーなウドの大木です

さて、次回はいよいよ花火大会。ここは一つ、ラブモード全快で霞少年と誰かの二人つきりシチュエーションを計画しております

誰になるかはその時の気分次第。あと読者様の何気無い一言に多大に左右されますので、活動報告（活動報告だったかな？）にでも書き込んで頂ければ幸い

それでは今日はこの辺で

しーゆーねくすと

51・僕と貴女と花火の下に（前書き）

綾萌「おめでとう」

佐山「おう」

綾萌「私は新年にあたり新たな目標を持った」

佐山「・・・」

綾萌「なんだ、私はまだ何も言っていないぞ」

佐山「なら何を言うつもりだった」

綾萌「それはもちろんこづく」

佐山「ふんっ！」

綾萌「むぐう（モグモグモグ）」

佐山「今年も宜しく頼む」

続け！

51・僕と貴女と花火の下に

活気に満ちた露店が立ち並び、香ばしい匂いが辺りに溢れている。子供達は景品を求めてクジや射的場に親を引っ張っているし、カッブルで屋台を巡る姿も見られる。

そんな中にはナンパなんて事をしてる男共もいるわけで、ここにも二人組が前を歩く二人に声を掛けようとしていた。

一人は朱色の浴衣で髪はお団子にしている。お洒落な簪が歩みに合わせて揺れ、会話が弾んでいるのか談笑に華を咲かせている。

そしてもう一人の方、肩より長い髪を先だけゴムで纏め、蒼い寛平に身を包んで下駄を鳴らしているその人は、隣との談笑に華を咲かせている。

声を掛けようとした二人組も、後ろ姿を見たとき最初は男なのかと疑ったが、横顔が見えたとき間違いなく女性であると確信したらしく、今まさに声を掛けようとしていた。

「ねえねえ君達、よかったら俺達と一緒にまわらばあっ！あつつあああ！」

「か、霞君！それさつき出来たてで買ったたこ焼きだよ！」

「5回目だぞ！ここ来てから5回も女と間違われて声かけられたんだぞ！もう我慢ならん。寛平を着てる時点で気付けや！」

「に、逃げてください二人とも！串で刺される前に早く逃げてください！」

「離してくれ洸夜！今ここで絶たねば平和な祭りは訪れない！」

現場を目撃していないやや離れた位置の人達は、喧嘩かなにかと思いに止める事は無かった。

数時間前、夜に祭を控えているので軽めの昼食をとっていた一同皿に盛られた素麺を皆でつついている時に事件は起きた

「いやあ祭だなあ。美味しいもん喰うぞお！」

隣に座る加弥が、然り気無くお椀に入れた練りわさびに気付く事もなく一氣に啜る慎。無論その後は大爆発である

噓せかえる慎を皆でスルーして、何事も無く箸を進める

「お兄ちゃん。お祭り楽しい？」

「うん。きつと楽しくなるよ。美鈴ちゃんの浴衣も届いてるから」

「私達の間もあるの？」

「みんな分あるから後で好きな色選んでおいて」

寸法を合わせてる浴衣がそれぞれ色違いで何着か届いている。まあ三人の誰かは着方が分かるだろ。俺と慎には寛平と下駄が届いてるし中々気合いの入った集団が今ここに誕生しようとしていた

「たーこ焼きやーき鳥りーんごアメー」

上機嫌に歌う加弥とそれに合わせて揺れてる美鈴ちゃん。深娜は相変わらず鉄仮面の様に無表情だが、分かる人には分かる程度に頬が緩んでいる

しかしここで一人、何か壮大な決意を秘めた様な神妙な面持ちの女性が一人、我ら5人組唯一の純粋な良心の持ち主

その名は先塚洗夜である

「か、霞君！」

突然立ち上がった洗夜は何故か俺をご指名の様子。一斉に集まる視線にやや赤面しながらも真っ直ぐに俺を見ている洗夜

「一緒にお祭り回りまひえんか！」

噛んだ

賑わう屋台道を歩く集団。焼き鳥綿アメを両手に持ち、ピンクの浴衣を揺らしながら歩く加弥。いつもストリートにしている髪はポニテールにしている

その隣を歩くのは、加弥より少しだけ背が高く、寛平越しにでも分かる肉体が自慢の慎。その肩にはご機嫌な美鈴ちゃんが、猫耳付きの蒼い浴衣に身を包んで慎の耳をリモコン変わりに摘まんで操縦している

その後ろを歩く深娜は半ば無理矢理着せられた美鈴ちゃんとお揃いの浴衣姿。彼女連れの男ですら思わず振り返ってしまふ程独特の存在感を漂わせている

無論ナンパ組が放っておく訳が無く、両手の指が足りなくなる位には声を掛けられているのだが、そのつど慎が美鈴ちゃんを降ろしてナンパ組を人気の無い所に連れていき、平和的解決をして戻ってくる。祭りの間中、声を掛けてきた男達と全く会わなかったのは偶然とゆう事になっている

「はああああ・・・今ごろコウちゃん霞とラブラブしてるんだろーなー」

「まあまあ。加弥だってその内霞と二人っきりでデート出来るんだろ？今日は我慢しなつて」

「ううう。まさか美鈴ちゃんがコウちゃんの援護するとは思わなかったあ」

慎の上の美鈴ちゃんは小首を傾げながら右耳を引っ張る。右側にはリング飴の屋台があった

「まこ。アレ買う」

「アイサー。了解です美鈴キャプテン」

飴を買ってる間、加弥を見下ろす美鈴はまたもや小首を傾げる

「でもお兄ちゃんと言ってた。みんな友達で、でも誰とも付き合っていないって」

「ううう」

「みんなお兄ちゃんの事好きだけど、お兄ちゃんはまだ誰も決めてない。なら早い者勝ちでしょ？」

「ううう。中学生に言い負けたあ。反論出来ない」

項垂れる加弥を他所に、深娜は苦い表情で吐き捨てる

「だから私は霞をどうも思っていないっていつてるでしょ。いい加減私を含めて言うのはやめなさい」

「……そーゆーことにしておくねお姉ちゃん」

「……美鈴」

リング飴を受け取った美鈴は憤の耳をおもいつきり引つ張って頭を叩く

「まこ、Bダツシュ」

「目指せ1UP！イヤッホイ！」

「あつ！待ちなさい！」

「うわぁ置いてかないでよぉ！」

何処にでもあるお祭り集団であつた

ちよつとしたいざごさを終えた霞を宿める洸夜。結局ナンパ組の逃走とゆう形で幕を閉じた

「ちきしょうあの野郎、逃げやがったな」

「霞君、少し落ち着こうよ。ほ、ほら、もう一回たこ焼き買お？」

「洸夜も止めたらダメだよ。ああゆう人のトラウマとかコンプレックスを刺激する奴は一回ドン底を見た方がいいんだよ」

「私お祭りにこんな黒いトラウマ抱えたくないよぉ」

取り敢えずたこ焼きを買い直して、近くの椅子に並んで腰かける

出来立てのたこ焼きにたつぷりの鰹節とソースを絡めて一口

家で食べる時より美味しく感じるのはいよいよお祭りだからだろうか

（私としては、霞君と一緒にだからだといいな）

隣に座りたこ焼きを頬張る霞を見て自然と頬を染める洸夜

お祭りを二人つきりで過ごしたくて皆の前であんな風に言うなんて・

・私も変わったよね

昔の自分が今の私を見たらなんて言うのかな

そんな事を考えていると、霞の口の端にほんの少しかソースが付いているのに気付く、特に考えもせずに指でそっと拭いて自分の指を舐めた。舐めた後で自分が何をしたのかゆっくり理解し始め、理解すると爆発するんじゃないのかと思われるほど一気に赤くなった（なっ、あっ、え？ええ？ええええ！わ、私、かか霞君の口元のソースを舐め・・・舐めちゃった！ははは恥ずかしい！はしたないことしちゃった！）

された霞も最初はキョトンとしていたが、徐々に理解して若干恥ずかしそうに頬を掻きながら

「えっとお・・・もしかしくなくても洸夜、今俺の口元についてたソース・・・舐めちゃ」

「舐めてません！たこ焼きはもうありません！早く次に行きましょうー！」

浴衣を着てるのに驚異的なダッシュでゴミを捨ててきて、まだ何か言いたそうな霞の手を取ると引き摺る様な勢いで歩き始めた

洸夜としては、あの場所に居るだけでさっきのシーンが延々と頭の中で流れそうなので、一刻も早く忘れなければならぬここ最近で一番の失態であり、ここまで真っ赤になった顔を霞に見せられないと思い引っぱ張り出したわけである

そんな洸夜の後ろ姿を見て霞は優しく微笑んだ

先程の所からやや離れた位置にあるお寺。その階段の下で肩で息をする洸夜と、心配そうに軽く背中を叩く霞

徐々に息を整え始めた洸夜は苦笑いしながら霞を見上げる

「霞君、疲れないの？私もうお腹痛くて」

「一応ね。ほら、皆でいろいろ無茶して最終的に俺が一番疲れてるから」

「あ、あはは・・・ごめんなさい」

「いいつて。洸夜より深娜と加弥の方が酷いから。さ、お参り行くか」

そういつて自然と握られた手に、驚いて固まる洸夜を見て苦笑いする霞

「嫌かな？」

「ち、違つよ！その、霞君から手を・・・握ってくれて・・・嬉しかった」

頬を染めて握り返した洸夜は、霞と並びゆっくりと歩き始めた

お参りを済ませた二人はお寺を後にし、花火の見える場所を目指し歩き始めた。しかし途中洸夜が首をかしげ霞の手を引く

「あれ？霞君、橋の方に行かないの？去年も橋の上で花火見てたよね？」

「ん？ああそこね。多分加弥達も向かってると思ったからちよつと穴場の方に」

「穴場？加弥ちゃん達と一緒に見ないの？」

霞は少し照れたように洸夜にだけ聞こえる声で話す

「今日1日は洸夜と二人つきりでデートなわけだし、この際家に帰るまで二人でもいいかなって思つてさ」

「ふえっ！そそそんな！加弥ちゃん達に悪いよ！」

手を繋いでるのも忘れてブンブン腕を振って遠慮する洸夜。一緒にブンブン揺れてる霞はなんとか洸夜を押さえて一息つく

「加弥ともデートするって事になってるんだから不公平じゃ駄目だろ？多分加弥は一日中ベツタリしそうだしね」

「・・・いいのかな？」

「深娜とだつて1日出掛けるのに付き合うんだからこれぐらいやつても文句は無いよ」

「・・・うん。それじゃあ霞君、とつておきの穴場に連れてつてね」
「お任せあれお嬢さん」

そう言つて再び手を繋いだ二人は川沿いを下り海岸を目指す

行き交う人の中を歩く二人は楽しそうに今までの出来事を思い返しながら話し、時に笑い、たまに恥ずかしそうに頬を染めたりしながらゆつくり歩を進める

やがて行き交う人の数も減り、海岸付近に着くとそこは予想通り多くの人で賑わっていた

「霞君、まさかここじゃないよね？すごい人だよ」

「だいじよぶ。ほら、そこだよ」

指差した方には停留している屋形船が一隻ある。予約されているのか近くには船頭さんと思われる人が煙管をくわえているだけで、他に人は見受けられない

「そこつて・・・川と船しかないよ？まさか乗るわけじゃないし？」

「乗るんだよあれに」

「ふえ？」

首をかしげる洗夜を尻目にまっすぐ進む霞は船頭に声を掛けた

「しーげさん。お待たせしました」

「おお。ようやく来たかい坊主。早くしねーと始まつちまうぞ」

そう言つてしげと呼ばれた老人は洗夜の存在に気付きニヤリと笑う

「おうおう坊主。色氣づいて見せつけてくれるな。めんこい彼女さんじゃねーか」

「かか彼女っ！ちちちちがいますよ！私はまだ霞君とは友達で！」

「まだ？つまり狙つてゐるわけだ。モテる男は辛いなあ坊主」

えううと真つ赤になつて俯く洗夜そそくさと霞の背に隠れた

「しげさん、洸夜をからかってないで早く行きますよ」

「おうよ。ほれさっさと乗り込め」

急かされる様子里り込んだ船はすぐに出航し、陸を離れて沖を目指す

数分波に揺られながらのんびり走る屋台船。中では料理が並び、日本酒から焼酎まで並んでいたりする

穏やかな波のお陰で二人はのんびりとお刺身をつまんでいる

「それにしても霞君、しげさんとどんな知り合いなの？」

「しげさんは爺さんの同級生なんだよ。この辺はしげさんのシマだから他の船も近づかないから特等席だよ」

「へえ。私初めて船の上で花火見るから楽しみだな」

「それは良かった。初めて招待した甲斐があったよ」

初めてと言われて頬を染める洸夜は、誤魔化す様に水で割った日本酒を飲んで真っ赤になった

すると障子越しに閃光が射し込み、独特の破裂音が響いた

外に視線を向けると一際大きく広がる閃光。そして大気を震わせる破裂音に、思わず身を竦める洸夜は霞の腕にしがみつки、数秒後に慌て離れた

赤面する洸夜は視線を空に戻し高鳴る鼓動を必死に抑えようとしている

霞はそんな洸夜を見て優しい笑みを浮かべ、釣られるように空を見た視界を埋め尽くす様に散りばめられた様々な色合いの花火は、途切れる事無く咲き続き、人々を魅力し続けている。洸夜もまた魅せられた様に空を見続け、自然と霞の手に自らの手を重ねていた

「ねえ霞君」

「ん？」

視線を空に向けたまま呟く洸夜。霞は洸夜の横顔に視線を向けると、重ねていた手を少しだけ強く握られた

「私、今日の事は絶対に忘れない。霞君がくれた今日この日の幸せ

を絶対に忘れない」

向き直った洸夜の表情は、どこまでも優しさに満ち溢れ、輝いていたそのまま霞の胸に顔を埋める洸夜は、母を求める子の様に背に手を回す

「少しでいいからこうさせて。帰ったらきつと皆が怒ってさせてくれないから」

胸の中で苦笑いする洸夜は少しだけ強く抱き締めた。霞は洸夜の背をゆっくりと叩き、優しく微笑んだ

暫くそうしていて、異変に気付いた霞は背を叩くのを止めて下を見るそこには浅く背を上下させ、静かに眠る洸夜がいた。苦笑いしながらゆっくり手をほどこき、静かに膝枕をしてあげて一息つく

「しげさん、盗み聞きは悪趣味ですよ」

「あんだよ。気付いてたのか」

操舵室に続く襖が開きしげが煙管をくわえて出てきた

「しっかし何とも初々しいつつうかがキつつうか」

「人の思想を他人がどうこう言う資格は無いんだよ」

「わーってらよ。それで、どうすんだこれから。嬢ちゃんは寝ちまつてるし、起こすのか？」

静かに眠る洸夜を見下ろした霞はどうしようかなと呟くと、しげが苦笑いして無線を取り出した

「坊主と嬢ちゃんは船に残ってる。俺は仲間の船で岸に戻るからよ。運転出来るだろ？」

「え？いや急にそんな」

「馬鹿か坊主。起きたら好きな野郎と二人つきりなんざ嬢ちゃんにとつちや何より嬉しいってもんだろ。大切にしてやんな、その子は今時珍しいくらい純粋な子だぜ」

いつ連絡したのか、近付いてくる船に手で合図すると日本酒の瓶片

手に立ち上がった

「今夜の波は静かだ。朝まで二人っきりで楽しみな坊主」

あばよーと言いなからさっさと出ていった無責任な老人を、呆れた表情で見送った霞は洗夜の髪を優しく撫でた

51・僕と貴女と花火の下に（後書き）

新年明けましておめでとう御座います。今年もウドの大木は駄目人間です

いやぁ年末までに投稿したかったです……年末の仕事とかだいつ嫌い！

それでも新年からは一ヶ月以内に更新するよう心がけますのでこれからもよろしくお願いします

あ、次回はついに慎主役第二弾です！

52・慎大戦物語（上）（前書き）

綾萌「もぐもぐもぐ」

佐山「いつまで居座るつもりだ。早く帰れ」

綾萌「何を言う。私の家はここだ」

佐山「違う。お前の親が住む家の方だ」

綾萌「8年前に親も家も無くなった」

佐山「・・・・・・」

綾萌「私の経営してる会社も家ではない。だから今私の帰る家はここだけだ」

佐山「・・・・・・」

綾萌「それにあんな運命的な出会いを経て悠一と会えたのだ。これは神の思し召しだ」

佐山「まだその戯れ言をほざくか」

綾萌「後は夜の営みを経て子作りを」

佐山「土に帰れ！」

続くぞなもし

52・慎大戦物語（上）

皆さんに問いたい

恐らく、この問いは皆さんの将来にも役立つかもしれないので、真剣に考えて頂きたい

もし、自分が好いてる人と自分の友達が朝帰りしたらどう思うだろうか

A・友達を信じ、いつも通り接する

B・友達に裏切られたと思い、縁を切る

C・素直に認め、二人の幸せを祈る

D・半狂乱になって好きな相手に殴りかかる

私、野崎霞の答は迷うこと無くDを選ばせて頂く

理由を話すには、花火大会の翌日の出来事を話さなければならないだろう

回想

日が登り、俺の膝枕の上で目を覚ました洗夜は、朝から真っ赤にな

つて慌てまくり波の揺れで引っくり返っていた

それから30分程して、漸く落ち着いた洗夜が若干まだ赤い顔で朝食を食べている

それから岸に帰りしげさんの運転で家まで送って貰った。洗夜はまだ浴衣姿なので流石に歩いて帰る訳にはいけないからね

それから玄関をくぐり第一声

「ただいまあ」

回想終了

さて、残念ながら私の記憶はここで途切れてしまっている
慎と洗夜の証言によると、帰宅早々殴られて気を失ったらしい。慎曰く『顎を打ち抜かれて人形みたいに崩れた』だそうだ

結局目を覚ましたのが夕方と、一日を超無駄にした気がするがどうしようも無いので諦めた

さて、長々と過去を語っていても現在を変えることは出来ない。
例え殴られると分かっているもやらなきゃならない事がある
そう言い聞かせて目の前を見る。そこには数少ない親友、慎がいる
のだ

おッス！オラ慎！

遂に京都に行く日がやってきたぜ！苦節、母上との壮絶な交渉の末、獲得した4ヶ月前借りお小遣いでお財布はホッカイだぜ！ただみっちゃんにエライ強さでツネられたんだよな。お土産買ってご機嫌とらないとなあ

「しかし霞、お前いいのか？洗夜との朝帰り事件の二日後に京都一泊二日旅とか」

「大丈夫だろ。置き手紙置いといたしお前が夜喜さんに会いに行くって書いたから勘違いは無いだろ」

「だといいいけどなあ」

始発の新幹線の中で駅弁をほお張りながら、慎は明日の夜の惨劇を頭から除外した

早朝、旅館『ゆきしろ』の前で箒を振る女性。いつもは裏方に回り、滅多にこういった仕事をしない宮蔵夜喜は任務を忠実に守り確り掃き掃除をしていた

早朝、女将の月島に呼ばれた夜喜は急遽掃き掃除を任されたのだ

「・・・・・・・・」

丹念に掃き掃除をする夜喜の前を通る人達は珍しそうな顔で挨拶し、夜喜は軽く会釈を返し掃除を続けた

「・・・・・・・・女将はどうして私に掃除を任せたのでしょうか？」

何時もなら朝の鍛練の後に警備システムを総点検し、銃器類の掃除をしているのに

「あの時の女将の表情・・・・・・・・」

何か考えあつての事だろう。そう結論付けて掃除を続けていると、ふと聞き知った声が聞こえた気がした

だがその可能性は低いと判断し、空耳だと思っていると旅館の角から二人組の少年が顔を出した

「あ、おはよう夜喜さん。掃き掃除なんて珍しいね」

「おはよう御座います夜喜さん！」

「・・・・・・」

箒を持ったまま固まった夜喜は慎を凝視し、されてる慎は余りの眼力に蛇に睨まれた蛙が如く固まった

膠着状態の二人を交互に見る霞は、暫し考え大きく手を叩いた

「っ！」

先に動くのは夜喜。箒を素早く投げ背に手を回し、一丁の拳銃ガスガンを抜いた

慎は一瞬遅れて動くが、目の前に飛んでくる箒を片手で掴み無理矢理体を横に飛ばす。一瞬遅れてさっきまでいた場所に計5発の玉が通り過ぎたが気にする余裕はない

続けざまに放たれる玉を紙一重で避け、箒で弾きながら一気に間合いを詰める

横薙ぎに振られた箒をバックステップで避けた夜喜は、着地と同時に姿勢を低くして懷に滑り込む。その加速のまま細くしなやかな指を拳に変え一撃を叩き込んだ

「・・・・っ！」

「甘いわぁ！」

日頃から無駄に鍛え上げている慎には効果が薄く、一瞬動きを止めた夜喜に対し、好機を逃すまいと一步踏み込んだ慎はその手を伸ばし「っ！！」

見事に胸を鷲掴みした

14歳の割に発育の良い胸を正面から鷲掴みした慎は、一瞬後にはコンクリートと熱いキスを交わしており、その頭を夜喜は全力で踏み潰していた

目が覚めると、般若面が俺を睨んでいた

「Why!」

思わず米国風に叫んで布団から飛び退き、部屋の隅とゆう名の安全地帯に前転で退避!

「Who am I!」

「You ar Makoto」

丁寧に米国風に返してくれた般若Manは何処からともなく日本刀を引き抜き、妖気とゆうか殺意紛いのオーラを漂わせながらゆつくりと上段に構えている

「まさかのシチュエーション! 夜喜さん後生だからご勘弁!」

「・・・いつからお気付きで?」

「そりや安全地帯に転がって確認して直ぐに」

「・・・そうでしたか」

「あぶなあ! ノーモーションで刀投げないで下さいよ!」

「了承も無しに女性の胸に触れるからです」

般若面を外した夜喜さんは、柱に突き刺さってる日本刀を引き抜きまだ何処かに消した

それから何食わぬ顔で膝を折り深々と頭を下げる

「ようこそ、旅館『ゆきしろ』に御出下さいました。本日御世話をさせて頂きます、宮蔵夜喜と申します。至らぬ点も御座いますが無卒宜しく御願い申し上げます」

顔をあげ向けられた笑みに、俺様はもう・・・なんつか・・・ど、どうよ! みたいにテンパった。つか可愛いぜこんちきしょおおお!

「いらつしゃい霞さん。急な連絡でびっくりしましたよ」

「すみません恋花さん。最近忙しくて連絡するの忘れてたもので」

「でもこうしてまたお会い出来て嬉しいですよ」

「はは。光栄です」

座敷にて、のんびりと茶を飲み交わす二人はどちらもともなく笑いだした

「慎様、御食事の用意が整いました」

なんかやたら高級そうな個室で待たされる事数分。夜喜さんが戻って来ました

「……ちよっ！朝飯の癖にやたら豪勢なんだけど！拙者のマネーが一瞬でチリになるぞこれ！

「御代は結構です。私からのほんの気持ちですので」

「こないあきまへん！どう見ても高いやおまへんか！」

俺はただ会いに来ただけなのにここまでしてもらうとスッゲー後ろめたい気持ちになっちゃうぞ！

「慎様。こちらはあくまで私からのお気持ち。召し上がって頂けないなら処分する他ありません」

「いただきますこんちきしょうお！」

ええいもうヤケ食いじゃあ！夜喜さんの為なら例え火の中の水の中！

「うんまあ！なんだこの美味さは、本気になった霞並みに美味しい！」

「本当ですか？」

「ワタシ嘘つかないアルよ！超デリシヤス！」

「よかった」

ほんのり頬を朱に染めた夜喜を見て手作りを知った慎は心中狂喜乱舞しながら全て綺麗にたいらげた

ふう。余は満足なり。

米粒一つ残さず夜喜さん手作りメニューを平らげてちよつと小休憩。
ああ茶が美味い

「慎様、御代わりは如何でしょうか？」

「あ、頂きます」

湯飲みに新たに注いでもらった茶を口に含みながら思う

(Love Field Banzai!)

何この幸せ空間！超ハッピー！いつも霞コンチキショオみたいな私
怨ドロドロの拙者の心がなんつか・・・こう・・・ピンク色の・・・
・・・ど、どうよ！！

「慎様、何故くねくねされてるのですか？」

はっ！俺としたことが、危うく妄想に全神経を支配される所だったぜ
取り敢えず深呼吸して気持ちを落ち着かせてから外に目を向ける
超快晴なんだけど。これはアレか？日頃虐げられてる俺を哀れに思
つてる神からの贈り物か？夜喜さんとお散歩いってようござんすか
！？

「慎様、本日は快晴ですので散歩等は如何でしょうか？僭越ながら
私も御供させて頂きたいと存じます」

「ももも勿論！むしろ一緒に来てください！」

「はい。喜んで」

夜喜さんスマイルキタアアアアアア！

その時は超有頂天になりまくって後先考えないで行動した事を非常に後悔した。なんで部屋で二人つきりでまったりするとか平和な案

が出なかつたんだろう

ああ、俺がお馬鹿様だからかなあ

続く!!

52・慎大戦物語（上）（後書き）

どうも。死亡フラグが発生してそんなウドの大木です

まずは謝辞。御免なさい。忙しいです

超がつくくらい多忙な日々で全く書けませんでした。今現在も地味に忙しく、上下の二部作になっちゃいました

ネタは頭にあるので暇が出来次第即書きますので下巻をお待ちください

ではではバーハーハイ

53・慎大戦物語（中）（前書き）

綾萌「ふつ、遂にこの時が来たようだな」

佐山「今度は何をやらかす気だ」

綾萌「なあに大した事ではない。次から前書きと後書きが完全に私の占領下に置かれるのだ」

佐山「…………… 幾ら積んだんだ。正直に吐け」

綾萌「なに、誠心誠意真心込めて脅したらここを管理してる奴が譲ってくれたのだ」

佐山「……………」

綾萌「さあ、日夜徹して練習した振り付けの成果を発揮する時だぞ！愚民共、間違った奴から順に口では言えない恥ずかしい拷問だからな。具体的に木馬、蠟燭、開脚吊るおぐつ！」

佐山「……………（無言の拳骨）」

53・慎大戦物語（中）

HEY、みんな元気にフレッシュしてるかい？超有頂天の慎様だZE！

我を見よ、太陽光を浴び神々しいまでの存在感を放つこの我をお！！

「慎様、先程からまるで止まり木の様に鳩と鳥に埋め尽くされておりますが大丈夫ですか？」

「ふぁいじょーぶでふ！我は不死身なり！！」

周囲を黒と白のコントラストで飾りながら、不死鳥の如く現世に舞い戻ってきた

鳩さん鳥さんありがとう。演出に多大な貢献をしてくれた二羽に手を振ってから夜喜さんに向き直る。いつもの中居服も素晴らしいが私服も超大人っぽいZE！

あ？どんな感じが知りたい？教えねえよ！ぜってえ教えねえ！

「慎様、そちらの方に御知り合いの方でもいらっしゃるのですか？」

「いいいいいえ！気のせいですよ夜喜さん！さぁ張り切って行きましょう！」

「はい。御供させて頂きます」

そうして拙者達のででデートが始まったで御座るよ！

さてさてほんの数ヶ月前に来た清水寺。まあ飛び降り紛いの事やらかして観光なんてこれっぽっちもしてないからノーカンだよな

「慎様、本日は天気恵まれて絶好の散歩日和ですね」

「そおつすねえ。修学旅行じゃまともに観光出来なかったから今日は満喫しないといけないうすよ」

「何かあったのですか？旅館にも夕方頃御一人でいらしてましたが」

「……………ボクハナニモオボエテナイ」

「御同行していた警察の方は少々……ええ、少々慎様に対する視線が熱を帯びておりましたが」

「うわああああ！」

やめろ！なんで俺の尻とか二の腕を見るんだよ！なんで触るんだよ！なんだよお前、パトカーの端に行けよ！今晚どう？じゃねえよ！

「あ、慎様。そちらは危険で……」

「うおああああ！！！」

「……………慎様。どうぞ」

「……………あざっす」

お団子屋さんでお茶を頂きながら一息

「つか夜喜さん、なんで貴女も上から飛び降りてきたの？危ないっすよ」

「あの程度は旅館の守備隊なら月一で実施しております」

「……………軍隊っすか」

「慎様も傷ひとつなく何よりです」

「いや、枝とか掴みまくって減速したから」

あれ？このトークって一般ピーポーがしてて大丈夫なライン？そのうち俺卍解とか出来るようになるんじゃない？なんか気合いとかで気功砲とか出来そうじゃね？どうしよ最近発売した『戦国活劇オダリオン』の千利休みたいに低空正座飛行からスーパー茶器ラッシュとが出来たら格好よくね？

「慎様、急に正座して経文を唱え出して。如何なされましたか？」

「いや、人間やれば何でも出来そうな気がして」

とりあえず座り直してお団子を一口。うわ霞がめっちゃ好きそうな

味だな

「こちらの笹時雨は、私共も御泊まりの御客様に勧めている大変美味しい茶屋です」

「およ？誰かと思ったら夜喜ちゃんじゃん」

暖簾を潜って出てきたのは朱色の和服に白のエプロン。銀の鈴が揺れる簷がよく似合う双子の姉妹の片割れ。いつも笑顔の看板娘

「御早う御座います愉米様。本日も大変美味しいと愉々様に御伝え下さい」

「あはは。愉々ちゃん恥ずかしがりですぐ引っ込んでうもんね」

和やかに話す二人を横目にもう一口。うーん、夜喜さんとどんな関係なのかな？高校とか大学辺りが一緒だったのかにや？

すると俺に気付いた愉米さんが首を傾げ、俺の周りを一周してさらに首を傾げた

「な、なんで御座いますでしょうか？」

「うーん……………」

いきなり臭いを嗅がれました。ってちよまあっ！

「なななななんで御座いますか！？」

「愉米様！」

わあちよつと怒ってる夜喜さん可愛い！ぞくぞくするな！

「あれえ？やっぱり君から霞の匂いがする？もしかして君が憤って子？」

「ん？霞の知り合いですか？」

「やっぱりい。って事は霞もここに来てるの？来てるよね？来てるね！」

お盆を抱きながらくねくねし始めた愉米さんを横目にお茶を一口……

……っ、殺気！

勢いよく振り向くがそこには風に靡く笹時雨の暖簾と食欲をそそる匂いが漂っている

「如何致しましたか慎様？」

「……………いや、多分気のせいっすね」

何だろっさっきの視線。確実に俺を見てたのは確かなんだが……………
…ってやっぱり拙者一般ピーポーなのか？どうしょ、杉田玄白みたいに両手出刃包丁で鶴の構えみたいに片足立ちで『はじめてのかいたいしんしょ』とかテロツプ出しながら乱舞とか始めたら

最後の決め台詞は『ひらいちゃらめええええ！』

ぞくぞくするな！

「慎様、串は暗器程度にしか使えませんよ。武器でしたらこちらに」
「ちょお！日本刀アウト！捕まっちゃ……………いや、無理だな。その辺の奴より万倍つええーからな」

「夜喜ちゃんむっちゃくちゃ強いからね。その刀だって私の蛟と同じ超名刀の清姫だよ」

「総理ー！みんな凶器もつてるよー！どうした法治国家あー！」

返ってくるのは虚しい山びこさんと奇異の視線だけ。何だろっ、僕なにか間違ってるのかな？

京都の民に不信を募らせながら二人の所に戻ろうとして足が止まる

……………愉米さんが二人いる

あれ？なんか愉米さん増えてる！何これイリュージョン！

「あ、この子が妹の愉々ちゃん。ちよつとシャイな自慢のいもアいたあー！」

「姉さん五月蠅い」

「うえええん。愉々ちゃんがまたぶったあー！」

うわ、棍棒でガチ殴りしやがった。何あの子姉御に酷似する容赦の無さっぶり

「……………」

「……………えっと、なんでありんすか？」

「……………」

こ、恐いよ霞！愉々さん恐いよガクガクブルブル

「愉々様、慎様に何か御用でも？」

スツと前に出る夜喜さん、心なしか恐いのである

「……………君が慎。霞から聞いている」

「あ、左様ですか。初めまして」

「うん……………私は愉々。愉々姉えって呼んで」

その瞬間、愉米は驚きの余り10m程全力で離れ、夜喜はフラリと立ち眩みを起こし椅子に座り直した

「えっ！何このリアクション！ちよいと夜喜さんどおしのおおおお
おおお！」

椅子から転げ落ちる様に回避。身を低くして次の行動に備える

さつきまでいた所には愉々姉えさんがいた。つかアレは間違いなく……………

「何で逃げるの……………チュウは嫌い？」

ほらね！やつぱり狙ってたよ。……………まで、何故逃げた拙者。あんな激レア演出は数年に一回の貴重な体験！

神よ、ギブミールピート！ちよっとタイムスリップさせて！

『無理ですby神』

ええい使えん神だ！

まあいい。仮に嬉し恥ずかしイベントが仮に発生した場合、拙者に明日は存在しないであろう。十中八九夜喜さんに惨殺されただろうなあ。こう……………後ろから……………サクツて

「慎様……………」

ほらねほらね！今背中がチクチクしてるもん！ちよっと動けばサクツだもん！

「夜喜、慎をいじめちゃダメ」

背後にいた夜喜さんは刀を構え愉々姉えに対峙する

「愉々様。女性たるもの常に慎ましく、礼節を重んじるものです」

「そうだね。でも今は関係ないよね？好きって気持ちを伝えないまま終わるなんて愚の極みだよ」

「それは……………確かにそうですが」

「夜喜は慎が好き？私は好き。だから伝えた。貴方が好きと。でも夜喜は伝えていない。なら貴女は私の邪魔をする権利は無い」

「……………」

夜喜さんは俯き、構えを解いた。だらりと下がる刃先は震え、時折地面を搔く音が聞こえる

「愉々ちゃん。あんまり夜喜ちゃんいじめちゃ」

「姉さん五月蠅い」

「ぶべっ！」

乙女らしからぬ奇声と共に頭を押さえて踞る姉。やべえ、姉御よりこええ！

「さあ慎、愉々姉えの胸に飛び込んで」

な、なんて魅力的なお言葉なのだ！よくよくみたら三人の中で一番……………豊満じゃないか！こ、言葉選んだんだからねっ！決して巨乳とか言いたいわけじゃないんだからねっ！

だがいかんせん余りにも分が悪すぎる。こんな状況で巨乳きやつほー！とか言いながら走り出したら拙者の魂すらも消し飛ばされる事必須だからな

……………覚悟を決めてやるしかないか

「愉々姉え！」

「なに？」

「超メンゴ！保留なっ！あ、アンタのタメじゃないんだからねっ！」
小脇に夜喜さんを抱えて超ダッシュ！今の俺ならスピードなら俺の方が上だとかフリーザ様にほざいてたピッコロより速いね！ふはははははは！

「愉々ちゃん、慎君行っちゃったね」

「残念。慎速いね」

「速いねえ。本気のつぐみちゃん並みに速いんじゃない？」

「……………多分まだ伸びるよ。きっと慎も私達と同じ」

「うひゃあ。愉々ちゃんがここまで手放しに絶賛するなんて霞以来じゃない？」

嬉しそうに手の内で蛟を転がす愉米は、揺れ落ちる木の葉を一瞬の居合いで両断する。常人には刀の軌道は愚か抜いたことすら気付かない程の神速である

「まさか愉々ちゃんが慎君loveになっちゃうなんて。お姉ちゃん超嬉しい」

「うん。私もびっくり。一目惚れだった」

ひいひい！と叫びながら愉米はまた全力で逃げ出した

「ふう。なんとか逃げ切れたな」

未だ夜喜さんを抱えたまま軽く汗を拭う。本能の赴くままに超ダッシュで逃げたけど多分正解だな。下手に捕まれば確実に貞操の危機だった

「…………… 慎様、私は何時までこうしていれば宜しいのですか？」

「ほわあ！すすすすんません夜喜さん！」

慌てて夜喜さんを下ろすと取り敢えず周囲に再確認。うむ、視線は感じないな…………… 僕、人だよな？ねえ人なんだよね？ロリ

貧乳のザビエルみたいに『神たまばわー！』とか叫んで空中四段蹴りとか出来たりしないよね？……………ゴクリ

「 慎様、大変御見事な三段蹴りでしたがまだ跳躍力が足りませんね」「うわあ！うわあ！なんか俺自分を見失っちゃいそお？」

夜喜さんに殴られました。女の人の尖ったグーパンチは凶器だと思います。あと拳の周りに衝撃波紛いの白い軌道を出すのは止めてください。殴られてパン！とか音するのは冗談抜きで人が出していない音じゃないですよ？それから何でぶつの？

「……………何故、愉々様への御返事を保留にしたのですか？」

なんかめっちゃめっちゃ夜喜さんキレてんだけど！あれ？その場でYES or NOの返答すべきだったの？でもなあ……………どう言えればいいんだろ？

「俺え、霞みたいに頭よくないから何言ってるか分かんないかもしれないけど」

頭を掻きながら何とか整理して言葉にする

「んー。なんつつかな、霞を見習うって訳じゃねーんだけどさ、今日初めて愉々姉えに会ってさ、まあいきなりビックリサプライズでワオ！みたいな事になったけどさ、なんも知らない人に告白されても俺困るんだわ」

近くのベンチに腰掛けながら空を見上げる

「何て言ったら伝わるかなあ……………先ずは友達からって感じのかな」

隣に腰掛けた夜喜さんは真剣な眼差しでこちらを見ている……………
…ど、ドッキドキだね！

「だってさ、俺夜喜さんの事もまだそんな知らないのに愉々姉えに告白されても……………やつばお困りなわけだよ」

「……………良くも悪くも貴方は真っ直ぐでいらっしやいますね」

ようやく微笑んでくれた夜喜さんは、どこからともなく弁当箱を取り出した。いや、ちょい待ち夜喜さん。マジでどっからそんな重箱取り出したの？四次元ポツケでもあるわけ？刀とか平気で出してるけどマジでどっから出してるの？

「それは乙女の秘密で御座います」

副音で『つべこべ言わずに早く食え』って聞こえるのは気のせいだろうか。手際よくお昼御飯を広げる夜喜さんを横目に空を見る

ちよつとだけ快晴の空が怨めしかった

まだ続く！って嘘お！

53・慎大戦物語（中）（後書き）

……………と、言うわけで大部遅れてご免なさい。忘れちゃーよって少々イカれて来たウドの大本です

次回から佐山&綾萌夫妻のトーク会が始まります。取り敢えず第一回放送はアニメっぽくOPで始まります。歌詞とかどうしようとか前途多難なアホですが、どうか気長に見守って頂けたら幸いです

それではまた次回、御会いしましょう！

PS、秘密基地のイラスト依頼コーナーにて拙者依頼してますんで、心の多大なるゆとりのある絵師様、ちょっとぐらい覗いてみて下さい

54・慎大戦物語（下）（前書き）

えーほんとお久しぶりのウドの大木です

ただただお詫びするばかりですが、もしまだ覚えてらっしゃる方が
いましたらよんでやってください

54・慎大戦物語（下）

よお、ちよっ……………待て、今話し掛けるな！……………あぶなっ！
まてまてまていくら何でもそれ無理いつ！……………アブねえ！今の
マジ危ねえ！

何だよ話し掛けんなよ今忙しいんだよ！

はあ？何してんの？避けてんだよ逃げてんだよ！

ふおおあああっ！死ねる！軽く死ねちまうぜ！

だから何だよ！……………は？経緯を問う？ええいコレを見る！

《超回想！》

太陽サンサン！ご飯も超美味い！夜喜さんめちやくちや料理上手いなあ

心はルンルン気分でお散歩してるのだが、心なしかちよっぴり覇気を感じる夜喜さん。やつぱりちよと前の嬉し恥ずかし珍事件が原因なのだろうか？謎深まるばかりなのだが気にしたら負けなんじゃね？

「慎様、私の顔に何か付いていますか？」

「ほわあっ！なな何でも無いでおじゃるよ！夜喜さん可愛いなあと思っただけでおじゃる！」

「……………御冗談を」

かーわーいーいー！！マジ照れしてる夜喜さん超可愛い！

「私などの事より、慎様の事を御聞かせ下さい。高校では部活動等をしていらっしゃるのですか？」

「部活かぁ。助っ人なら何回があるけど基本は帰宅部っすよ。家の手伝いとかありますからねー」

「慎様程の素質があれば全国も十分狙えると思うのですが」

「それ霞にも言われたっすね。でもそんなことしてたらせつかくの面白いイベントに参加出来ないじゃないっすか？」

まあそのおかげでこうやって会いに来ることも出来るわけだし。数多の運動と言う名のリンチとか修羅場を越えてきた俺からすればルールに縛られた試合なんておちあのこさいさいだ！

「では、慎様は高校卒業後の進路などは？」

……。あれ？拙者大学とか行けるレベルの知能あったっけ？加弥とどっこいな筈だけどな保体意外ギリ赤点圏外だよな？

「もし……、仮に慎様が宜しければ……私共の働くゆきしろに來ては如何でしょうか？実働部隊でその才を振るって頂くと大変有り難く存じます」

あつれー？なんか就職先一件確保しちゃった？しかもすっげえ行きてえ！

未来の自分にアドバイスを頂くべく、電波総受信中の俺の横では夜喜さんが少しだけ不安そうに見てる表情にキョンキョンしたのは内緒で御座るよ？

「今すぐ決めて頂かなくても結構です。頭の片隅にでも留めて頂ければ幸いです」

「そ、そおっすか」

取り敢えずこの話題は回避出来たが……。いずれは決めないとあそばかばか陽気の午後の日差しの下、俺と夜喜さんは特に目的も無くふらふらと散歩を再開した

なんつうかホントまったりした時間だなあ。やっぱ京都っただけあって風情？みたいな感じのオーラバンバンくるぜ

おお！生舞子Han発見！ビバ京都おお！

「慎様、彼方の舞子は観光の方ですよ。本来舞子は夕時から仕事が始まりますので日中あの様に出歩く事は滅多に御座いません」

「なんですと！ああ夢が一つ壊れてしまった」

「慎様は、舞子が御好きなのですか？」

「京都」舞子のイメージがガキの頃からあつたからなあ。でも今は中居服も捨てがたいと思う今日この頃」

「そうですか」

夜喜さんスマイルきたああああ！あれか？今ギャルゲー的解釈だと高感度＋１だろ！ふほほほ！まだまだこれからだあ！

「私も幼少の頃舞を学びましたので、もし機会があれば見て頂きたいものです」

「絶対見ます！いいや見せてください！」

夜喜さんの舞だぞ！超見たいに決まってんじゃん！寧ろ俺が舞う！

「阿波おどり……………でしようか？」

「いえ、適当音頭でございやす」

そんなちよつと恥ずかしさに攻め立てられてる拙者を他所に、夜喜さんに近づく二人の影。制服姿なので学生さんかな？

ちよつと茶髪気味で活発そうな女子高生さん。ああ、加弥をおつきくして髪切ったらこんな感じだ

隣の子は割りと大人しそうな感じだな。黒髪といい佇まいといい京美人って感じた。お二人ともなんか釣竿入れる様に長い背負ってるけど……………いやいやライフルなんて一般ピーポーは持ってないな。ふう、よくよく考えたらあの旅館軍隊とのお知り合いが武装してるだけだもんな

「あつれ？宮蔵さんじゃない？今日つて非番……もしかしてデート？」

「沙里様。此方は御孫様の御友人の慎様で御座います。本日は女将より、慎様の御世話を任されておりますので京を案内してる最中で御座います」

「なーんや。残念」

頭の後ろで手を組む沙里さんとやら。その横では困った顔をする京美人さん（仮名）

「さっちゃん、宮蔵さんは先輩なんやから敬語使わないかんよ？」

「はいはい」

「もう。宮蔵さん堪忍して下さいね。クラブでみつちりしばいておきますから」

京美人がしばくとかこええなおい

「御気になさらず二羽様。御二人はこれから練習でしょうか？」

「今からふーさんにしばかれに行くんよ。加減してや？」

「ややわあさっちゃん。部長に逆らったらあきまへんよ？」

うわすつげえ嫌そうな顔。鬼部長みたいだなふーさん。それにしても又々夜喜さんのお知り合いみたいだな。愉々姉えとは同級生っぽいからこちらは後輩さんかな？

すると今度は俺に視線を向けるお二人。取り敢えず年上っぽいから気をつけ！！

「はじめまして。藤坂慎です」

「あらご丁寧に。うちは二羽りせ、よろしゅうね慎さん。京には旅行にでも来はりよったの？」

「そんな感じです。修学旅行で来たけどあんま観光出来なかったんで」

「ほな今日はゆったり観光しはってや。ほらさっちゃんも挨拶せないかんよ？」

しかしさっちゃんさんは何やら眉にシワを寄せながら見て………いやもうハッキリと睨んでるよ。俺怒らせたりしてないよな？………

……存在か？存在がそんなに気に入らないのか！

「うちは金城沙里。あんた………なんか武道習ってたりするんか？」

「武道？いや暴力は振るわれまくってるけど格闘技とかはやってないですが………何故に？」

聞くと同時に身を屈めて後ろに跳ぶ。微かに頭上を横切った風に嫌な予感を募らせながら体勢を整え追撃に備える

「何もしてへん奴が今のを避けるんかい。完璧に不意突いたつもりなんやけどな」

「さっちゃん！宮蔵さんとこのお客さんに何してはるの！」

「流石慎様。無駄の無い動きですね」

「く、宮蔵さん？何言ってはりますの？さっちゃんがお客さんにこない失礼なこととしてはるのに」

しかし夜喜さんは、それが当然であるかの様に微笑みながら首を傾げる

「女将が、ただの一般の御客様の御世話に私を選ぶでしょうか？」

「……………」

「つまりは慎様も…………私達と同じ、と言うことです」

「いや、なんか怒らせたならごめんなさい！ほんに堪忍したって！」

「……………うち、こんな弱腰の男に避けられたんか。へこむわあ」

「と言いつつあからさまに狙ってますよね？」

「……………なんで分かるんや？」

「いや、雰囲気って言うか微妙に構え直してる辺りからなんとなく

……………」

「ほんま何者なん。うちこれでも腕には結構自信あるんよ。これでゆきしろに内定もろたのに」

「……………それってあの改造重火器振り回して覗き滅却したり、月一で飛び降り紛いの軍事演習やってるあのゆきしろの防衛隊っすよね？」

「そつや。なんで知ってるん……………まさか覗き」

「……………はは。まさか、いやそんな事ししてませんよ」
「ここここ殺される！侮蔑の眼に射殺されてしまいそうで御座る！」

「沙里様。先に申し上げておきます」

天の救いの如く現れた夜喜さんは、誰もが騙されてしまう程の微笑
みと、恥じらう様に朱に染めた頬に手を当てながら

「慎様は、私を楽しませて下さる事の出来る、数少ない逸材で御座
います」

そしてキツパリと言っちゃいました

「少なくとも、御二人よりも上です」

なんでしょう。今目の前のさっちゃんさんからとんでもねえ殺気感
じるんだけど。それに獲物を握る手に力入ってるし、構えからして
……………棍じゃ無い

「薙刀か」

「ご名答。よう分かったな。うちらこれでも全国大会連覇中なんよ」
袋から引き出された薙刀を片手で器用に回しながら視線を全く反ら
さないさっちゃんさん。やっぺ、目がマジだ

「こつから本気でいこか。宮蔵さんがそこまで言うならうちらも引
つ込みつかんからな」

「夜喜さん！事態が悪化してるよ！どうするのさ！」

「慎様、ファイト」

「卑怯って思うけど可愛いなこんちきしょう！」

《超回想終了！》

分かったか！避けてる意味が分かったああああ！掠った！今おでこ
でチっていった！

「ちつ。惜しい」

「こつちもか！」

「なんで当たaranの！なんでこれだけ狙ってるのに当たaranの！」
「当たってたまるか！折れるわい！」

そんな一方的な死合を観戦する二人、一人は満足そうに頷く夜喜さんと、啞然とした表情で立ち尽くすふーさん

「あ、あり得へん。本気のさっちゃんが未だに一発も……………掠るのがやつとやなんて」

「先程も言いましたが実力は慎様の方が上です。ただ、慎様は女性に手を上げるのが少々苦手なようで、反撃しないからここまで長期の勝負となってるのでしょうか」

「ほな、慎さんが反撃に転じたら……………」

その問いに答えを出すように、割りと自然に取り出した清姫。鞘から無造作に引き抜き、鞘を此方に放り投げた

薙刀の刃音とは別の微かな音が聞こえ、確認する事も無く背に回した手で掴むと、左から横薙ぎに迫る模造の刃の先端を下から弾き上げ一歩踏み込む

沙里は弾かれた力に逆らわずに、下段から石突きを振り上げるが、左に踏み込んだ脚を軸に身を捻りギリギリで避け、沙里の目の前の鞘を放った

突然目の前の飛び込む鞘に反射的に頭を引き、身を後ろに跳ぼうと地を蹴る瞬間すくい上げる様に脚を払う

「きやあつ！」

後は頭から落ちない様にギリギリながらキャッチ。あれ、お姫様だつこするのって我が家の妹様以来だな

「二羽様、御理解頂けましたか？」

「……………はい」

「それにしても沙里様、なんて羨ましい」

「え？」

「…………何でも御座いません。御氣に為さらず」

なんかちよいと恥ずかしそうな夜喜さんにキュンキュンしながら、さつきから黙ってるさっちゃんさんに視線を落とす…………え、ちょなんか泣きそうなんだけど！もしや足払い痛かった！

「うわあごめんなさい！痛かったっすか！」

「ぐすつ。負けた……………」

「く、悔し泣き？」

思い出した様に困った顔をするふーさんはチラツと夜喜さんを見ながら

「さっちゃんは昔から負けず嫌いで、ゆきしろの入社試験で宮蔵さんに負かされた時はほんま慰めるの苦労したんよ」

思わぬ暴露に真っ赤になりながら睨んでくるさっちゃんさん。だけど縮こまりながら涙目の上目遣いなんてただ可愛いだけなんだよね……………いつまでこうしてる気なん？」

「ふおお！申し訳ないで御座る！」

いそいそと降ろして、ふーさんにヘルプアイを送るとご免なさいっばい返信が返ってきた

「……………」

背を向けて薙刀を袋にしまうさっちゃんさん。こっちに向くと同時にさつき仕舞った薙刀を思いっきり振って来やがりましたが何とか避けて臨戦体勢

「憤……………だつたよね。うちに完勝したのは宮蔵さんにうちの爺ちゃん。それとあんただけや」

「あー、その、光栄です？でいいのかな」

「必ずあんたしばいたるから、それまで他の奴に負けたらいかんよ」
「えっと、善処します……………あ、夜喜さんには勝てる気がしないんすけど」

「宮蔵さんは例外やろ。うちも全然勝てる気せーへん」

やはりゆきしろ最強は夜喜さんらしいな。恐るべし闘う中居さん……………それと、強い男は嫌いじゃない」

「ふえ？」

「……………ああもうまどろっこしいのは嫌いなんよ！今すぐ携帯出しゃ！」

「イエッサー！」

反射的に携帯を出してしまいなんかよく分からない展開のまま赤外線通信でアド交換しちゃったのだが……………痛い！夜喜さんの視線がチクチク刺さるよ！

「ほな、こちらは学校行きますさかい、失礼します」

「……………じゃあね」

さっちゃんさんとふーさんと別れて、またもや夜喜さんとぶらり旅再開。やっぺなんか夜喜さん超こええ。ああサンサンと輝く太陽が憎いぜ

「慎様」

「ひゃいっ！な、なんで御座いましょ」

「沙里様の事、どう思ってたっしゃいますか？」

「さっちゃんさんすか？どうって……………ちよつとおつきくした加弥みたいな感じでなんか親しみやすい？あと怒らせたら怖い」

ピッピロピロ。ピロピロ。おや？携帯にメールが……………さっちゃんさんだ

【あんたうちの悪口言ったら堪忍しないかね】

こええ！

「慎様……………皆様に大人気ですね？」

殺される！今確かにな殺気を感じた！尋常じゃないくらいの殺気臭がプンプンする！おらあドツキドキだあ！

「慎様、そこにベンチがありますので、お話でもしませんか？ええじっくりと」

55・慎大戦物語（事後処理）（前書き）

と、いうわけで、なんとか一ヶ月で更新したわけですが、拙者、今いる会社を辞めることになりました、これからいつも以上にバタバタしてしまうので更新遅くなるかもしれません

それでもなるっただけ早く書き上げますので何卒よろしくお願いします

では、慎お説教タイムスタートです

55・慎大戦物語（事後処理）

さあ始まりました、夜喜さんとの談話タイム。またの名を尋問タイム。ベンチに正座しながら夜喜さんのお声を待ちます。前を歩く親子の視線がとても痛いです

「パパー。あの人たちどうしたのー？」

パパさんは笑顔で子供の手を引いていきます。何か通じるモノがあったのでしよう、パパさんはこっちを見て軽く頷いて行きました。きっと励ましてくれてるに違いありません

「さて、慎様」

「はっ！何でありましょうか！」

「……………もつとりラックスして頂いて構いませんのに」

後ろめたい気持ちがあるのか、拙者の心が許してくれません

「慎様がよろしいのでしたら構いませんが」

夜喜さんは苦笑いしながら視線を前に向ける。あれ、何か急に重力が5割り増した気がするんだけど

「慎様、皆様に大変人気でしたね……………」

「い、いえいえ。その様な事は一切」

「慎様は歳上の方が好きなのですか？」

「……………まっさかー。ソナナこと無いアルヨ？」

無意識に震えてしまうのは致し方あるまい。だって恐いんだもん

「慎様は、私が幾つか御存知でしょうか？」

夜喜さんの歳？えーっと、愉々姉えとタメと考えて、愉々姉えも夜喜さんも働いてるから……………まあ高卒としても19くらいかな？さっちゃんさんは後輩なら18と見ていいと思うから……………

「19つてとこすか？」

「……………14です」

「パードウン？」

「私は14歳で御座います。奇しくも未知流様と同じで御座います」

俺はベンチを離れ、立派な太い木に近付いてしっかりと捕まえてから

……………メゴンっ！

「H A H A H A、夜喜さん冗談が上手いね」

「慎様、取り敢えず額の止血をさせて頂きます」

あれ、なんか視界が紅くなってるぜH A H A H A

「つか夜喜さん、本当にマジッすか？」

「本当で御座います。御孫様から伺ってると思っていたのですが」

「霞って伝えることと伝えないことってしっかり分けてるからなあ」

クルクル包帯を巻かれながらちよつとだけ考えてみた。あれ、拙者

って炉裏派だつけ？ いや、違う。断じて違う。拙者的に夜喜さんの

大人の仕草にズキウウウウンだから……………つまり問題ないで

しよ？でしよでしよ？

「よし、私的年齢対処クリア」

「……………如何なさいましたか？まさか先程の衝撃で脳に」

「いやいや無い無い。ぜっんぜん問題ないで御座るよ」

「左様ですか……………」

プリティーナース夜喜さんの治療が終わり、またまたベンチに座り

直す俺達……………く、空気がおもてえ！夜喜さんから半端ねえ後悔

オーラ吹き出てやがる！いや、ここでこれを解消出来たらギャルゲ

ー的解釈でフラグゲツチューじゃね？

「あのー夜喜さん？」

「何でしょうか？」

「俺は夜喜さんの年なんて全然気にしないっすよ？」

「それはつまり、御自身が無節操であると認められるということだ

すか？」

思わぬ返しキタアア！

「愉々様は19ですし、沙里様は18。私は一番したで14ですか

ら……………若ければ宜しいのですか？」

「うわああああああん！」

言い返せないよおお！どうやっても反論できないよおお！

「ま、慎様！御気を確かに！」

「いいじゃないっすかあ！夜喜さん基本大人びてるけどたまにスツゲエ可愛い仕草するからギャップ萌えすんだもん！なんすかあの恥ずかしい時の表情、反則級に可愛いでしょ！お持ち帰りしてえもん！」

「え……………ま、慎様」

「それにあのスタイルで14とかぜってえあり得ねえって！もし周りがロリ野郎とか言ってももう開き直るしかねえじゃん！甘んじて受け入れてやんよ！ロリ上等だよバカ野郎！」

「……………（赤面）」

「うわあああああああおぐっ」

周りの視線に耐えきれなかった夜喜さんに容赦ない一撃を受けて、俺はちよっとお昼寝タイムに移行した

「……………慎様の御馬鹿……………大馬鹿です」

襟首をつまみ一息で担ぎ上げる。周囲を一瞥すると、今まで此方を伺っていた皆様は足早に公園を離れていきます。賢明な判断です

旅館に着くまでの間、私は今日の出来事を思い起こし、己の器の小ささを恥じておりました

愉々様の様に、ただ己の心に正直に生き、沙里様の様に強引に距離を詰め、未知流様の様に常に想い続ける

私は……………慎様の隣に立つ事が出来るのでしょうか。慎様の隣に立つに相応しい女性になれるのでしょうか

慎様は何を望むのでしょうか。私は応える事が出来るのでしょうか

「慎様」

「……………」

「慎様」

「……………返事がない。ただの屍のようだ」

「慎様」

「えっと……………はい」

「私は……………」

「ねえ夜喜さん」

私の言葉を遮る様に重ねて話しかける慎様

「見当違いな事言つてたら恥ずかしいんだけどさ、焦らなくてもいいんじゃないね？」

「焦る……………私ですか？」

「うん。なんとなくね。まだ夜喜さん14なんだし、これからもつと色々な事あるんだからさ。愉々姉とかさっちゃんさん位の歳になつたらでも遅くない気がするぞ。俺はちゃんと待つてるからさ……………出来ればこの台詞も担がれてない状態で言いたかった」

「……………はい」

慎様を降ろして、今度は並んで旅館へと向かいます

慎様は、どこまでも真っ直ぐな御方です。私は、そこに惹かれたのかもしれないね

楽しかったドッキドキ京都の旅も、お別れのお時間だぜ！くっ、寂しくなんてないやいっ！

「それでは慎様、御体に気を付けて」

「夜喜さんも気を付けて。今度はあっちに遊びに来てよ」

「はい。必ず伺います」

京都はドッキドキだったなあ。刺激が一杯

主に愉々姉とさっちゃんさんが絡んだ事故だけのおおお！

咄嗟に身を引くと鼻先を掠めて彼方に消える矢。間違いなく訓練用じゃなく鋭利な方だった

「ちつ、また当たらなかったじゃない」

「さ、さっちゃんさん！貴女今何したか分かってるで御座るか！」

「ただ狙っただけじゃない」

「当たればそ　く　し　じゃねえっすか！」

「五月蠅いわね！」

「い、痛い！弓で突っつかないで！」

「慎を苛めちゃダメ」

「愉々姉まで！」

なんてこったでしょう。何故お二方まで駅に召喚されたで御座るか？

霞の隣にいる恋華さんはしてやっつたりのVサインをしているので犯人は一目瞭然。でもちよつと茶目っ気あつて可愛いなあと思つちやつたから許すしかありませんよ

そんな事考えてたら額にくつつく黒光りする鉄砲。どんなに控え目に見ても服の中から出せないサイズです

「慎様。そんなに年上がよろしいのですか？」

「H A H A H A、そんな事無いアルよー」

夜喜さんをセンターに並んだ三人衆。ちよつとでも逆鱗にふれたら新幹線の先頭に縛られて帰宅しなければならぬだろう

霞にヘルプオーラを送ってみたが既に座席に座つてにこやかに笑つていやがる。ここぞとばかりに仕返しかこの野郎

「えー、短い期間だったけどホント色々あつて楽しかったです。今度は俺達の街に遊びに来てください。案内しますんで」

「ふん。暇になったらね。うちは絶対アンタ負かすんやから他の奴に負けたらシバくからね」

「ぜ、善処します」

「これ………持ってきてや。うちの近くの店の菓子や」

綺麗にラッピングされたお菓子を頂きやした。うわツンデレっぽくて可愛いなあ！

何か言いたそうなさっちゃんさんだが愉々姉えがずいっと割り込んで来た

「慎、今度遊びに行くから。慎の部屋に連れてってね」

「いきなり部屋で御座るか！」

「……………うん」

ちよつ、何故にそんな潤んだ瞳で熱視線送るで御座るか！もしや男を魅せる日が近いので御座るかああ！お、落ち着け我が息子よ、ステイスTEE。よしよし

「間もなく、発車致します。4番口でイチャついてるその慎、さつさと乗れよバーカ！」

ええええええ！アナウンサーキレやがったあ！つか何で名前バレてるの！

「ちよつ！愉々はん！アンタ何言ってるの！」

「大人の特権」

「愉々はん！」

もめだした二人を他所にもう出発って事で乗り込んだ拙者。夜喜さんは何も言わないですつと俺を見ている

「それじゃ夜喜さん、また今度」

会いましょうの言葉は夜喜さんに止められた。もう瞬間移動したんじゃない？的な感覚で目の前に現れて唇を重ねられた

ファーストキスするのは甘酸っぱいなんて言うけれど、霞は痛いって言ってた

俺的に夜喜さんのキスは……………こう……………ふにゅってしててほのかに花の匂いっていうかい匂いがして夜喜さんの息づかいがZERO距離から放たれてイイヤツフウウウウウウ！みたいな感じでどうよ！

スツと離れた夜喜さんは頬を染めながら、今までで一番優しく微笑んでいた

「それでは慎様。また、御逢いしましょう」

見計らった様に閉じる戸を挟んで、ほんの少し涙目で夜喜さんは微笑んでいた

この先夜喜さんの隣に立つなら、あの涙に応えれるだけの男にならないと駄目なんだろうな
走り出した新幹線から京の街を眺めながら、俺は自分の将来を考えていた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6227a/>

一步先から闇

2011年5月22日23時29分発行